鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　10

平成５年度発掘調査報告
（第２分冊）

平成６年３月

鎌倉市教育委員会

総　目　次

（第１分冊）

序文……I

例言……II

平成５年度の概観……III

１．公方屋敷跡……1

第一章　調査地点の位置と歴史的環境……6

第二章　調査の概要……9

第三章　検出された遺構と遺物……14

第１節　遺構……14

第２節　遺物……32

第四章　まとめ……77

〈附篇〉　公方屋敷の花粉化石……78

２．永福寺跡……103

第１章　遺跡の位置と歴史的環境……109

第２章　調査の経過と概要……110

第１節　調査の経過……110

第２節　層序……111

第３章　検出した遺構と遺物……112

第１節　１面の遺構と遺物……112

第２節　２面の遺構と遺物……117

第３節　３面の遺構と遺物……119

第４章　まとめ……122

附編１．井戸内堆積物の花粉化石及び樹種同定……143

附編２．鎌倉永福寺跡（二階堂地区）出土の動物遺体

―井戸址出土の動物遺体について―……153

3．大倉幕府周辺遺跡群 ……199
第一章　調査地点と周辺の遺跡 ……203
第二章　調査の経過と概要 ……204
第三章　本調査での成果 ……210
第１節　二面検出の遺構と遺物 ……210
第２節　三面検出の遺構と遺物 ……224
第四章　調査のまとめ ……230

（第２分冊）

4．北条政村屋敷跡……1
第一章　調査地の位置と環境……5
第二章　調査の経過と堆積土層……8
I　調査の経過……8
II　堆積土層……9
III　試掘調査……10
第三章　遺構と遺物……12
I　１面の遺構……12
II　２面の遺構……17
III　第３層出土遺物……26
IV　第４層の遺構……28
第四章　まとめと考察……34
I　遺跡の年代と性格……34
II　道路について……34
III　問題点……36
（附論）　市内遺跡発掘調査事業に係る花粉分析業務……37
5．長谷小路周辺遺跡……59
第一章　調査地点の概観……63
第二章　調査の概要……69
第三章　検出遺構と出土遺物……71

第１節　中世……71
第２節　中世以前……87
第四章　まとめ……90
6．長谷観音堂周辺遺跡 ……107
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……111
第二章　調査の経過と堆積土層 ……114
第三章　検出された遺構と出土した遺物 ……117
第１節　中世の遺構と出土遺物 ……117
第２節　中世以前の遺構と出土遺物 ……130
第３節　本地点における火山灰質堆積物について ……137
第四章　まとめと考察 ……141
7．妙本寺遺跡 ……163
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……167
第２章　調査の経過と検出した遺構 ……167
第３章　出土遺物 ……170
第４章　まとめ ……173
8．天神山下城 ……179
第１章　遺跡の立地及び周辺の遺跡 ……183
第２章　トレンチ調査 ……184
・まとめ ……184
9．若宮大路周辺遺跡群 ……189
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……193
第二章　調査の概要 ……194
第１節　調査区の設定 ……194
第２節　堆積土層と生活面 ……194
第三章　検出遺構 ……196
第１節　第一面検出遺構 ……196
第２節　第二面検出遺構 ……198
第３節　第三・四面検出遺構 ……200

第四章　出土遺物 ……201
第五章　調査のまとめ ……211
10. 笹目遺跡 ……223
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……227
第２章　調査の経過と検出した遺構 ……228
第３章　出土遺物 ……230

（第３分冊）

11. 若宮大路周辺遺跡群……1
第一章　遺跡の位置と歴史的環境……11
第二章　調査の経緯……14
第三章　検出した遺構・遺物……20
第四章　まとめ ……221

4. 北条政村屋敷跡（No.131）

常盤字殿入下643番４外地点

例　言

1．本文は鎌倉市常盤字殿入下643番４外地点の専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本文の執筆は下記の分担で行い、編集は斉木秀雄が行った。なお、根本執筆部分については鎌倉考古学研究所・菊川英政氏に指導・助言を受けた

斉木秀雄　第１章、第２章、第４章

根本志保　第３章

3．本文中で使用した写真は斉木が撮影した。

4．本遺跡で使用している調査グリット軸は鎌倉市４級基準点を基に作成した。

5．調査体制

主任調査員　斉木秀雄

調　査　員　根本志保、伊丹まどか、稲田桂子

調査・資料整理参加者

松原康子、佐藤仁彦、増永佐代子、宮本宣子、辻きよ子、八杉陽子、谷下田厚子、石元道子

目　次

本文目次

第一章　調査地の位置と環境……5
第二章　調査の経過と堆積土層……8
　I　調査の経過……8
　II　堆積土層……9
　III　試堀調査……10
第三章　遺構と遺物……12
　I　1面の遺構……12
　II　2面の遺構……17
　III　第3層出土遺物……26
　IV　第4層の遺構……28
第四章　まとめと考察……34
　I　遺跡の年代と性格……34
　II　道路について……34
　III　問題点……36
（附論）　市内遺跡発掘調査事業に係る花粉分析業務……37

図版目次

Fig. 1　調査地点位置図 …… 5
Fig. 2　調査地周辺図 …… 6
Fig. 3　グリット軸設定図 …… 8
Fig. 4　調査区設定図 …… 9
Fig. 5　基本土層模式図 ……10
Fig. 6　試掘調査出土遺物 ……11
Fig. 7　遺構8 ……12
Fig. 8　遺構8出土遺物 ……13
Fig. 9　遺構3・7・1面模式図 ……14
Fig.10　遺構3・5・7出土遺物 ……15
Fig.11　遺構2 ……17
Fig.12　1面採集遺物 ……17
Fig.13　第2面全体図 ……折込……19・20
Fig.14　遺構14・19・道路 ……21
Fig.15　遺構14出土遺物 ……22
Fig.16　水田周辺図 ……23
Fig.17　水田周辺採集遺物 ……24
Fig.18　遺構15・27 ……24
Fig.19　2面採集遺物 ……26
Fig.20　第3層出土遺物 ……27
Fig.21　3層側溝出土遺物 ……27
Fig.22　遺構29 ……28
Fig.23　遺構29出土遺物 ……28
Fig.24　遺構30 ……29

Fig.25　遺構30出土遺物……30
Fig.26　第4層出土遺物……32
Fig.27　検出された道路例……35

写　真　図　版

PL.1－1．調査地遠景　2．土層堆積……49
PL.2－1．1面全景（東から）　2．遺構3（南から）　3．調査風景……50
PL.3－1．礎板検出状況　2．礎板検出状況　3．遺構15……51
PL.4－1．2面全景　2．遺構15、27（南から）　3．遺構14（西から）……52
PL.5－1．水田周辺　2．畦道と橋柱穴（南から）　3．第3層検出状態……53
PL.6－1．遺構30検出状況　2．遺構30（部分）　3．遺構29検出状況図（東南から）……54
PL.7．中世遺物（かわらけ、木製品等）……55
PL.8．灰釉陶器、須恵器、土師器の坏……56
PL.9．土師器（高坏、壺）……57
PL.10．土師器（壺、甕）……58

第一章　調査地の位置と環境

調査地は鎌倉市常盤字殿入下643番４・大仏の切通しの出口北側近くから東に延びる細長い谷内に位置する。谷開口部からの距離は直線で約250m、南側尾根の山裾を谷奥から流れる大塚川の北岸にあたり、現況での海抜は17m前後を測る。

細長い谷内には調査地点近くから「殿入（とのいり）」、「御所ノ内（ごしょのうち）」「法華堂（ほけどう）」「たちん台（館ノ台？）」「一向堂（いっこうどう）」等の古地名が残り、鎌倉幕府７代執権、北条政村の「常葉（常盤）別業」が谷内に在ったと伝えられている。(註１)『新編相模国国土記稿』では「北条陸奥守政村別亭蹟　村東に在り、今陸田となり（濶千二百坪許）御所の内と字す…」と記されている。

大仏の切通しは南側の尾根を越えた小谷内にあるが、本谷内からは「仲ノ坂」「東坂」の２本の道が切通しに合流していたようである。現存していないため不確かではあるが、仲ノ坂を調査地近くから、東坂をたちん台前面辺りから推定する説もある。(註２)道路筋の確定は別としても、谷内から２筋の道が切通しに向かっているのは、やはり切通しの防御のためであろう。阿部正道氏は著書『鎌倉の古道』のなかで「常盤の政村方は大仏口を、極楽寺の重時は極楽寺口を、山ノ内の時頼邸は巨福呂・亀谷坂口を、名越の朝時亭は名越坂口を、佐介の時盛亭は化粧坂口を、それぞれ守る位置にあった」と指摘している。(註３)

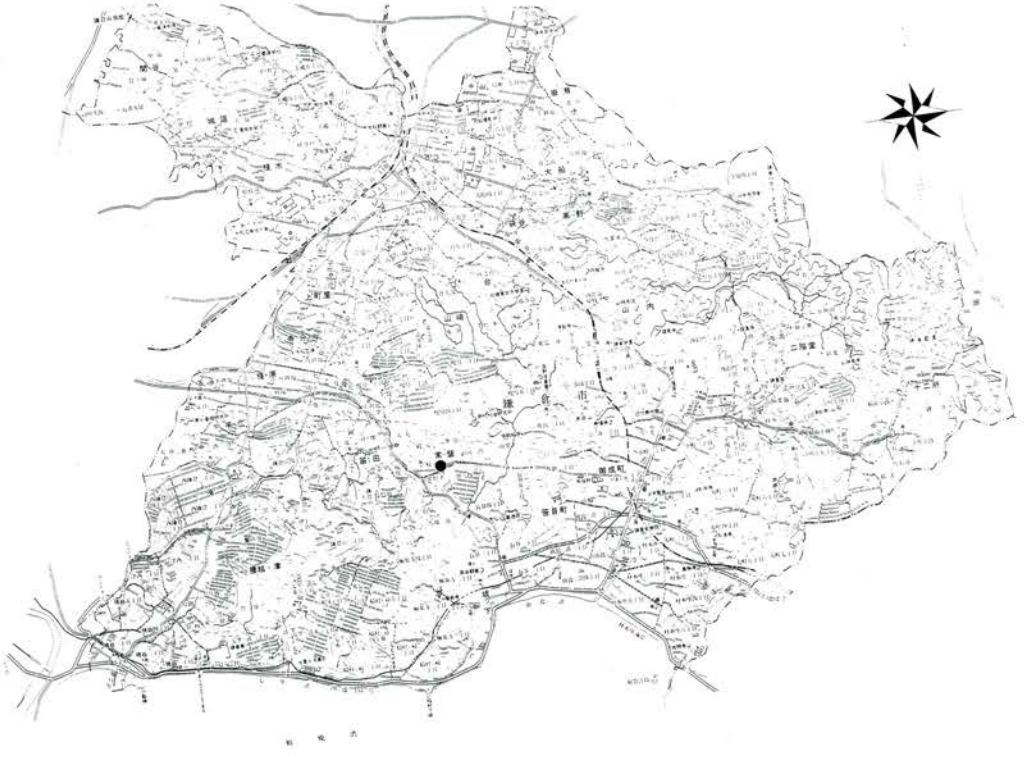


Fig. 1　調査地点位置図

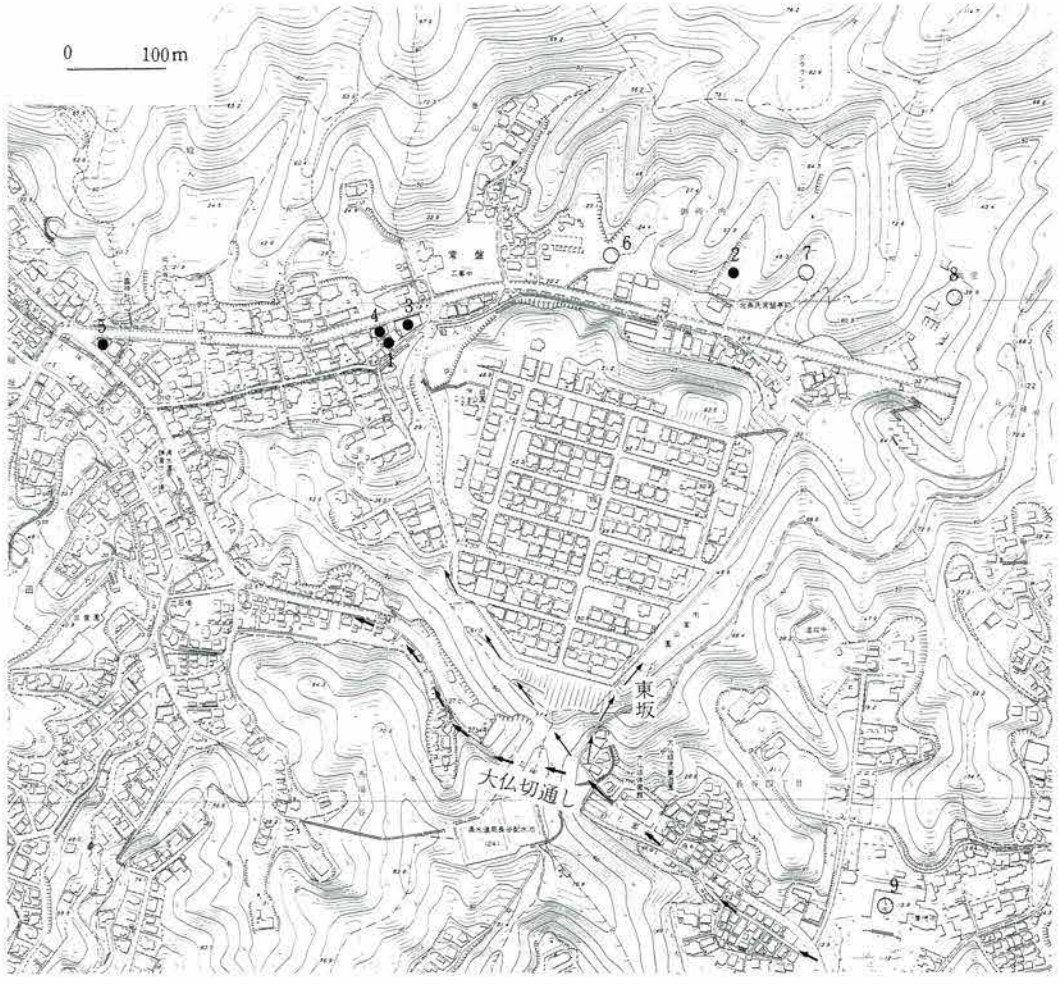


Fig. 2　調査地周辺図

谷内に別業を構えた北条政村は北条時政の孫・義時の四男として誕生し、文永元年（1264）～文永五年（1268）の間、第7代執権を務めている。和歌に才があり「東方の遺老」と称されたようである。谷内にはこの他北条義政（塩田義政）の亭もあった。

谷内での発掘調査は4地点で実施されている。最初の調査は宅地造成工事に伴い「たちん台」西の小谷（Fig. 2－2）内で実施された。[註4] この調査では予想をはるかに超えた遺構・遺物が検出され、結果として「北条政村屋敷跡」の国指定史跡への道筋が開かれた。

その後、商業ビル建築に伴う調査が1987年にFig. 2－3・4地点で実施されている。[註5] この地点の調査では中世の溝、かわらけ溜り等の他に中世以前（と考えていた）の道路と側溝、柵列そして水

田跡（形状からのみ考えた）等が確認されている。竪穴住居址こそ検出されていなかったが、多くの遺物が出土しており、周辺（南側の山裾辺り）に集落の存在が十分に推定される。現在までに住居址の確認はない。

大仏越えの道路と谷内からの道路が交わる八雲神社前の地点（Fig. 2 — 5）の調査は1988年に実施されている。(註6) 極く部分的な調査であったため、中世遺物は出土したものの、性格の把める遺構は検出できなかった。(註7)

調査地の含まれる谷は、北条氏の拠点としては希なほど良好に姿を残している。とは言え、1976年にＪＲ鎌倉駅西口まで通じる道路が完成してからは、開発が増加している。国指定史跡として保存された地域はもとより、保存されなかった地域を含めての総合的な調査があってこそ「七口と北条氏」の関係が把めるのであり、今後のより一層の調査を必要としている。

註

註１　奥田直栄「北条政村の常盤別業について」『神奈川県文化財調査報告書・第34集』昭和47年　神奈川県教育委員会他

註２　阿部正道「塩田義政とその邸跡について—鎌倉武士邸跡の考察—」『神奈川県博物館協会会報・第26号』昭和46年他

註３　註２に同じ

註４　1977年調査。未報告。調査担当・斉木秀雄（調査団長は故三上次男先生）

註５　現在未報告。調査担当・斉木秀雄（調査団長は吉田章一郎・青山学院大学教授）

註６　鎌倉市教育委員会調査。未報告。

註７　調査中に実見した。

第二章　調査の経過と堆積土層

Ⅰ　調査の経過

本地点の発掘調査は平成４年７月の試掘調査を経て実施された。調査地の東・北の地点の発掘調査はすでに実施され、多くの成果を得ていたため当然の結果ではあるが、現地表の海抜レベルから中世面はすでに削平されている事が予想された。調査の結果はそれを裏付ける形となってしまったが新たに多くの成果を得ることができた。

調査にあたっては、鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市４級基準点（ＣＯ72、ＣＯ73）を基に調査軸線を設定した。この測定作業には鎌倉市教育委員会嘱託職員の福田　誠氏の協力を得た。測定に使用したのはエレクトロニック・トータルステーション（測機舎・ＳＴＴ３Ｂ）である。測定結果はFig. 3に示した。

本来、都市遺跡の調査では離れた位置にある数地点の遺跡で検出された遺構間(例えば溝や道路)に認められる「距離」「角度」等を正確に把むことが重要なのである。これが正確に行われてこそ都市空間を形作る「尺度」や「街区」と言った基本的条件が整うのである。市内全体に発掘調査のための国土座標からおこした測量基準点を設置していない鎌倉市の現況は「中世都市鎌倉の復元」を最終目標の一つとしても掲げていない単に「調査の消化」を行っているだけとも言えよう。早急な対策が必要である。

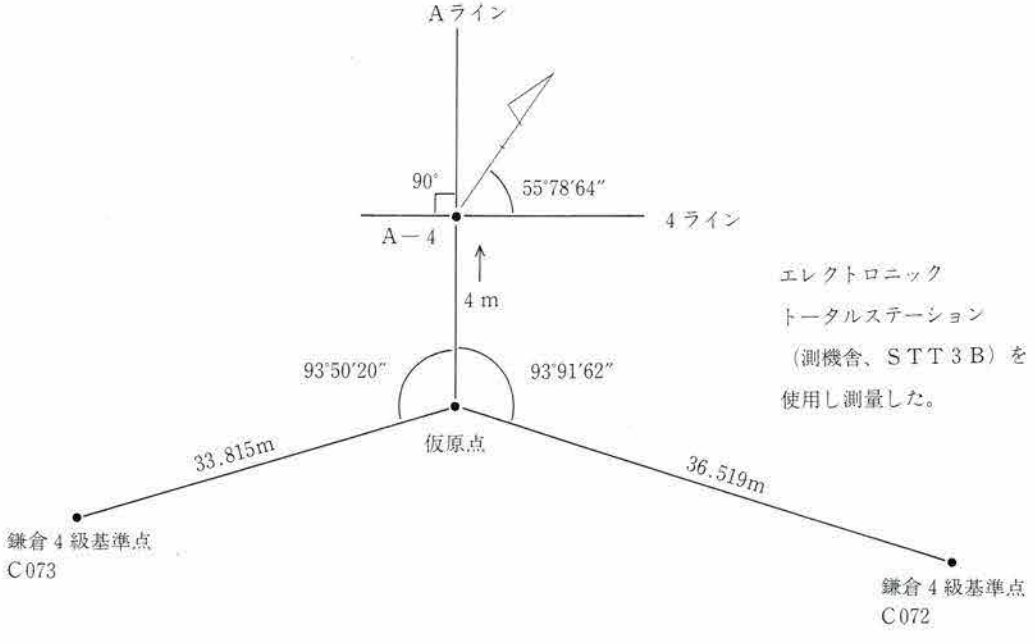


Fig. 3　グリット軸設定図

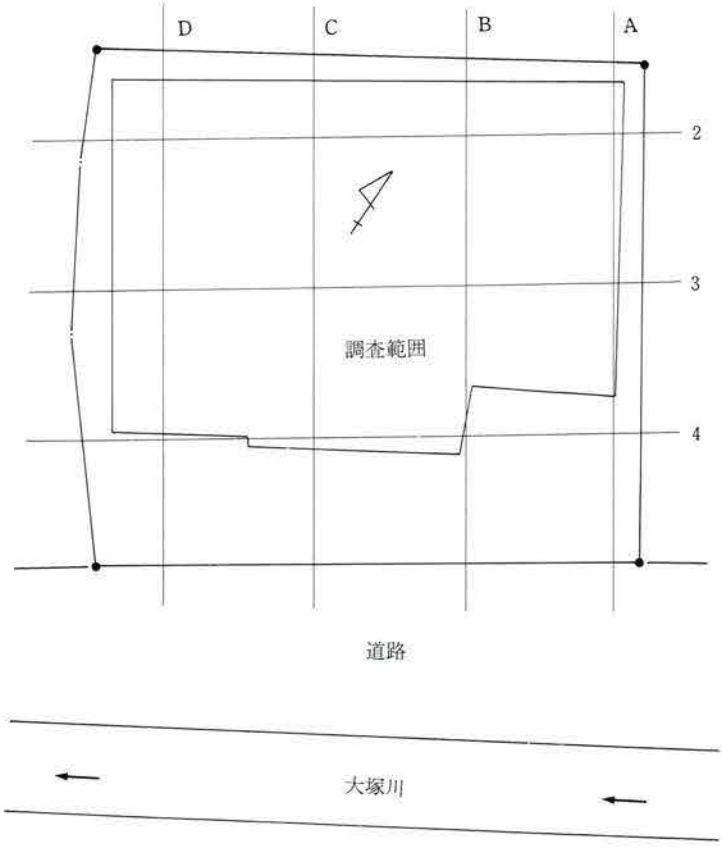


Fig. 4　調査区設定図

調査区は建築建物範囲としたが、調査事務所・トイレ・排土排出のためのトラックスペース等を考え、Fig. 4 に示したとおりに設定した。

調査グリッドは 4 m四方とし、各杭には東（実際には北東にあたるが、大塚川を南としたため）から西に向かってA～Dのアルファベットを、北から南に向かって 1 ～ 4 の数字を附した。各グリットの名称は北東隅の杭名を、例えばA 2 グリッドのようにあてた。

II　堆積土層

調査では部分的な堆積土を含め約10層を確認したが、おおまかには 7 層として把えることが可能である。模式図はFig. 5 に示した。

堆積土は、模式図では南の大塚川に向かって低くなっているように示してあるが、これは中世以前の堆積土（第 2 層以下）に認められる様相であって、第 1 層は北が厚く、南が薄いにすぎない。南を流れる大塚川の開削（あるいは自然流路が変化した）に関わる結果と考えられる。それを示すように、東接する地点の調査では（中世の）すべての堆積土は北が低くなるように堆積している。(註)

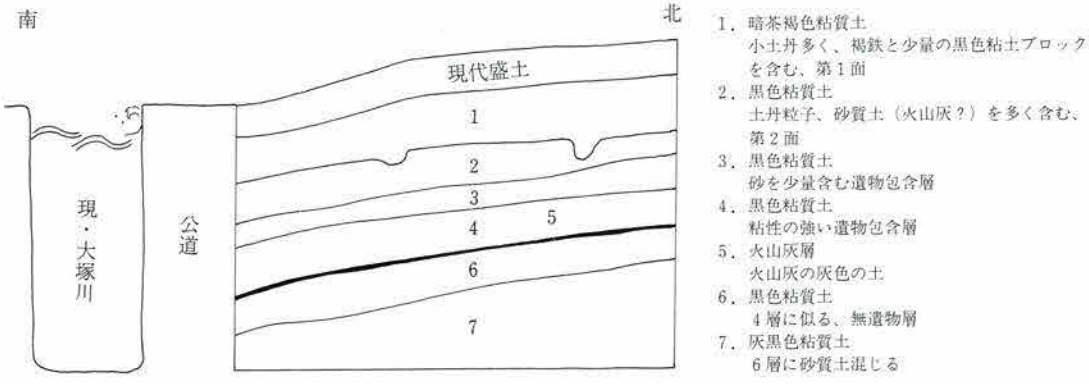


Fig. 5　基本土層模式図

調査では確認されていないが、谷の中央辺りを大塚川が流れていたようだ。

表土以下の堆積土は以下の通りである。

第1層　暗茶褐色粘質土。東接する調査では中世基盤層として把えられてしまったが間違いである。

第2層　黒色粘質土。砂質小粒子（火山灰？）を多く含む。本来の中世基盤層と考えられる。上面が第2面。

第3層　黒色粘質土。遺物包含層。

第4層　黒色粘質土。粘性の強い遺物包含層。

第5層　火山灰層。灰色でキメ細かい。

第6層　黒色粘質土。第4層に似ているが、遺物はほとんど出土しない。

第7層　灰黒色粘質土。第6層に砂質土が混じっている。

周辺の堆積土とは比較しようもないが、現状での地表レベルからは、大塚川沿いの道路造成（あるいは大塚川造成）に関わる削平工事によって、川沿いの中世遺構面が削られてしまっているとも考えられる。

III　試掘調査

試掘調査は鎌倉市教育委員会が、敷地内旧駐車スペース内（A3グリッド・調査区外）で実施した。任意設定のトレンチであったためFig. 4には載せられなかった。

調査では中世遺物は少なかったものの、中世以前の土器類が多くみられた。出土状況は明らかではないが、おそらく4面土器溜りの一部が試掘調査トレンチに延びていたのだろう。以下出土遺物について説明を加える。この部分に関しては、根本志保の作成した観察メモによっている。

Fig. 6－1は甕の口辺、雲母片を多く含む胎土で器表は淡黄灰色。

Fig. 6－2は明橙灰色のキメ細かい胎土を持つ口辺、壺と思われる。

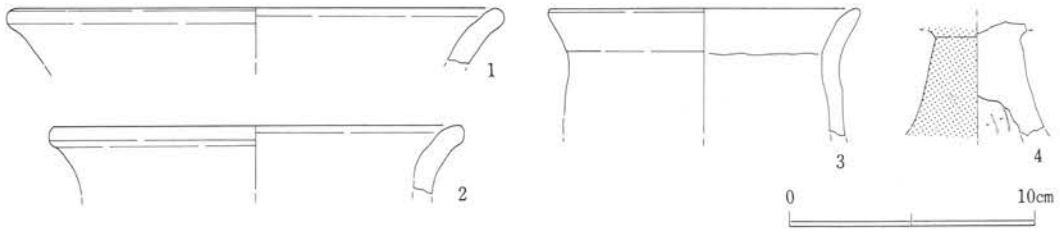


Fig. 6　試掘調査出土遺物

Fig. 6 — 3 は甑。内面の所々が剥離し、黄色の付着物が残る。口辺から体部へのカーブはシャープさを欠き、内外面はヘラナデされている。焼成は良く、硬い。胎土には雲母片が目立つ。

Fig. 6 — 4 は高坏の脚部で外面は赤彩される。内側はヘラ削り痕が顕著で、外面はヘラ削りの後ナデを入れている。非常に精良な土を用い、含有物は極く少量の砂と石英だけである。

註　調査中に実見している。本地点ではこれら中世層は削平されてしまっている。谷内で流路が変化した結果であろう。

第三章　遺構と遺物

本地点の調査で明確に遺構面として捕らえたのは１面と２面までで、その下につづく遺物包含層は３層、４層とした。

１面は基盤になる層が深く削平され殆ど失われていた。南側現道路面（海抜17.22m）より10cm掘り下げた茶褐色粘質土で遺構面を検出した。

２面は現道路地表下33cmの黒褐色粘質土で検出した。やや北方が高い立地を呈す様である。

４層において諸干気にかかる出土の仕方をした遺物があるが、それについては、４層の項目で詳しく触れる。

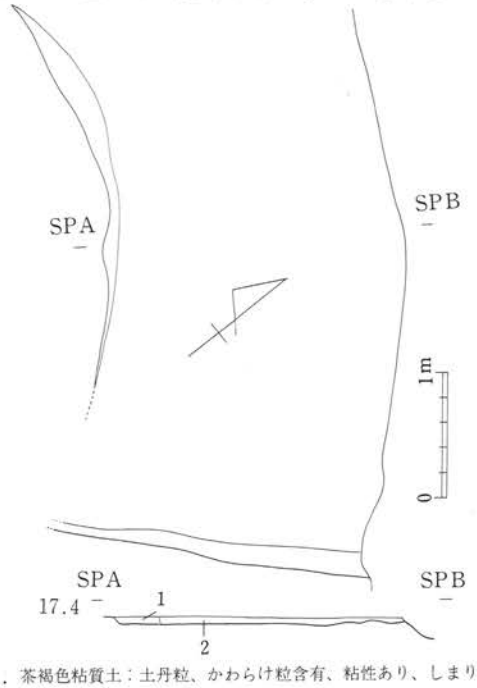
ここに図示した遺物は、そのほとんどが本来復元をさける様な小片ばかりであるが、やや強引に復元し図化したので、計測数値は残存状態の良好なかわらけ等にとどまり、他は記さない。

遺構名は、調査時に便宜上付けた数字番号をそのまま用いた。

Ⅰ　１面の遺構

遺構８

C－２、B－２～B－３グリッドに位置する。確認レベルは17.24m。長軸を4.50m、短軸を2.50m測る。やや方形に近い形を呈するが、東を遺構３に切られており、全体の範囲はつかめない。西側に立ち上がりが見られるが、はっきりとつかみきれないうちに消える。フク土は茶褐色で褐鉄を含む。深さは西方で５cm程の段差がある。浅く起伏の乏しい形状である。



1．茶褐色粘質土：土丹粒、かわらけ粒含有、粘性あり、しまり強い。
2．暗茶褐色粘質土：φ１～1.5cmの鎌倉石と炭化物、かわらけ粒、土丹粒含有、粘性・しまり有り。

Fig. 7　遺構８

近世の遺構ではないかと思われる。

出土遺物（Fig. 8－１～５）

１は、恐らく湯呑み等の磁器片で白地に合成コバルト様の文様が入る。２はかわらけ、全体に磨滅をしており整形痕がわかりにくい。胎土は砂多く、長石、雲母を含有。３は灰釉陶器椀。素地のキメが細かく、色調は白灰色を呈す。胎土は細砂を含み表面に黒いしみが点々とある特徴的な土で、猿投地方の土ではないかと思われる。器内のみこみ部は非常によく磨滅している。体部内面には、灰釉がハケ塗りされている。底部の高台内側は、糸切り後、回転ヘラ削りされている。４は土師器の甕の口辺部。全面に磨滅が著しく整形痕が見ら

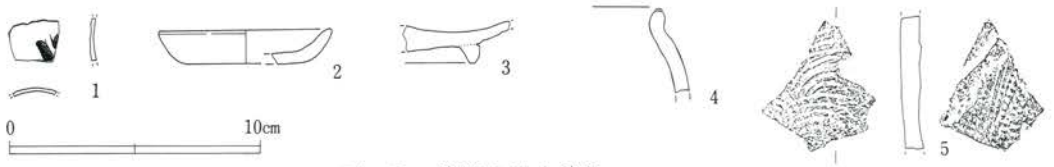


Fig. 8　遺構 8 出土遺物

れない。胎土のキメは細かく石英、雲母を含む。5は、須恵器の甕片で表裏面に青海波の叩き目が残る。胎土に砂、長石を含む。

図示出来なかった遺物は、かわらけ大型80ｇ、小型30ｇ、獣骨1片。

遺構 3

調査区のほぼ中央を南北に延びる溝である。B－1～B－3グリッドに位置する。北端は調査区外に延び、西で遺構8を切り南端は攪乱に切られる。

確認レベルは北が海抜17.1m。南は17.27m。溝底のレベルは、北が17.10m。南が17.03mと、南へ下り、流れは北から南へ現大塚川へ流れ込む形になる。確認された長さは6.5m。溝巾はあまり変動なく北方から中央辺りにかけて4.5m前後、南へ行くに従い狭くなり、2.5mになる。深さは北方が浅く12cm前後で南方は深くなり30cmにもなる。

また、断面から二期に分けられる。第1期は巾広く、小土丹を多く含む茶褐色土で、第2期はやや巾がせまく、磨滅したかわらけ片を含む。

出土遺物（Fig.10—18～20）

18は、白磁の口兀皿、もしくは碗、の底部と思われる。素地のキメはやや粗く、砂を少量含有する色調は白灰色の胎土で、内外面に施釉されている。19は、かわらけ。全体に磨滅している上、再火を受けており側面に砂混じりのタールが付着している。胎土の素地は細かで砂、雲母をやや多く含む。色調は明橙灰色。口径12.2cm。底径7.0cm。器高3.1cmを測る。20は、高坏の脚部。磨滅が著しく、整形痕が認められない。胎土のキメは細かく、多目の砂と針状物、石英を含有。

ここに図示した遺物以外は、かわらけ大型50ｇ小型30ｇ、常滑甕片3片。

遺構 7

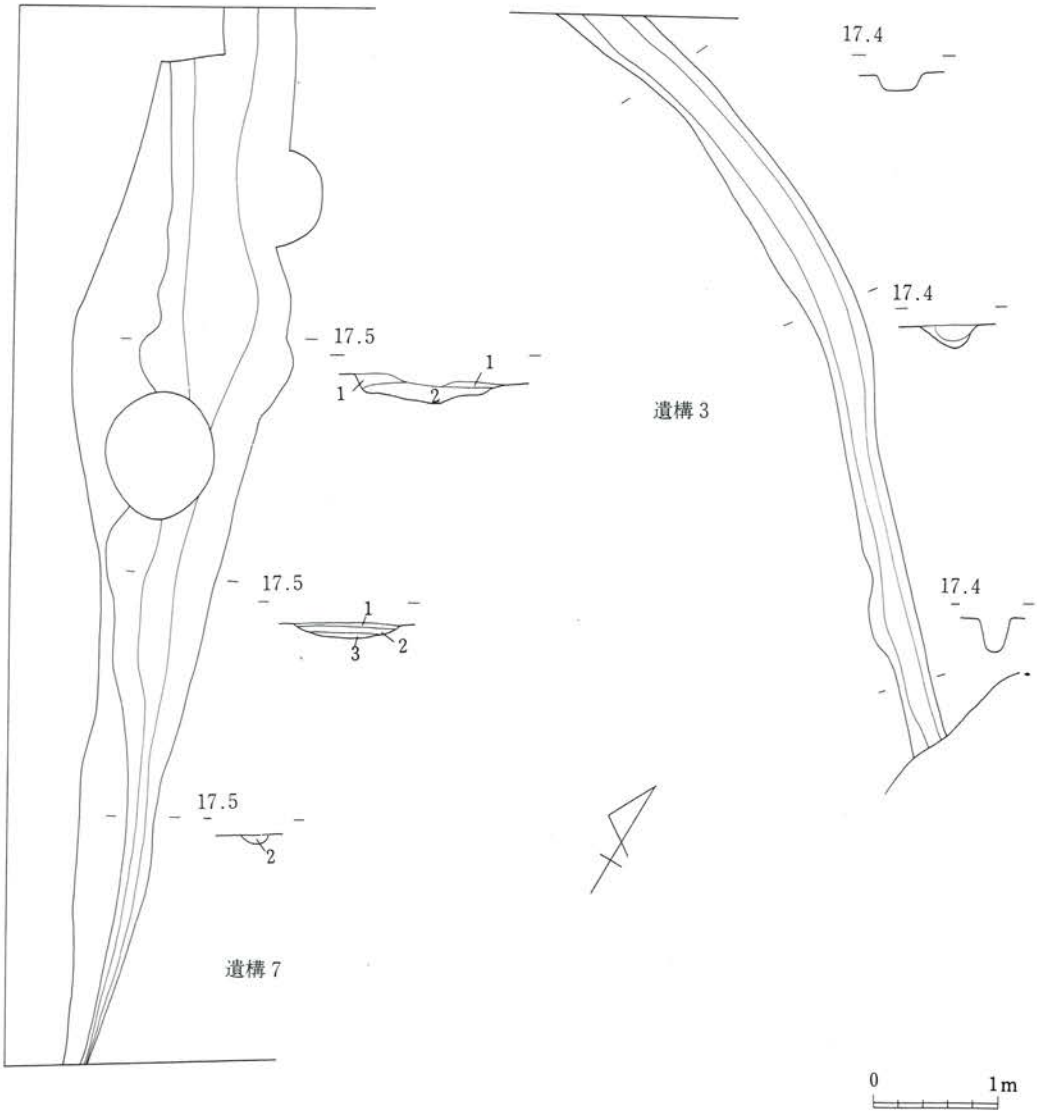
調査区の西側を北から南に延びる溝で、C－1・2～D－3グリッドに位置する。

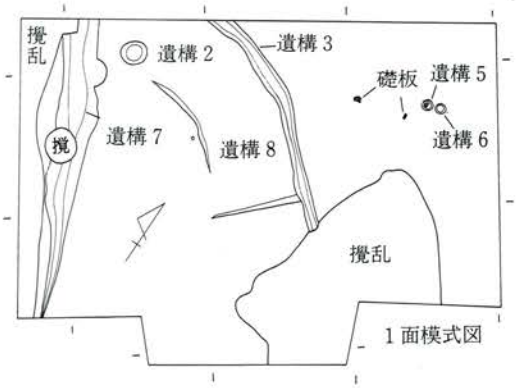
北は攪乱に切られ、南端に行くに従い狭くなってくる。

確認レベルは北が17.22m。南端が17.09m。流れは北から南へ流れ込む様子。確認された長さは、9.70m。溝巾は所々侵蝕されているが北でほぼ1m、深さ25cm。南方で巾10cmまでにすぼまり深さ10cmを測る。このまま自然に消失するのであろうか。フク土は、ぎっしりと大小の土丹が詰まっている。

出土遺物（Fig.10—1～16）

1は、常滑こね鉢の口辺部。長石を多く含有する。暗灰色。体部に強いヘラ整形痕が残る。2も山茶碗窯系こね鉢の口辺。暗灰色の胎土で長石、石英粒を多く含有。3は、山茶碗窯系こね鉢底部。





遺構3土層注記
1層　茶褐色粘質土：1cm前後のかわらけ片含む、粘性あり、しまり弱い。
2層　茶褐色粘質土：細かい土丹粒やや多く含有、粘性あり、しまり強い。

遺構7土層注記
1層　暗茶褐色土：細かい土丹粒、かわらけ粒、かわらけ片含有、しまり強く、粘性ややある。
2層　暗茶褐色土：土丹層、φ3～5cmの土丹片が密集する、1層よりやや暗目の土。
3層　茶褐色土　：無遺物で粘性がある。

Fig. 9　遺構3・7・1面模式図

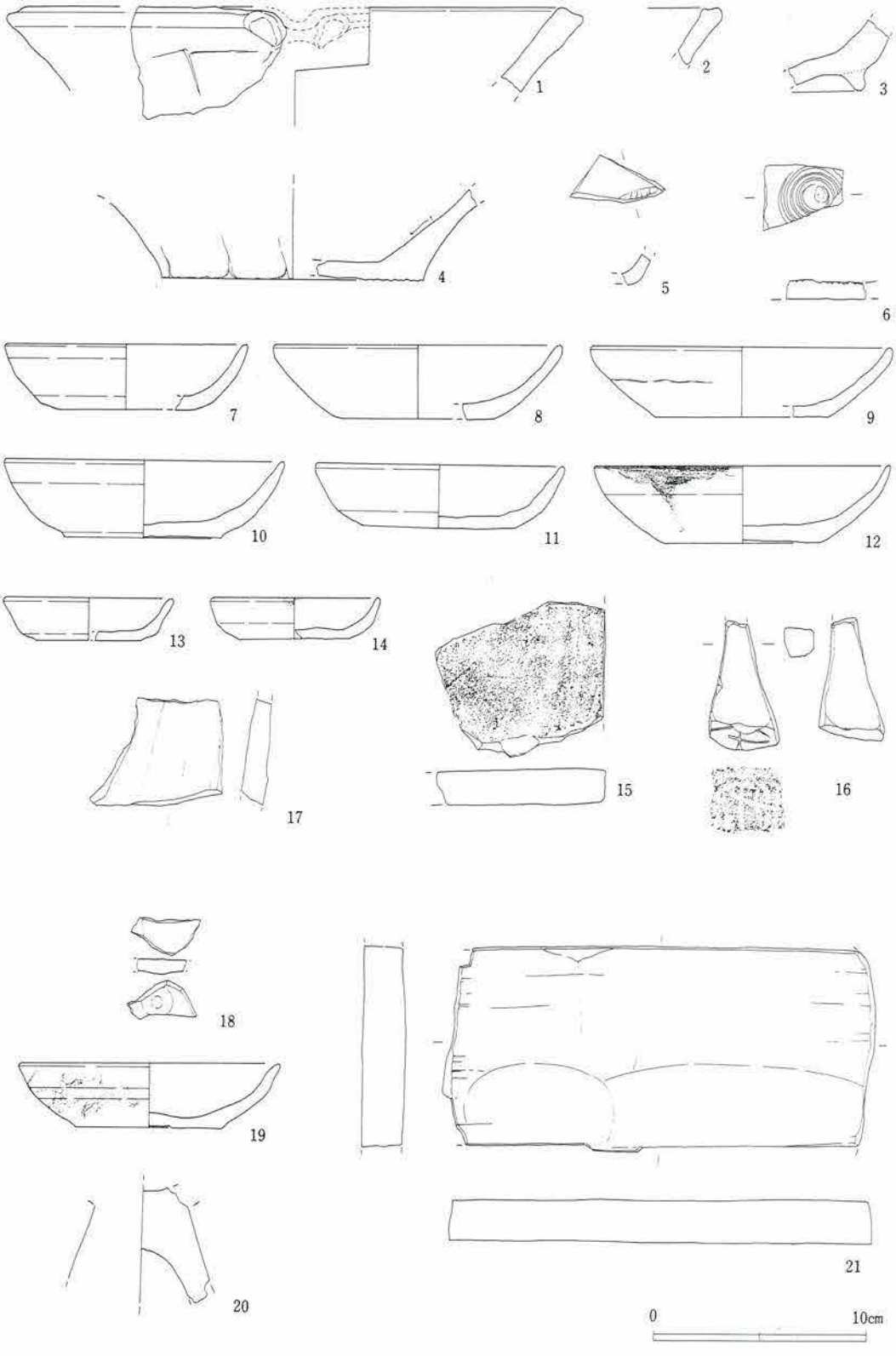


Fig.10　遺構 3 ・ 5 ・ 7 出土遺物

灰白色でみこみ部に降灰釉がかかる。4は常滑こね鉢底部。長石粒多く、砂、石英を含む。内面下方は磨滅が著しい。底部にぼこぼこの圧痕残る。5は卸し皿。釉は緑灰色で薄く刷毛塗りされている。胎土は明灰色で、微量砂を含む。6は折縁鉢の底部。みこみの中央部に渦状の四重沈線が巡る。胎土は乳白色で微量砂を含む。内面緑灰色に施釉され、底部も極薄く塗られている。断面に接着の痕なのか漆らしき付着物が見られる。7から14はかわらけ、底部は全てろくろ回転糸切りの左回りを呈す。7は磨滅が著しい。砂、黒雲母、石英、針状物を含有。口径11.8cm。底径6.6cm。器高3.1cm。8は砂多く、石英、針状物を含む。口径13.4cm。底径3.7cm。器高3.5cm。9は、全体に磨滅が著しいがキメの細かい土、砂をやや多く含み、針状物も見られる。口径14cm、底径8.2cm。器高3.3cmを測る。10は素地のキメが細かい。含有物は、砂が少なめで針状物がやや目立つ。口径13cm。底径7.5cm。器高3.7cm。11も全体に磨滅が著しい。砂はやや少なく、粘土粒、針状物を含む。口径11.5cm。底径7.1cm。器高3.1cm。12は、器内のみこみと外面が煤けており、口辺部には強い横撫でが入る。素地のキメは粗く、砂、粘土粒、雲母、赤色粒子を含む。口径13.8cm、底径7.3cm。器高3.7cm。13は、全体に磨滅している。素地のキメは細かく、砂、針状物を含有。口径7.8cm。底径5.1cm。器高は2cmを測る。14は、口辺部にタールを付着させている。素地のキメは細かく、多目の砂と、雲母、針状物を含有する。口径7.8cm、底径5.2cm、器高2cmを測る。15は斜格子の叩き目文を持つ女瓦。暗灰色の胎土で、キメは細かいが、小石粒、白色粒子、砂等を多く含み、硬く焼きしまる。側面はヘラ削り。叩き目は磨滅が著しくはっきりしない。16は、砥石（中砥）各4面ともよく使い込まれている。一端にV字の削痕が4条残る。石質は、気胞を多く含みやや軟質。元々は方柱状の材であったと思われる。17は土師器の甕もしくは甑。表面ヘラ撫でされている。

図示以外の遺物は、かわらけの大型が2480g、小型が660g、手焙り（瓦質）片が1片出土している。

遺構5

調査区の北方に並ぶ柱穴。A－2グリッドに位置する。確認レベルは17.18m。直径が25～30cmの円形を呈する。深さ15cm。

出土遺物（Fig.10—21）

表面にチョウナ痕の残る板片。礎板か。長軸20.5cm。短軸9.7cm。厚さ2.1cmを測る。

遺構6

A－2グリッドに遺構5と並ぶ。確認レベルは17.18m。直径30cmの円形を呈し、深さは20cm。中に礎板らしき木片を残すが、残存状態が悪く取り上げる事は出来なかった。

遺構5、6のフク土は同質で、暗茶褐色粘質土で土丹を含む。

遺構2

調査区北西、C－1グリッドに位置する。平面形がほぼ円を呈する土壙である。

確認レベルは海抜17.43mで、一面精査時に土壙状の攪乱群とともに確認された。当初攪乱として掘り進めてしまい、他の攪乱とのフク土の違いを記録する事は出来なかった。

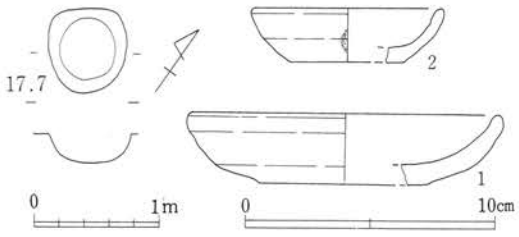


Fig.11　遺構 2

他の土坑は、醤油の一升瓶がゴロゴロ出て来たり、丸頭の釘や鉄滓を包含していたため攪乱とした。

遺構 2 からは、かわらけ 2 片のみが出土した。下面の遺構の遺物を掘り上げてしまった形跡はない。

出土遺物（Fig.12— 1 ～ 2 ）

1 はかわらけ、全体に磨滅している。素地のキメは粗い。砂が多く、針状物を含有する。厚手でやや浅い器形。口径12.3cm、底径6.8cm、器高2.9cm。 2 、かわらけ、素地のキメは細かい。砂は少な目で粘土粒、針状物を含む。外面は一部にタールを付着させ、口辺内面に水引きした痕が強く残る。口径6.5cm。底径5.7cm、器高2.2cm。

1 面採集遺物（Fig.12— 1 ～ 5 ）

1 は須恵器の坏。底部を全面ヘラ削りしている。砂、長石を含む粗目の土である。表面は淡灰色を呈する。 2 も須恵器の坏。底部は糸切りされ、 1 より新しい形態を呈する。精良な土を用いた暗青灰色。 3 は灰釉陶器椀、素地のキメが細かく、砂、石英を少量含む。器内体部まで緑黄色の灰釉を刷毛塗りし、体部外面及び外底面は回転ヘラ削りの後、撫でを施す。高台は「三日月高台」で、内湾する特徴的な形を呈す。黒笹90号窯式期のものと思われる。 4 は、渥美の鉢。素地のキメは細かく、砂をやや多目に含み、小石粒が含まれる。胎土は灰色で、表面は暗灰色を呈する。器内はよく磨滅している。 5 は、山茶碗窯系のこね鉢。高台の畳付部に籾殻痕が残る。黄灰色で作りは雑。砂、長石が多く、石英も見られる。

II　2 面の遺構

遺構14

調査区を東西に横切る溝である。A－2 ～C－1 グリッドに位置する。東端は調査区外に延び、中央で遺構 3 に切られる。西方では遺構15と遺構27を切り、西端を攪乱に切られる。確認レベルは、東で17.4m、西で17.32m。溝底は東17.25m。西16.95m。と東から西へ流れ込む様相だ。確認された長さは、12.5m。巾はほぼ 1 m前後であるが西でやや狭くなり50cm前後となる。深さはほぼ一定しており確認レベルから35cm前後掘られている。

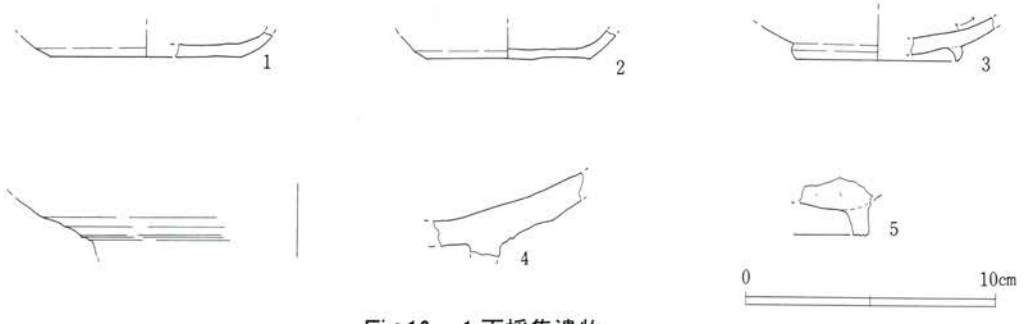


Fig.12　1 面採集遺物

遺構の南側は道路状を呈した間なので、道路の側溝とも考えられる。遺構内東方には、溝底に南北に並ぶピットがある。確認レベル17.17m。北側のピットは、10cm×5cmの楕円で深さ15cm。南側のピットは、6.5cm×5cmの円形を呈し、深さ10cmを測る。

出土遺物（Fig.15—1～16）

1は須恵器の甕片。暗青灰色で砂、長石を含む土。外面に平行叩き目文。内側に青海波文を呈す。2は土師器の高坏で、外面の坏底部にヘラ削りが残る。砂、雲母、粘土粒、針状物を含む明橙灰色。3は、土師器の甕の口縁、砂、長石、石英、小石粒を含有、橙褐色。4は山茶碗、キメはやや粗く砂を少量含む。5は山茶碗の底部。高台の畳付部に籾痕はない。砂、小石粒を含有。6はかわらけ、素地のキメ細かく砂多い。雲母、粘土粒、針状物含有。

7～16は木製品。7は板折敷、厚さ0.7cm。残長17.1cm×9.1cm。残存する3片にφ3㎜の穿孔があり、一辺に3孔穿れていた様である。表面には無数の刃物傷が残されている。俎板に転用したのか。8、9は箸と思われる。8が残長10cm、厚さ7㎜、9が8.8cm。厚さ7㎜。10は草履芯長さ24.3cm、巾5.1cm。厚さ3㎜、11は円盤、中央にφ3㎜の穿孔がある。直径3.9cm。厚さ1㎜。12は礎板か。両端は雑に切られている。残長17.7cm、残巾6cm。厚みは1.5cm。13は14同様両端を切り割られている。鋸目の残る所までの長さ16cm、残巾6.3cm、厚み2.1cm。14は、やや中央よりにφ2㎜の穿孔が2辺から穿れられる。釘穴か。残長18.7cm。残巾2.9cm、厚み2.2cm。15は5cmの木片の先端を丸く削り下す。一見、人形（ひとがた）と見うけられる。全長11.6cm、巾2.7cm。16は丸く円柱に削られている。長さ9.1cm、巾3.2cm。

以上の遺物を見合わせると、古墳後期頃の遺物も見られるが、鎌倉での草履芯の出土の確認は中世以降であり、全体として中世前期頃に帰属すると思われる。また、図示出来なかった遺物は、かわらけ中型55g。小型70g。常滑片1片、須恵器片2片、土師器片、木製品等がある。

遺構19

道路を挟んで遺構14の対岸、B—3グリッドに位置する。道路の側溝の可能性があるが、確認全長2.70mと短く、東は攪乱に切られ、西は消失点がはっきりしないまま消えてしまう。溝巾は60cm深さは5cmから10cm。フク土は茶褐色粘質土で、黒色粘土、土丹、土丹粒、炭化物、火山灰を含み下層に砂質土を溜める。遺物の出土なし。

遺構23

遺構19西方の道路沿い、C—2、C—3グリッド。確認レベル17.11mで、浅い窪みが検出された。5cm程の不正形の窪みで側溝とは言いかねる。

フク土は、茶褐色粘質土で、土丹粒、褐鉄、炭化物を含む。

道路遺構

A—2、B—2、3からC—2、3。D—2グリッドに位置する。調査区を遺構14と平行して横切る。西側で攪乱、遺構15に切られる。中央は1面の遺構3に切られ、東南で攪括に切られている。確認全長は13.70mで、東の確認レベルは17.37m。中央17.18m、西17.15m。と西に向かってやや

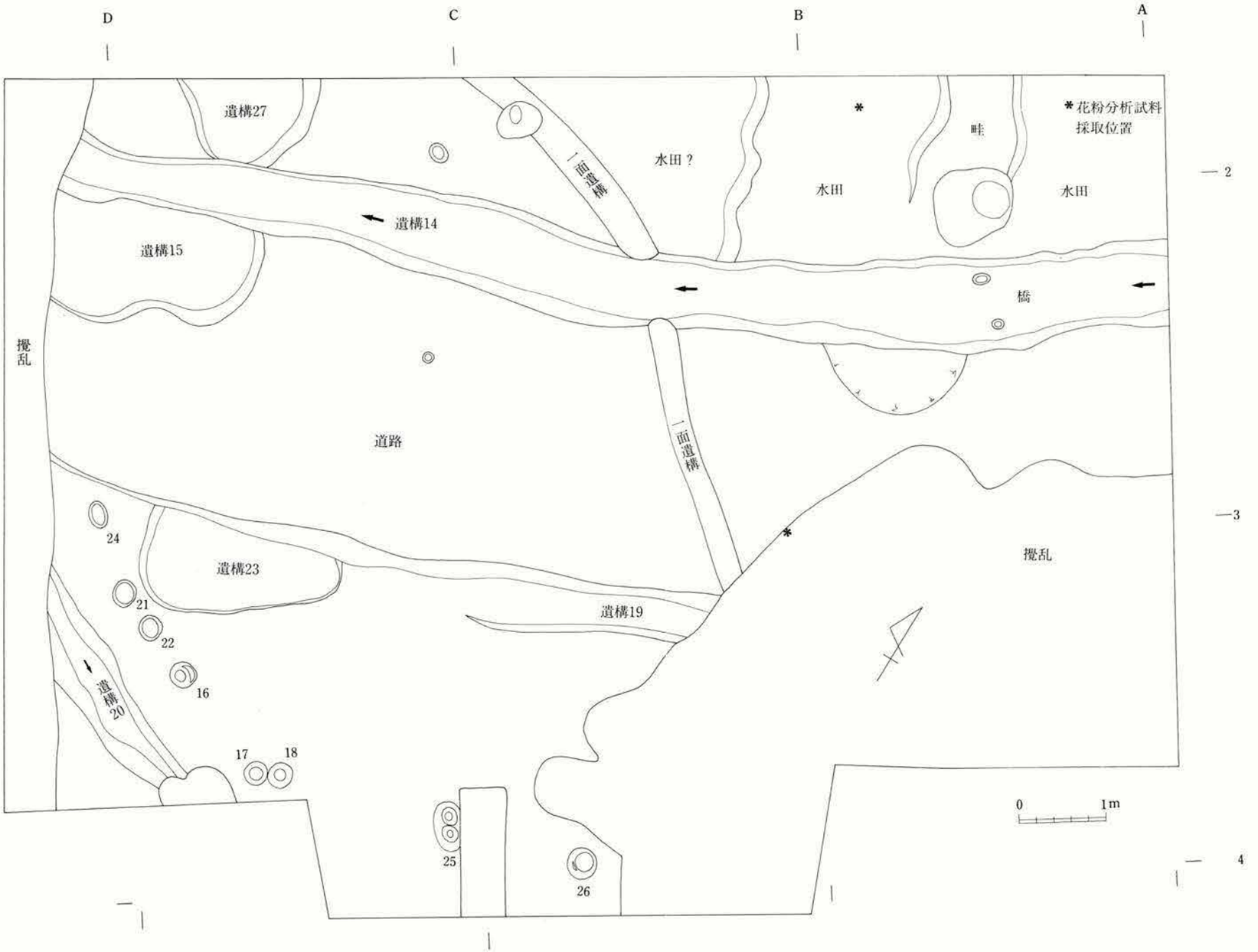


Fig.13　第2面全体図

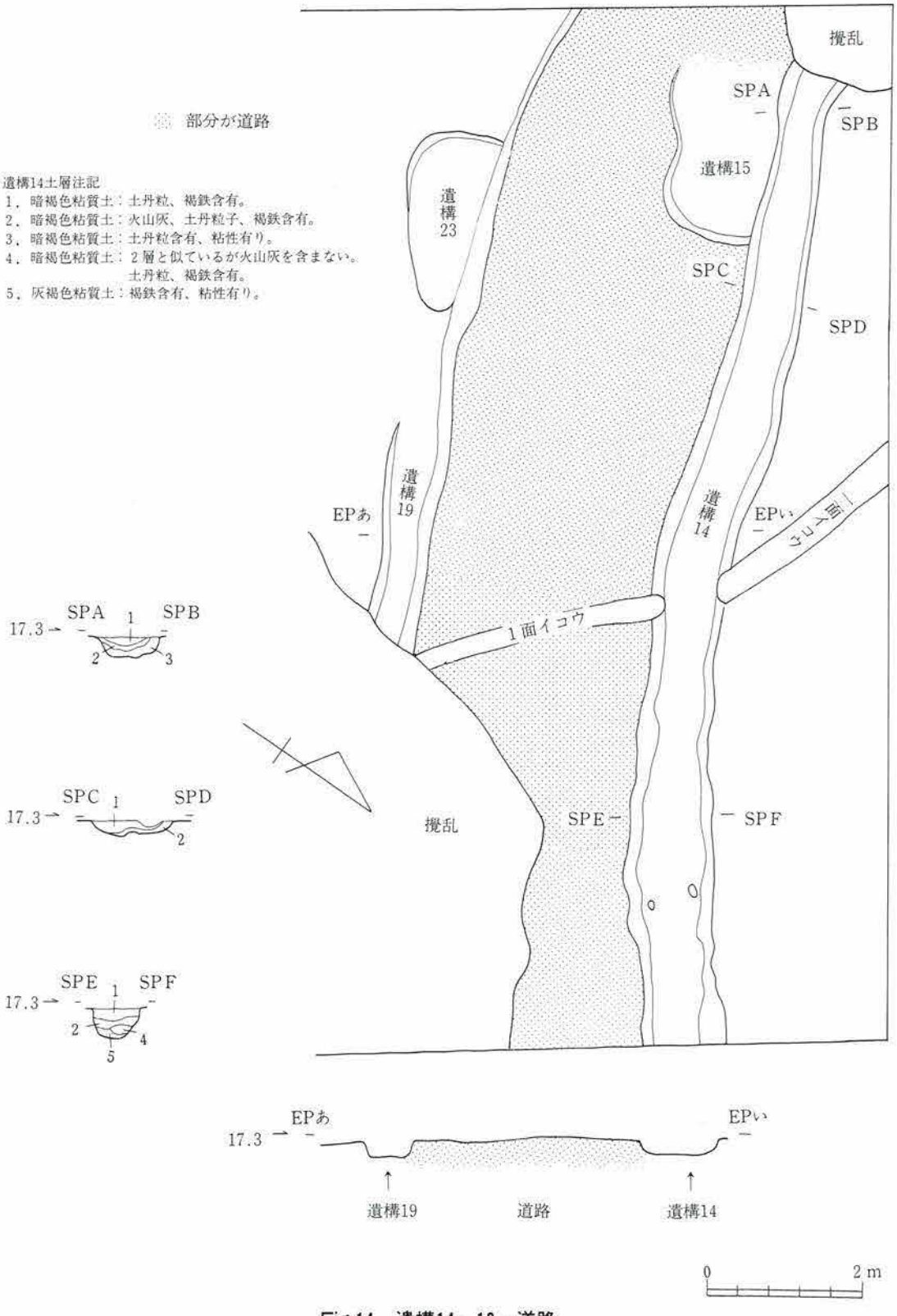


Fig.14　遺構14・19・道路

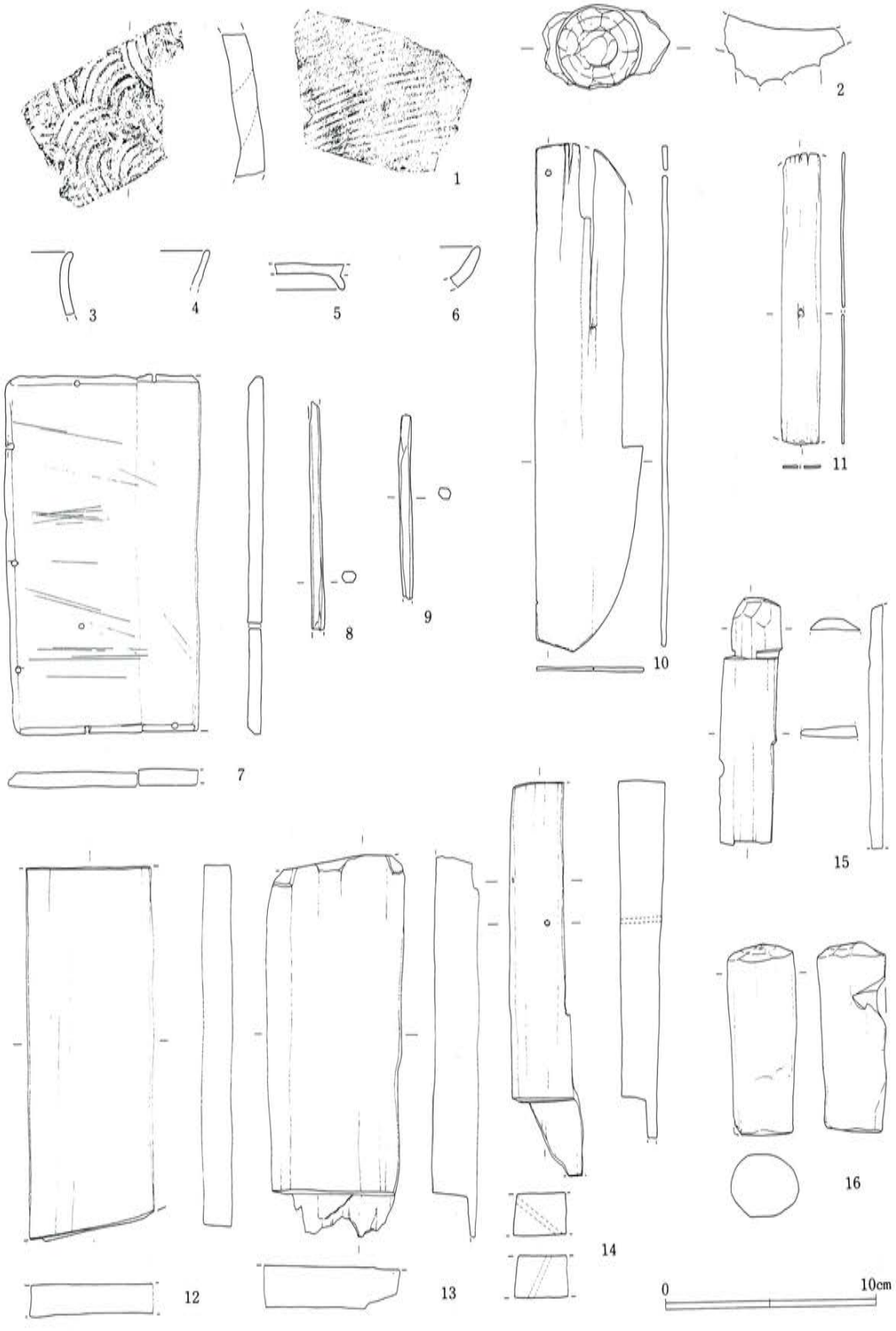


Fig.15　遺構14出土遺物

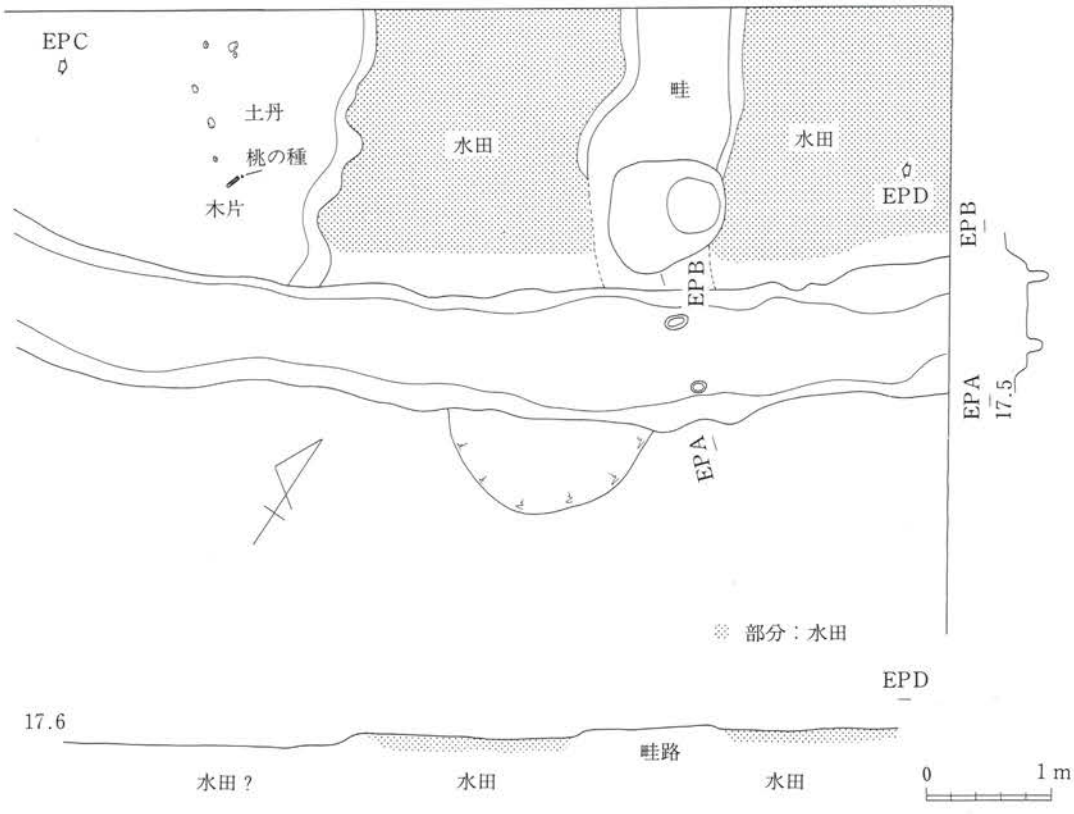


Fig.16　水田周辺図

下る。道巾はほぼ一定しており、３ｍ～3.4m程である。地業は版築等を施したものではなく、硬くしまった地山を削り出したものである。調査区東側の隣接地を88年に吉田章一郎団長下で調査を実施した際に、この道路に続く遺構が検出されており、[※註1]更に北東へ延び、現公道に沿う様相である。

水田周辺

調査区北方で植物遺体を含む黒色粘質土地帯があった。Ａ－２グリッドには、遺構14に直行する形で、道路と同様に地山を削り出した様な、巾3.7m～5.5mの畦道が検出された。海抜は17.36mその両脇に、90cm×15cmのトレンチを設け、花粉分析を実施した結果、水田と確定した。しかし、無念ながら遺構としての確認は明確にしえなかった。

畦道を挟み、西側のＢ－１・２グリッドでは、緩やかに段差がつく、その下段は、分析対象としなかったので、確定出来ないが上段同様に、黒色粘質土が広がっていたため、水田であった可能性は高く、遺構14の北岸、調査区北東の一帯には、段差のつく水田だったのではないかと想像をかき立てる。また、分析の結果では、道路南岸も水田であり、第４層まで続く事も明らかにされた。

畦道と道路の直交する地点で、遺構14の溝底に２つの柱穴が確認されている。レベル数値等は、遺構14の項で述べたが、畦道と道路を結ぶ橋の柱穴ではないかと思われる。また、畦道上に約50cm巾の窪みが見られるが、橋畔の施設であろうか？

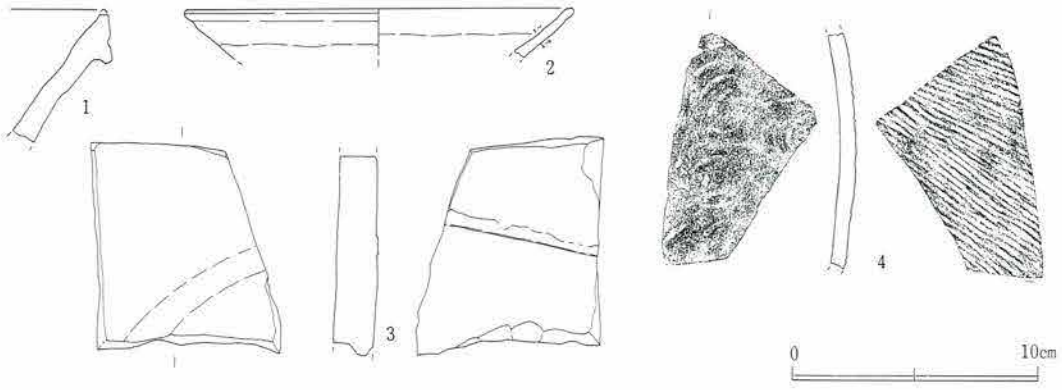


Fig.17　水田周辺採集遺物

水田周辺採集遺物（Fig.17—1～4）

1は須恵器の甕の口縁、素地のキメは粗く、砂、石英、長石、針状物を含む。2は灰釉陶器椀、釉を口辺部の内外面に漬けがけしており、露胎部は暗灰色を呈する。胎土は灰色。砂、石英を多く含む。3は渥美の甕、再火を受けており、降灰釉がざらついている。内面に帯状に緑がかった黒色の釉がついている。4は、須恵器の甕、精良な土を用い、砂少なく、石英、長石が見られる。表面は、平行叩き目文が顕著、器内には青海波文が磨滅されつつ、おぼろげに形をとどめている。

遺構15

調査区北西、C—2グリッドに位置する。確認レベルは17.25m。道路を切り、北を遺構14に切られ、西は消失点をはっきり残さずにだらだらと消える。不正形の土壙状である。

出土遺物は図示したものの他に、かわらけ片、中型50g、小型20g。土師質土器片は1片を出土する。この土師質土器片は図示しえなかったが、遺構27出土の土器片と、同一個体ではないが、同質の胎土を持ち、器形も近いものが想像される。

出土遺物（Fig.18—1）

土師器の坏、明橙灰色で、砂が極少量入る精良な土。非常に粉っぽい相模型の坏で、調整痕は不明瞭。

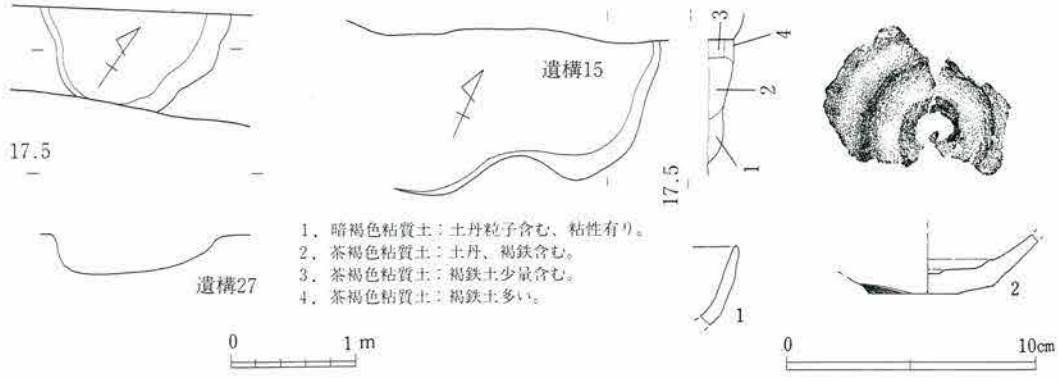


Fig.18　遺構15・27

遺構27

C－1グリッドに位置し、遺構14を挟んで遺構15の対岸にある。北は調査区外に延び、南は遺構14に切られている。確認レベルは17.03m、不整形の土坑である。確認巾は1.3m。深さは30cm～10cmを測る。フク土は黒褐色粘質土で、土丹粒子、褐鉄を含む粘りのある土。

出土した遺物は、図示したものの他に、かわらけ片、中型35ｇ、小型20ｇが出土している。

出土遺物（Fig.18－2）

土師質土器、胎土が特徴的である。素地のキメは細かく精良で、雲母と、やや多目の砂を含有する。焼成は良好でよく焼きしまる。色調は暗茶褐色のチョコレート色。器内中央から渦巻状に強い回転痕が付く。外底部の回転糸切りは、雑に行われている。

所謂、古代末から中世初頭に見られる土師質土器であろうか。

遺構20

調査区西南の隅、C－3、D－3グリッドに位置する溝で、東西に延びるが、東西とも攪乱に切られている。確認レベルは西が17.05m。南16.91m、とやや東が低く、流れもそれに従うのだろう。確認された長さは2.5m。溝巾はほぼ60cm程だが、東方は狭くなる。深さは10～15cm。フク土は暗褐色粘質土。土丹粒、土器の極小片を含みしまりが悪い。

ピット群

調査区の南側で8個のピットが検出された。いづれも遺物の出土はない。

遺構16、C－3グリッドに位置する。確認レベルは17.06m。直径30cmの円形。深さ16cm。フク土は暗茶褐色粘質土。土丹、褐鉄を含む。

遺構17、C－3グリッドに位置する。確認レベルは17m、直径26cmの円形を呈す。深さ15cm。フク土は暗茶褐色粘質土。土丹、炭化物、褐鉄を含むしまりが弱い土。

遺構18、C－3グリッドで、遺構17と並ぶ、確認レベル17m。直径32×24cmのほぼ円形、深さ16cmフク土は暗茶褐色粘質土、土丹、炭化物、褐鉄を含む。しまりが強い。

遺構21、D－3グリッドに位置する。確認レベル17.09m。直径25cmの円形を呈する。深さ8cm。フク土は暗茶褐色粘質土、小土丹褐鉄含む。

遺構22、C－3グリッドに位置する。確認レベル17.1m。直径23cmの円形を呈する。深さ9cm。フク土は暗茶褐色粘質土、褐鉄含む。

遺構24、D－2グリッドに位置する。確認レベル17.13m。直径32×20cmの楕円形を呈する。深さ5cm。フク土は、暗茶褐色粘質土、土丹粒子、炭化物、褐鉄を含む。

遺構25、C－3グリッドに位置する。確認レベル17m。直径54cm×26cmの北東を攪乱に切られた楕円形の中に直径20cmのピットが2つ並ぶ、ピットの底辺レベルは16.76m。フク土は暗茶褐色粘質土。土丹、黒色粘土ブロック、褐鉄を含む。

遺構26、B－3グリッド、確認レベルは16.99m。直径34×30の円形を呈する。深さ23cm。フク土は暗茶褐色土、土丹粒、褐鉄、黒色粘土ブロックを含む。しまり弱い。

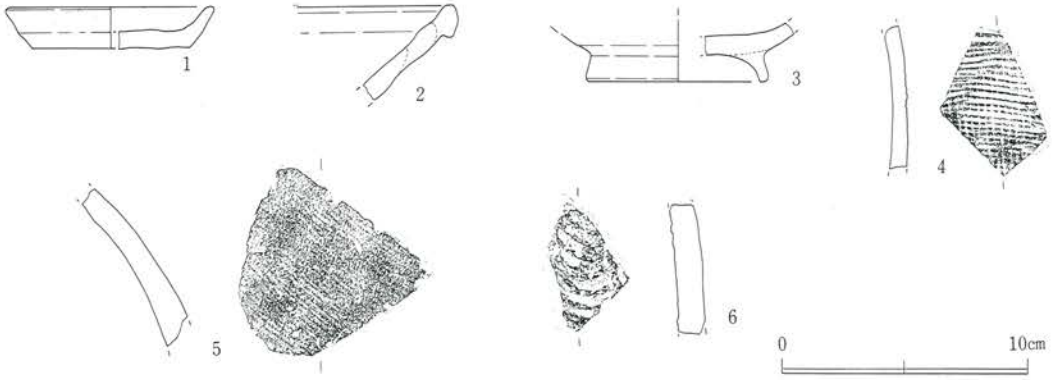


Fig.19　2 面採集遺物

2 面採集遺物

1はかわらけ、底部は回転糸切り、砂、雲母を含むキメの細かい胎土。2は魚住の鉢の口辺部。縁帯部に降灰釉がかかる。素地のキメは粗く、砂、長石、石英を含む。3は土師質土器で、高台内側の底部は、回転糸切りしている。よく焼きしまったしっかりした高台をつける。胎土はキメが細かく砂を多く含み、細かい雲母と針状物が見られる。4～5は須恵器の甕片。外面に平行叩き目文があり内面は弱い同心円文がある。5は外面に平行文が見られる。6は内面が青海波文、外面が平行文。

III　第 3 層出土遺物（Fig.20— 1 ～17）

砂、スコリアの混じる黒色粘質土まで掘削し、3層とした。北位を頂きに放射状に下る地形を呈す。面的な要素を含むものは何も検出できなかった。しかし、包含する遺物は多く、古墳後期頃のものから、奈良・平安期と思われるものが出土している。

出土遺物（Fig.20— 1 ～17）

1～5までは須恵器、1は蓋坏の坏で細かく丁寧に整形されている。口辺は内湾し口唇部でやや外反する。器内は横撫でされている。素地のキメは細かく、砂とやや大粒の長石を含む。色調は青灰色を呈す。2も蓋坏の坏、口唇部ほぼ直立し、内側に強く稜を残す。体部は回転ヘラ削り、色調は1よりやや暗目の青灰色。素地のキメは細かい、砂、長石を含有する。3は、皿あるいは蓋か。素地のキメ細かく針状物が多く入る。砂、石英を混ぜた胎土で、暗青灰色を呈す。北武蔵窯系か。4は蓋坏の坏。外面は全体に降灰釉がかかる。良く水ひされ練られた精良な土で、含有物は、極少量の砂と長石である。5は甕の肩か。内面は頸部付近にヘラ撫でが入り、その下に青海波文、外面は平行叩き目文が残る。長石、砂を含有するよく焼きしまった土。6～10は土師器の坏。6は、器内みこみからやや内湾気味に立ち上るが口辺にかかり外反し、断面筆型の口縁を成す。外面は口辺が内側に押されて下り、ゆるやかに稜を二段作る。胎土は、精良な土で少量の砂と黒色の細粒子が入る。色調は暗黄褐色。7は、内外面を赤彩した比企型の坏。口辺はゆるく外反し、体部はヘラ削

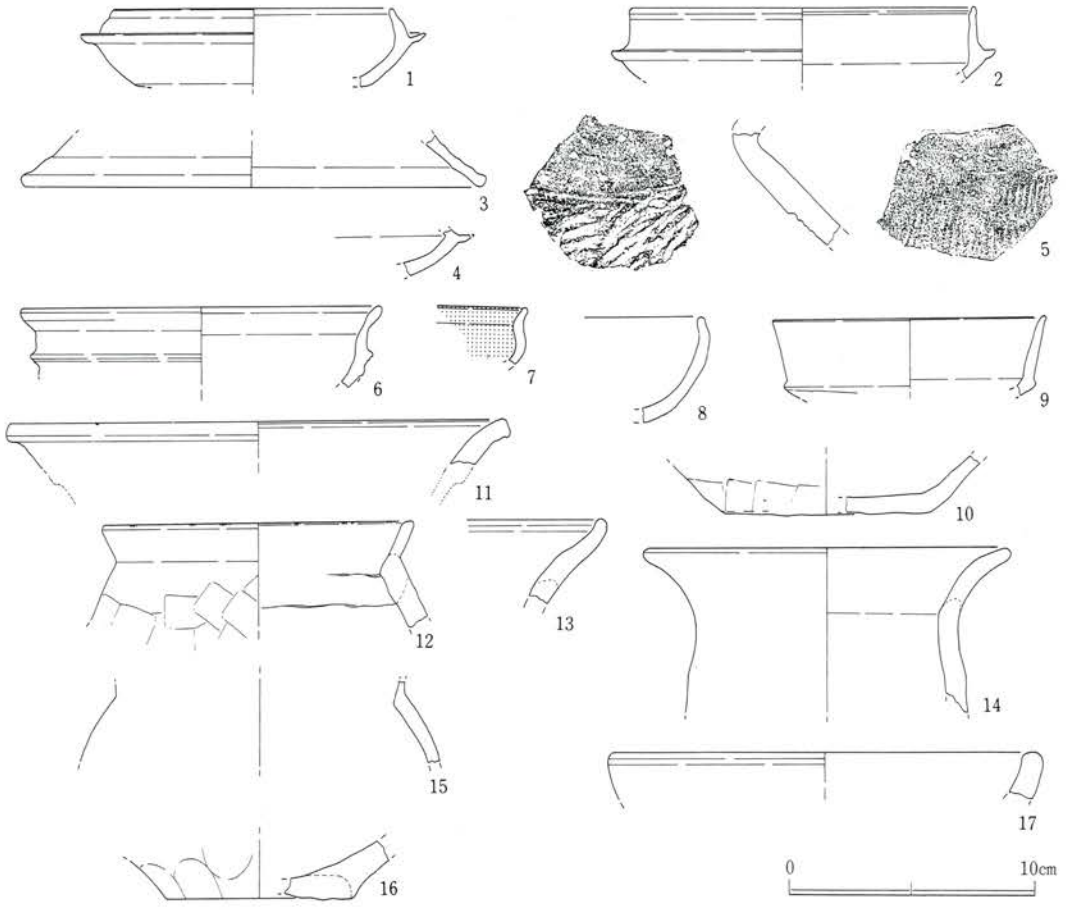


Fig.20　第３層出土遺物

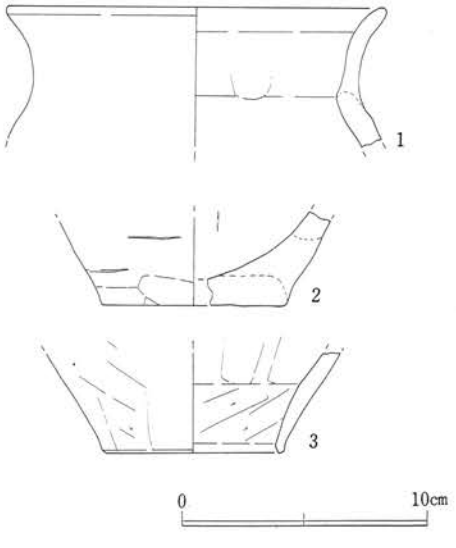


Fig.21　３層側溝出土遺物

りし緩く張る。胎土は赤褐色でキメ細かく、砂をやや多目に含む。８は全体に磨滅が著しい。明橙灰色で体部外面はヘラ削りしている。砂、針状物を含有。９はやや外反気味に直立した口辺で、体部はヘラ削り、素地のキメは細かく、砂、黒色粒子を含む、明橙灰色。10は坏の底部、鮮やかな明橙灰色で、外面を全面ヘラ調整している。11から16は土師器の甕もしくは壺。11は複合口縁と思われる壺の口辺。黄灰色のキメの細かい胎土で砂、白雲母を含む。12は体部が厚く口辺がくの字に屈曲する。内面から口辺にかけて強く横撫でされ胴部はヘラ削りされる。口唇部に刷毛目の圧痕が数カ所残る。13は、赤褐色でよく焼きしまる。砂と

やや大粒の黒色粒を含有する。14は甕の口辺。胴部が張らず、口辺外反し、だらりと下る。内面は刷毛目を撫で消す。外面胴部はすすけている。15は壺か、薄手である。全体に磨滅していて整形痕は不明瞭。砂、黒色粒を多く含む。16は甕の底部で木葉痕を残す。外面はヘラ撫でされており全体が黒く煤けている。砂を多く含んだ淡橙灰色。17は器形不明。口縁は丸く素地のキメは細かい。砂、黒色粒子を少量含む。

第3層側溝出土遺物（Fig.21—1～3）

3層から4層にかけて調査の便宜上、調査区の北、東、西の三辺に巾15cm程の側溝を掘った。その時に出土した遺物のうち図化可能な3片を図示する。

1は土師器の甕の口辺。頸部内面に指頭痕が残る。茶褐色でよく焼きしまる。含有物は、砂、黒色粒子が多い。2は底部を含む内外面をヘラ撫でしている。淡橙灰色で、砂、黒色粒子を含む。3は甑。外面はヘラ削り、内面はヘラ撫でからヘラ削りに移行し底部下端に強くヘラ削りがぐるりと巡る。素地のキメが細かく、砂、石英粒が多く見られるやや白っぽい橙灰色。

IV　第4層の遺構

火山灰層の上の黒色粘質土を火山灰層より10cm上のレベルまで掘削し、4層とした。

4層内では、明確に遺構は伴わないが遺物の出土状態が、単に包含されているというよりも、人為的にその場に置かれた（放置、放棄された）様相の強い出土の仕方をした遺物と遺物群がある。これらは任意に掘り下げたレベルが偶然生活面であったか、もしくは、上層の遺構の確認が出来ず掘り残したものであろうか。とりあえず4層を単に遺物包含層と考えるよりも、全域を人為的に構築した「面」としては捕らえられないが、4層の中に面的な部分もあると考えたい。

尚、4層より下の火山灰層まで一部トレンチ調査をしたが、その範囲内では、遺構、遺物とも検

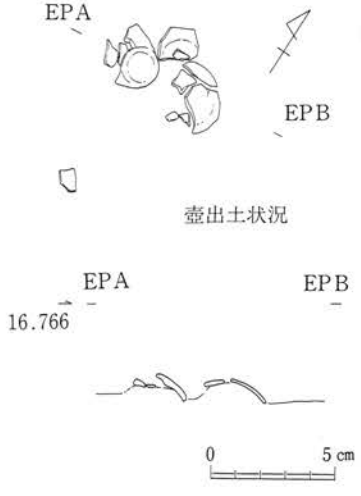


Fig.22　遺構29

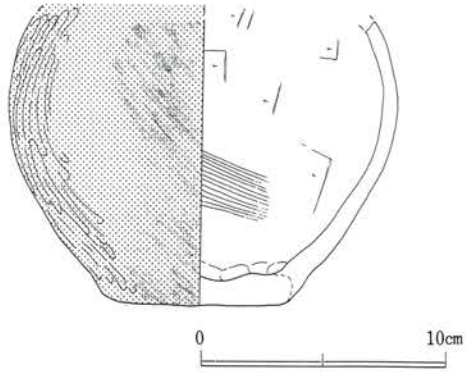
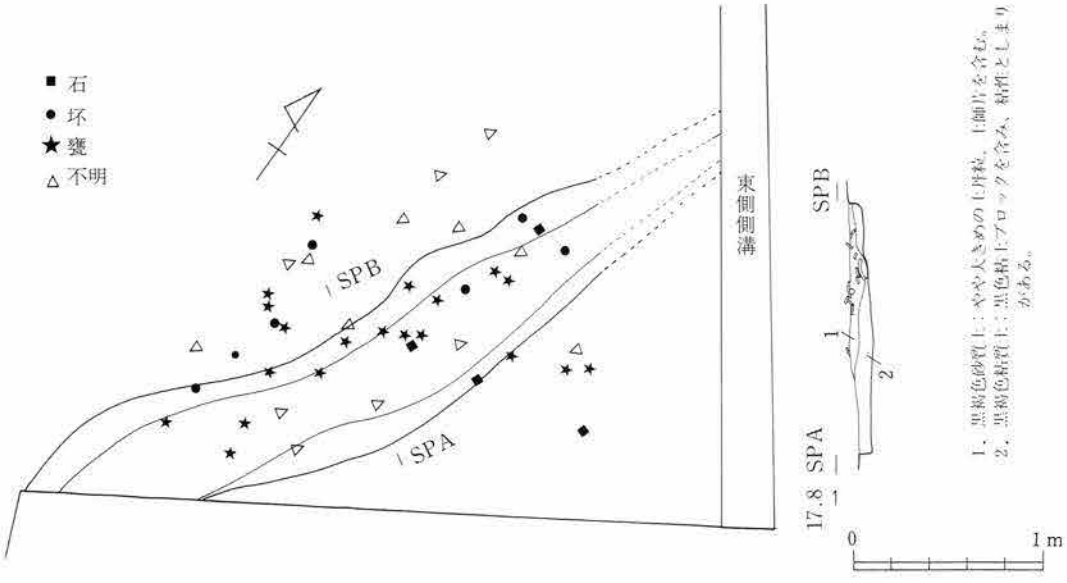


Fig.23　遺構29出土遺物



	数量	備　　考
坏　土師	28片	口片多い。
須恵	3片	図示
甕　須恵	1片	図示
土師	148片	甕、壺は明確に判別しにくく、明らかに壺であるもののみ数を上げた。
壺　土師	24片	
高坏　土師	8片	ほぼ脚部片
甑　土師	2片	体部

	数量	備　　考
磨滅片	2片	小片であるが全体に磨滅　土師のみ
小片　土師	275片	3㎝以下のもの
石	9ケ	内、3ケが火を受けている。
須恵　平瓶	1片	図示
土師　坩	1片	図示
不明	14片	類別出来ないもの。

表1　出土遺物内訳け表

Fig.24　遺構30

出できず、調査を打ち切った。

遺構29

調査区のほぼ中央、B－2グリッドに位置する。確認レベルは16.56m。

遺構は確認出来なかったが、壺の周辺は、他の地盤よりしまりが非常に弱い。

遺物（Fig.23）

胴が球形を呈する、和泉から鬼高期頃の壺であろうか。胎土の素地のキメは細かい。黒色粒、石英が多く、針状物、白雲母、長石、砂、粘土粒を含有。黄褐色で焼きが甘くややボソボソした土である。外面胴部は一部煤けている。整形痕は、外面胴部に磨きを施し赤彩されていた様子。器内は刷毛目調整の後にヘラの横撫でで刷毛目を消している。底部内面は指頭痕が顕著に残る。

出土状態が、あたかも据え置いた物が土圧で割れた様であるが、口辺部は損失している。

遺構30

調査区の東南隅、A－3グリッドに位置する。海抜17.54mで、平面約2m四方を海抜17.46mの深さを持って遺物を含有していた。遺物を全て取り除いた後には溝状に窪みが出来たが、上面での遺構の確認は出来ず、また調査区の隅であり、溝状の窪みがどう広がるのかを確認する事は出来ない。

Fig.24は遺構30の検出時の遺物の散布状態と遺物を全て取り上げた後の溝状の窪みとを現している。

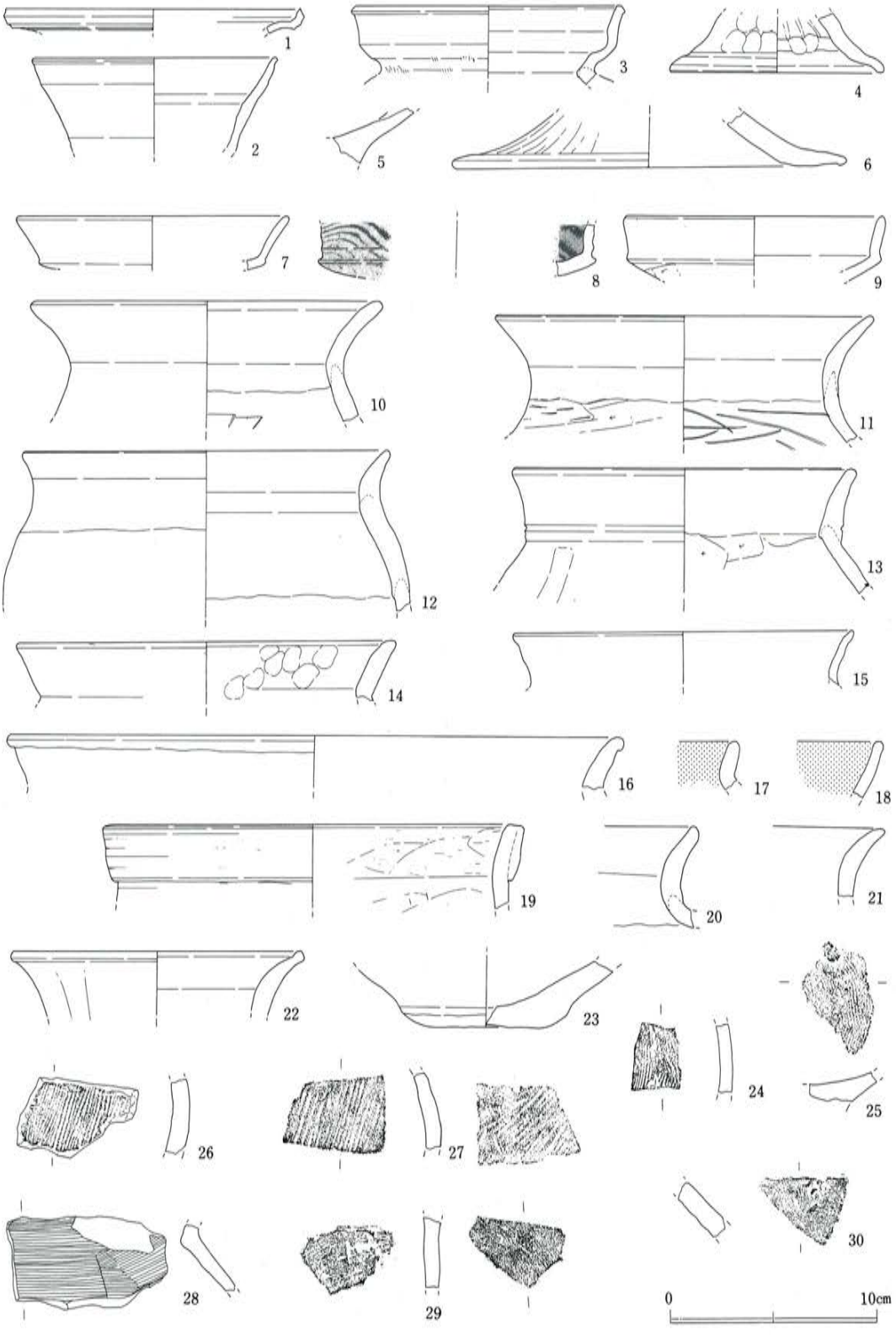


Fig.25　遺構30出土遺物

表１は、出土遺物の内訳である。

出土遺物は、古墳後期を主体とするが、時期的に異なる遺物も少量混入し、奈良時代初頭頃までのものも見られる。

出土遺物（Fig.25—１～30）

１は須恵器。器形は不明である。内曲した口縁部は、外へ張り出しながら一旦、強い稜を巡らせ、反り気味に下へ延びる。８世紀初頭の坏蓋で良く似た器形があるが口縁がこれ程には内湾しない、胎土は精良で、極少量の砂が混じる。色調は青灰色。２は須恵器の瓶（平瓶）の口辺。赤褐色を呈し、器内、外ともに細かい横撫で痕を残す。胎土は精良で、砂、長石を少量含む。３は、土師器壺の口辺。器内に大きく段をつけて、僅かに反りながら口を開ける。頚部に胴部整形痕の刷毛目痕を残すがほぼ撫でにより消される。器内では段のつく所で横撫でされている。胎土は砂、黒色粒が多く、針状物も見られる。褐色でよく焼きしまる。４は、土師器の高坏脚部。あるいは、先端の形から、坩の口辺かとも思われるが不明である。内面中央には指頭痕が残りその上に磨きの様なヘラの整形痕が見られる。外面は中腹に弱く指頭痕を残し、ふっくらと裾を広げ、先端をやや内湾させる。素地のキメは非常に細かい、砂、黒色粒子が微量入る。色調は黄灰色。５は土師器の高坏、坏底部。内外とも赤彩されている。外面を斜めにヘラ削りする。砂、黒色粒子、針状物を少量含む。胎土の色は黄褐色。６は土師器の高坏脚部か。外面は縦の刷毛の後に撫で、或いはヘラ撫で調整を加える。内面ヘラ整形。素地のキメ細かく少量の砂、黒色粒子を含む。色調は外表面は赤褐色、内面胎土は黄褐色。７～９は土師器の坏、鬼高期の特徴をもつ。７は、口辺部やや外反する。素地のキメは細かいが、砂を多く含む。８は、黒色処理されており黒褐色を呈する。素地の色は淡黄灰色で、砂、白色粒子が多く、長石を含む。体部はヘラ削り。９は体部ヘラ削り。素地のキメは細かく、砂はやや多い。石英、白色粒子が見られる。色調は赤褐色を呈しかなり赤いが、赤彩を施した様ではない。18は、内面に赤彩を施す。砂、石英、針状物を含む。黄灰色。10から23までは土師器の甕もしくは壺。10は器内の頚部下方にヘラ撫でが見られるが、他は強い横撫で。赤褐色で硬く、よく焼きしまっている。胎土は砂っぽく粗い。11は、胴部内面に横位のヘラ削りが顕著に見られる。胴部外面は、僅かにヘラ削りが見られるが、頚部で強く撫で消されている。素地のキメは細かく、砂、小石粒、長石、黒色粒、滑石粒を多目に含む。色調は淡黄褐色でよく焼きしまる。12は、口辺あまり反らず、胴部も張らない。胴部に不明瞭だが縦のヘラ削りが入る。胎土の素地のキメは細かい。砂、黒色粒子、粘土粒を多く含む。13は口辺部厚く、くの字型に曲がる。頚部に沈線が巡る。胴部は縦のヘラ撫で、胴部内面は横のヘラ撫で。胎土の含有物は多く、砂、石粒、石英、ϕ１㎜～４㎜の黒色粒、白色粒子を含有。色調は褐色。胴部内面が煤けている。

14は、口縁の一部が煤けている。13同様くの字型に屈曲し口辺の内側に指頭痕を残す。砂、黒色粒子、長石含有。15は薄い口辺を持つ。内外面は丁寧に横撫でされている。素地のキメは細かく砂が多い。他に黒色粒子、長石、針状物を含む。褐色。16は、口縁をやや玉縁状に作られているが、その上から刷毛目を消す様に撫でが入るため口縁もややつぶされている。色は褐色で砂が多く、長

石、黒色粒子を含有する。17は、小型壺か？赤彩を施され、口辺はややくの字に屈曲し、素地のキメはやや粗く、砂、黒色粒を多く含有。

19は、複合口縁を持ち、太い縁帯が巡る。内面はヘラの横撫で。20は、胴部が張り、口唇部がやや内湾する。内外面ヘラ等によるヨコナデか。21は、口辺外反する。磨滅が著しく整形痕が見られない。胎土はϕ1㎜の長石、黒色粒子と砂を含有。サックリした淡橙灰色の土。22は、外面胴部から縦にヘラ削りされている。内面は滑らかに撫でられている。砂が多く、長石、黒色粒子、粘土粒を含有、23は底部、全体に磨滅が著しく整形痕は見られないが、底部には木葉痕が残る。素地のキメは粗くϕ1㎜～2㎜の小石粒、長石、滑石と、やや細かい黒色粒子等が多量に含まれている。24から30は、刷毛目の調整痕を拓本で載せる。刷毛目とは、割り板等の木目で撫でた筋状の整形痕の事である。24は甕の胴部か、内外面を刷毛目整形している。25は小型甕或いは壺の底部。磨滅し見にくいが細かい刷毛目が残る。26は、甕の胴部、内面は刷毛目で、外面はヘラ削りする。27は内外面ともやや雑な刷毛目。28は、甕の口辺部、内面は刷毛目を残す。29は内外面が細かい丁寧な刷毛目。30は甕の肩のあたりか。内外面に細かい刷毛目を残す。

第4層出土の遺物（Fig.26—1～21）

4層出土の遺物は、刷毛目や磨き、赤彩等を施した古墳中期から後期にかかるものが目立った。

1～6は土師器の坏。1は薄手の明橙灰色の坏で、口辺はやや外反する。外面の体部から底部に

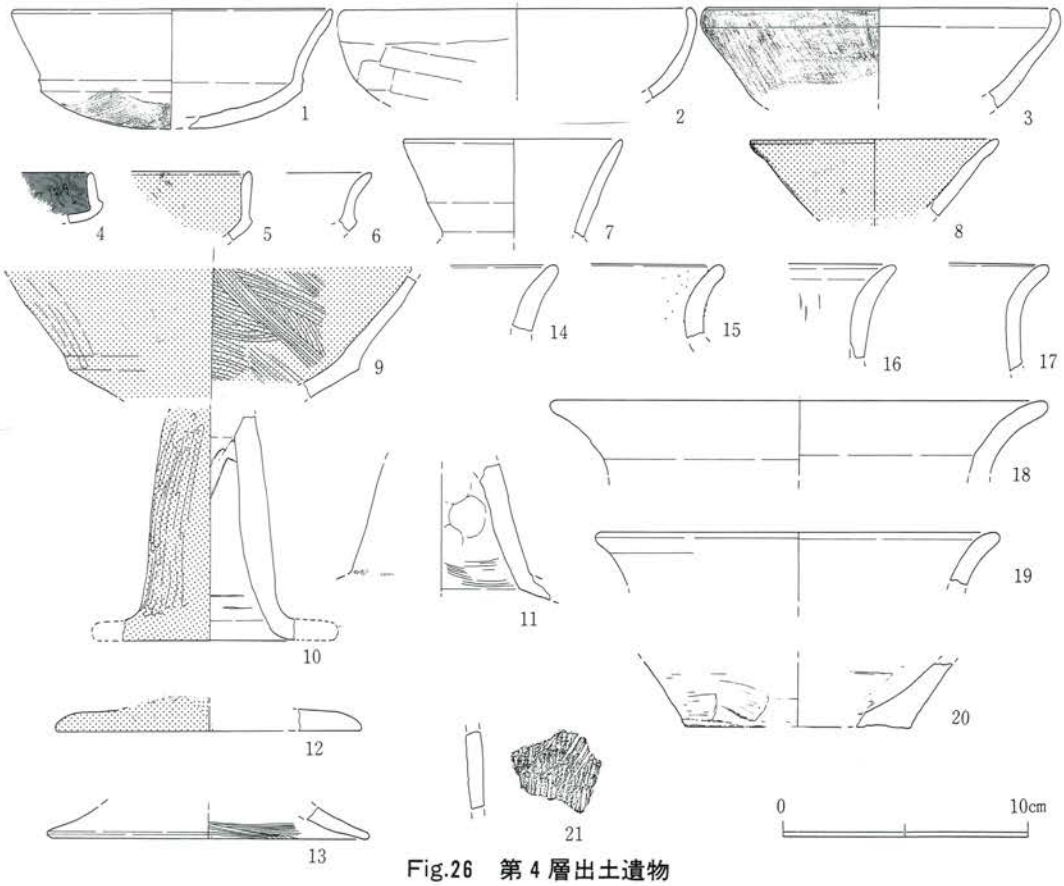


Fig.26　第4層出土遺物

かけては、ヘラ削りを施し、煤けている。胎土は精良な土を用いて、砂、白雲母を少量含有する。2は、口縁を撫で整形し、体部はヘラ削りする。やや赤味を帯び、砂、白雲母の入る精良な土である。3は、体部が膨らまず口縁が内湾する坏である。外面は口縁にかけて黒く火を受けている。素地のキメは細かく砂、石英、針状物を含む。4はやや小型の坏である。残存状態が悪くはっきりしないが、黒色処理されていた様である。砂、針状物を含む。5は口辺がほぼ直立する。顕著ではないが赤彩を施した後が見られる。体部はヘラ削り。素地のキメは細かく、砂、黒色粒子、針状物を含む。6は口辺が大きく外反する。砂、黒色粒子を含む。

7～8は坩の口辺である。7は内面ヨコナデし、外面は頸部に強いナデが入る。黄白灰色でキメの細かい土。砂やや多く、針状物含む。8は内外面とも横撫でされ、赤彩を施されていた様子である。精良な土で、白雲母、砂を含む。

9～13は高坏である。9は赤彩された坏部。器内は横を基調に所々で斜めに刷毛目が残り、外面坏底部はヘラ削りされ、体部は縦方向の刷毛調整の後に磨きが入る。胎土は砂を多く含む。10は脚部。表面は滑らかで磨きが施され赤彩される。内面下方は強くヘラ等で横位に撫で、上方はヘラで斜めにやや粗くえぐり取る様にヘラ削りをして、その上を撫で消している。11は脚部、外面は刷毛目の後、撫で消している。内面は上方に指頭痕が残り、下方は刷毛で横撫でしている。砂、黒色粒子、針状物を含む精良な土。12は赤彩を僅かに残す脚部の裾。13は、内面に刷毛目を残す脚部の裾。

14～20は、土師器の壺、甕。14は横撫でされたカメの口縁、砂、黒色粒を多く含む、茶褐色のキメの粗い胎土を持つ。15はϕ2㎜～5㎜の小石粒を多量に含む、赤褐色の甕の口辺。16は内面にヘラの横撫で痕を残す。黄褐色のキメの細かい口辺。17は、15同様の大粒の長石や、滑石、黒色粒子を多く含む胎土を持つ。18は、赤褐色でよく焼きしまっている。内面にヘラ撫での痕跡が僅かに見られる。砂、黒色粒子を多く含む。19は茶褐色で黒色粒子を多く含む。外面の横撫では強く残る。20は底部。外面はヘラ削りされている。内面も横位にヘラ削りが見られる。硬質でキメの細かい胎土、21は胴部片、内面はやや細かい刷毛目が僅かに見られ、外面は大雑握な刷毛目痕である。

註1　北条政村邸遺跡二次調査、調査担当の斉木秀雄氏にきいた。

第四章　まとめと考察

調査では、鎌倉という中世の大都市での調査でありながら、中世遺構が削平されほとんどみられないという、鎌倉では極く希な結果が得られた。

Ⅰ　遺跡の年代と性格

遺跡の年代は中世・近世とわずかに遺構があるものの、中世以前の遺構がほとんど検出されていない為に、きわめて大混雑にしか把み得ない。

中世以前では明確な遺構は検出できなかったが6世紀～11世紀代までの土器類が出土している。出土状況からは、遺構14を除き、おおむね「流入品」と考えられる。おそらく調査地点の南、大塚川を挟んだ丘陵裾部に、集落が存在するのであろう。又、明らかに中世以前に属する3層、4層のうち、3層はプラント・オパール分析の結果「稲作」の可能性が指摘された。「稲作」は道路時期（2面）まで、分析結果から認められる。

2面の側溝を伴う道路遺構は、10世紀から中世初頭までの間に含まれる「土師質土器」と考えられる土器片と、草履芯等の木製品が含まれる。しかし、かわらけは含まれていない。草履芯の年代は把めないが、これが中世の技術であるのならば、2面は10（あるいは11）世紀から、東接調査区の手づくねかわらけを含まない一群（13世紀後半頃）の出現までの間が考えられる。北条政村がこの地に「別業」を構えるに際しては「造成工事」を行ったであろうから、道路脇に水田がみられる状況を、それ以前（13世紀中頃）とすることも可能である。

1面の頃にはすでに（この位置には）道路はみられない。おそらく谷内の造成の結果として、谷の中央部に道路が造り替えられたのだろう。出土遺物の主体はかわらけであり、これらの編年観からは、13世紀後半頃の年代が考えられる。

その後の堆積土、造成面はすでに削平されてしまっているため、本地点の調査では全く把めないが、東接地との関係で見るならば、14世紀（又は15世紀初頭）までは、何らかの構造物が谷内に在ったようである。

Ⅱ　道路について

本地点の調査で検出された道路は、鎌倉という都市域の外での希な例であり、都市を取り巻く環境を知る上で、貴重である。

検出された道路は両側に溝を持ち、幅は（溝肩から溝肩）3m～3.4m程を測る。約1丈（10尺）と考えても良いだろう。道の北側（南側は削平を受けているため不明）には畦道が直交し、水田が営まれている。この状況は多分に「農村的」である。

1丈の道路幅が古代末～中世初めの鎌倉にしては「広いか、狭いか」という事は別にして、行き

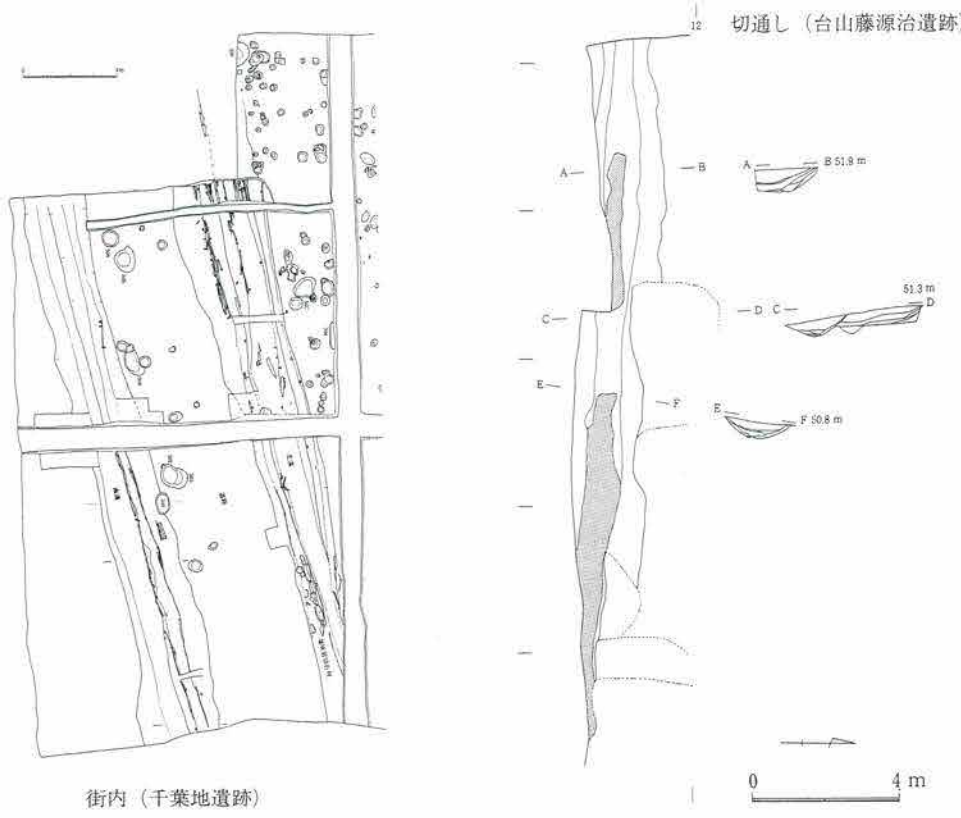


Fig.27　検出された道路例

止まりのしかも田園地帯の谷内の道としてはやや広いように思える。この道路は、大仏の切通しが整備される前の、仲ノ坂あるいは東坂を通って鎌倉に入る「幹線道路」ではなかったろうか。切通しの整備、開削とそれに伴う防衛拠点（政村邸等）の造営に伴って、道筋の移動が為されたと考えるのは早計であろうか。現在何の裏付けもないが、可能性は強く指摘したい。

鎌倉の調査では、多くの道路、通路[註1]が検出される。大まかに区分すれば、平地面での道路と切通し道路とに分かれ、平地面の道路は造成技法で版築（積み上げ）道路と削り出し道路とに分けられる。一般的には基盤層の強固な山裾と盛土整地が行われていない都市の初期段階で削り出し造成の道路が多く、都市が整備されていく段階で版築道路が多くなってくるようだ。

又、切通し道の様相は、現存するものは後世の削平によって大幅に変化しており、正確に把めないが、台山藤源治遺跡の第１次調査で小規模な切通し道が検出されている。[註2] おそらく「七口」と言われる幹線としての切通しの他に、多くの「切通し道」が在ったのだろう。街内の道路としては千葉地遺跡で検出されたものが、良好な姿を残している。[註3] 路面は幾層にも積み上げられ、両側には溝が掘られている。規模の大小はあるが、市内で検出される道路は両側に「側溝」を待つのが一般的である。住居からの排水を兼ねているだろう。

街内では側溝を持つ道路の他に溝状の土壙で区画された道路が、所謂「浜地」で検出されている。[註4]

道路そのものの構造は全く変化しないのであるが、両側の溝が他の（より大きな）溝や河川に向かって続いておらず、途切れてしまう「溝状土壙」に変化している。これには何らかの「意味」が存在していると考えるのだが、まだ明らかにはできない。

道路はそのまま街や村の区画のおおよそを表している。そのため、その方向性や規模等を正しく把むことによって、街そのものが明らかにもできうる。今後、調査において注意を払うべき要点の一つであろう。

III　問題点

鎌倉における現体制下での発掘調査には問題点が多々あって、すべてを一堂に書き連ねるほどの「勇気」は私にはない。その地点に関わる部分について述べるのでなければ「調査報告書」としてまとめられた考古学的部分をかすめさせてしまうほどに問題点が多い。

最近、強く感じる問題点は「科学的分析」に関わる点である。本地点の調査では調査者のやや勝手な思い込みと、東接地での調査結果等があったため、プラントオパール分析を依頼することができた。結果として、これによって稲作・水田の存在が認められたのである。ややもすれば、鎌倉以外の類似調査例との形状比較等で、科学的な裏付けも無いままに、遺構を決めざるを得ない鎌倉の調査体制、調査意識に大いに問題があろう。

調査団（民間の）による調査の結果、鎌倉の様相が明らかになる現況では、行政サイドとしてもこれらの分析委託費を調査団に大いに認めるべきである。現状ではほとんど0に近い。

ここに書き留めた問題点も、本地点の報告書にはそぐわないという意見も多いだろう。しかし、現状を知っていただくのも、調査団（ここでは調査団は存在しないが）の役目と考えている。

註1　道路ほど明確ではないが、空間的に人の往来の考えられる部分も勝手に含めている。

註2　手塚直樹他『台山藤源治遺跡』1985年　台山藤源治遺跡発掘調査団

註3　手塚直樹他『千葉地遺跡』1982年

註4　斉木秀雄「溝状土壙について」『鎌倉考古』№28　1993年　鎌倉考古学研究所

市内遺跡発掘調査事業に係る花粉分析業務

北条政村屋敷跡（常盤字殿入下643番４他）

報　告　書

平成４年10月

株式会社　パレオ・ラボ
Paleo・Labo Co.

北条政村屋敷跡の花粉化石

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

1．はじめに

北条政村屋敷跡（常盤字殿入下643番４他）における今回の発掘では鎌倉時代とともにその下位の古墳時代から古代についても調査された。今回の花粉分析ではこの古墳時代から古代の試料について行い、当時の古植生について検討した。また、その結果から予想される水田稲作についてはプラント・オパール分析からの検討を加えた。

2．試料と方法

花粉分析用試料は調査区域南側の深掘り部分より柱状、一部スポットで採取した。また深さ20cmほどの東・西トレンチより２点づつ計４点をスポットで採取した。図１に深掘りの地質柱状図および花粉分析層を示すが、図の層位番号は便宜的につけたものである。以下に深掘りおよびトレンチの土層記載を若干示す。

１）深掘り（試料No.１～８）：Ⅰ層は灰褐色の粘土質シルトで、径５㎜前後（最大径21㎜）で黄灰～赤褐色の泥岩（土丹）が多くみられる。また赤褐色の酸化鉄が縦に短く発達しており、全体に白色粒子（風化スコリア？）が多く認められる。II層は黒灰色シルトで、下部は粘土質となり、しまっている。上位より赤褐色の酸化鉄が縦にみられ(上部のみ)、青緑色砂岩粒２～４㎜（最大径19㎜）が散在している。また白色粒子（風化スコリア？）が散在している。III層は黒～黒灰色粘土で、かたくしまっている。管状の赤褐色酸化鉄が少し認められ、白色粒子（風化スコリア？）が散在している。IV層は黒～黒灰色の泥炭質粘土で、褐色を帯びた白色テフラ（風化スコリア）層が３枚認められる。最上位のテフラ層は厚さが２～４cmで連続性も良く、黒灰色～灰色スコリアを主体として、赤色スコリア、斜長石も多くみられる。中位のものは散り気味でやや不明瞭であり、斜長石が主体で、黒灰色のスコリアが少量みられる。下位のものは点線状で連続性は悪く、やはり斜長石が主体で、黒灰色のスコリアが少量みられる。Ⅴ層は黒～黒褐色の泥炭で、下部ほど褐色を帯び、未分解である。中程に褐色を帯びた白色テフラが点線状に認められ、上位のものほどではないが連続性は悪く、同様に斜長石が主体で、黒灰色のスコリアが少量認められる。

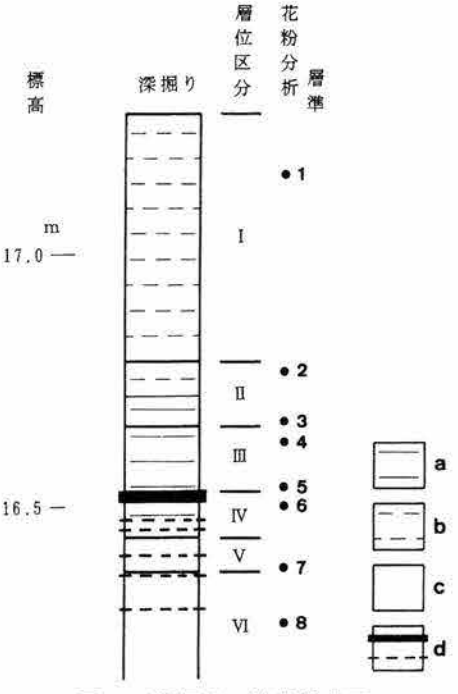


図１　深掘りの地質柱状図

a：粘土　b：シルト　c：泥炭　d：テフラ

VI層は黒褐色の未分解質泥炭で、下部に暗黄灰色の細砂がレンズ状にはいる。認められる植物遺体は草本質であるが、香りは木本質である。上部に2枚の褐色を帯びた白色テフラ層がレンズ状（最大厚5㎜）に存在している。そのうち上位のものは連続性が悪く、斜長石が主体で、黒灰色のスコリアが少量認められる。また同層準付近に暗黄灰色の細砂が場所によってレンズ状にみられる。下位のテフラは比較的連続性はよく、黒灰色スコリアが主体で、赤色スコリアも少量認められる。また斜長石も多くみられる。

2）東側トレンチ（試料No.9、10）：上部は褐色を帯びた黒灰～暗灰色のシルト質粘土で、最上部には黄褐色の泥岩（土丹）が点在している。また黄灰色の斑紋（結核？）が認められる。下部は青灰色のシルトで、細い植物遺体が縦にみられる。

3）西側トレンチ（試料No.11、12）：上部は褐色を帯びた黒灰色のシルト質粘土で、黄白色粒子（風化スコリア？）や青緑色砂岩粒子（径1㎜）が散在している。下部は青灰色の砂質シルトで、上位との境界は火炎状である。径1㎜ほどの青緑色砂岩粒子（最大径30㎜）が散在しており、また材片も認められる。

以上の様な土層より、深掘りからは8点、両トレンチからは2点づつの計12試料について、次のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約1.0ｇ）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

3．結果

検出された花粉・胞子の分類群数は深掘りが樹木花粉32、草本花粉21、形態分類を含むシダ植物胞子3の計56、東側トレンチが樹木花粉14、草本花粉19、形態分類を含むシダ植物胞子3の計36、西側トレンチが樹木花粉15、草本花粉15、形態分類で示したシダ植物胞子2の計32である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表1に、また主要な花粉・シダ植物胞子の分布を図2（深掘り）、図3（東側トレンチ）、図4（西側トレンチ）に示した。なおこの分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を基数に、草本花粉、シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数として百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また花粉化石の単体標本（花粉化石を一個体抽出して作成したプレパラート）を作成し各々にPLC.SS番号を付し形態観察用および保存用とした。

1）深掘り（試料No.1～8）

樹木花粉の産出傾向から局地花粉化石帯（下位よりⅠ、Ⅱ）を設定した。なお試料1は花粉の検

表1　北条政村屋敷跡産出の花粉化石一覧表

和名	学名	溝掘り								東側		西側	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
樹木													
マキ属	*Podocarpus*	-	1	-	-	1	-	-	-	1	-	1	1
モミ属	*Abies*	-	1	-	3	3	-	3	7	1	-	1	-
ツガ属	*Tsuga*	-	1	-	1	1	-	2	-	4	-	3	1
トウヒ属	*Picea*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	-	-	-	-	2	2	2	2	2	-	7	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	1	2
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	-	-	1	1	1	-	1	2	-	-	1
スギ属	*Cryptomeria*	-	18	21	43	24	24	42	75	132	4	32	12
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	-	2	2	1	2	2	9	11	14	-	7	-
ヤマモモ属	*Myrica*	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
クルミ属	*Juglans*	-	1	1	1	-	-	2	-	-	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	5	-	7	1	4	3	7	5	-	-	1
カバノキ属	*Betula*	-	-	-	1	1	-	-	-	3	-	2	-
ハンノキ属	*Alnus*	-	1	1	3	-	-	-	1	1	-	1	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	1	13	11	24	13	6	7	11	8	1	1	-
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	3	21	23	39	21	11	16	72	29	3	13	2
クリ属	*Castanea*	-	1	-	-	-	-	-	2	-	-	1	-
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	4	41	45	66	52	39	18	17	25	3	11	8
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	-	4	3	11	6	6	5	19	3	-	1	1
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	-	-	2	2	2	1	-	-	-	-	-
フウ属	*Liquidamber*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
サンショウ属	*Zanthoxylum*	-	-	-	-	2	-	1	2	-	-	-	-
キハダ属	*Phellodendron*	-	-	-	-	1	1	4	1	-	-	-	-
アカメガシワ属	*Mallotus*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	*Acer*	-	-	1	7	2	1	2	1	-	-	-	-
トチノキ属	*Aesculus*	-	-	-	1	5	-	1	1	-	-	-	-
ムクロジ属	*Sapindus*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属	*Vitis*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
グミ属	*Elaeagnus*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	1	1	1	1	-	2	-	-	-
ミズキ属	*Cornus*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
エゴノキ属	*Styrax*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属	*Lonicera*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
草本													
ガマ属	*Typha*	-	-	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-
サジオモダカ属	*Alisma*	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
オモダカ属	*Sagittaria*	-	3	-	1	-	-	-	-	10	-	1	-
イネ科	Gramineae	8	122	56	121	24	6	155	97	544	12	146	8
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	26	7	13	11	2	16	33	57	4	9	1
イボクサ属	*Aneilema*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ミズアオイ属	*Monochoria*	-	1	-	1	-	-	-	-	14	-	1	-
クワ科	Moraceae	-	5	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-
ギシギシ属	*Rumex*	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	1	1	2	2	-	2	3	-	-	1	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	17	4	-	-	1	-	-	16	2	3	2
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	36	1	-	1	-	-	-	12	-	8	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	-	-	1	1	-	-	5	-	1	-
アブラナ科	Cruciferae	1	-	-	2	3	-	-	1	63	2	82	4
バラ科	Rosaceae	-	1	-	-	1	-	-	2	2	-	-	-
マメ科	Leguminosae	-	3	-	-	2	1	9	7	4	-	-	-
ツリフネソウ属	*Impatiens*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
キカシグサ属	*Rotala*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
セリ科	Umbelliferae	-	3	-	-	1	-	-	-	5	-	-	-
オオバコ属	*Plantago*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカネ属－ヤエムグラ属	*Rubia - Galium*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	-	14	4	4	4	1	5	2	32	1	16	28
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	3	-	1	3	-	2	-	5	1	5	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	1	22	-	-	1	1	-	-	14	2	6	-
シダ植物													
アカウキクサ属	*Azolla*	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
単条型胞子	Monolete spore	16	47	103	116	70	129	20	35	13	9	5	7
三条型胞子	Trilete spore	2	6	6	8	21	7	2	1	2	-	-	1
樹木花粉	Arboreal pollen	8	113	108	213	144	101	121	233	232	11	82	29
草本花粉	Nonarboreal pollen	13	261	76	146	54	13	189	147	791	24	280	45
シダ植物胞子	Spores	18	54	109	124	91	136	22	36	16	9	5	8
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	39	428	293	483	289	250	332	416	1039	44	367	82
不明花粉	Unknown pollen	15	71	24	48	66	43	27	34	40	8	14	15

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

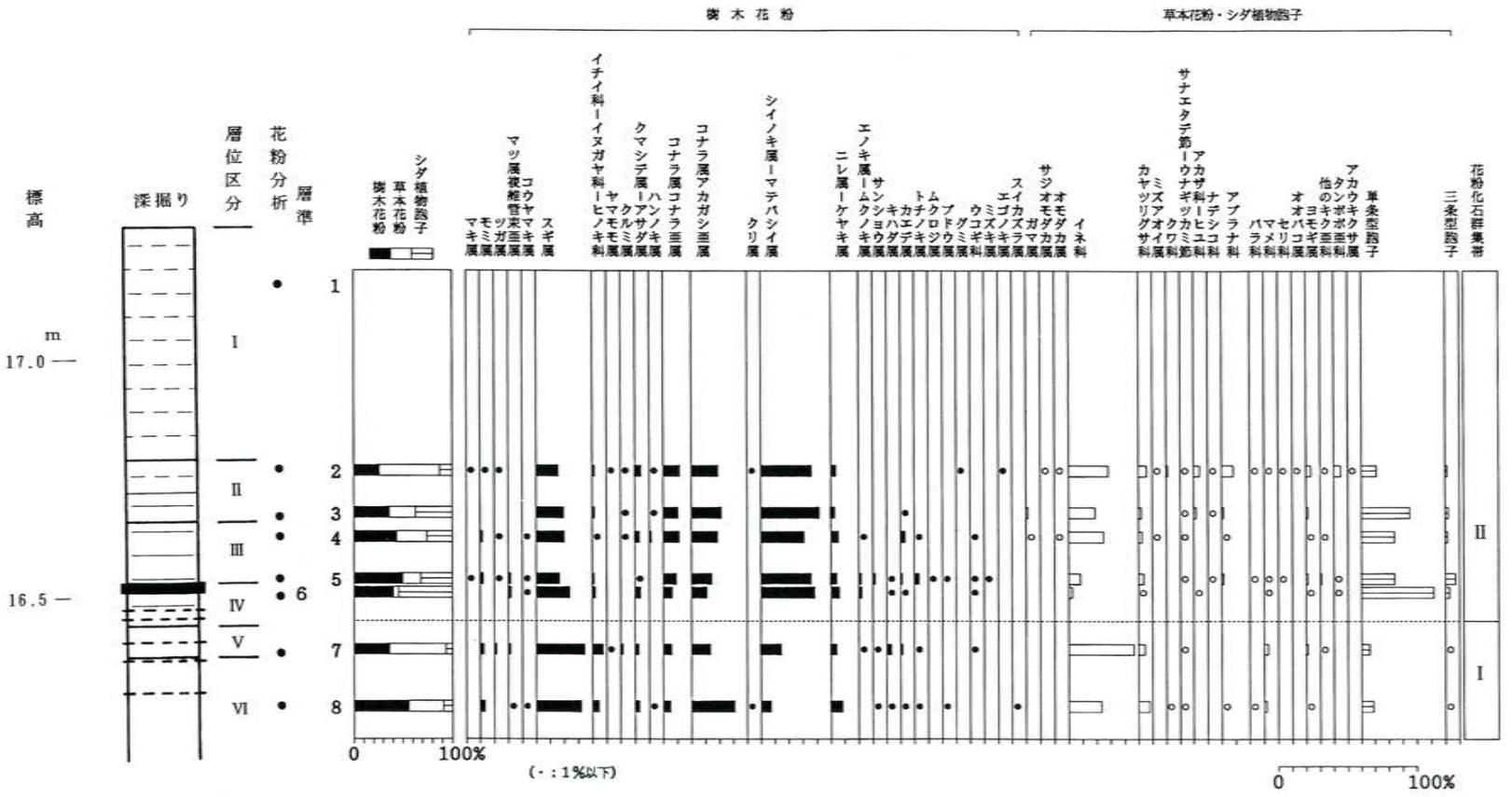


図2　深掘りの主要花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

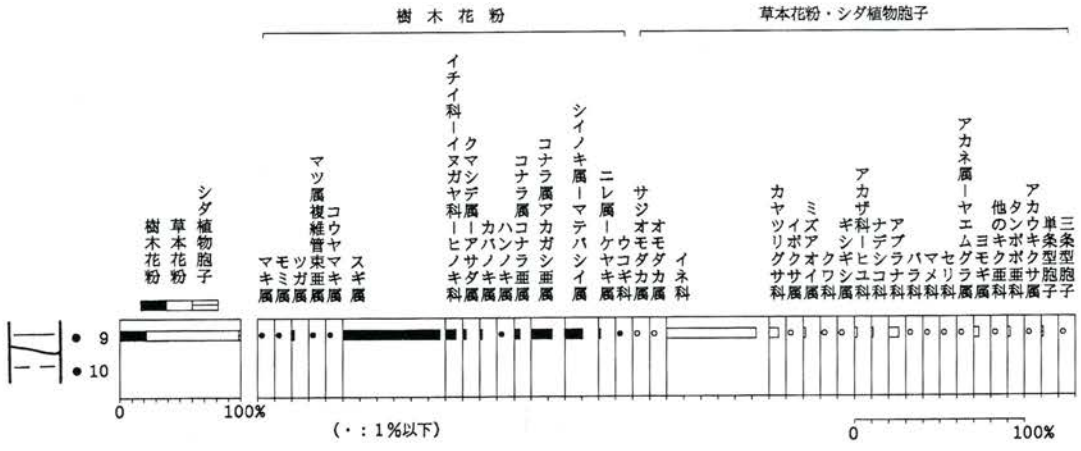


図3　東側トレンチの主要花粉化石分布図

(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

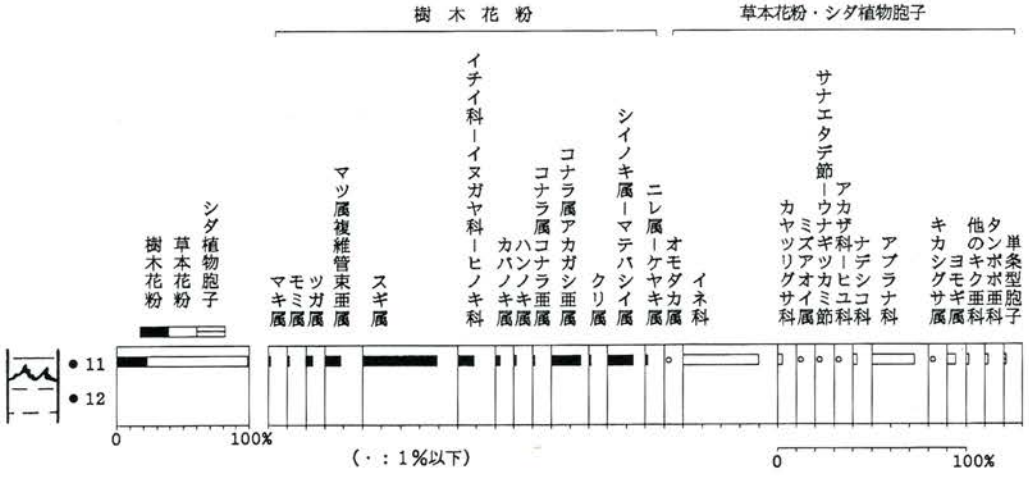


図4　西側トレンチの主要花粉化石分布図

(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

出数が非常に少なく、分布図として示すことが出来なかった。

Ⅰ帯(試料７、８)：スギ属が30%前後の出現率を示して最優占しており、同じ針葉樹類のイチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科が５%前後産出している。広葉樹類ではコナラ属アカガシ亜属が最下部で30%の出現率を示しているが、その上位で急減している。これとは反対にシイノキ属—マテバシイ属は上部に向かい急増している。その他では、クマシデ属—アサダ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属などが５%前後検出されている。草本類ではイネ科が試料７において50%近い出現率を示し、優占している。その他ではカヤツリグサ科が５%前後みられるが、他はいずれも低率である。

Ⅱ帯(試料２～６)：Ⅰ帯において最優占していたスギ属は上部に向かい減少しており、試料２では出現率が20%を下回っている。これに対してシイノキ属—マテバシイ属は急激に増加し、高い出現率を示している。またアカガシ亜属は上部に向い増加傾向がみられ、コナラ亜属も同様である。草本類ではイネ科が上部の３試料（試料２～４）において20%前後とやや多く検出されている。また試料２および４より抽水植物のサジオモダカ属やオモダカ属、ミズアオイ属などが得られている。アブラナ科も試料２において比較的高い出現率を示しており、他にオオバコ属やシダ類のアカウキクサ属などがこの試料２より検出されている。このⅡ帯においては単条型胞子が多く産出している。

２）東側トレンチ（試料No. ９、10）

試料10においては花粉の検出数が少なく、分布図として示すことはできなかった。特徴としてはスギ属が60%近い出現率を示し、最優占していることである。その他ではアカガシ亜属やシイノキ属—マテバシイ属が10%を越えて産出している。草本類ではイネ科が突出した出現率を示しており、その他ではカヤツリグサ科やアブラナ科が５%を越えて得られている。またサジオモダカ属やオモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属などの抽水植物が、またシダ類胞子のアカウキクサ属が産出している。

３）西側トレンチ（試料No.11、12）

両試料とも樹木花粉の検出数が少なく、とくに少なかった試料12については分布図として示すことを控えた。試料11の産出傾向は東側トレンチの試料９と同様で、スギ属が高率で産出して最優占しており、アカガシ亜属やシイノキ属—マテバシイ属がこれについでいる。草本類ではイネ科が最優占しており、抽水植物のオモダカ属やミズアオイ属も検出されている。またアブラナ科が20%を越える高い出現率を示している。

４．遺跡周辺の古植生

スギ属・アカガシ亜属期：深掘りの花粉帯Ⅰに当たり、遺物などの出土がなく、時代については不明であるが、およそ縄文時代から古墳時代にかけてと予想される。遺跡周辺ではスギ属を主体にイチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科を混ぜる針葉樹林や、アカガシ亜属やシイノキ属—マテバシイ属を中心とした照葉樹林が広がっていた。またクマシデ属—アサダ属、コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属などの落葉広葉樹類も一部に生育していた。

スギ属・アカガシ亜属・シイノキ属—マテバシイ属期：花粉帯IIに当たり、出土遺物などから古墳時代から古代にかけてと考えられている。このころはシイノキ属—マテバシイ属が勢力を強め、アカガシ亜属とともに照葉樹林を形成していた。またスギ属はその林分を狭めたようであるが、依然として主要な森林要素であった。落葉広葉樹類はコナラ亜属が多少増加しており、一部にコナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林が成立していた。

横浜市南西部の柏尾川低地では2,100～1,000年前の時期にアカガシ亜属の出現率が増加しており、カシ類が重要な植生構成要素となり、またスギ属も同時期最優占している(清水　1990)。北条政村屋敷跡遺跡の東および西側トレンチの試料は古代末（11世紀）と考えられ、やはりスギ属を主体とした針葉樹林と、アカガシ亜属やシイノキ属—マテバシイ属を主体とした照葉樹林が成立していた。

以上のように縄文時代後･晩期から古代にかけて、大勢としてはスギ属を主体とした針葉樹林と、アカガシ亜属やシイノキ属—マテバシイ属を主体とした照葉樹林が遺跡の周辺に広く成立していた。

表2　試料1ｇ当りのプラント・オパール

試料番号	イネ (個／g)	ネザサ属型 (個／g)	クマザサ属型 (個／g)	他のタケ亜科 (個／g)	ヨシ属 (個／g)	ウシクサ族 (個／g)	不明 (個／g)
2	6,300	148,400	7,600	6,300	6,300	3,800	5,100
3	11,000	233,300	11,000	20,500	33,100	4,700	25,200
4	20,900	357,700	19,300	16,100	33,800	25,800	19,300
5	2,300	327,500	18,600	18,600	51,100	16,300	11,600
7	0	233,400	14,600	14,600	60,800	14,600	26,700
9	10,000	220,100	15,700	8,600	1,400	20,000	22,900
10	2,700	229,700	18,800	10,700	2,700	13,400	21,500
11	9,600	217,200	8,200	12,400	1,400	23,400	33,000

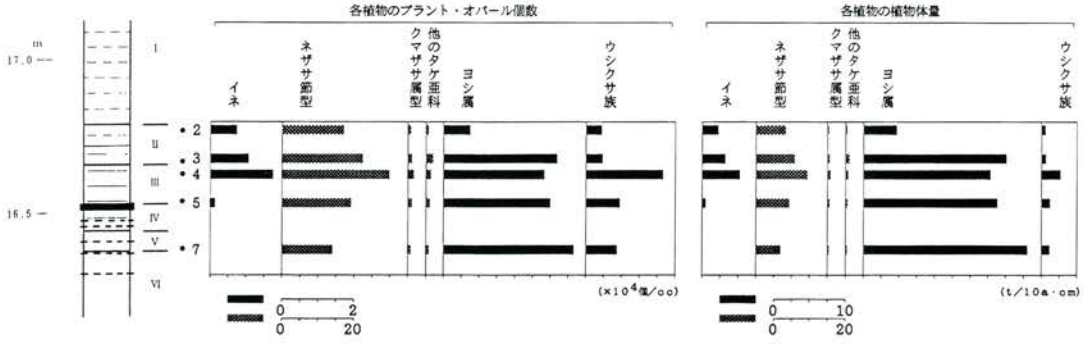


図5　深掘りのプラント・オパール分布図

5．水田稲作について

東側トレンチの試料９や西側トレンチの試料11ではイネ科花粉が高率で出現しており、また現在水田雑草として普通にみられるサジオモダカ属やオモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属などが産出している。これは深掘りの試料２および４においても見られ、当遺跡付近において古墳時代から古代において水田稲作が行われていた可能性がある。

こうした稲作の検討という観点からプラント・オパール分析を深掘りの試料２、３、４、５、７の５点とトレンチの試料９、10、11の３点について行い、その結果を表２および図５に示した。稲作について杉山（1989）は、イネのプラント・オパールが試料１ｇあたりおよそ5,000個以上と比較的多量に検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。分析を行った８試料の内、試料２、３、４、９、11が試料１ｇ当り5000個以上検出されている。したがって上記の５試料については稲作の可能性が示されたことになる。

以上のように花粉分析やプラント・オパール分析から当遺跡において古墳時代から古代にかけての時期に水田稲作が行われていた可能性が高いことが示された。

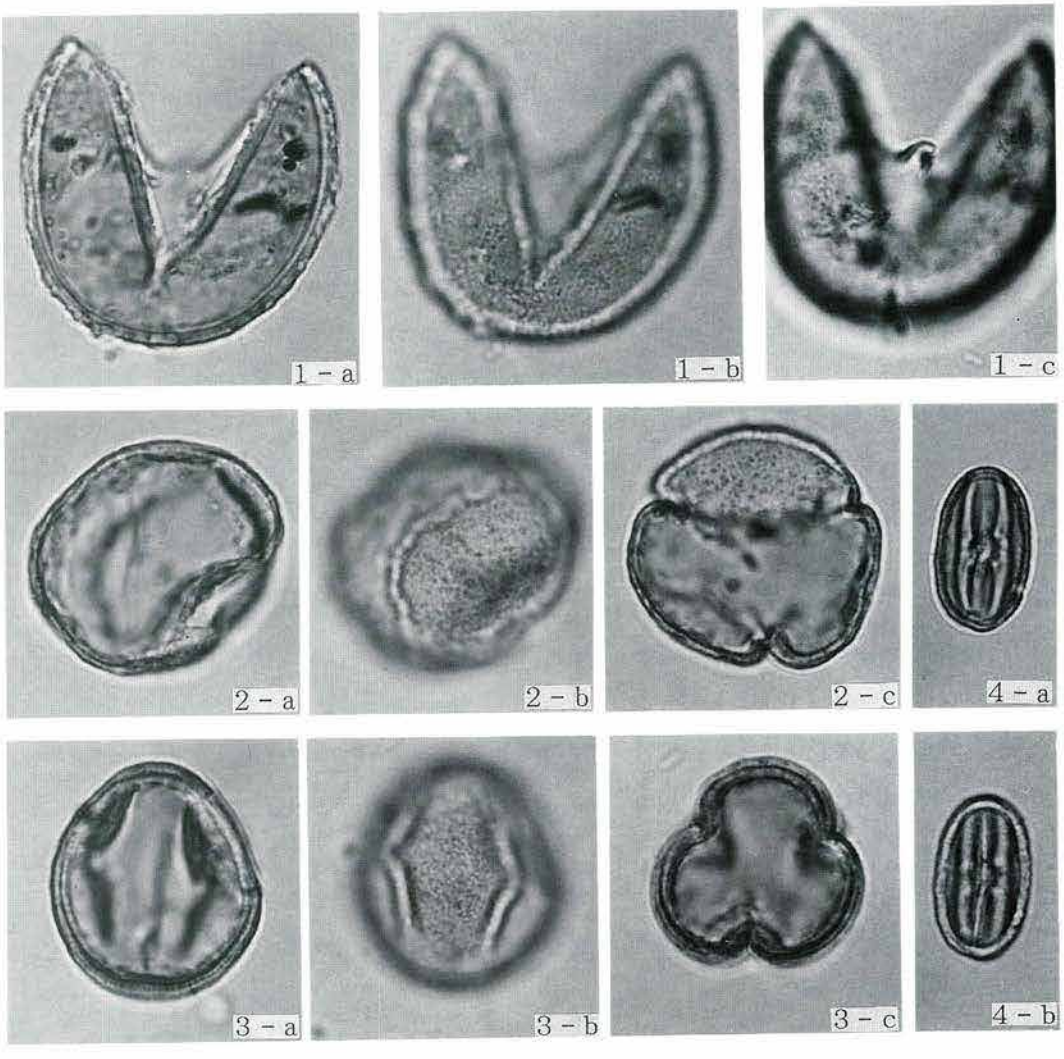
6．おわりに

上記のように花粉分析とプラント・オパール分析から当遺跡において水田稲作の可能性が示され、また攪乱のため明確ではないが、両トレンチの間において畝状の遺構が検出されている。今後はさらに大型植物遺体分析によるイネの部位（穎など）の検出が望まれ、それによって稲作の可能性がより高まるであろう。また試料の時代についてもより明確になることが望まれよう。

引用文献

清水　丈太（1990）「横浜市南西部、柏尾川低地で得られた完新世堆積物の花粉分析」『第四紀研究29』p.351～360

杉山　真二（1989）「プラントオパール、練馬区弁天池低湿地遺跡の調査」『東京都住宅局・練馬区遺跡調査会』p.133～154



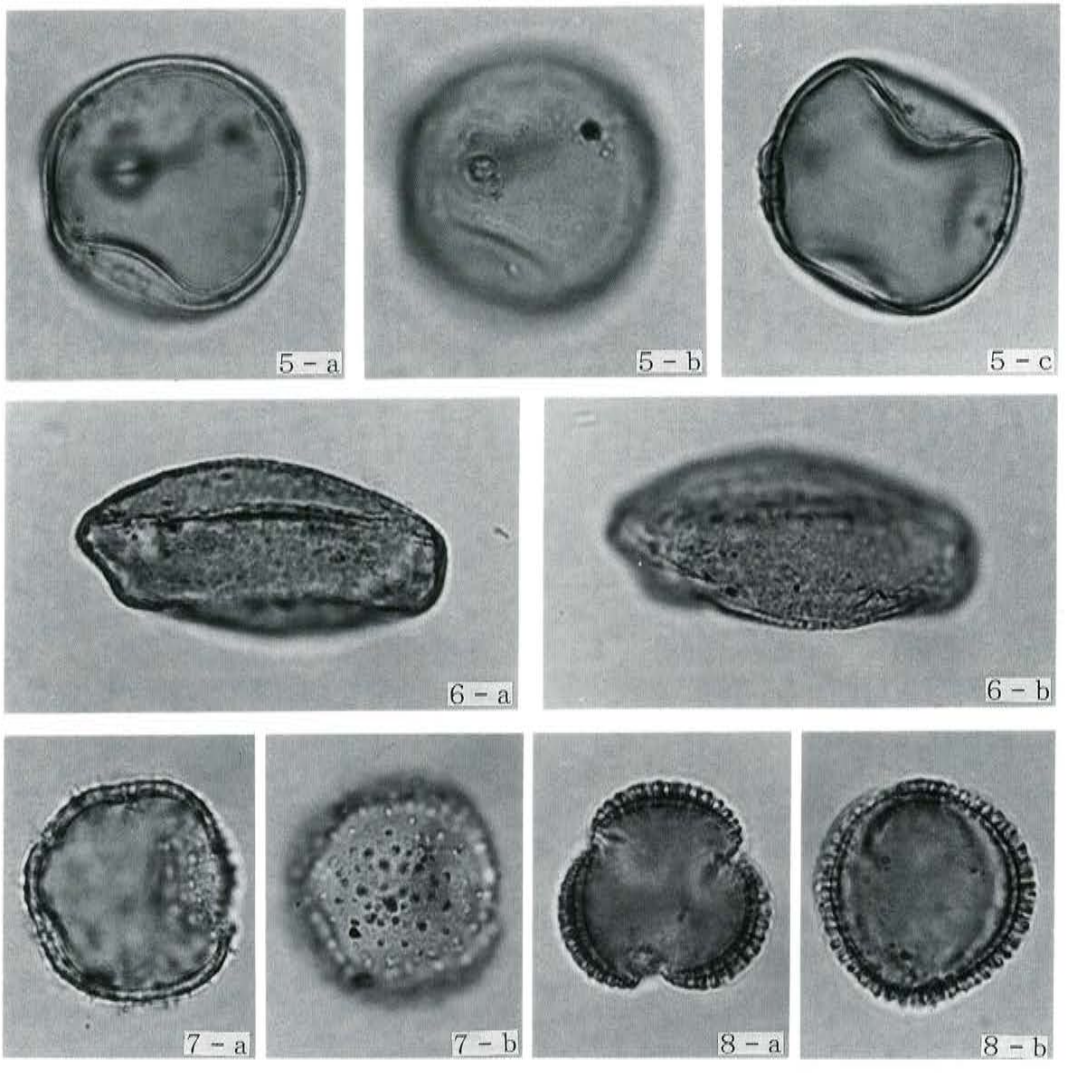
図版Ⅰ　北条政村屋敷跡の花粉化石（東側トレンチ　試料９）

1．スギ属　PLC.SS 946

2．コナラ属コナラ亜属　PLC.SS 953

3．コナラ属アカガシ亜属　PLC.SS 948

4．シイノキ属―マテバシイ属　PLC.SS 947



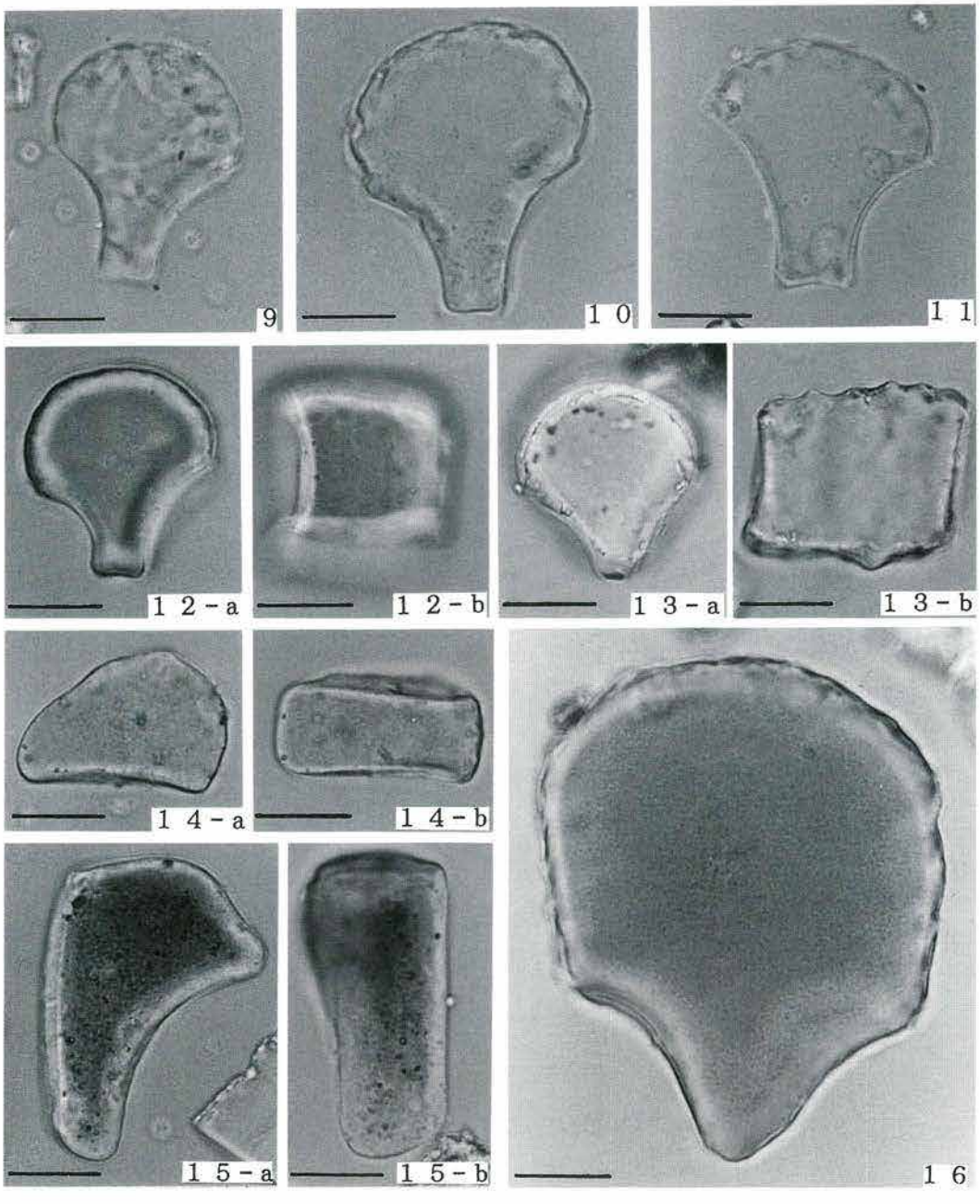
図版II　北条政村屋敷跡の花粉化石（東側トレンチ　試料９）

5．イネ属　PLC.SS 949

6．ミズアオイ属　PLC.SS 952

7．オモダカ属　PLC.SS 950

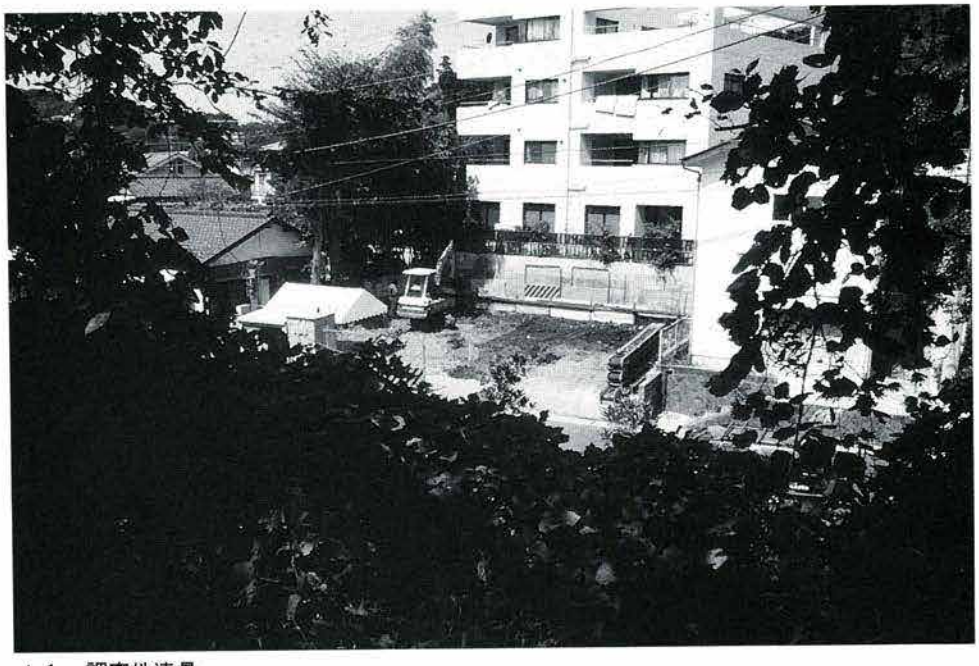
8．アブラナ科　PLC.SS 951



図版III　北条政村屋敷跡のプラント・オパール（深掘り）　bar：20μm

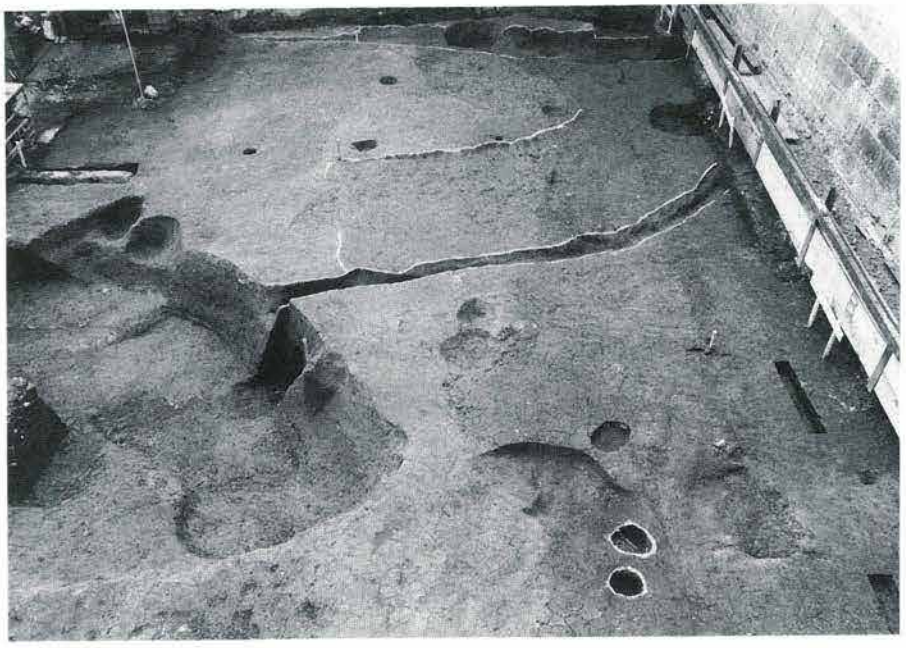
9～12：イネ（9：試料5　10：試料10　11：試料2　12：試料2）　13：ネザサ節型　試料11

14：クマザサ属型　試料2　15：ウシクサ属　試料4　16：ヨシ属　試料4



▲1．調査地遠景

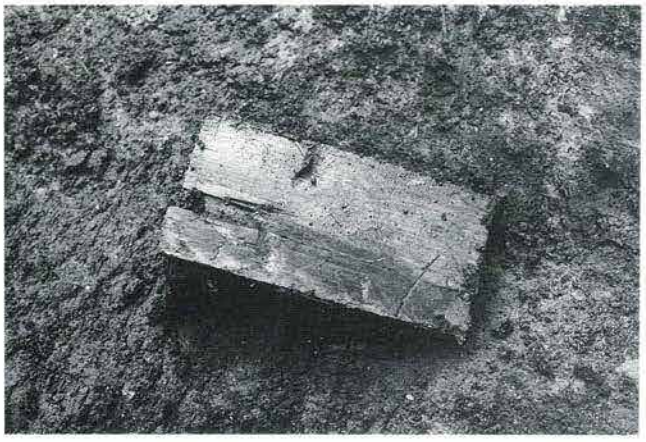
▼2．土層堆積



1．1面全景(東から)

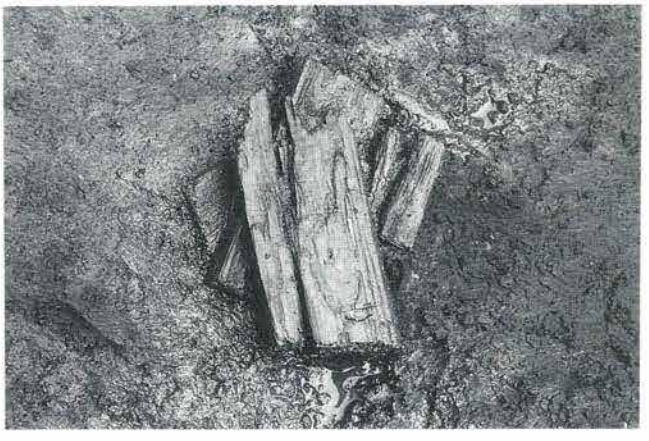
2．遺構3(南から)▶

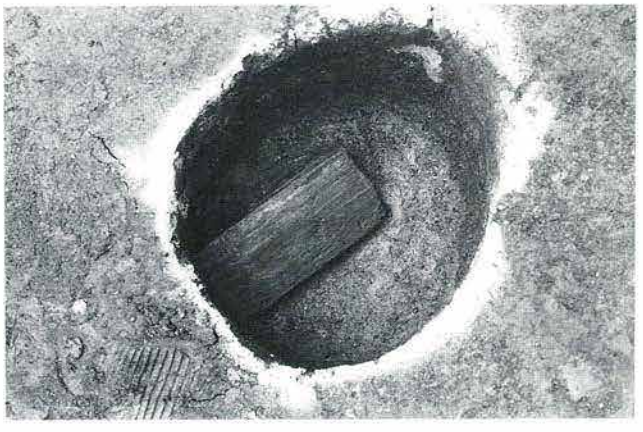
▲3．調査風景



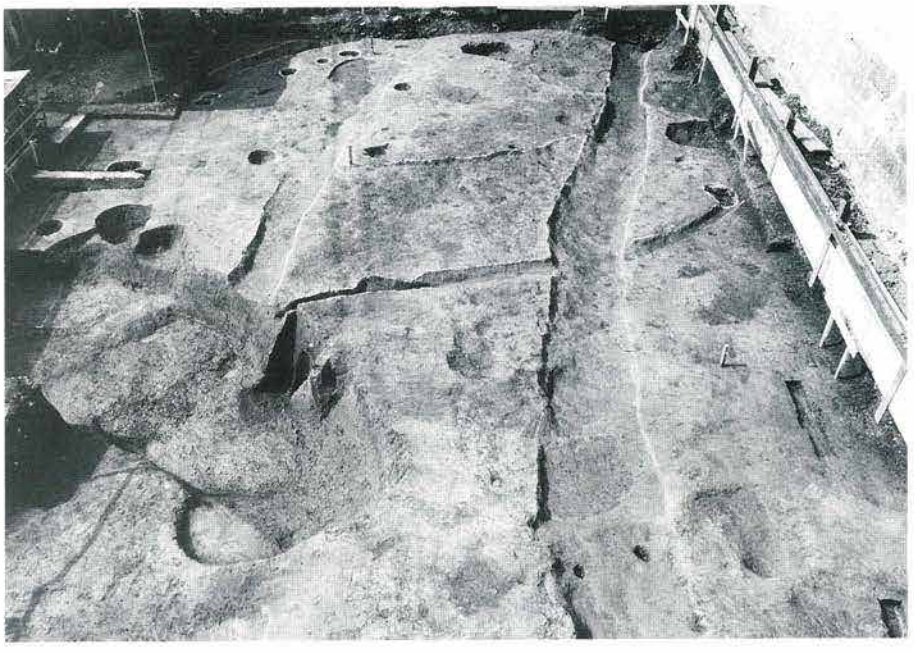
◀1．礎板出土状況

2．礎板出土状況▶



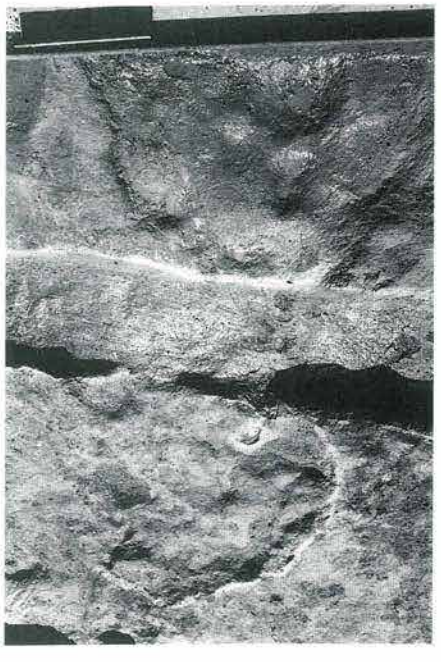


◀3．遺構5



▲1．2面全景(東から)

▼2．遺構15・27(南から)



▼3．遺構14(西から)

◀1．水田周辺(西から)

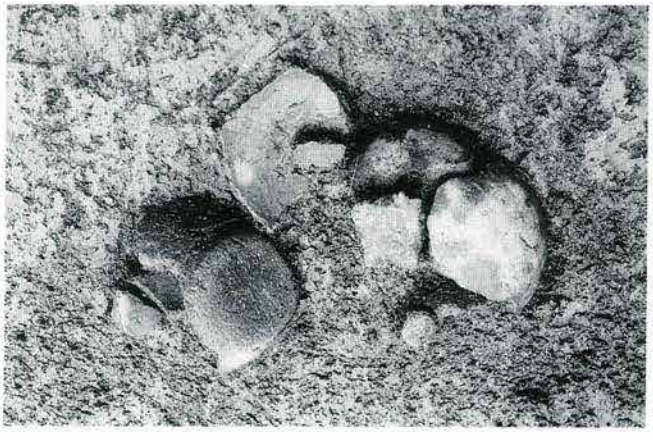
2．畦道と橋柱穴(南から)▶

◀3．第3層検出状況

PL. 6

◀ 1．遺構30検出状況

2．遺構30(部分)▶



◀ 3．遺構29検出状況(東南から)

▲砥石(中砥)

▲魚住鉢口縁

▲山茶碗窯系こね鉢口縁

▲瀬戸折れ縁鉢
内面底部

▲かわらけ

▲常滑こね鉢(底部)

▲山茶碗窯系
こね鉢

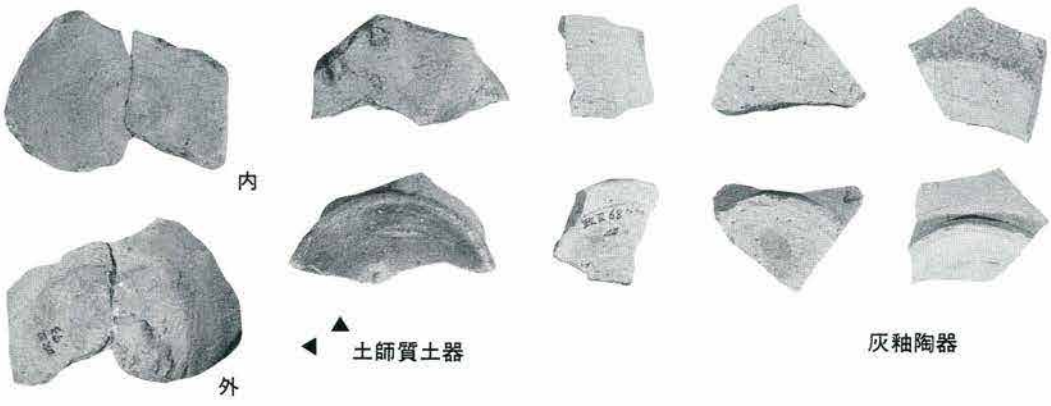
▲草履芯

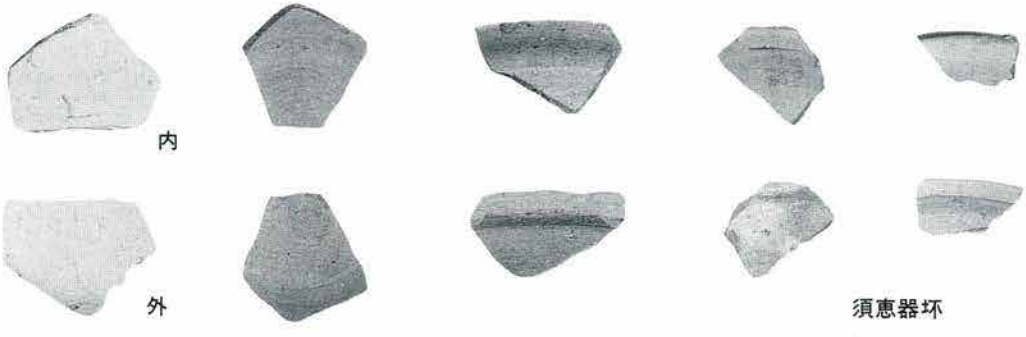
▲板折敷

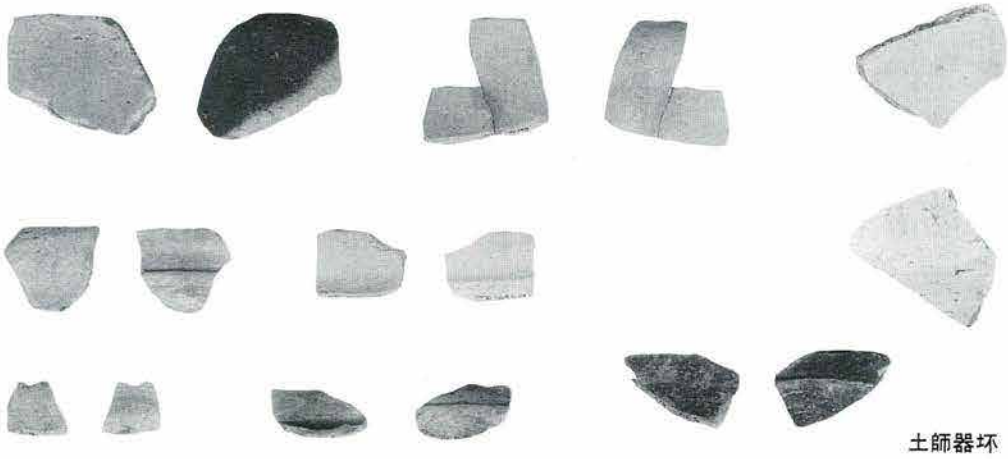
▲円盤

▲人形？

PL. 8

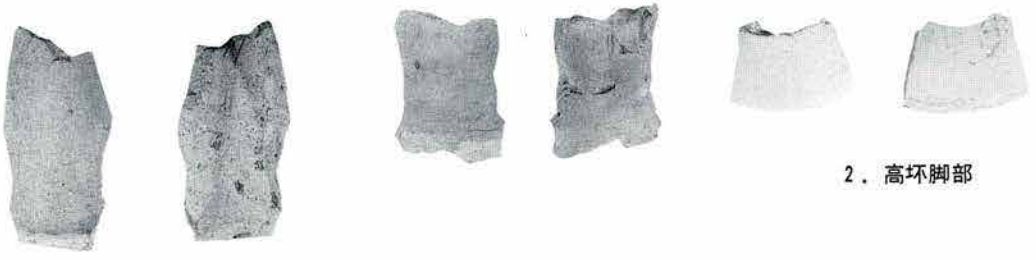




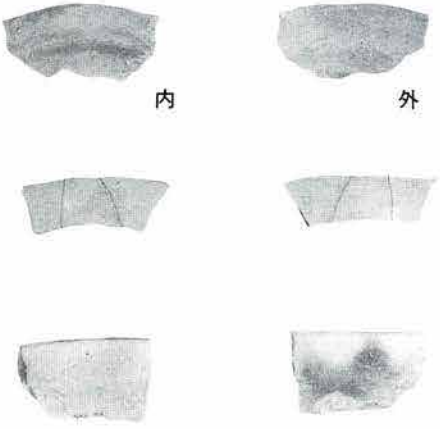


▲1．高坏の坏

外　　内



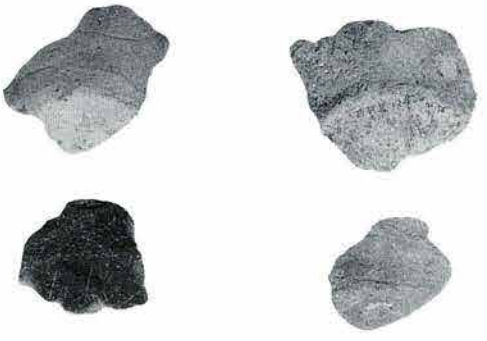
2．高坏脚部



内　　外

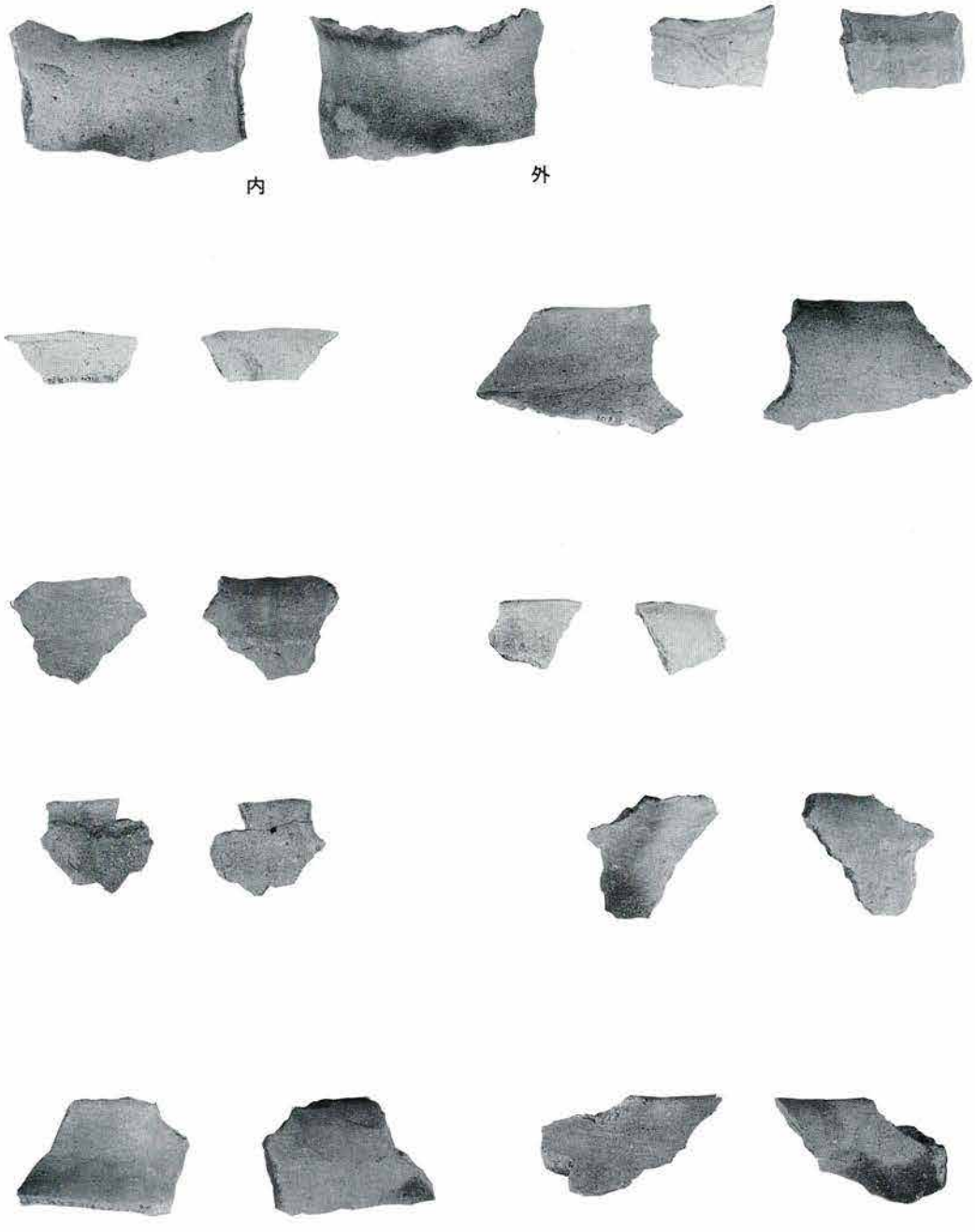
4．壺の口辺

3．遺構29出土の壺



5．壺・甕　底部

PL.10



1．土師器・甕・壺の口辺

5. 長谷小路周辺遺跡（No.236）

由比ケ浜三丁目1175番２外地点

例　言

1．本報は、鎌倉市由比ケ浜三丁目1175番２外地点における埋蔵文化財発掘調査報告である。

2．発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会がおこなった。

3．調査体制は次のとおり。

担　当　者　　馬淵和雄

調　査　員　　園部雅之・渡部律子・黒崎真理（整理作業）

調査補助員　　南保由利・森本康二・坂倉美恵子・青木綾子・成田初枝・池谷ツル

調査協力者　　福本寿夫・萱野輝雄・松崎靖弘

4．本報の執筆・編集は馬淵がおこなった。また遺物図および遺構図墨入れは南保・黒崎・馬淵がおこない、遺物写真は黒崎が撮影した。

5．本発掘調査に関連する諸資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　次

例　言……60
目　次……61
第一章　調査地点の概観……63
第二章　調査の概要……69
第三章　検出遺構と出土遺物……71
　第１節　中世……71
　第２節　中世以前……87
第四章　まとめ……90

挿　図　目　次

図１　調査地点と近辺の主な発掘調査地点・旧跡……64
図２　調査地点位置図……65
図３　遺構全図……折り込み……67・68
図４　方眼設定図……69
図５　土壙・同出土遺物(1)……72
図６　土壙・同出土遺物(2)……73
図７　土壙・同出土遺物(3)……74
図８　土壙・同出土遺物(4)……77
図９　土壙・同出土遺物(5)……79
図10　土壙・同出土遺物(6)……80
図11　土壙・同出土遺物(7)……81
図12　土壙・同出土遺物(8)……82
図13　包含層出土遺物(1)……84
図14　包含層出土遺物(2)……88
図15　主軸方位対比図……91

表　目　次

表１　土壙出土遺物観察表(1)……75
表２　土壙出土遺物観察表(2)……75
表３　土壙出土遺物観察表(3)……76
表４　土壙出土遺物観察表(4)……78
表５　土壙出土遺物観察表(5)……78

表 6　土壙出土遺物観察表(6)……83
表 7　土壙・柱穴出土遺物観察表(1)……83
表 8　土壙・柱穴出土遺物観察表(2)……83
表 9　包含層出土遺物観察表(1)……85
表10　包含層出土遺物観察表(2)……86
表11　包含層出土遺物観察表(3)……87
表12　包含層出土遺物観察表(4)……89
表13　調査区全体遺物構成……96
表14　同上　層位別遺物構成……96
表15　土師器技法別構成……96
表16　国産陶磁器器種構成……97
表17　中国陶磁器器種構成……97
表18　土器・土製品器種構成……97
表19　石製品器種構成……98
表20　常滑器種構成……98
表21　瀬戸器種構成……98
表22　青磁器種構成……99
表23　白磁器種構成……99
表24　古代遺物器種構成……99

図　版　目　次

図版 1　調査区全景（北から）……100
同　上　（南から）……100
図版 2　土壙 1・3・2……101
土壙 2（南から）……101
土壙 1（東から）……101
図版 3　土壙19（東から）・土壙26（西から）……102
図版 4　土壙出土遺物……103
図版 5　包含層出土遺物(1)——中世……104
図版 6　同　上　(2)——古代……105

第一章　調査地点の概観

国道134号線（旧道）は名越から鎌倉に入り、下馬四角で若宮大路を横切って長谷観音前から由比ケ浜海岸に向かう。この道は途中、六地蔵交差点と呼ばれる地点で、扇ケ谷から南下してきた今小路（「今大路」）と交わる。現在長谷小路と通称されるのは、ここから西の長谷観音前交差点までの部分である。調査地点はこの道路中間付近から約150m海岸寄りにある。

六地蔵交差点から長谷小路を西に約300m行くと、佐助ケ谷より南下した路地が通過する場所がある。この路地は西南に折れて海岸に向かうが、250mほどで海岸に並行した道路と交差する。この交差点東北の角が本調査地点である。現在の地番は鎌倉市由比ケ浜三丁目1175番２外。

調査地点は鎌倉旧市街地南域に形成された海成砂丘上に位置しており、現地表で海抜約8.5m内外の高さにある。海岸線までの距離は埋立の進んだ現在では400m近くもあるが、松島義章氏による地質調査や松尾宣方氏らによる試掘調査の結果から、中世期由比ケ浜海岸線は現在よりも200～300m内陸にあることが分かっており、それだと約250m程度になる。

さてこの付近での人の生活痕は、大体古墳時代から本格的になる。長谷小路近辺の数カ所からも古墳時代の土器が出土しているのをはじめ、調査地点東方にはかつて下向原古墳群という名の古墳群が存在していたという。「和田塚」はもとその中の１基で、采女塚と呼ばれた高塚古墳であったことが知られている。あるいは畿内政権と結びついた有力な豪族がいた可能性もあろう。また東海地方との交流を窺わせる古墳時代前期の土器も、近在から出土している。

律令時代の鎌倉は郡衙所在地であり、古東海道の通過する場所でもあった。現在の極楽寺坂付近から鎌倉に入った東海道は、おそらく長谷小路を通って鎌倉郡衙前にいたったと考えられる。坂下御霊社・長谷観音・甘縄神明社など古代からの寺社がこの道路に面しているのはそのことを裏付けている（地名は便宜上現在のものを使った）。市内各地からこの時代の住居跡が続々と検出されているが、調査地点近くでもいくつか例がある。一帯には当該期の集落がひろく展開していたのである。『万葉集』巻14「相模国歌」には「美奈の瀬河」・「鎌倉山」・「御輿の崎」という鎌倉の三つの地名が詠み込まれている。「美奈の瀬河」は由比ケ浜西部に流れ込む川で、稲瀬川水系の一つとして現在も名称が残っている。「御輿の崎」は長谷甘縄神明社の裏にある御輿ケ岳のことであろう。これらはいずれも調査地点から指呼の距離にある。

律令体制の崩れた平安時代後期、11世紀後半には源氏一族が鎌倉に根拠を構えはじめる。そして12世紀末の頼朝による鎌倉開府を迎えるが、この間約150年間は東国では一体にほとんど遺構がみられない。鎌倉もまたいくつかの事例を除き同様だが「前浜」と呼ばれる海岸砂丘地帯ではさらに13世紀代まで待たねばならない。この頃市中整備を進める北条得宗家は、増大する一方の海上輸送に対処するため和賀江の港を築き、律僧忍性が極楽寺に止住してからは前浜の管理を同寺に委ねた。このことについて石井進氏は「港湾・商業・漁業の地として大きな役割を果たしていた前浜一帯に

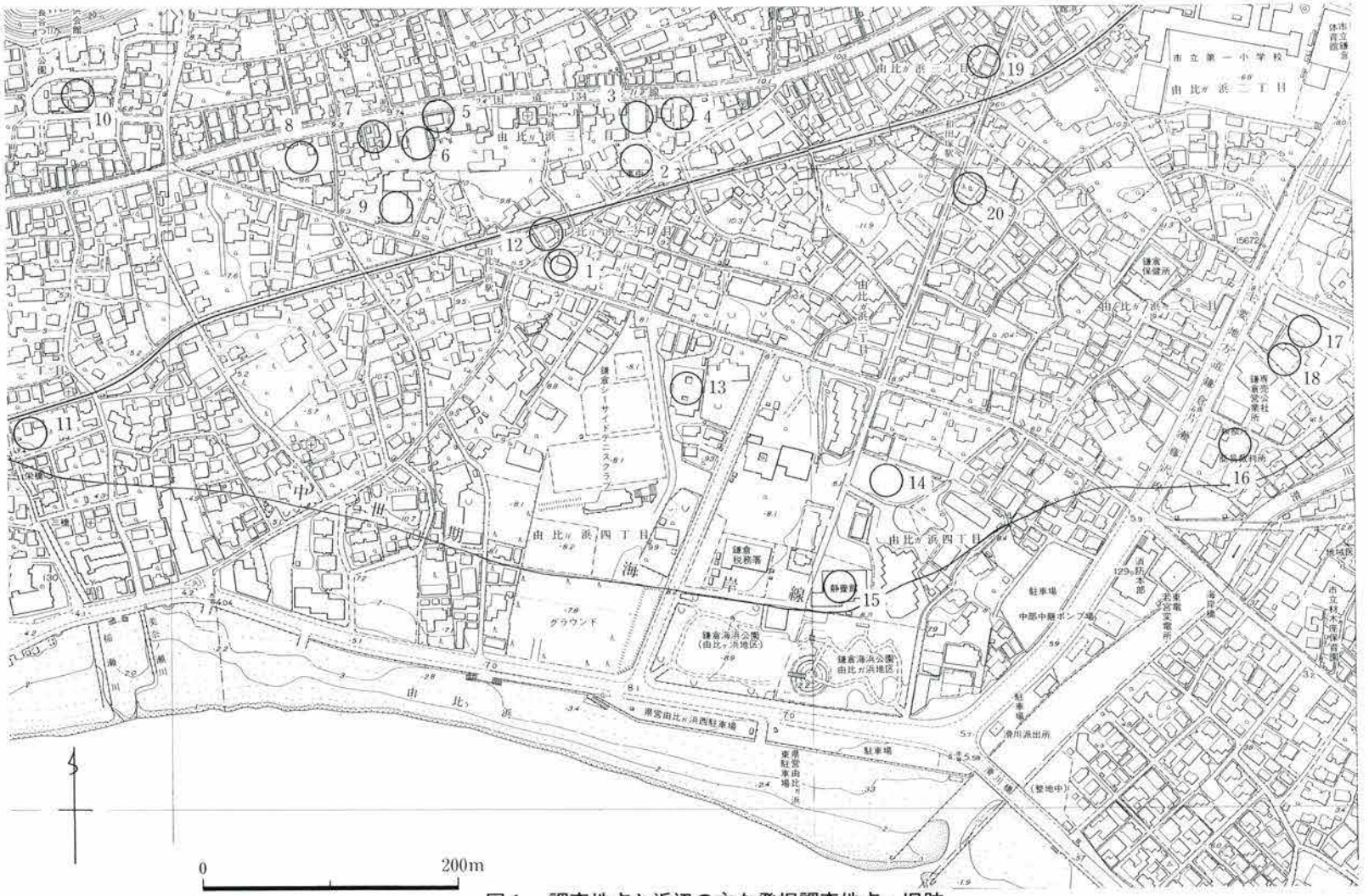


図１　調査地点と近辺の主な発掘調査地点・旧跡

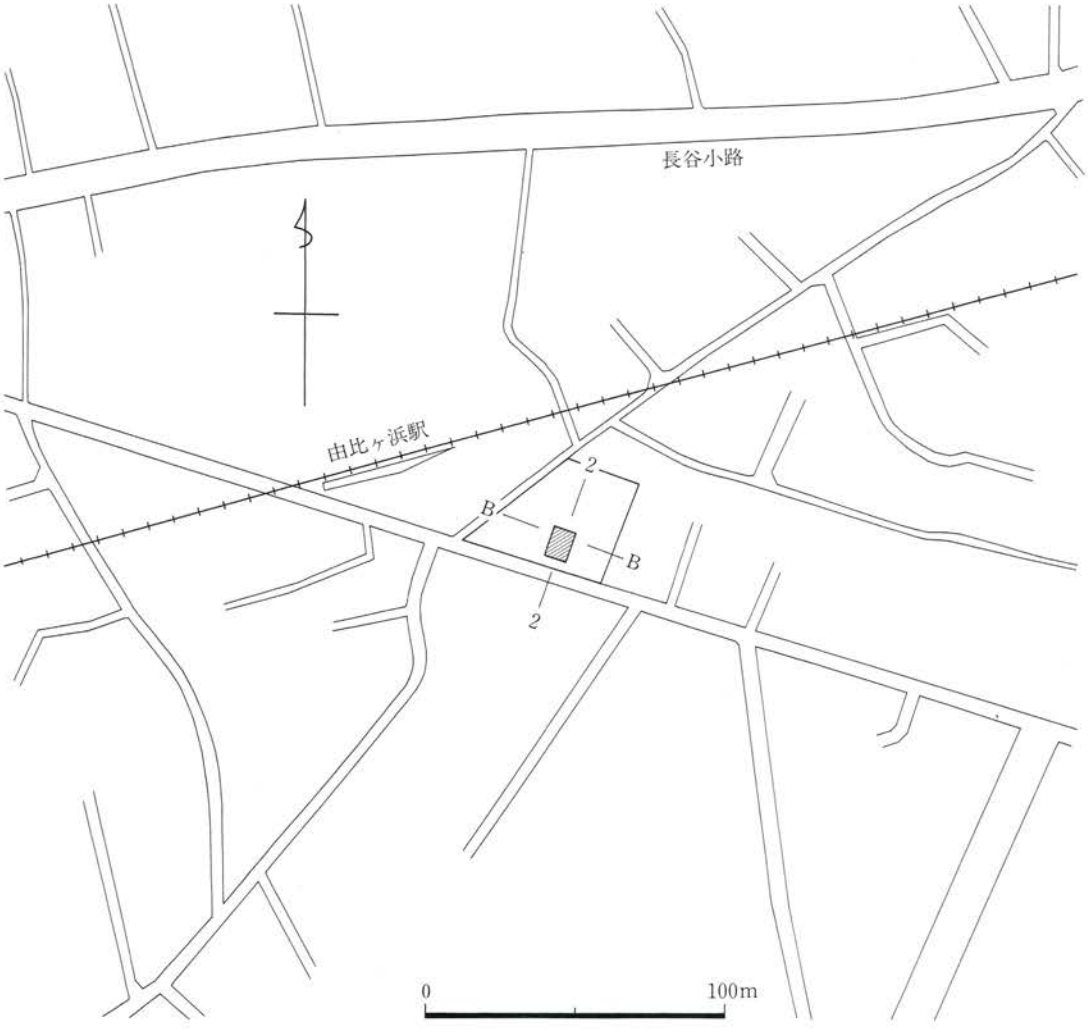


図 2　調査地点位置図

図 1　調査地点名

1．調査地点（由比ヶ浜三丁目258番 1 地点）
3．長谷小路周辺遺跡（由比ヶ浜三丁目258番 8 地点）
4．長谷小路周辺遺跡（由比ヶ浜三丁目254番24地点）
5．長谷小路周辺遺跡（由比ヶ浜三丁目194番25外地点）
6．長谷小路周辺遺跡（由比ヶ浜三丁目194番24地点）
7．長谷小路周辺遺跡（由比ヶ浜三丁目199番 1 地点）
8．長谷小路南遺跡
9．日産保養荘用地
10．伝安達泰盛邸跡（長谷一丁目227番地点）
11．由比ヶ浜南遺跡
12．長谷小路周辺遺跡（由比ヶ浜三丁目194番40地点）
13．由比ヶ浜中世集団墓地遺跡（由比ヶ浜四丁目1181番外地点）
14．由比ヶ浜中世集団墓地遺跡（由比ヶ浜四丁目1134番 1 地点）
15．由比ヶ浜中世集団墓地遺跡（静養館用地）
16．由比ヶ浜中世集団墓地遺跡（材木座遺跡）
17．由比ヶ浜中世集団墓地遺跡（由比ヶ浜二丁目1034番 1 外地点）
18．由比ヶ浜中世集団墓地遺跡（由比ヶ浜二丁目1015番29外地点）
19．長谷小路周辺遺跡（由比ヶ浜三丁目229番外地点）
20．和田塚（采女塚）

対する極楽寺の一種の支配権の意義は、いかに大きく評価しても、しすぎるということはあるまい」と的確に指摘する。また細川涼一氏も「(極楽寺は) 幕府にとっては五山よりももっと重要な機能を果たす官寺であった」と言っている。一帯で遺構・遺物が目立ちはじめるのはこの時期、13世紀半ばである。以来前浜は職能民の盛んに往来する賑やかな場となった。

この時期の前浜で検出されるのは、主として大型の竪穴建物と墓である。竪穴建物の評価はいまだ定まっていないが、方形または長方形の平面形を呈し、概して大型で深く、住居・倉庫など様々の機能が想定できる。調査地点東側一帯に「由比ケ浜中世集団墓地遺跡」の名称が付けられているとおり、人骨がいたるところから大量に出土する。大型の哺乳類の四肢骨が頻繁に出土するのも前浜の特徴である。こういった点は、ここが京都の賀茂の河原同様、ケガレが忌まれない開放された空間であったことを物語っている。

前浜で遺構が検出されなくなるのは15世紀前半～中葉である。これは鎌倉府の滅亡と機を同じくして、鎌倉が都市機能を失った時期に一致する。

注

1　松島義章（1974）「鎌倉の沖積層」『神奈川県立博物館調査研究報告　自然科学』第5号
2　松尾宣方（1989）「中世の海岸線と浜」『よみがえる中世』3　平凡社
3　長谷小路周辺遺跡由比ケ浜三丁目194番24地点他
4　熊原政男（1961）「極楽律寺要文録」『金沢文庫研究紀要』第1号　神奈川県立金沢文庫
5　石井　進（1981）「都市鎌倉における『地獄』の風景」『御家人制の研究』p.p.92　吉川弘文館
6　細川涼一（1979）「叡尊・忍性の慈善救済—非人救済を主軸に—」『論求』11-5　p.p.102

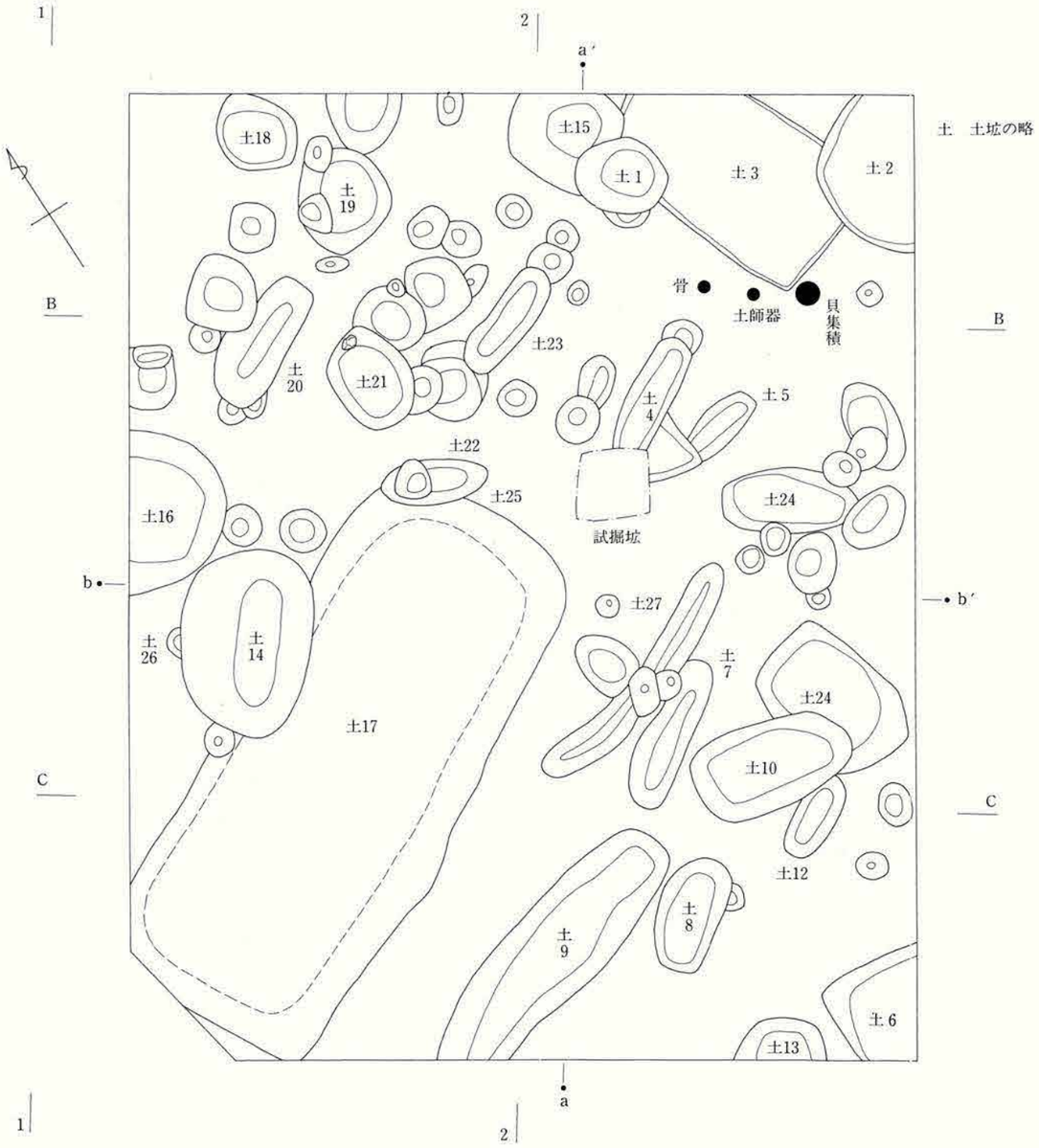
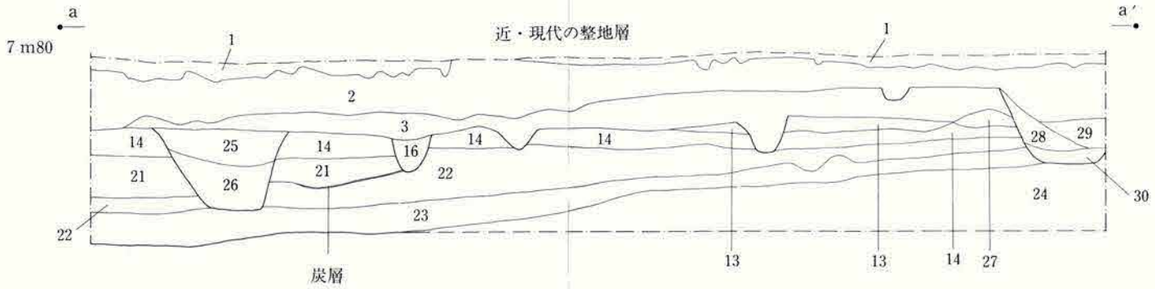
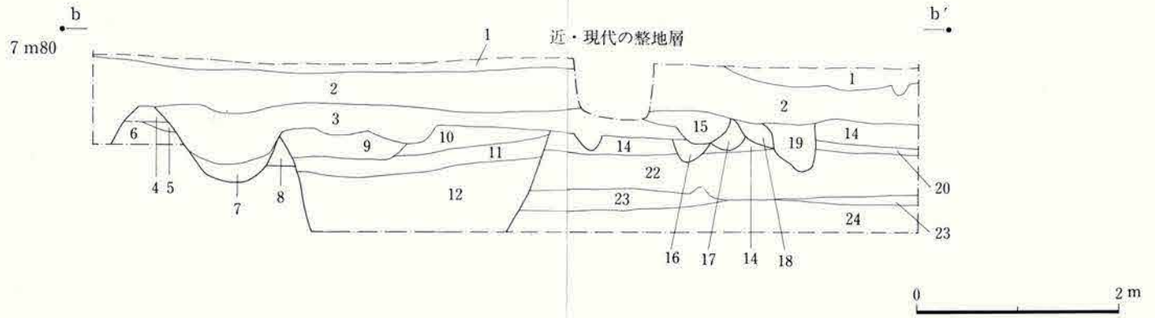


図3　遺構全図





1．茶白色砂質土
2．暗黒褐色砂質土　炭化物、遺物、灰色シルト岩粒、貝殻片を含む
3．黒褐色砂質土　全体に少量の白砂が混入、炭化物、遺物、灰色シルト岩粒、貝殻片を含む
4．茶褐色砂質土　黄砂が混入、炭化物、遺物、貝殻片を含む
5．黄茶褐色砂質土　多量の黄砂と白砂が混入、炭化物、貝殻粒を含む
6．黄白色砂質土　暗茶褐色砂質土ブロックが混入、炭化物、貝殻粒を含む
7．茶褐色砂質土　多量の貝粒子、貝殻片、炭化物、土師器片を含む
8．暗茶褐色砂質土　多量の貝粒子、少量の灰色シルト岩粒、炭化物、土師器片を含む
9．茶褐色土　多量の貝粒子がまだらに混入、貝殻片、土師器片、灰色シルト岩粒子を含む
10．茶褐色土　貝粒子、灰色シルト岩粒子、土師器粒子、土師器片、炭化物を含む
11．暗茶褐色土　多量の貝粒子、少量の炭化物、土師器片を含む
12．暗茶褐色土　多量の貝粒子、貝殻片、土師器片、炭化物を含む
13．暗茶褐色砂質土　少量の貝殻片、炭化物を含む
14．茶褐色砂質土　多量の貝粒子、貝殻片、炭化物、灰色シルト岩粒、少量の土師器片を含む
15．暗茶褐色砂質土　炭化物、貝殻粒、灰色シルト岩の小塊を含む
16．明茶褐色砂質土　多量の貝粒子、炭化物、土師器片、灰色シルト岩粒を含む
17．暗茶褐色砂質土　多量の貝粒子、貝殻片、土師器片、炭化物を含む
18．暗茶褐色土　多量の貝粒子、貝殻片、炭化物、灰色シルト岩粒子、土師器片、凝灰質砂岩片を含む
19．暗茶褐色土　多量の貝粒子、貝殻片、炭化物、土師器片、灰色シルト岩粒を含む
20．黒褐色土　多量の炭化物、貝粒子、貝殻片、灰色シルト岩粒子、土師器粒子を含む
21．暗茶褐色砂質土　貝殻片、貝粒子、炭化物、土師器片を含む
22．暗茶褐色砂質土　多量の貝殻片、貝粒子、土師器片、灰色シルト岩塊、灰色シルト岩粒、少量の炭化物を含む
23．黒褐色土　多量の貝粒子、土師器片、炭化物、灰色シルト岩粒を含む
24．茶褐色砂質土　貝粒子、貝殻片、土師器片、灰色シルト岩粒、炭化物、ごく少量の灰色シルト岩塊を含む
25．黒褐色砂質土　多量の貝粒子、貝殻片、炭化物、土師器片、灰色シルト岩塊を含む
26．黒灰褐色砂質土　多量の貝粒子、貝殻片、炭化物、少量の土師器片を含む
27．灰白色砂質土　多量の貝粒子、ごく少量の炭化物を含む
28．暗黒褐色砂質土　所々に赤砂が混入、少量の貝粒子、炭化物、土師器片を含む
29．暗黒褐色砂質土　少量の貝粒子、炭化物、土師器片を含む
30．黒褐色砂質土　少量の貝粒子、炭化物、土師器片を含む

第二章　調査の概要

調査方法

鎌倉市教育委員会による試掘調査によれば、現地表下約70cmまで近・現代の整地層が認められたため、まず重機によってこの層まで排除した。これ以下に近世期以前の包含層が存在するが、近世の遺構は明瞭には認められず、地表下約１ｍで中世面に達する。人力による掘削に入ってからは、調査区中央に土層観察用の畦を十字型に残した。層位は図４に示したとおりである。なお、掘削は深度規制のため、土層図以下は調査していない。

調査区は南北10m×東西９ｍの長方形で、調査面積は90㎡である。調査に際しては一辺５ｍ区画

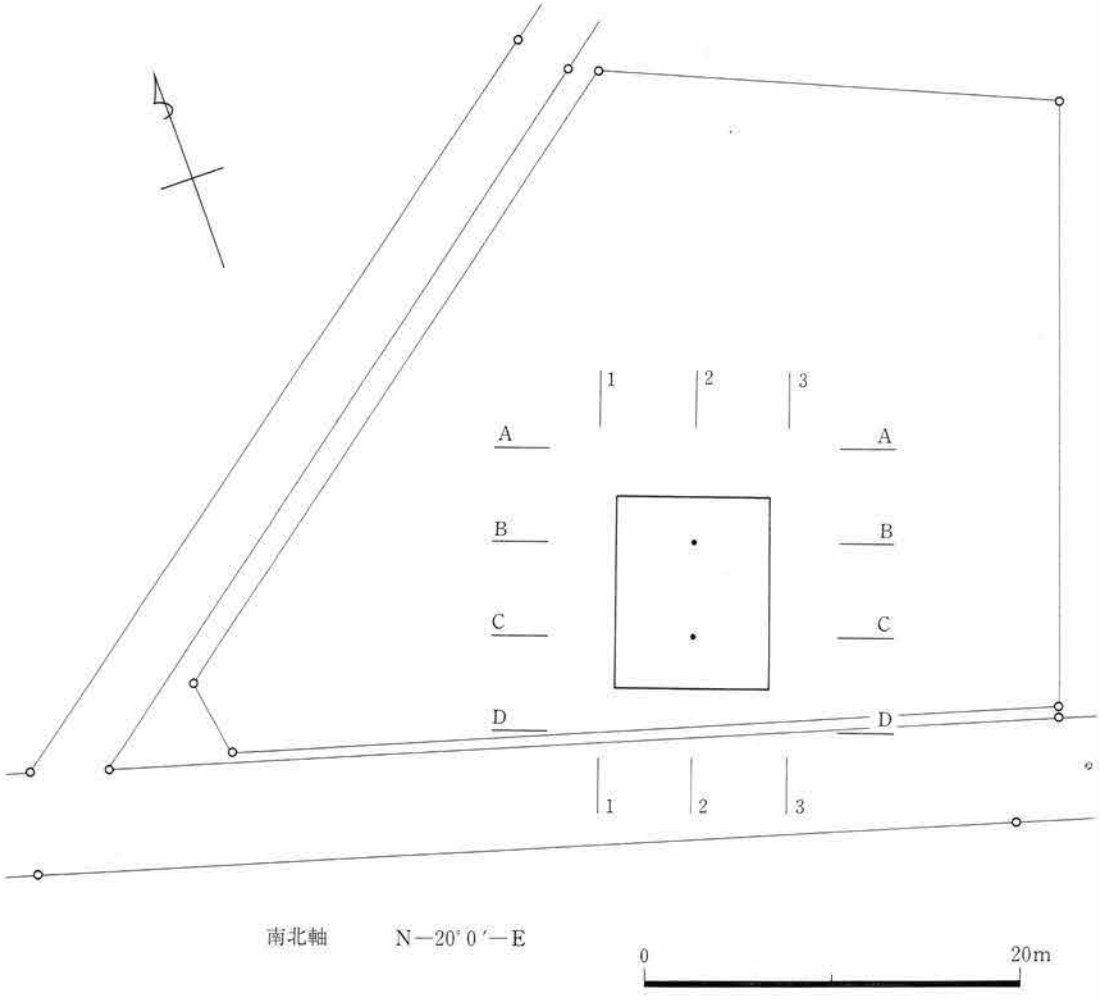


図４　方眼設定図

の方眼を調査区に設定し、南北軸に算用数字の、東西軸にアルファベットの名称を付した。測量上の便宜を考えて調査区壁に軸線方位を平行（または直交）させたため、南北軸はＮ―20°―Ｅとなり、若宮大路などの町割基軸線とは一致していない。

調査経過

調査は1992年９月10日に始められ、同年10月28日に終了した。その間の経緯については、日誌抄を参照されたい。

９月10日(木)　機材搬入。重機による表土除去作業。
12日(金)　遣方方眼設置
14日(月)　遺構検出作業開始。以後順次遺構掘り上げと平面実測・写真撮影を行う。
21日(月)　いったん中央ベルト除去
30日(水)　雨で崩れた調査区壁の復旧と、流入土砂の除去
10月３日(土)　雨で崩れた調査区壁の復旧と、流入土砂の除去
９日(金)　再三の水没
21日(水)　全景写真撮影
22日(木)　黒色土面まで掘り下げ
28日(水)　機材撤収と片づけ

第三章　検出遺構と出土遺物

第1節　中世

表土である近・現代の整地層を除くと暗黒褐色砂質土が現れる（図4土層番号2－以下土層番号のみ記す）。この土は出土遺物からみて近世のものと考えられたが、上面に遺構はほとんど検出されなかった。厚さ30～50cmほどのこの土の下に中世層はある。なおこの一帯は表土以下すべて砂質土もしくは砂層である。

中世面は海抜6.8m～7mのあたりにあり、北から南（海岸方向）に向かってなだらかに傾斜している。上下2枚の遺構面が認められ、上層面は混入物の多い黒褐色砂質土（3）、下層面はこれも混入物の多い茶褐色砂質土（14）が基盤となっている。検出された中世遺構は土壙27基、柱穴様の小穴50口である。また、貝や土師器、人骨・獣骨などの集積も小規模ながら認められた。

1．土壙

先述のように大小27基の土壙が検出された。これらは大きくみて次の四つの類型に分けることができる。

Ⅰ類　長径1.5～2m前後の円形もしくは楕円形で、すり鉢状または逆台形の断面を呈する。主軸方位は不規則。上層面からの切り込みであることが多い。

土壙2・10・14・15・16

II類　長径1m前後の円形もしくは楕円形で、すり鉢状または逆台形の断面を呈する。主軸方位は不規則。下層面からの切り込みであることが多い。

土壙1・8・11・13・18・19・21・22・24

III類　長辺数mの大型長方形土壙で、箱形の断面を呈する。主軸方位に一定の規則性がある。下層面からの切り込みであることが多い。

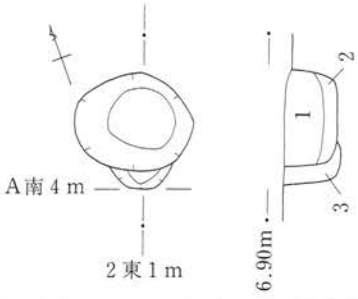
土壙3・6・17

IV類　溝のような細長い形状で、U字形の断面を呈する。主軸方位にIII類と同方向の規則性がみられる。下層面からの切り込みであることが多い。

土壙4・5・7・9・12・20・23・27

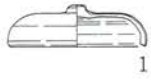
2．小穴

検出した50口の大半が調査区北半部にある。明瞭な規則性は認めにくいが、これらが柱穴であるならば、この付近に掘立柱建物の存在を想定することもできよう。

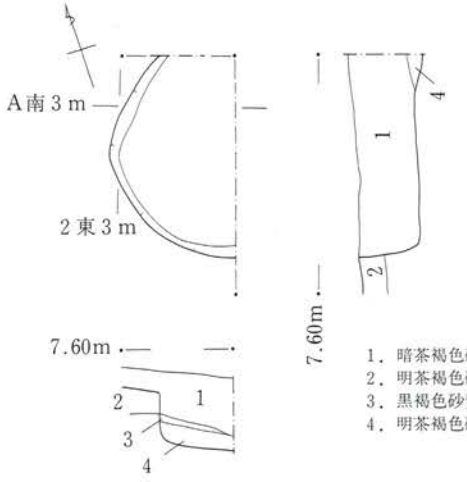


1．黒褐色砂質土　多量の貝粒子、貝殻片、土師器片、灰色シルト岩小塊、少量の炭化物を含む
2．黒色砂質土　多量の貝粒子、貝殻片、土師器片、少量の土師器粒子、微量の炭化物を含む
3．黒褐色砂質土　多量の貝粒子、土師器片、微量の炭化物を含む

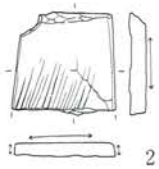
概要
平面形　円形
断面形　箱形
最大径　96cm
底部径　55cm
深さ　42cm
主軸方位　N－59°－W



土坑1



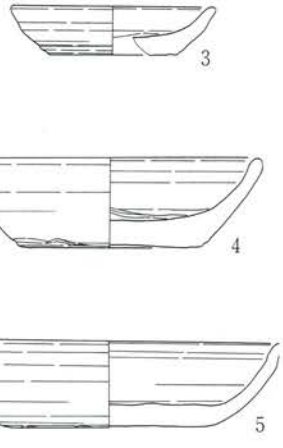
概要
平面形　円形
断面形　箱形
最大径　(164cm)
底部径　(155cm)
深さ　38cm
主軸方位　N－61°－E



1．暗茶褐色砂質土　炭化物、貝殻、貝粒子、土師器片を含む
2．明茶褐色砂質土　白色砂が混入、炭化物、貝粒子を含む
3．黒褐色砂質土　多量の炭化物、貝粒子を含む
4．明茶褐色砂質土　炭化物、貝粒子を含む

土坑2

概要
平面形　長方形
断面形　箱形
長辺　260cm
短辺　150cm
深さ　34cm
主軸方位　N－34°－W



1．黒褐色砂質土　多量の貝粒子、少量の炭化物、貝殻、土師器粒子、灰色シルト岩粒子、微量の骨、灰色シルト岩粒、玉砂利を含む
2．黄褐色砂質土　多量の貝粒子、微量の炭化物、灰色シルト岩粒、貝殻片、土師器粒を含む、常滑片混入
3．黄褐色砂質土　多量の貝粒子、微量の貝殻片、炭化物、土師器粒を含む

土坑3

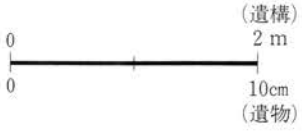
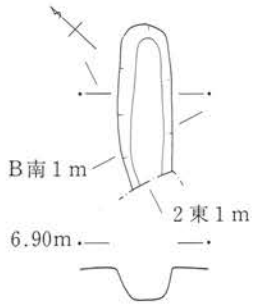
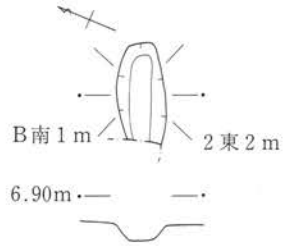


図5　土壙・同出土遺物(1)



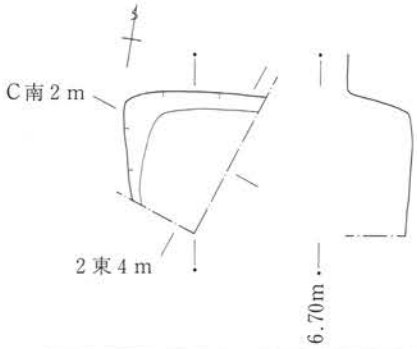
概要
平面形　長楕円形？
断面形　U字形
長径　(125cm)
短径　40cm
深さ　28cm
主軸方位　N－46°－E

土坑4

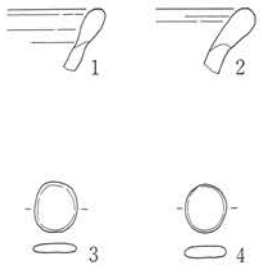


概要
平面形　長楕円形？
断面形　皿形
長径　(80cm)
短径　35cm
深さ　14cm
主軸方位　N－70°－E

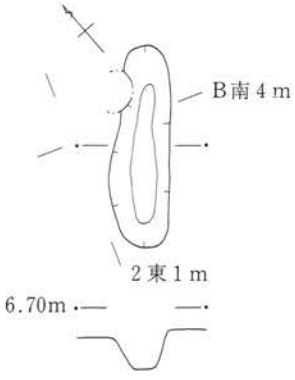
土坑5



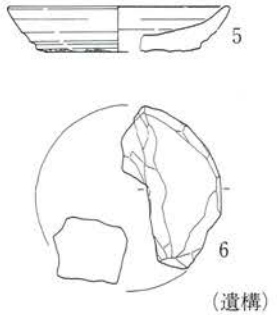
概要
平面形　方形？
断面形　逆台形
辺　(115cm)
深さ　52cm
主軸方位　N－9°－W



土坑6



概要
平面形　長楕円形
断面形　U字形
長径　160cm
短径　45cm
深さ　32cm
主軸方位　N－40°－E



土坑7

図6　土壙・同出土遺物(2)

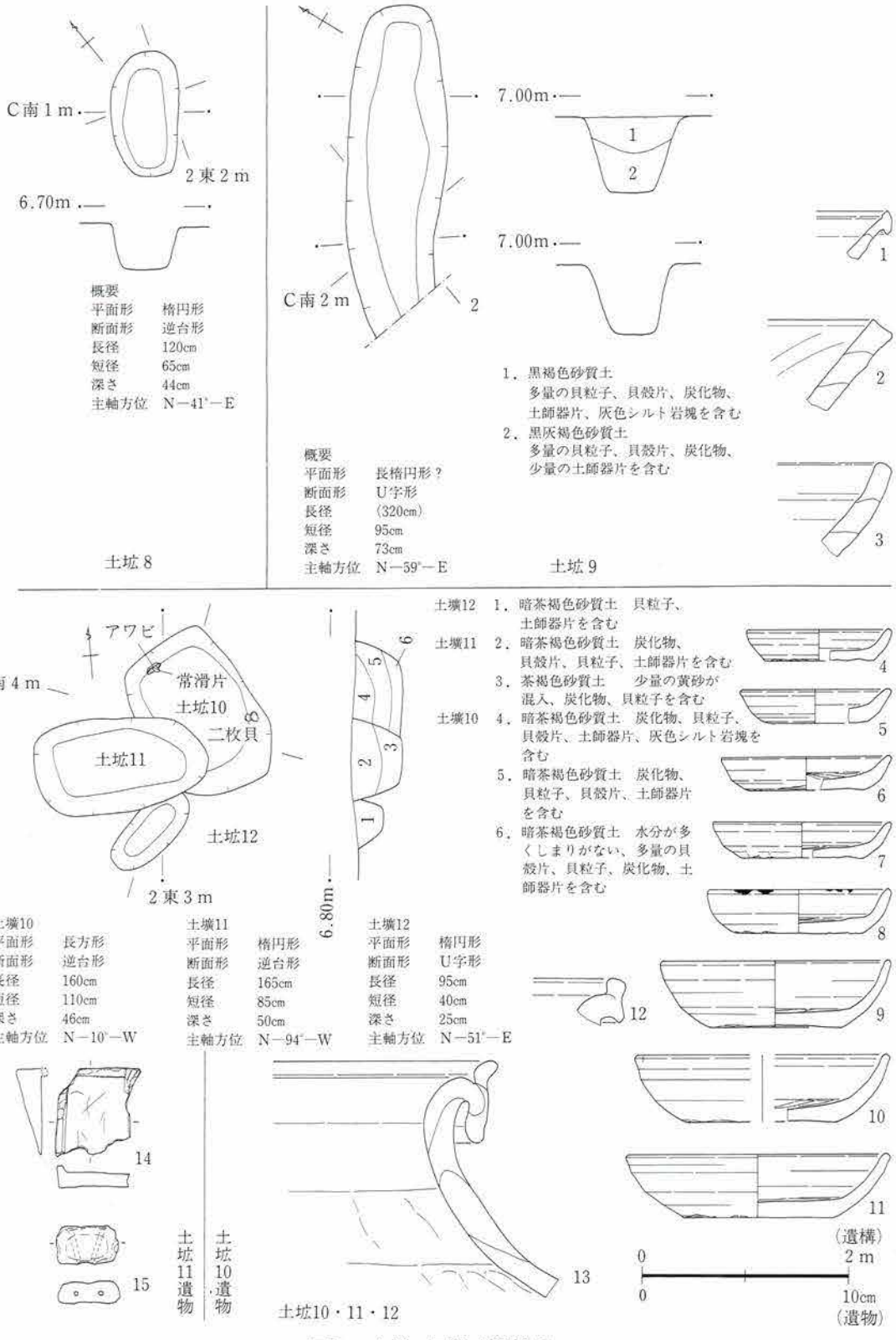

C南1m
2東2m
6.70m
概要
平面形 楕円形
断面形 逆台形
長径 120cm
短径 65cm
深さ 44cm
主軸方位 N−41°−E
土坑8
C南2m
2
7.00m
1
2
7.00m
概要
平面形 長楕円形？
断面形 U字形
長径 (320cm)
短径 95cm
深さ 73cm
主軸方位 N−59°−E
1．黒褐色砂質土
多量の貝粒子、貝殻片、炭化物、
土師器片、灰色シルト岩塊を含む
2．黒灰褐色砂質土
多量の貝粒子、貝殻片、炭化物、
少量の土師器片を含む
土坑9
1
2
3
アワビ
常滑片
B南4m
土坑10
二枚貝
土坑11
土坑12
2東3m
6.80m
土壙12 1．暗茶褐色砂質土 貝粒子、
土師器片を含む
土壙11 2．暗茶褐色砂質土 炭化物、
貝殻片、貝粒子、土師器片を含む
3．茶褐色砂質土 少量の黄砂が
混入、炭化物、貝粒子を含む
土壙10 4．暗茶褐色砂質土 炭化物、貝粒子、
貝殻片、土師器片、灰色シルト岩塊を
含む
5．暗茶褐色砂質土 炭化物、
貝粒子、貝殻片、土師器片
を含む
6．暗茶褐色砂質土 水分が多
くしまりがない、多量の貝
殻片、貝粒子、炭化物、土
師器片を含む
4
5
6
7
8
9
10
11
12
土壙10
平面形 長方形
断面形 逆台形
長径 160cm
短径 110cm
深さ 46cm
主軸方位 N−10°−W
土壙11
平面形 楕円形
断面形 逆台形
長径 165cm
短径 85cm
深さ 50cm
主軸方位 N−94°−W
土壙12
平面形 楕円形
断面形 U字形
長径 95cm
短径 40cm
深さ 25cm
主軸方位 N−51°−E
14
15
土坑11遺物
土坑10遺物
13
土坑10・11・12
(遺構)
0
2m
0
10cm
(遺物)

図7　土壙・同出土遺物(3)

土1	1	白　磁 蓋	法量　口径5.6cm　器高1.7cm　　成形　型入れ　内面ナデ　頂部につまみ 素地　白色、きめ細かい　　釉薬　透明　　焼成　良好
土2	2	砥　石	法量　長さ(4.0cm)　幅4.0cm　厚さ(0.6cm)　　石材　粘板岩 色調　茶褐色　　備考　1面が砥面　側面に切出痕が残る
土3	3	土師器	法量　口径8.3cm　底径4.8cm　器高1.9cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　砂粒、小石、針状物質、雲母、貝粒含む 色調　淡灰橙色　　焼成　良好
	4	土師器	法量　口径12.2cm　底径7.4cm　器高3.6cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　砂粒、小石、針状物質、雲母、貝粒含む 色調　灰橙色　　焼成　良好
	5	土師器	法量　口径14.0cm　底径7.9cm　器高3.65cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　　胎土　砂粒、小石、針状物質、雲母、貝粒含む　　色調　灰橙色 焼成　良好

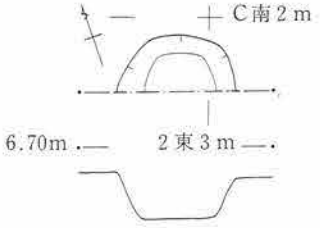
表1　土壙出土遺物観察表(1)

土6	1	山茶碗窯系 こね鉢	成形　輪積　　胎土　多量の砂粒、小石含む　　色調　灰色　　焼成　良好
	2	山茶碗窯系 こね鉢	成形　輪積　　胎土　砂粒、小石含む　　色調　灰色　　焼成　良好
	3	碁　石	法量　長径2.0cm　短径1.75cm　厚さ0.3cm　　色調　黒色
	4	碁　石	法量　長径2.0cm　短径1.7cm　厚さ0.4cm　　色調　黒色
土7	5	土師器	法量　口径9.0cm　底径6.6cm　器高1.8cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　砂粒、針状物質、貝粒含む、ややきめ細かい 色調　灰橙色　　焼成　良好
	6	石製品	法量　推定径7.4cm　高さ(2.35cm)　　成形　円盤状　上、側面に加工痕有り 石材　灰色シルト岩　　色調　灰橙色

表2　土壙出土遺物観察表(2)

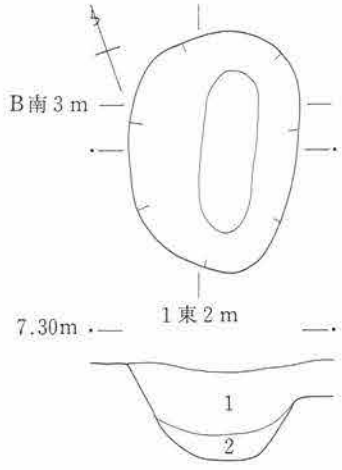
土9	1	魚　住	成形　口縁部横ナデ　口縁内側に沈線　　胎土　小石含む、ややきめ細かい 色調　黒色　　焼成　良好
	2	常　滑 こね鉢	成形　輪積後ナデ　外面縦方向ナデ　　胎土　小石、砂粒含む　　色調　橙褐色 焼成　普通
	3	常　滑 こね鉢	成形　輪積後ナデ　胎土　砂粒、小石含む　　色調　黒褐色　　焼成　普通
土10	4	土師器	法量　口径7.0cm　底径5.7cm　器高1.5cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　砂粒、雲母、針状物質含む 色調　橙褐色　　焼成　良好
	5	土師器	法量　口径7.2cm　底径4.0cm　器高1.65cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　砂粒、雲母、針状物質含む　　色調　橙色 焼成　良好
	6	土師器	法量　口径8.2cm　底径5.7cm　器高1.6cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　砂粒、雲母、針状物質含む 色調　灰橙色　　焼成　良好
	7	土師器	法量　口径8.6cm　底径5.7cm　器高1.75cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　砂粒、雲母、針状物質含む 色調　灰橙色　　焼成　良好
	8	土師器	法量　口径8.8cm　底径5.8cm　器高2.1cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　砂粒、雲母、針状物質含む 色調　橙褐色　　焼成　良好
	9	土師器	法量　口径11.1cm　底径6.3cm　器高3.2cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　貝粒、砂粒、雲母含む 色調　橙色～灰橙色　　焼成　良好
	10	土師器	法量　口径14.9cm　底径9.8cm　器高3.25cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　貝粒、針状物質、砂粒、雲母含む 色調　橙色　　焼成　良好
	11	土師器	法量　口径12.7cm　底径7.3cm　器高3.05cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　貝粒、針状物質、砂粒、雲母含む 色調　橙色　　焼成　良好
	12	常　滑 甕	成形　輪積後ナデ　　胎土　砂粒含む、微気孔有り　　色調　茶褐色、降灰有り 焼成　普通
	13	常　滑 甕	成形　輪積後ナデ　　胎土　小石、砂粒含む、気孔有り　　色調　茶褐色、降灰 有り　　焼成　普通
土11	14	硯	法量　長さ(4.1cm)　幅(3.4cm)　厚さ(1.4cm)　　石材　不明 色調　淡褐色　　備考　使用痕有り
	15	骨製品	法量　長さ2.9cm　幅1.7cm　厚さ1.0cm　　成形　まわりをすって成形　穿孔が2ヵ 所有り　　色調　淡橙色

表3　土壙出土遺物観察表(3)



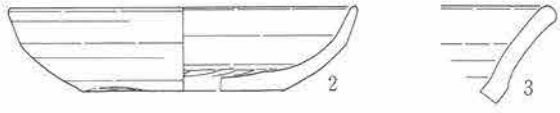
概要
平面形　円形？
断面形　逆台形
径　96cm
深さ　40cm
主軸方位　不明

土坑13

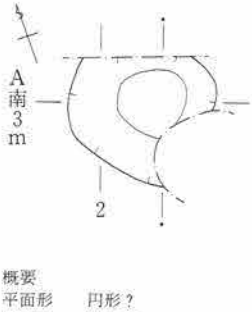


概要
平面形　楕円形
断面形　U字形
長径　195cm
短径　136cm
深さ　76cm
主軸方位　N—26°—E

1．暗褐色砂質土
全体に少量の白砂が混入　炭化物、遺物、灰色シルト岩粒、貝殻片を含む
2．茶褐色砂質土
多量の貝粒子、貝殻片、炭化物、土師器片を含む



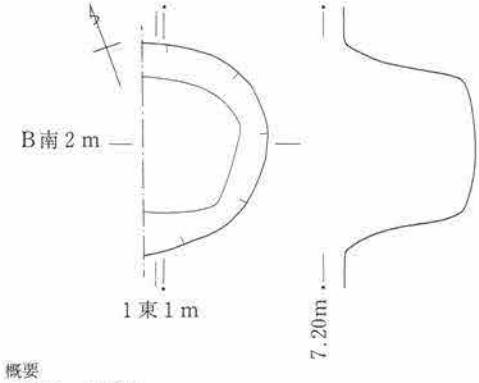
土坑14



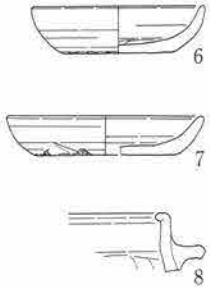
概要
平面形　円形？
断面形　逆台形
径　110cm
深さ　75cm
主軸方位　不明

1．暗黒褐色砂質土　少量の貝粒子、炭化物、土師器片を含む
2．暗黒褐色砂質土　所々に赤砂が混入、少量の貝粒子、炭化物、土師器片を含む
3．黒褐色砂質土　少量の貝粒子、炭化物、土師器片を含む

土坑15



概要
平面形　円形？
断面形　逆台形
径　170cm
深さ　106cm
主軸方位　不明



土坑16

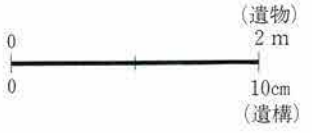


図8　土壙・同出土遺物(4)

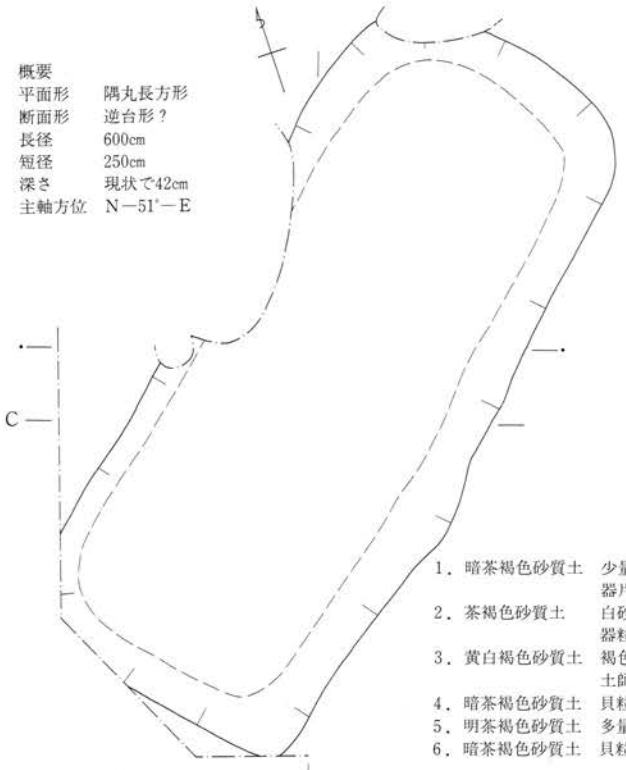
土13	1	土師器	法量　口径7.1cm　底径4.0cm　器高1.65cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　　胎土　砂粒、針状物質含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
土14	2	土師器	法量　口径14.2cm　底径8.1cm　器高3.4cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　砂粒、小石、針状物質、雲母含む 色調　灰橙褐色　　焼成　良好
	3	山茶碗窯系こね鉢	成形　輪積後ロクロ　　胎土　小石、砂粒含む、気孔有り　　色調　灰色 焼成　良好
土15	4	土師器（穿孔）	法量　底径5.6cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ　スノコ痕有り 底部中央よりに穿孔有り　　胎土　砂粒、小石、針状物質含む 色調　淡灰褐色　　焼成　良好
	5	山茶碗窯系こね鉢	成形　輪積　　胎土　小石、砂粒含む　　色調　灰色　　焼成　良好
土16	6	土師器	法量　口径7.0cm　底径4.5cm　器高1.9cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　砂粒、雲母含む　　色調　橙色 焼成　良好
	7	土師器	法量　口径8.0cm　底径5.6cm　器高1.6cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　小石、砂粒、針状物質含む 色調　橙褐色　　焼成　良好
	8	鍔付き土鍋	成形　輪積　横ナデ　鍔部貼り付け　　胎土　砂粒、小石、雲母含む 色調　淡橙色　胎芯部灰色　　焼成　良好

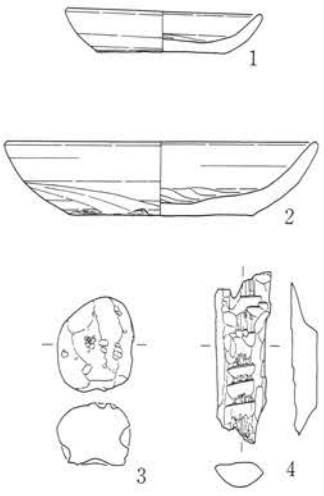
表 4　土壙出土遺物観察表(4)

土17	1	土師器	法量　口径7.95cm　底径5.2cm　器高1.75cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　砂粒、小石、雲母、針状物質、貝粒含む 色調　灰橙色　　焼成　良好
	2	土師器	法量　口径12.7cm　底径7.5cm　器高3.0cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　砂粒、小石、貝粒、針状物質、雲母含む 色調　橙色　　焼成　良好　　完形
	3	軽　石	法量　長さ3.9cm　幅3.0cm　厚さ2.2cm　　色調　灰黒色 備考　使用痕有り
	4	朴　骨	法量　長さ6.9cm　幅2.0cm　厚さ1.0cm　　成形　ノミ痕有り 色調　淡褐色
土18	5	土師器	法量　口径7.8cm　底径4.2cm　器高1.8cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　ススト付着　　胎土　砂粒、小石、貝粒、針状物質、雲母含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好　　完形
	6	軽　石	法量　長さ4.0cm　幅2.6cm　厚さ1.7cm　　色調　灰白色 備考　使用痕有り

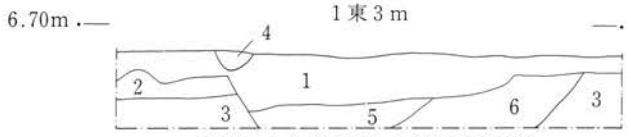
表 5　土壙出土遺物観察表(5)

概要
平面形　隅丸長方形
断面形　逆台形？
長径　600cm
短径　250cm
深さ　現状で42cm
主軸方位　N－51°－E



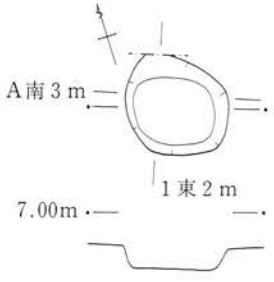


1．暗茶褐色砂質土　少量の褐色砂質土ブロックが混入、多量の貝粒子、貝殻片、土師器片、土師器粒子、炭化物を含む
2．茶褐色砂質土　白砂と褐色砂質土ブロックが混入、貝粒子、炭化物、少量の土師器粒子を含む
3．黄白褐色砂質土　褐色砂質土ブロック、灰色シルト岩小塊が混入、貝粒子、炭化物、土師器片を含む
4．暗茶褐色砂質土　貝粒子、炭化物、灰色シルト岩小塊を含む
5．明茶褐色砂質土　多量の貝粒子、貝殻片、炭化物を含む
6．暗茶褐色砂質土　貝粒子、貝殻片、炭化物を含む



湧水による崩落激しく以下掘削不能

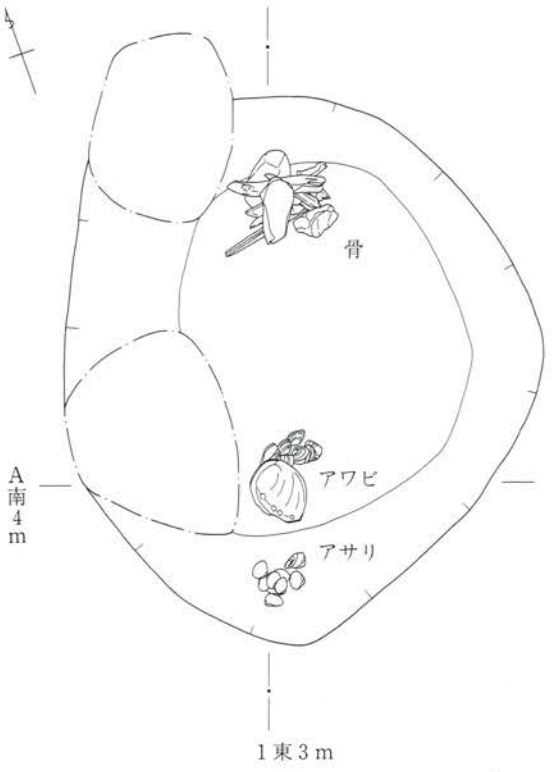
土坑17

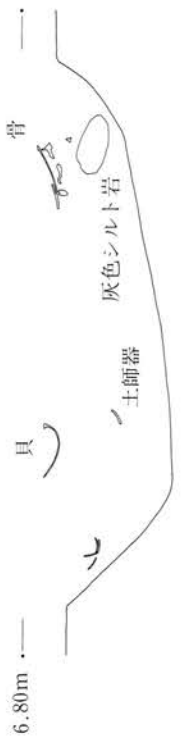


概要
平面形　不整円形
断面形　逆台形
長径　86cm
短径　75cm
深さ　20cm
主軸方位　N－64°－W

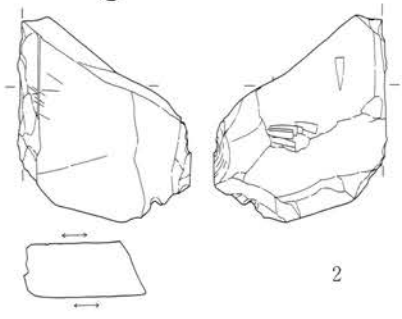
土坑18

図9　土壙・同出土遺物(5)

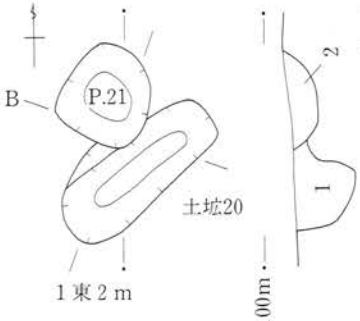




概要
平面形　不整円形
断面形　皿形
長径　110cm
短径　95cm
深さ　22cm
主軸方位　N－22°－E

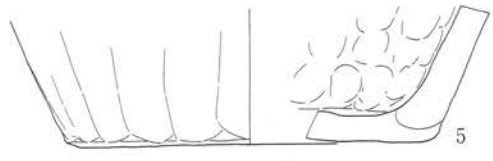


土坑19



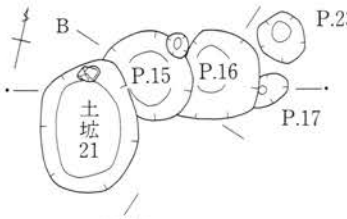
概要
平面形　楕円形
断面形　U字形
長径　145cm
短径　65cm
深さ　50cm
主軸方位　N－54°－E

土壙20　1．黒褐色砂質土　多量の貝粒子、貝殻片、灰色シルト岩塊、土師器片、炭化物、少量の灰色シルト岩粒、土師器粒を含む
P．21　2．黒褐色砂質土　多量の貝粒子、少量の炭化物、貝殻片、微量の灰色シルト岩粒、土師器粒を含む

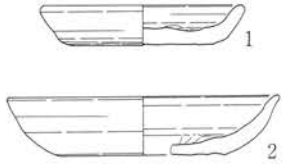


土坑20（他）

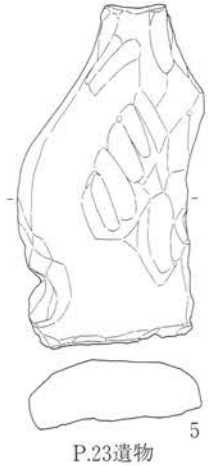
図10　土壙・同出土遺物(6)



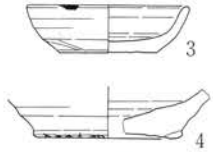
概要
平面形　楕円形
断面形　U字形
長径　104cm
短径　80cm
深さ　28cm
主軸方向　N−14°−W



P.15遺物



P.23遺物

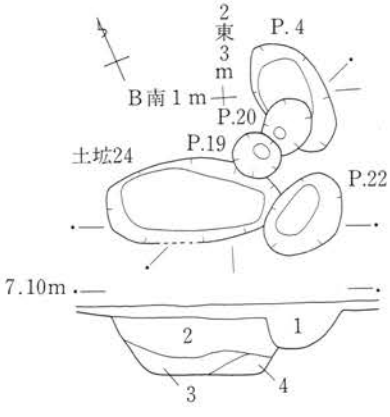


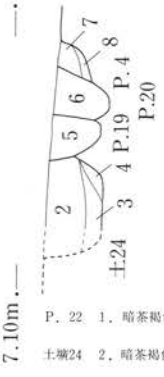
P.16遺物

土坑21遺物

土坑21(他)

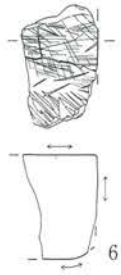
土壙21　1．黒褐色砂質土　多量の貝粒子、少量の炭化物、貝殻片、微量の灰色シルト岩粒、土師器粒を含む
P．15　2．黒褐色砂質土　多量の貝粒子、微量の炭化物、土師器粒、貝殻片を含む
P．16　3．黒褐色砂質土　多量の貝粒子、少量の炭化物、貝殻、微量の土師器粒を含む
P．17　4．黒褐色砂質土　多量の貝粒子、少量の炭化物、土師器粒を含む





概要
平面形　楕円形
断面形　逆台形
長径　140cm
短径　68cm
深さ　46cm
主軸方向　N−68°−W

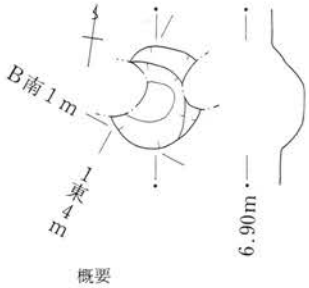
土坑24(他)



土坑24遺物

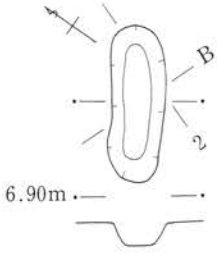
P．22　1．暗茶褐色砂質土　多量の貝粒子、土師器片、土師器粒、灰色シルト岩粒子、炭化物を含む
土壙24　2．暗茶褐色砂質土　多量の貝粒子、貝殻片、土師器片、土師器粒子、灰色シルト岩粒子、炭化物、骨片を含む
3．暗茶褐色砂質土　やや明るい色調、多量の貝粒子、少量の土師器片、炭化物、灰色シルト岩粒子を含む
4．明茶褐色砂質土　多量の貝粒子、貝殻片、少量の炭化物を含む
P．19　5．明茶褐色砂質土　貝粒子、土師器片を含む
P．20　6．暗茶褐色砂質土　少量の炭化物を含む
P．4　7．暗茶褐色砂質土　やや暗い色調、少量の炭化物を含む
8．炭層

P．4 遺物



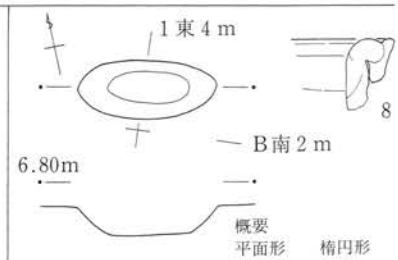
概要
平面形　楕円形
断面形　擂鉢形
長径　84cm
短径　70cm
深さ　22cm
主軸方位　N−20°−E

土坑22



概要
平面形　楕円形
断面形　逆台形
長径　128cm
短径　44cm
深さ　18cm
主軸方位　N−56°−E

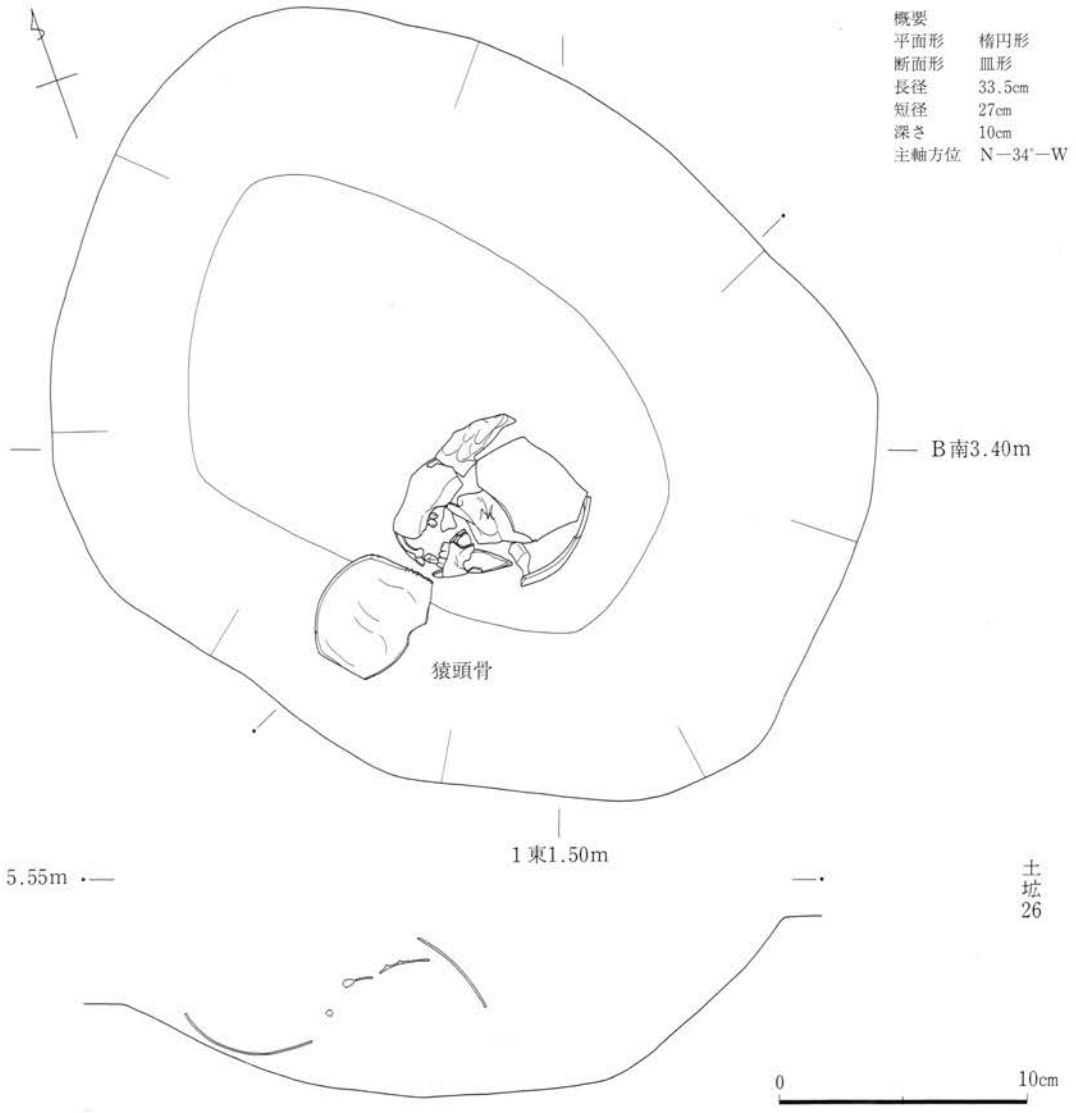
土坑23



概要
平面形　楕円形
断面形　皿形
長径　112cm
短径　46cm
深さ　24cm
主軸方位　N−78°−W

土坑25

図11　土壙・同出土遺物(7)



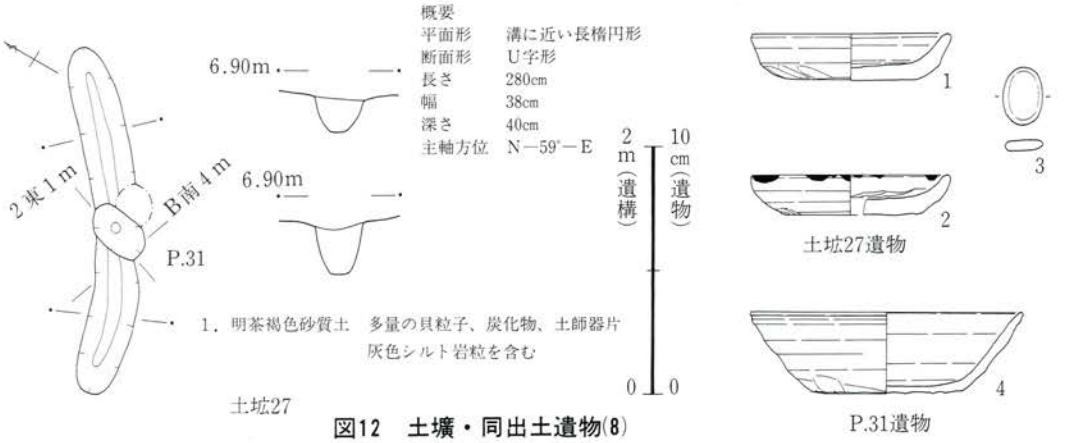


図12　土壙・同出土遺物(8)

土19	1	土師器	法量　口径13.1cm　底径7.7cm　器高3.05cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　　胎土　砂粒、針状物質、雲母含む　　色調　灰褐色 焼成　良好
	2	石製品 (硯石？)	法量　長さ8.3cm　幅7.0cm　厚さ2.25cm　　成形　表面線刻有り　裏面ノミ痕有り 石材　不明　　色調　黒色
土20	3	土師器	法量　口径8.0cm　底径5.0cm　器高1.8cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　スス付着　　胎土　砂粒、雲母、針状物質含む 色調　灰橙色　　焼成　良好　　完形
	4	常滑 甕	成形　輪積　　胎土　小石、砂粒含む　　色調　茶褐色　外面に降灰 焼成　普通
	5	常滑 甕	法量　底径14.8cm　　成形　輪積　外面ヘラ成形　内面指頭痕 胎土　小石、砂粒含む　　色調　橙褐色　　焼成　普通

表 6　土壙出土遺物観察表(6)

P15	1	土師器	法量　口径8.2cm　底径5.8cm　器高1.6cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　　胎土　砂粒、針状物質含む、きめ細かい　　色調　灰褐色 焼成　良好
	2	土師器	法量　口径11.0cm　底径6.4cm　器高2.4cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　砂粒、小石、貝粒、針状物質含む、きめ細かい　　色調　橙色　　焼成　良好
P16	3	土師器	法量　口径6.6cm　底径4.0cm　器高1.9cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　　胎土　砂粒、針状物質含む　　色調　暗茶褐色 焼成　良好　二次焼成をうける
	4	山茶碗	法量　底径6.0cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　高台貼り付け　モミ痕有り 胎土　小石、砂粒含む　　色調　灰色　　焼成　良好
P23	5	石製品	法量　長さ13.5cm　幅6.7cm　厚さ3.0cm　　成形　ノミ痕有り　　石材　砂岩 色調　灰茶褐色
土24	6	砥　石	法量　長さ5.0cm　幅3.1cm　厚さ4.2cm　　産地　天草　　色調　褐色 備考　中砥　3面が砥面
P4	7	山茶碗窯系 こね鉢	成形　輪積　横ナデ　　胎土　砂粒、小石含む、きめ細かい　　色調　暗灰色 口縁と内面に降灰　　焼成　良好
土25	8	常滑 甕	成形　輪積　横ナデ　　胎土　小石、砂粒含む、粗い　　色調　黒褐色 焼成　普通

表 7　土壙・柱穴出土遺物観察表(1)

土27	1	土師器	法量　口径8.0cm　底径5.6cm　器高1.6cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スノコ痕有り　スス付着　　胎土　小石、針状物質含む、ややきめ細かい　　色調　灰橙色　　焼成　良好
	2	土師器	法量　口径8.0cm　底径5.0cm　器高1.9cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　スス付着　　胎土　小石、針状物質含む、ややきめ細かい 色調　灰橙色　　焼成　良好
*	3	碁　石	法量　長径2.3cm　短径1.6cm　厚さ0.35cm　　色調　黒色
P31	4	瀬戸入子	法量　口径11.0cm　底径6.0cm　器高3.2cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 内底部ナデ　内底面は磨滅　スノコ痕有り　　素地　明灰色、きめ細かい 釉薬　口縁に自然降灰釉　　焼成　良好

表 8　土壙・柱穴出土遺物観察表(2)

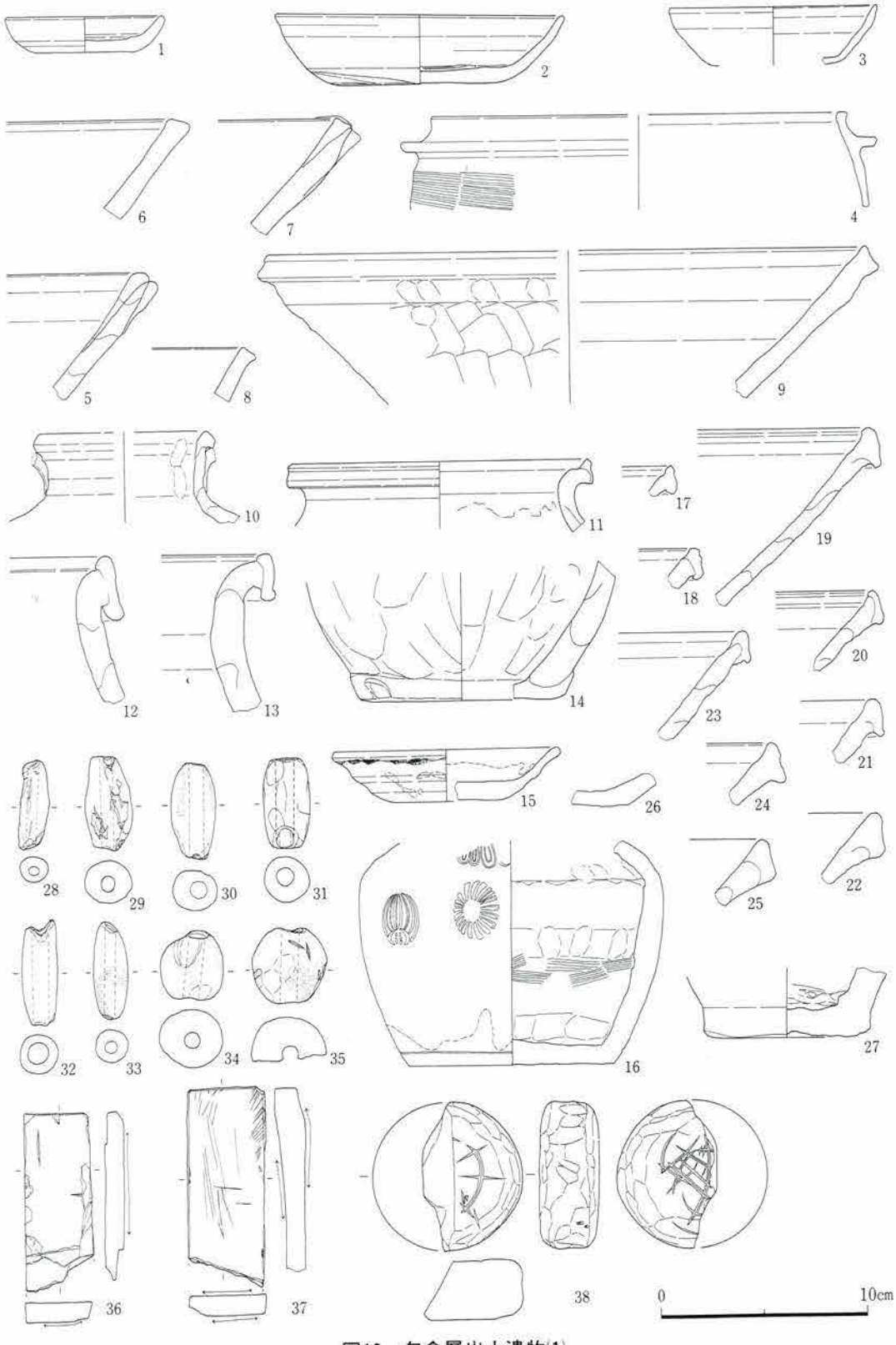


図13　包含層出土遺物(1)

1	土師器	法量　口径7.7cm　底径4.8cm　器高1.7cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ　スノコ痕有り　　胎土　砂粒、小石、針状物質、雲母含む　色調　淡橙色　　焼成　良好　　完形
2	土師器	法量　口径14.0cm　底径7.5cm　器高3.5cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ　　胎土　砂粒、小石、貝粒、針状物質含む　　色調　橙色　焼成　良好
3	瓦　器 輪花　皿	法量　口径10.0cm　　成形　輪花型　内外面横方向暗文　　胎土　灰色　きめ細かい　　色調　灰黒色　　焼成　良好
4	鍔付土鍋	法量　口径20.0cm　　成形　鍔口以上はナデ成形　胴部はハケナデ成形　外面、口縁は使用に伴うスス付着　　胎土　小石、砂粒ふくむ、ややきめ粗い　　色調　暗灰色　　焼成　良好
5	山茶碗窯系 こね鉢	成形　輪積後ナデ　口唇脇指頭圧痕　　胎土　小石、砂粒含む　　色調　灰褐色　焼成　良好
6	常　滑 こね鉢	成形　輪積　　胎土　砂粒、小石含む　　色調　暗茶褐色　口縁と内面に降灰　焼成　普通
7	常　滑 こね鉢	成形　輪積　口唇脇指頭圧痕　　胎土　砂粒、小石含む、気孔有り　　色調　橙褐色　　焼成　普通
8	常　滑 こね鉢	成形　輪積　　胎土　小石、砂粒含む　　色調　灰黒色　　焼成　普通
9	常　滑 こね鉢	法量　口径30.0cm　　成形　輪積後ナデ　口唇脇指頭圧痕　　胎土　小石、砂粒含む　　色調　茶褐色　　焼成　普通
10	常　滑 小　壺	法量　口径8.0cm　　成形　輪積後ナデ　把手貼り付け　　胎土　小石、砂粒含む　色調　暗茶褐色　口縁と胴部に降灰　　焼成　普通
11	常　滑 小　甕	法量　口径14.8cm　　成形　輪積　　胎土　小石、砂粒含む　　色調　茶褐色　口縁と内面に厚く降灰　　焼成　普通
12	常　滑 甕	成形　輪積後ナデ　　胎土　小石、砂粒含む　　色調　茶褐色　口縁と肩部に降灰　焼成　普通
13	常　滑 甕	成形　輪積後ナデ　　胎土　小石、砂粒含む、微気孔有り　　色調　明茶褐色　口縁と肩部に降灰　　焼成　普通
14	常　滑 壺	法量　底径10.0cm　　成形　輪積　外面ヘラ調整　内面ヘラ調整後ナデ　胎土　小石、砂粒含む　　色調　暗茶褐色　　焼成　普通
15	瀬　戸 鉄釉　皿	法量　口径11.0cm　底径5.4cm　器高2.5cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　外側面強いナデ　　素地　茶褐色、小石含む、気孔有り、ややきめ粗い　釉薬　茶～黒褐色鉄釉が口縁に施釉　口縁外側に油煤　　焼成　良好
16	瀬　戸 壺	法量　底径9.8cm　　成形　ロクロ　外面ナデ　胴下部に沈線　内面ヘラ調整　一部指調整　　文様　肩部に蓮弁　胴部に菊花文と蓮華文が交互に押印　素地　灰色、ややきめ粗い　　釉薬　灰緑色半透明　　焼成　良好
17	魚　住 こね鉢	成形　口縁部横ナデ　　胎土　きめ細かい、白粒子含む　　色調　灰色　焼成　良好
18	魚　住 こね鉢	成形　口縁端部に強いナデ　　胎土　粘性なく白粒子含む　　色調　白灰色～暗灰色　　焼成　良好
19	魚　住 こね鉢	成形　輪積後ナデ　内面に使用痕有り　　胎土　小石、砂粒含む、ややきめ粗い　色調　暗灰色　　焼成　良好

表 9　包含層出土遺物観察表(1)

20	魚　住 こね鉢	成形　輪積後ナデ　　胎土　砂粒、白色粒子含む　　色調　暗灰褐色 焼成　良好
21	魚　住 こね鉢	成形　口縁部ナデ　　胎土　砂粒含む　　色調　暗灰褐色　　焼成　良好
22	魚　住 こね鉢	成形　口縁部ナデ　　胎土　粘性なく砂粒、白色粒子含む　　色調　暗灰色 焼成　良好
23	魚　住 こね鉢	成形　輪積後ナデ　　胎土　砂粒、小石含む、ややきめ粗い　　色調　暗灰色 焼成　良好
24	魚　住 こね鉢	成形　口縁部ナデ　　胎土　砂粒、小石含む　　色調　茶灰色　　焼成　良好
25	魚　住 こね鉢	成形　口縁部ナデ　　胎土　砂粒含む、ややきめ粗い　　色調　灰色 焼成　良好
26	魚　住 こね鉢	成形　輪積　内底面に使用痕有り　　胎土　砂粒含む　　色調　暗灰色 焼成　良好
27	褐　釉 壺	法量　底径8.0cm　　成形　ロクロ　ナデ成形　底部ゆがみ有り 素地　灰色、きめ細かいが気孔が多い　　釉薬　暗茶褐色　外面、外底面施釉 焼成　良好
28	土　錘	法量　径1.35cm　内径0.4cm　長さ4.3cm　　成形　棒に粘土を巻いて成形 胎土　砂粒、金雲母含む、きめ細かい　　色調　灰茶褐色　　焼成　良好
29	土　錘	法量　径2.2cm　内径0.5cm　長さ4.6cm　　成形　棒に粘土を巻いて成形　火はぜしている　　胎土　小石を多く含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
30	土　錘	法量　径2.0cm　内径0.5cm　長さ4.7cm　　成形　棒に粘土を巻いて成形 胎土　小石、砂粒、雲母含む　　色調　灰色　　焼成　良好
31	土　錘	法量　径2.2cm　内径0.85cm　長さ4.4cm　　成形　棒に粘土を巻いて成形 胎土　砂粒、雲母、針状物質含む　　色調　橙色　　焼成　良好
32	土　錘	法量　径1.9cm　内径0.9cm　長さ5.1cm　　成形　棒に粘土を巻いて成形 胎土　砂粒、雲母含む、ややきめ細かい　　色調　暗橙色　　焼成　良好
33	土　錘	法量　径1.6cm　内径0.35cm　長さ4.7cm　　成形　棒に粘土を巻いて成形 胎土　砂粒、針状物質、雲母含む　　色調　灰色　　焼成　良好
34	土　錘	法量　径3.0cm　内径0.6cm　長さ3.3cm　　成形　棒に粘土を巻いて成形 胎土　砂粒、貝粒、雲母含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
35	土　錘	法量　径3.6cm　内径0.65cm　長さ3.5cm　　成形　棒に粘土を巻いて成形 胎土　貝粒、砂粒、小石、雲母含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
36	砥　石	法量　長さ(8.6cm)　幅3.3cm　厚さ0.8cm　　産地　京都鳴滝　　色調　灰褐色 備考　仕上砥　1面が砥面　裏面は欠損　側面に加工痕
37	砥　石	法量　長さ(9.7cm)　幅3.8cm　厚さ1.3cm　　産地　京都鳴滝　　色調　灰褐色 一部赤みがかる　　備考　仕上砥　2面が砥面　側面に加工痕
38	石製品	法量　径7.0cm　厚さ2.8cm　　成形　側面ノミ痕有り、磨滅している　両面に使用痕有り　　石材　灰色シルト岩　　色調　黄灰色

表10　包含層出土遺物観察表(2)

第2節　中世以前

先にも述べたように、当調査には工事掘削深度までという深度規制がある。この深度では古代遺構面に達することはできず、したがって遺構の検出もなかったが、中世層の調査の際に遺物がかなり出土した。ここでは中世層から出土した遺物を紹介する。

遺物のなかに「類製塩土器」と鉈尾のあることが注目される。

1	土師器 杯	法量　口径15.0cm　　成形　口縁部、内面ナデ　外側面ヘラ削り 胎土　砂粒、小石、貝粒含む、ややきめ細かい　　色調　暗橙色　　焼成　良好　二次焼成を受ける
2	土師器 甕	法量　底径6.1cm　　成形　内面ナデ、板圧痕有り　外面ヘラナデ　　胎土　砂粒、小石、雲母含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
3	土師器 甕	成形　口縁部ナデ　内面スス付着　　胎土　砂粒、小石、金雲母含む 色調　暗橙色　　焼成　良好
4	土師器 内黒　碗	成形　外面ヘラナデ　内面ヘラ磨き、炭素吸着　　胎土　砂粒、白色粒子、雲母含む、きめ粗い　　色調　暗灰褐色　　焼成　良好
5	土師器 甕	法量　口径31.4cm　　成形　輪積　外面指頭痕有り　内面横方向ハケ目 胎土　砂粒、小石、雲母含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
6	土師器 製塩土器	成形　輪積　　胎土　砂粒、貝粒、小石、雲母含む　　色調　灰橙色 焼成　良好
7	土師器 製塩土器	成形　輪積　　胎土　砂粒、雲母含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
8	土師器 製塩土器	成形　輪積　スス付着　　胎土　砂粒、貝粒、雲母含む　　色調　灰橙色 焼成　良好
9	須恵器 杯	法量　口径13.0cm　　成形　ロクロ　　胎土　小石、白粒子含む、きめ細かい 色調　黒灰色　　焼成　良好
10	須恵器 杯	法量　底径7.0cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　　胎土　小石、砂粒含む 色調　黒灰色　　焼成　良好
11	須恵器 杯	法量　口径12.0cm　底径6.8cm　器高3.8cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 胎土　小石、砂粒含む　　色調　黒灰色　　焼成　良好
12	須恵器 杯	法量　底径7.0cm　　成形　ロクロ　外底部ヘラ削り　外面にスス付着 胎土　小石含む、きめ細かい　　色調　灰色　　焼成　良好
13	須恵器 杯	法量　底径5.6cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　　胎土　小石、砂、針状物質含む、やや粗い　　色調　暗灰色　　焼成　良好
14	須恵器 杯	法量　底径9.0cm　　成形　ロクロ　外底部ヘラ削り　　胎土　小石、砂粒含む、やや粗い　　色調　灰色　　焼成　良好
15	須恵器 杯	成形　ロクロ　　胎土　きめ細かい　　色調　灰黒色　外面は黒色に焼ける 焼成　良好　　備考　埼玉産か？

表11　包含層出土遺物観察表(3)

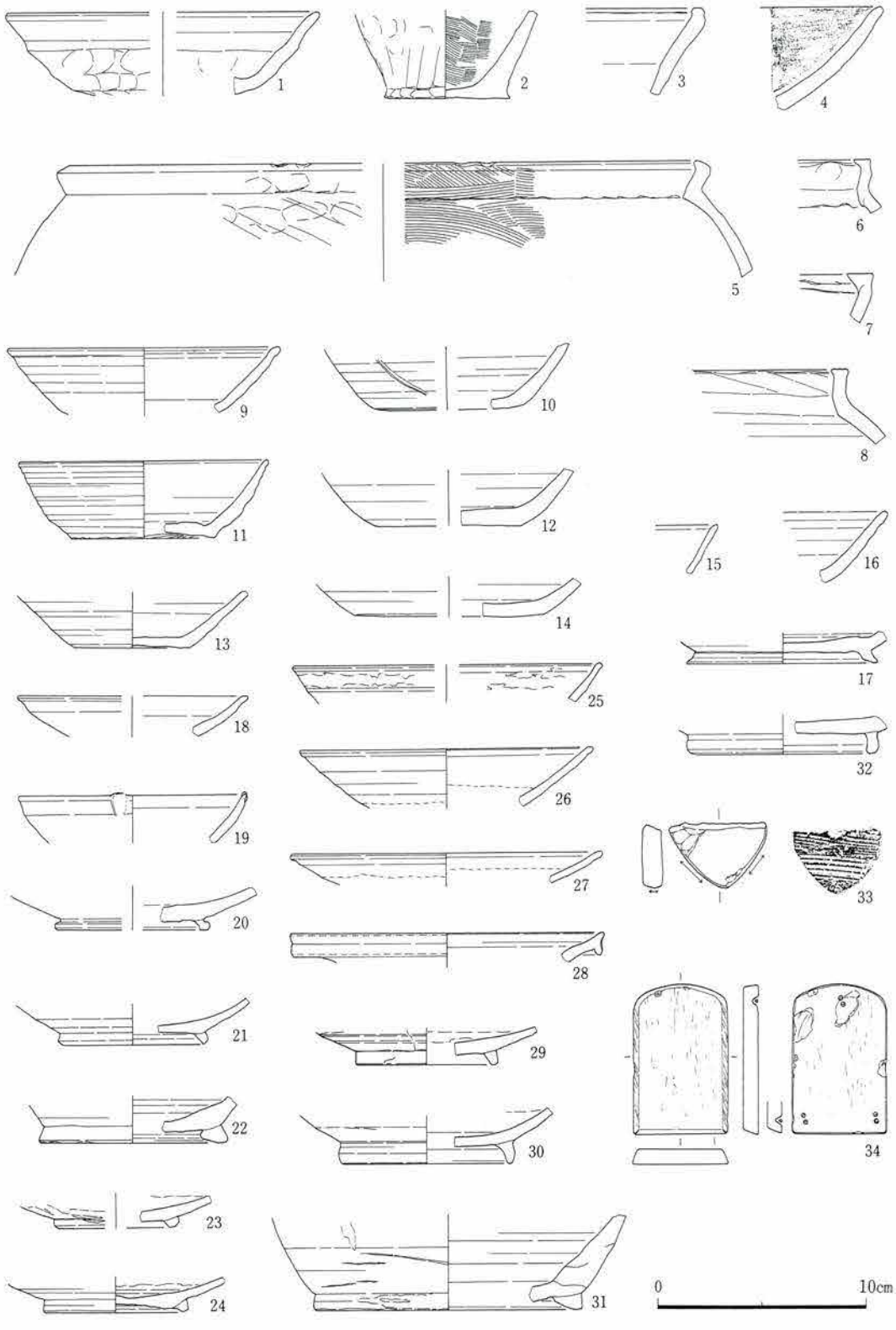


図14　包含層出土遺物(2)

16	須恵器 杯	法量　口径13.0cm　　成形　ロクロ　　胎土　小石、砂粒含む、ややきめ細かい 色調　灰白色　　焼成　良好
17	須恵器 杯	法量　底径9.0cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　　高台貼り付け 胎土　小石、砂粒含む、ややきめ粗い　　色調　灰色　　焼成　良好
18	緑釉陶器 皿	法量　口径11.1cm　　成形　ロクロ　　素地　明灰色、小石少々含む、きめ細かい 釉薬　淡緑色透明　　焼成　良好
19	緑釉陶器 輪花　皿	法量　口径11.1cm　　成形　ロクロ　　素地　灰色、小石少々含む、きめ細かい 釉薬　淡緑色透明　　焼成　良好
20	緑釉陶器 皿	法量　底径7.4cm　　成形　ロクロ　高台貼り付け　　素地　淡橙色、白粒子含む、 やや粗い　　釉薬　淡緑色透明　　焼成　やや不良
21	灰釉陶器 皿	法量　底径7.2cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　高台貼り付け 素地　明灰色、小石、砂粒含む、微気孔有り　　釉薬　灰緑色(内底に飛沫) 焼成　良好
22	灰釉陶器 瓶	法量　底径9.0cm　　成形　ロクロ　外底部ヘラ成形　高台貼り付け 素地　灰白色、砂粒含む、ややきめ細かい　　焼成　良好
23	灰釉陶器 皿	法量　底径6.0cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　高台貼り付け 素地　灰白色、砂粒含む、きめ細かい　　釉薬　灰緑色透明　内外側面に付け掛け施 釉　　焼成　良好
24	灰釉陶器 皿	法量　底径7.0cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　スノコ痕有り　高台貼り付け 内底部ナデ　　素地　灰色、小石含む、きめ細かい　　釉薬　灰緑色透明　内側面 付け掛け施釉　　焼成　良好
25	灰釉陶器 碗	法量　口径14.9cm　　成形　ロクロ　　素地　灰色、砂粒含む 釉薬　灰緑色透明　ハケ塗り施釉　　焼成　良好
26	灰釉陶器 皿	法量　口径14.0cm　　成形　ロクロ　　素地　灰色、小石含む、やや粗い 釉薬　灰緑色透明　口縁から3.5cmまで付け掛け施釉　　焼成　良好
27	灰釉陶器 皿	法量　口径15.0cm　　成形　ロクロ　　素地　灰色、小石含む、やや粗い 釉薬　灰緑色透明　口縁から2.0cmまで付け掛け施釉　　焼成　良好
28	灰釉陶器 瓶	法量　口径15.0cm　　成形　ロクロ　　素地　灰色、砂粒含む、やや粗い 釉薬　灰緑色透明　ハケ塗り施釉　　焼成　良好
29	灰釉陶器 皿	法量　底径6.8cm　　成形　ロクロ　外底部ナデ　高台貼り付け 素地　灰色、小石少々含む、微気孔有り、きめ細かい　　釉薬　灰緑色半透明　側面 付掛け施釉　内底部に釉垂れ　　焼成　良好
30	灰釉陶器 皿	法量　底径8.2cm　　成形　ロクロ　外底部ヘラナデ　高台貼り付け　高台際ヘラ削り 素地　灰色、小石、砂粒含む　　釉薬　灰色半透明　側面付け掛け施釉 焼成　良好
31	灰釉陶器 瓶	法量　底径13.0cm　　成形　ロクロ　高台貼り付け　高台際ヘラナデ 素地　灰色、砂粒含む、ややきめ細かい　　釉薬　灰緑色半透明　外面一部に釉垂れ 焼成　良好
32	灰釉陶器 皿	法量　口径9.0cm　　成形　ロクロ　外底部ナデ　高台貼り付け 素地　灰色、小石含む、きめ細かい　　釉薬　灰色透明　内底部に飛沫 焼成　良好
33	すり須恵器	法量　長さ3.1cm　幅4.7cm　厚さ1.0cm　　成形　須恵器片から成る　外面たたき調整 割れ口に使用痕有り　　胎土　砂粒、小石含む　　色調　灰黒色 焼成　良好
34	石製品 鉈　尾	法量　長さ7.2cm　幅4.6cm　厚さ0.7cm　　成形　表面、側面磨き　側面に切り出し痕 残る　裏面に径１㎜程の装着用小孔が２孔一対で６ヶ所有り　　石材　蛇紋岩 色調　暗緑色

表12　包含層出土遺物観察表(4)

第四章　まとめ

第1節　中世

遺構

当調査は面積90㎡と狭く、また深度規制のせいもあって、満足な資料が得られたとは言いがたい面がある。例えば、前浜における特徴的な遺構である大型の竪穴建物は一軒も検出されなかった。おそらくこれは、竪穴群と竪穴群の間に調査区が位置していたためであろう。しかしそれでも中世期の土壙のうちには、遺構主軸方位の明瞭に分かるものもあるので、図15に示し、近隣の調査地点との対比を試みた。

以下、便宜的に本調査地点を地点A、近隣の調査地点(長谷小路周辺遺跡　由比ケ浜三丁目194番40地点）を地点Bと呼ぶ。またA・B両地点間を北東～南西に走行する道路を道路1、地点A南側を東西に走行する道路を道路2と仮称する。なお地点Bの全体図は「鎌倉市長谷小路周辺遺跡の液状化跡」[1]をもとに作成した。

第三章の土壙の項で述べたように、本地点検出の土壙のうち、III類およびIV類は細長く、明瞭な主軸方位を有する。その中心は土壙17であって、主軸方位はN—50°—Eである。他の幾つかも概ねこれに倣った主軸をもっている。地点Bには中世期の道路1と思われる遺構が検出されているが、この方位が道路1に沿ったものであるのは、図15でも明らかである。また、地点Bには竪穴建物が何軒か検出されているが、この主軸も道路1に直交している。要するに、道路1の規制力には否みがたいものがあるといえるが、問題はその範囲ということになろう。なお、地点Aの遺構群に道路2の影響が認められないのは、おそらくこの道が後世の造作であるからだ。

一方、本地点から約150m前後北を走る長谷小路沿いでも、何箇所も発掘調査が行われている。図15に含めることができなかったが、これらの調査で検出された遺構は、大半が長谷小路の軸線に直交、もしくは平行している。ところが、長谷小路と道路1とは軸線が大きくずれているので、双方の規制力がどこかで衝突するはずである。つまり、どこかで、何らかの方法でそのずれは解消されているはずである。道路と道路の中間付近の良好な調査事例がないので、この点の詳細は不明であると言わざるを得ない。しかし、ずれの存在は実は等閑視できない問題を孕んでいるので、若干付言をしておきたい。

前浜の遺構のあり方を鶴岡八幡宮前面付近の街区（以下とりあえず「中心域」と呼ぶ）と比較してみると、明らかな違いがある。それは、中心域にみられるような溝と道路による明瞭な小区画が存在しないことである。例えば、長谷小路南遺跡—由比ケ浜三丁目202番2外地点（図1—地点8）や、由比ケ浜中世集団墓地遺跡—由比ケ浜二丁目1034番1外地点（同—地点17）[2]など、広範囲に調査された遺跡での竪穴建物の配置をみれば一目瞭然である。長谷小路周辺遺跡—由比ケ浜三丁目229

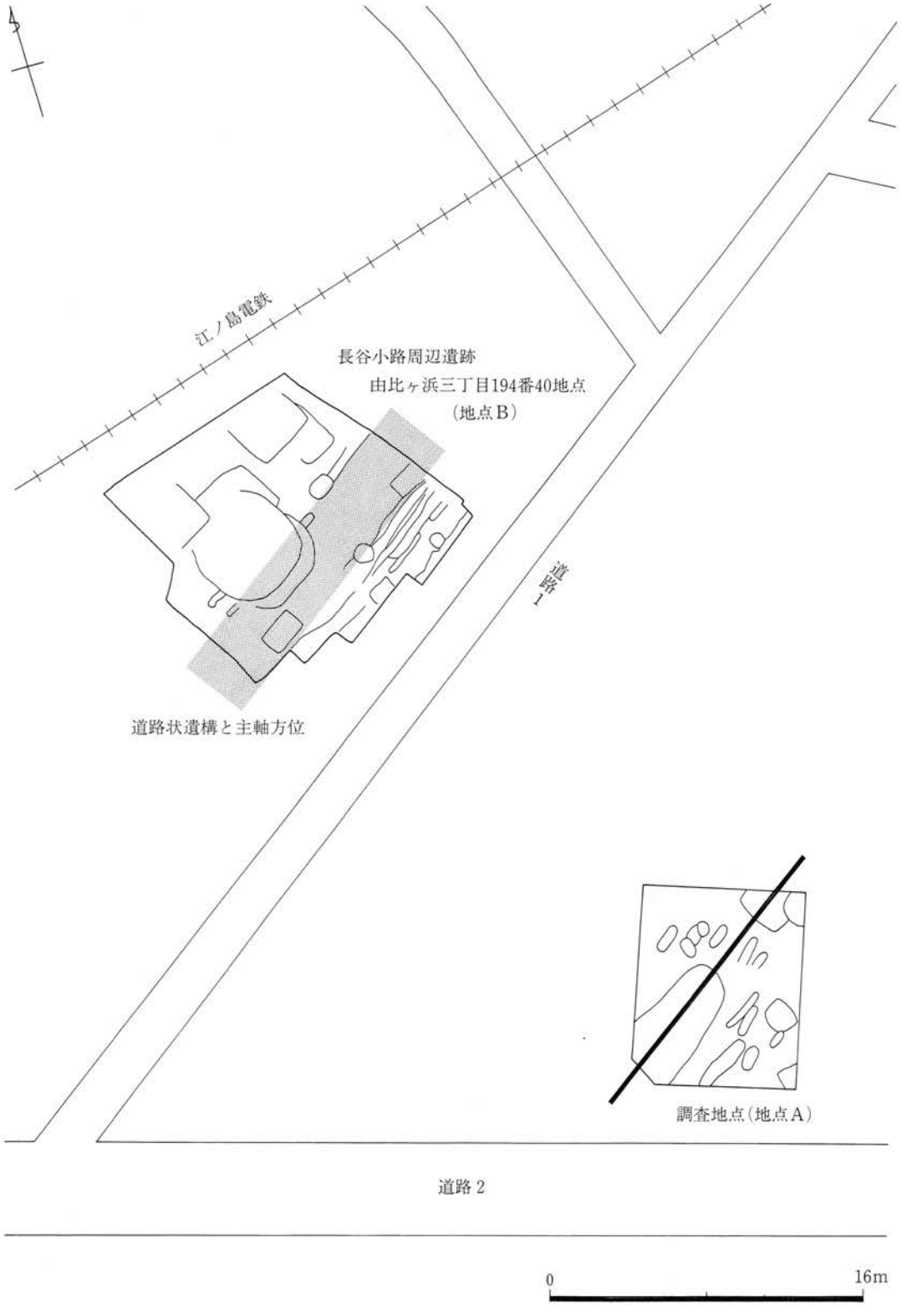

江ノ島電鉄
長谷小路周辺遺跡
由比ヶ浜三丁目194番40地点
（地点B）
道路1
道路状遺構と主軸方位
調査地点（地点A）
道路2
0
16m

図15　主軸方位対比図

番外地点（同一地点19）[3]で溝とされているものも、その多くは溝と呼ぶには無理があり、どうみても土壙というべきだろう。そして言うまでもなく、土壙による境界表示と溝による区画とは、意味が大きく異なる。前者が個別集団（または一族）の単独意思により成立するのに対し、後者は上位権力者の関与なくして成立しがたいからである。

また、道路によって区画されているという意見があるが[4]、人の生活が存在する以上、通路空間が形成されるのは当たり前の話である。もちろん、地点Bにみられるように大枠としての町割を示す道路が存在するのは言うまでもない。最近由比ケ浜中世集団墓地遺跡一由比ケ浜４－６－９地点で検出された道路（であるとして）にしても幅８mと異例に大きく、明らかに小区画を示すものではない。問題は、中心域に認められるような小区画が明瞭には示されていないことに尽きる。そしてそうであれば、主軸の移行は不規則で漸移的なものにならざるをえない。

ところで、とりとめもなく言えば、その移行は地点17の例に明らかなように、一遺構ごとではなく、遺構群の変化として把握できる。その指標が土壙などであることは否定しないが、ではこの場合の「群」とは何か。血族なのか、職能民集団なのか、行政単位なのか。つまり、ずれの問題からは「群」の成因と構成要素が課題として派生してくることが分かる。しかしこの点については、本地点の資料ではいかんともしがたく、いずれ別稿を期したい。

注目の遺構としては、猿の頭蓋骨が埋葬された土壙26がある。猿の飼育例は平安時代後期から増える。例えば馬小屋に繋がれたり、芸能の猿曳の猿としてである。本例がどのような性格のものであるか不明だが、もしこれが後者であれば、遍歴の芸能者の存在を示唆することとなり、前浜の性格づけにも大きな手掛かりとなるだろう。ただ残念なことに本資料は腐食がひどく、原型をとどめたまま採り上げることができなかった。

なお遺跡の存続年代については、出土遺物から13世紀後半～14世紀いっぱいと考えている。その理由は、包含層を別にして、遺構からは13世紀中葉以前および15世紀前半以降の遺物がほとんど出土しないからである。つまり当地点は鎌倉後期から南北朝期にかけてという、鎌倉が都市として最も栄えていた時期の遺跡であるということができる。

また残念ながら、ここでは地点Bにみられた、地震による液状化の痕は検出できなかった。

遺物

出土遺物の傾向については、計量による分析を試みた。方法と視点は次の通り。

・出土した中世遺物は基本的にすべて数えた。ただし貝類は除いた。なぜなら貝類の場合、食料残渣としての貝殻と、砂層に本来含まれている遺体としての貝殻との弁別が困難であるからだ。嗜食傾向をみるのに、両者の区別は不可欠である。海岸砂丘地帯の調査の際に免れないであろうこの問題については、目下検討中。

・点数はすべて破片数である（接合後）。したがって実際の個体数を反映するものではない。比較対照の指標としてみられたい。（→補論）

・百分率の表のうちには、全体でも非常に少ない点数によるものもある。破片数も併せて参照してほしい。

・土層は上・中・下の三層に分けた。図4の土層番号でいうと、上層が2・3番、中層が14・22番、下層が23・24番に相当する。

・年代は上層が14世紀後半～15世紀、中層が検出遺構の多くが含まれる13世紀後半～14世紀、下層が13世紀中葉以前と考えている。これらの層の性格をひと言でいえば、上層は鎌倉が衰えてから、中層は都市鎌倉の最盛期、下層は前浜がまだそれほど賑わっていなかった時期、ということができる。

・遺構出土遺物も層中に含めた。

・遺物分類は、大・中・小の三段階になっている。これをとりあえず「大分類」「中分類」「小分類」と呼ぶ。大分類は、例えば土師器・国産陶磁器・舶載陶磁器・土製品（土師器以外の土器を含む）・石製品・鉄製品といった具合に、主として材料によっている。中分類は、例えば土師器ならロクロ種（R種）・てづくね種（T種）といった成形技法により、国産陶磁器なら産地により、舶載陶磁器なら青磁・白磁・褐釉といった材質によっている（その他詳細は表参照）。小分類は必要に応じて、例えば常滑なら壺・甕・すり鉢といった器種もしくは機能により分けた。

さてまず大分類によって遺跡全体の傾向をみてみよう。遺物のほとんどが上・中層に集中しており、下層からは土師器以外ごく僅かしか出ていない。先に述べたように、下層は鎌倉時代前期以前に属しており、当地での人の往来が少なかったことを示している。ただ前浜にも、13世紀中葉以前の遺物が出る場所はいくつか確認されており、今後は「場」の差異を検討することが必要だろう。また、中層よりも上層で国産陶磁器の割合が増える傾向が窺える。その理由を大雑把に言うならば、都市的共食儀礼用の食器としての土師器の使用量が、都市鎌倉の衰微とともに次第に減少していったことが挙げられよう。なお遺跡全体では、土師器が68.68%、国産陶磁器が25.22%、舶載陶磁器が1.89%となっているが、この数値には残念ながらまだ比較材料がなく、現時点では何とも評価できない。

次に中分類を項目ごとにみていく。

土師器――ほとんどがR種である。これはT種の存続期に前浜が使われていなかったことを示すものに違いない。

国産陶磁器――常滑が圧倒的に多いのは確かであるが、大型器種を破片点数で数えた場合は見かけ上の数値が増えるので割り引かねばなるまい。いわゆる山茶碗窯系こね鉢も中層以降大量に出土している。瀬戸内の須恵器系陶器も定量流通していることが分かる。瀬戸は中層よりも上層で増えるが、一方山茶碗は中層のほうが多い。これらの傾向は先に記した層位の年代観とも矛盾しない。上層で渥美が出土しているのは混入であろう。

舶載陶磁器――全体の点数が少ないので、断定的に言うのは避けねばなるまいが、白磁と青白磁が

上層で減少する傾向にある。

石製品――砥石と硯が中層以降定量流通していることが看取できる。

さらに小分類をみてみたいが、ここでは百分率は常滑・瀬戸・青磁・白磁でしかおこなっていない。他は全体に数が少ないので試みなかった。常滑は甕が上層・中層とも90%を超えているが、これもまた見かけ上の比率であり、実際の個体数比はもっと少ないものと思われる。瀬戸はまんべんなく出ているが、調理具のおろし皿の比率がやや高い。青磁および白磁は少ない点数で行ったので評価は控えたい。

第2節　中世以前

当該期の資料は、先述のように遺構の検出はなく、中世層から採集した遺物のみにとどまる。年代的には、8世紀から10世紀まで含まれているが、この期間は今小路西遺跡（御成小学校内）の郡衙、および郡衙関連遺構の存続時期に一致する。今後は郡衙と周辺集落との関係が大きな課題になってくると思われる。この点で注意を要する遺物に鉈尾がある。石帯の部材は、鎌倉市内では丸鞆二例が出土している（今小路西遺跡[5]・宇津宮辻子幕府跡[6]）が、官吏の居住域を知る上で重要な資料になろう。

土器では類製塩土器が注目される。中世層からの出土であるため年代を知る手掛かりを欠くが、前出地点17（図1）出土の類品の年代からみて、概ね10世紀中～後半とみてよかろう。この土器は市内では海岸砂丘地帯から集中的に出土するが、使用形態については今後の課題である。

出土点数と百分率を出しておいたので、参考にされたい。

注

1．上本進二・大河内勉・寒川旭・山崎晴雄・佃栄吉・松島義章（1993）『第四紀研究』第32巻第1号

2．原広志他（1993）「1．由比ケ浜中世集団墓地遺跡　由比ケ浜二丁目1034番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　9』鎌倉市教育委員会

3．宗臺秀明他（1993）「3．長谷小路周辺遺跡　由比ケ浜三丁目229番外（No.236）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　9』鎌倉市教育委員会

4．斉木秀雄（1991）「『板壁掘立柱建物』の提唱」『中世都市研究』第1号　p.p.74

なお斉木氏はその後『佐助ケ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書』の中で、氏の批判に対する馬淵の反論（馬淵和雄（1993）「歴史時代研究の動向（中世）『日本考古学年報　44』）について「感情的」なる評言を用いて言及している。どこがそうなのか馬淵には全然分からないが、「感情的」であるかどうかについてはここでは書かない。この言葉が反批判を受けた側の常套句であり、正当であるべき議論を矮小化するものであるからである。これについてはいずれ別稿を期す。

5．宮田真他（1993）『今小路西遺跡（社会福祉センター用地・御成町625番2地点）』鎌倉市教育委員会

6．雪ノ下カトリック教会用地（継実氏の教示）

補論

計量分析はモンテリウス以来の方法であり、その意義についても頻繁に論じられているので、ここで詳しくは触れない。中世では小野正敏[1]・宇野隆夫氏[2]らの論考を参照されたい。

問題はその方法であるが、ここで破片数計算法を採用した理由を説明しておこう。

計量をする際に、個体数と破片点数とで大きく数値が異なるのはたびたび指摘されているとおりである。例えば甕1点と皿1点は個体数比で言えば1点対1点、つまり50%：50%になる。しかしこれが割れた場合、破片点数は個体の大きさに比例するだろう。仮に破片数で95点対5点に割れたとすると、見かけ上の比率は実態と全くかけ離れることになる。甕が2個体の場合は、実態では2対1（66.7%：33.3%）の比率が、破片点数では190対5、つまり97.4%：2.6%という途方もない差となって現れてしまうのである。そしておそらくこの差は、資料が多ければ多いほど大きくなるだろう。

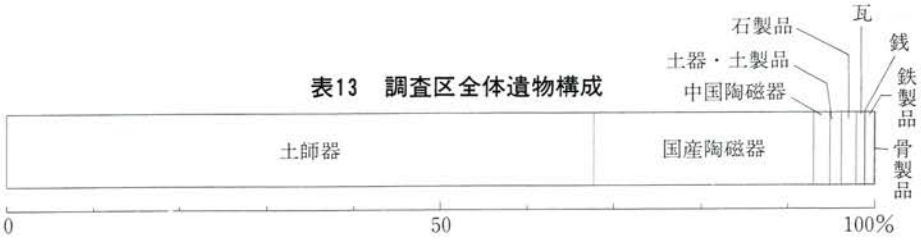
以上の通り、破片点数のみに頼ることには大きな陥穽があるのを認める。では、どうやればより実態に近い数字を得ることができるだろうか。宇野隆夫氏の提唱するように、口縁部計測法との併用によるのも確かに有効であろう。だが考えてみれば、口縁部の破片であろうと体部の破片であろうと、あるいは完形品であろうと1㎝の破片であろうと、接合する資料がなければそれのみでも1個体の存在を示すものであることに違いはない（小野正敏氏の言葉による）。とすれば、遺物整理に必須の作業である接合・復元を試みていさえすれば、破片数でもさほどの不都合は生じないのではあるまいか。

もちろん同一個体をそれと認識できないことはおおいにありうる。どころか常に免れないというのが実情であろう。しかし要は、どんな方法であれ数多くの研究者が同じ地平に立ち、同じ方法で計量すれば、実際の個体数の正確な反映でなくても、比較対照の指標として十分に有効であるという点にある。その点において、破片数計数法は最も簡単でなじみやすい方法であると思われる。もし、より詳細な個体数を知りたいのであれば、各人がそれぞれの方法で、そこに提出されている数値を自由に操作すればよいのである。

補論注

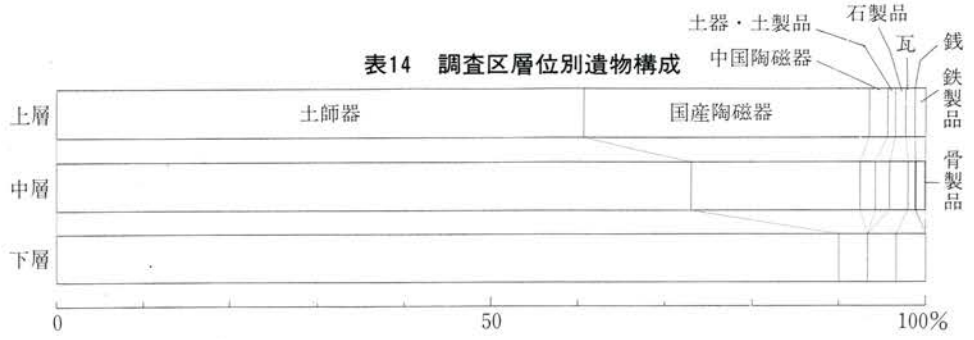
1．小野正敏（1984）「第4回貿易陶磁研究集会　その成果と課題」『貿易陶磁研究』No.4　貿易陶磁研究会
2．宇野隆夫（1992）「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集　国立歴史民俗博物館

表13　調査区全体遺物構成



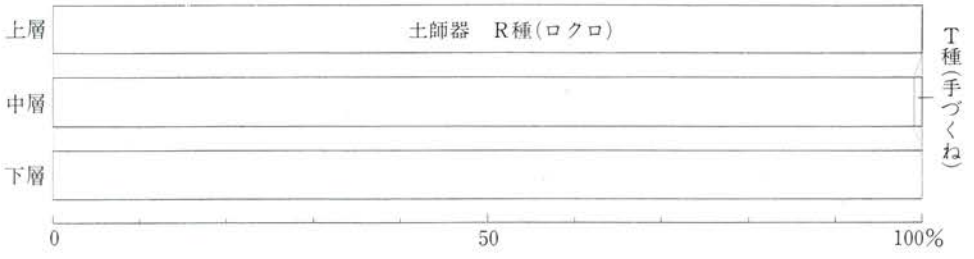
	土師器	国産陶磁	中国陶磁	土器・土製品	石製品	瓦	銭	鉄製品	骨製品	計
点　数	3727	1389	104	72	95	52	3	61	4	5507
百分率	67.68	25.22	1.89	1.31	1.73	0.94	0.05	1.11	0.07	100

表14　調査区層位別遺物構成



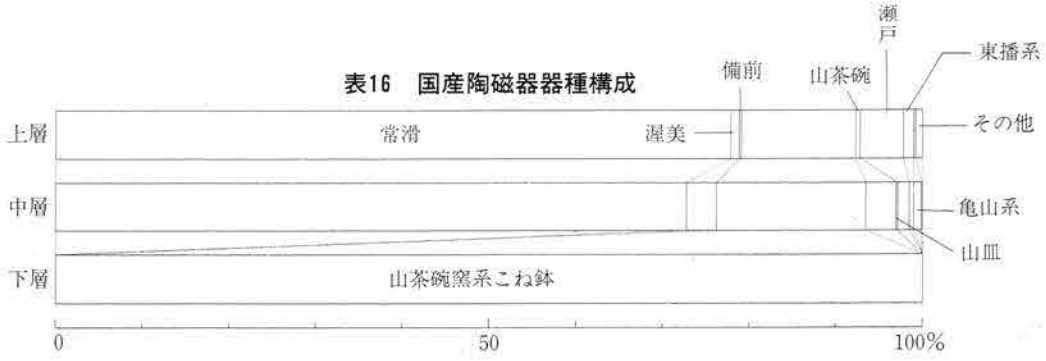
		土師器	国産陶磁	中国陶磁	土器・土製品	石製品	瓦	銭	鉄製品	骨製品	計
上層	点　数	1458	790	50	22	29	26	0	30	0	2405
	百分率	60.62	32.85	2.08	0.91	1.21	1.08	0.00	1.25	0.00	100
中層	点　数	2242	598	54	50	65	25	3	31	4	3072
	百分率	72.98	19.47	1.76	1.63	2.12	0.81	0.10	1.01	0.13	100
下層	点　数	27	1	0	0	1	1	0	0	0	30
	百分率	90.00	3.33	0.00	0.00	3.33	3.33	0.00	0.00	0.00	100

表15　土師器技法別構成



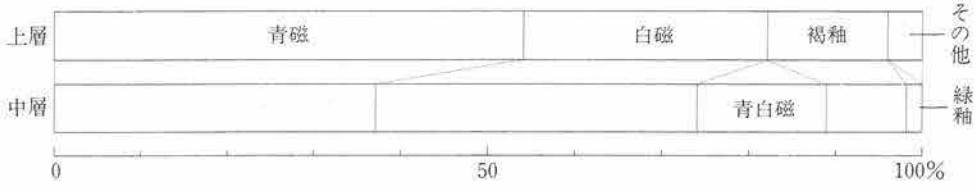
		R	T	その他	計
上層	点　数	1457	0	1	1458
	百分率	99.93	0.00	0.07	100
中層	点　数	2221	21	1	2243
	百分率	99.02	0.94	0.04	100
下層	点　数	27	0	0	27
	百分率	100.00	0.00	0.00	100

表16　国産陶磁器器種構成



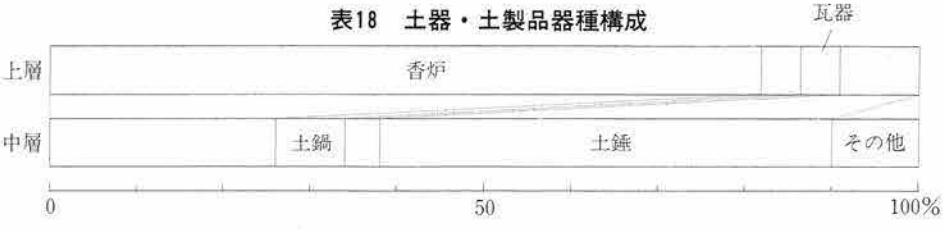
	常滑	渥美	備前	こね鉢	山茶碗	山皿	瀬戸	東播	亀山系	その他	計
上層	615	8	2	104	4	0	40	9	2	6	790
	77.85	1.01	0.25	13.16	0.51	0.00	5.06	1.14	0.25	0.76	100
中層	435	21	0	103	21	1	8	3	5	1	598
	72.74	3.51	0.00	17.22	3.51	0.17	1.34	0.50	0.84	0.17	100
下層	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	0.00	0.00	0.00	100	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100

表17　中国陶磁器器種構成



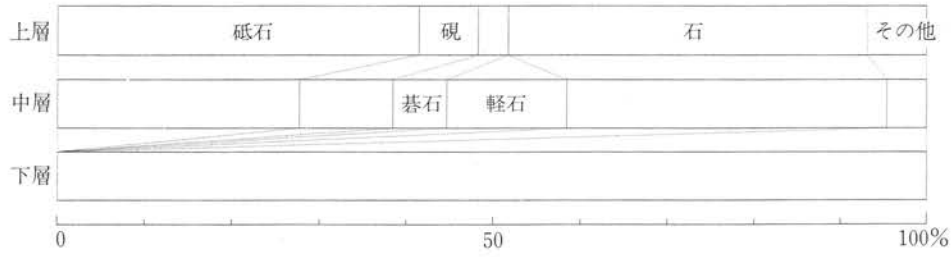
	青磁	白磁	青白磁	褐釉	緑釉	その他	計
上層	27	14	0	7	0	2	50
	54.00	28.00	0.00	14.00	0.00	4.00	100
中層	20	20	8	5	1	0	54
	37.04	37.04	14.81	9.26	1.85	0.00	100

表18　土器・土製品器種構成



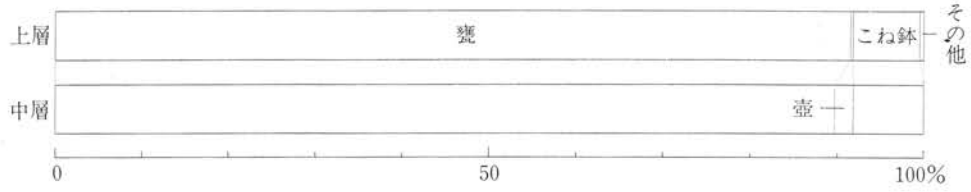
	香炉	土鍋	瓦器	土錘	その他	計
上層	18	1	1	2	0	22
	81.82	4.55	4.55	9.09	0.00	100
中層	13	4	2	26	5	50
	26.00	8.00	4.00	52.00	10.00	100

表19　石製品器種構成



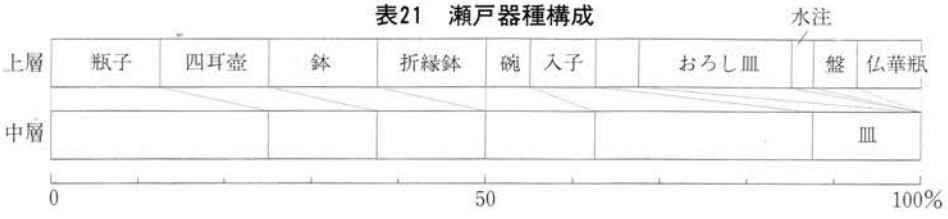
	砥石	硯	碁石	軽石	石	その他	計
上層	12	2	1	0	12	2	29
	41.38	6.90	3.45	0.00	41.38	6.90	100
中層	18	7	4	9	24	3	65
	27.69	10.77	6.15	13.85	36.92	4.62	100
下層	0	0	0	0	0	1	1
	0	0	0	0	0	100	100

表20　常滑器種構成



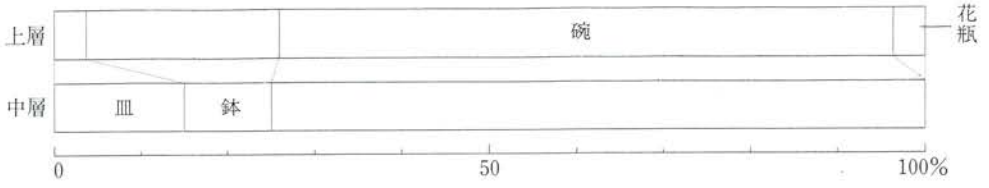
	甕	壺	こね鉢	その他	計
上層	562	2	48	3	615
	91.38	0.33	7.80	0.49	100
中層	373	7	27	5	412
	90.53	1.70	6.55	1.21	100

表21　瀬戸器種構成



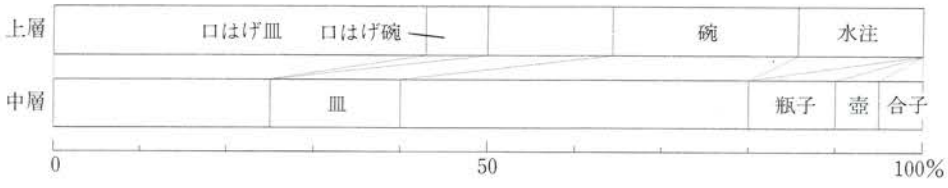
	瓶子	四耳壺	鉢	折縁鉢	碗	入子	皿	おろし皿	水注	場	仏華瓶	計
上層	5	5	5	5	2	3	2	7	1	2	3	40
	12.50	12.50	12.50	12.50	5.00	7.50	5.00	17.50	2.50	5.00	7.50	100
中層	2	1	1	0	1	2	1	0	0	0	0	8
	25.00	12.50	12.50	0.00	12.50	25.00	12.50	0.00	0.00	0.00	0.00	100

表22　青磁器種構成



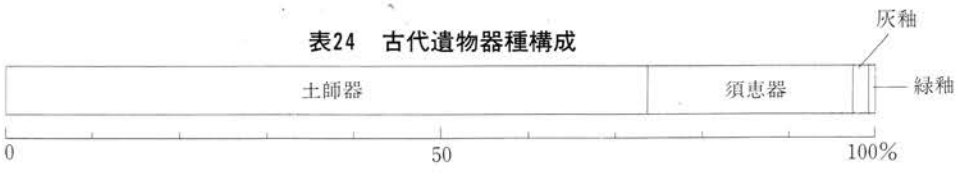
	皿	鉢	碗	花瓶	計
上層	1	6	19	1	27
	3.07	22.22	70.37	3.70	100
中層	3	2	15	0	20
	15.00	10.00	75.00	0.00	100

表23　白磁器種構成



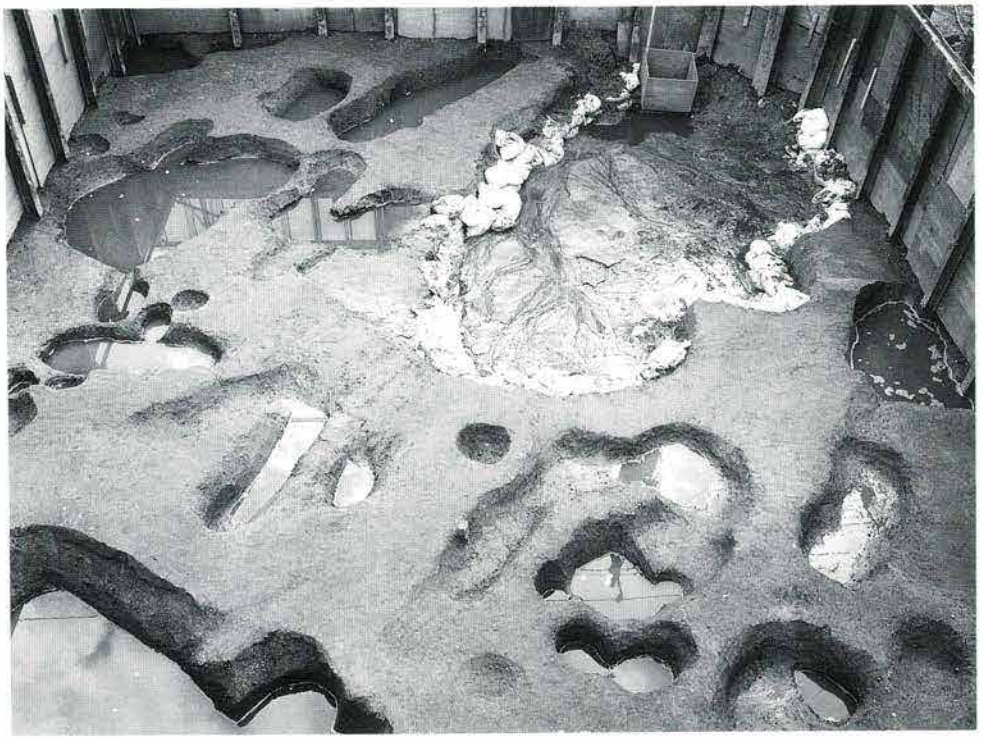
	口はげ皿	口はげ碗	皿	碗	水注	瓶子	壺	合子	計
上層	6	1	2	3	2	0	0	0	14
	42.86	7.14	14.29	21.43	14.29	0.00	0.00	0.00	100
中層	5	0	3	8	0	2	1	1	18
	25.00	0.00	15.00	40.00	0.00	10.00	5.00	5.00	100

表24　古代遺物器種構成

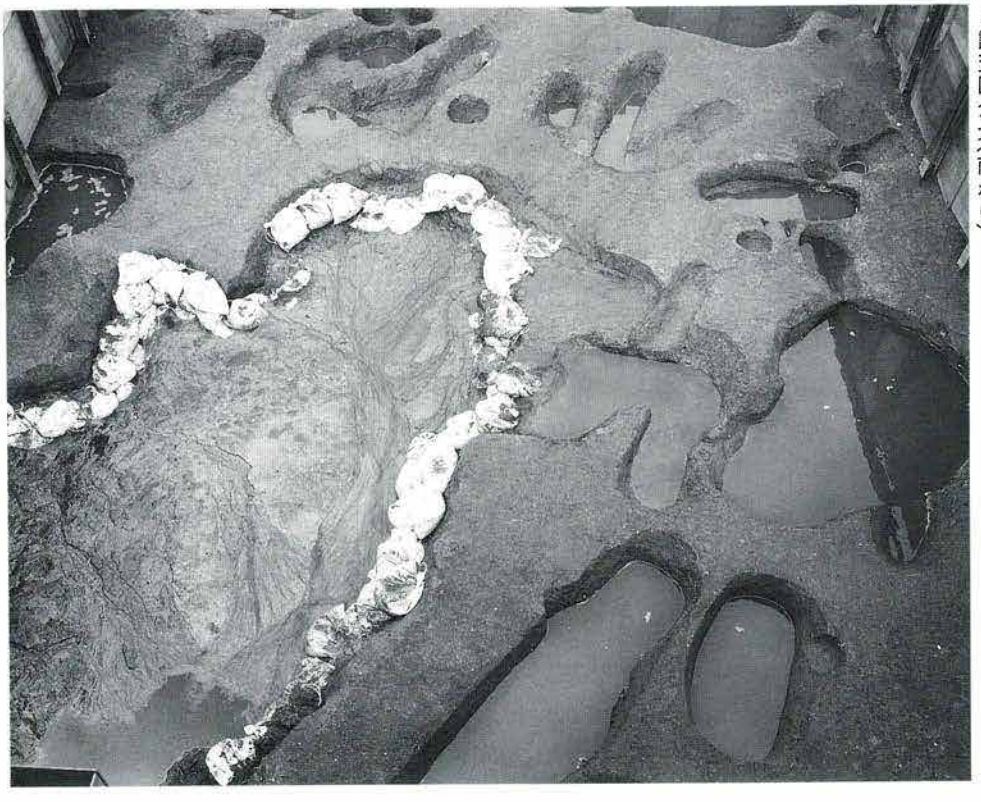


土師器	須恵器	灰釉	緑釉	計
1201	388	31	14	1634
73.50	23.74	1.89	0.85	100

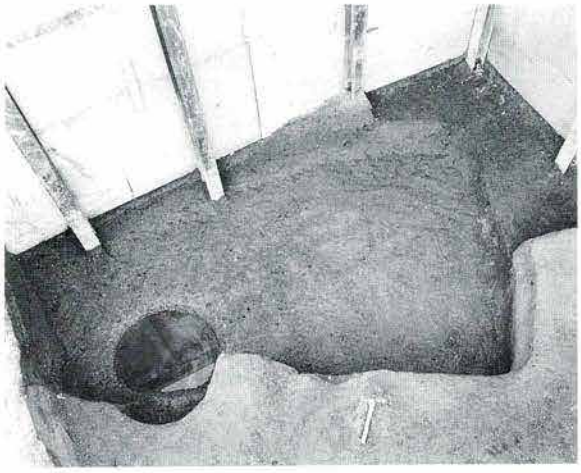
図版 1



◀調査区全景（北から）

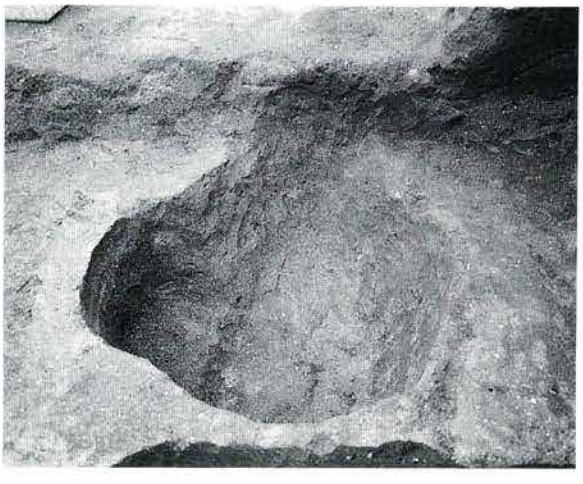


◀調査区全景（南から）



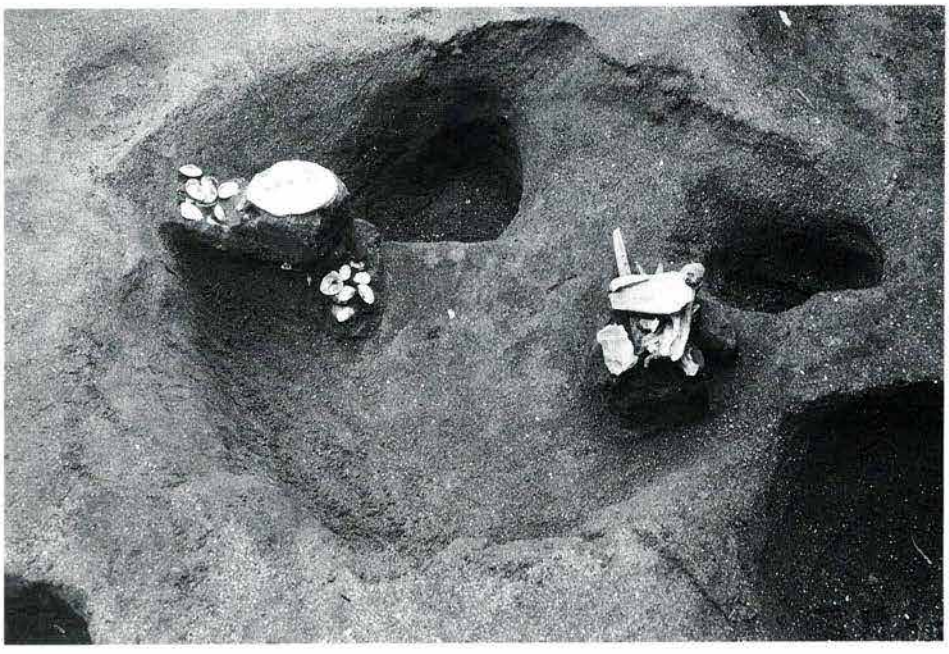
◀土壙 1 、 3 、 2 (南から)

◀土壙 2 (南から)

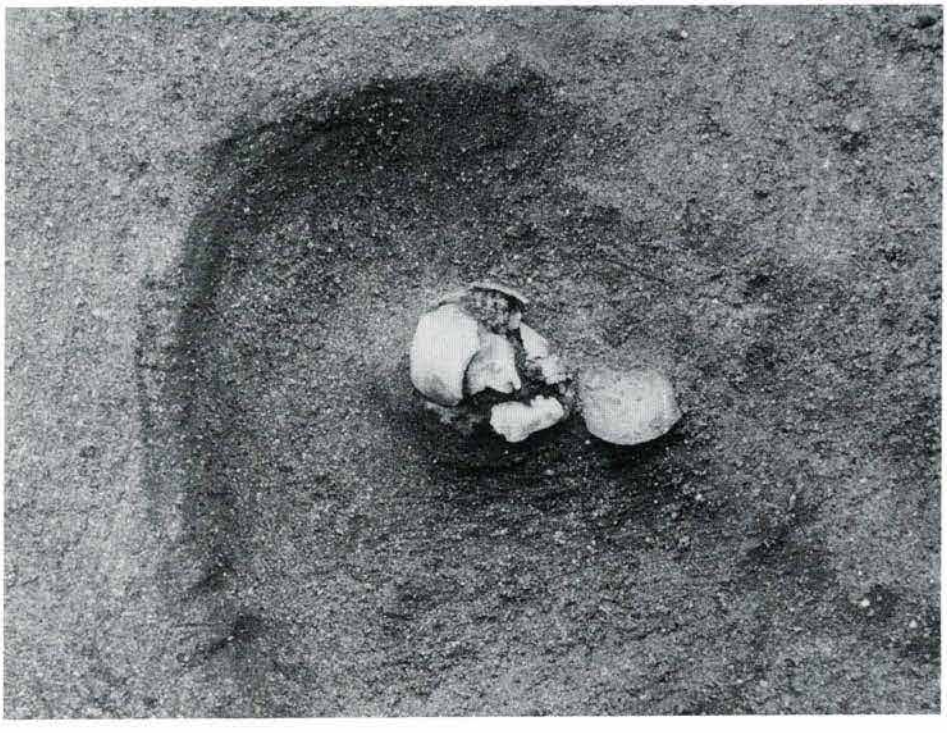


◀土壙 1 (東から)

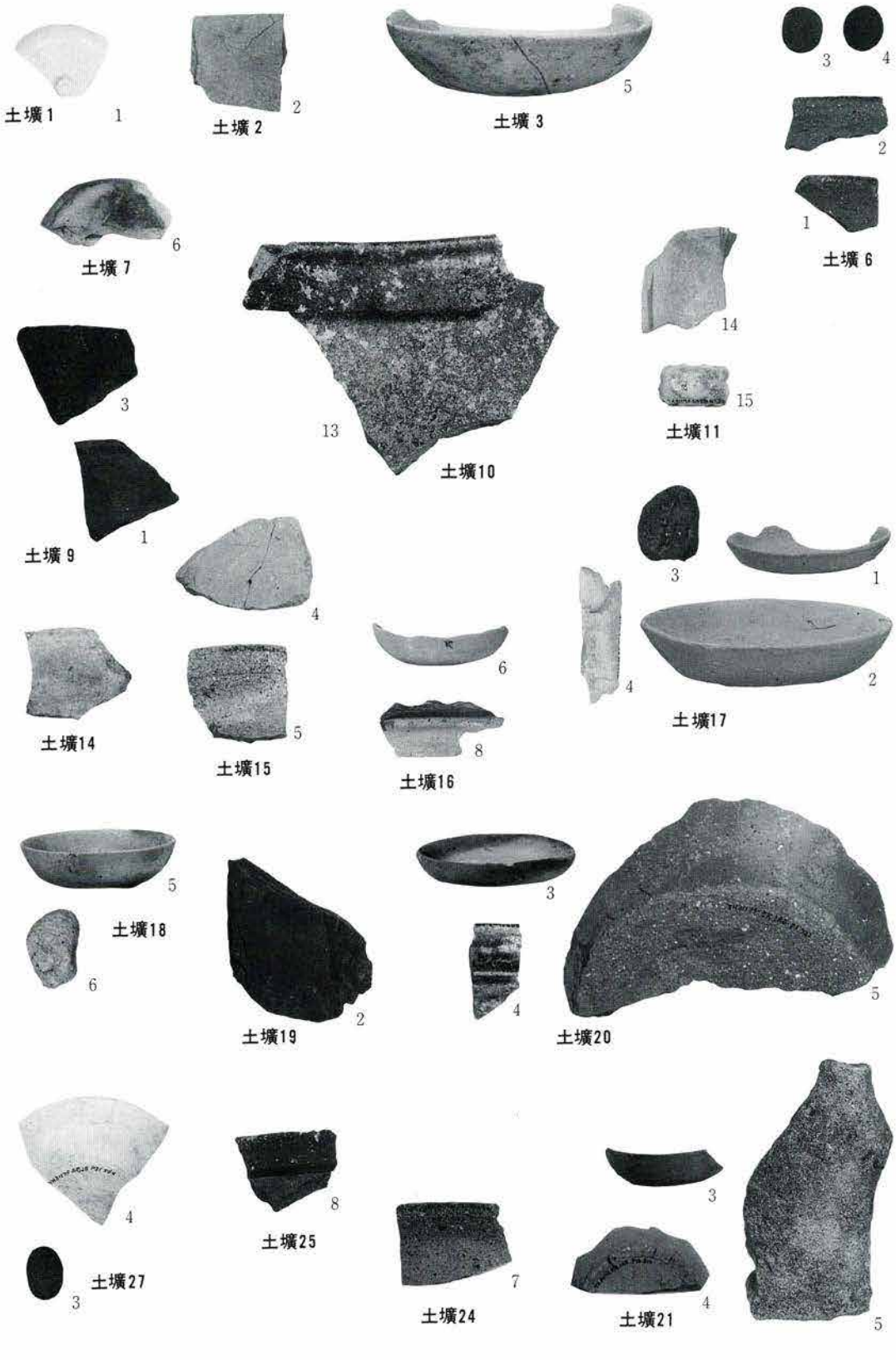
図版 3



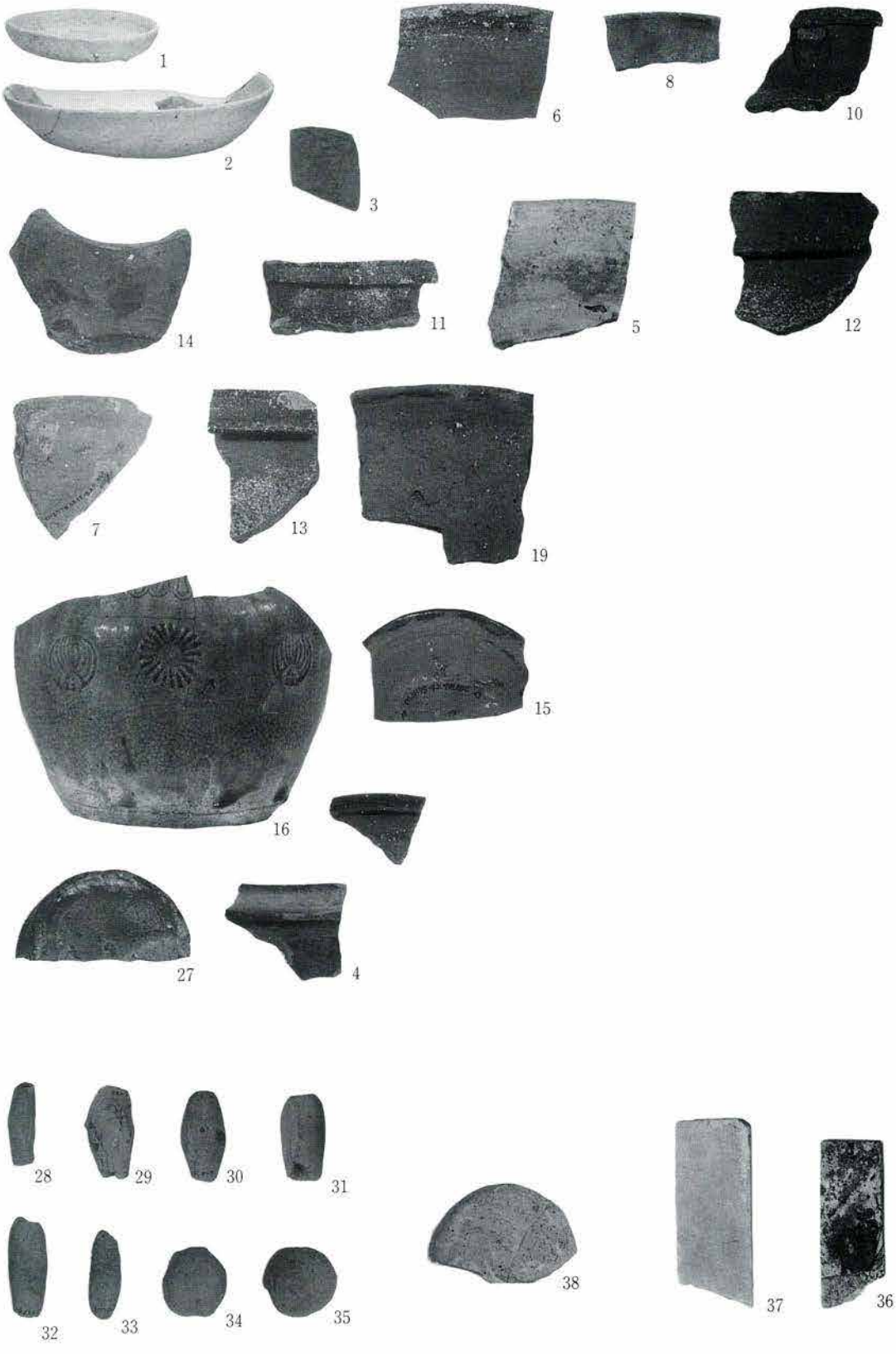
◀土壙19（東から）

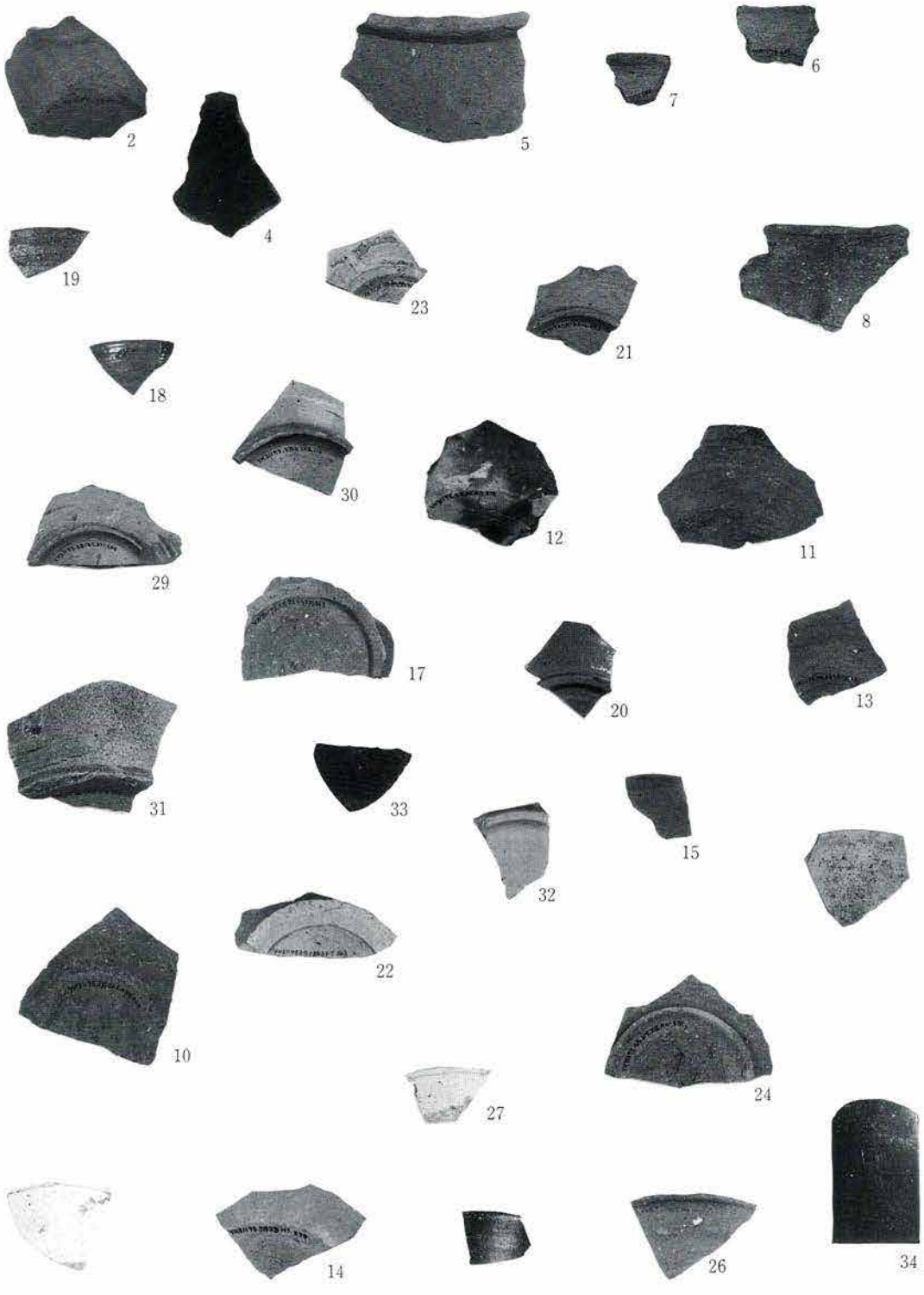


◀土壙26（西から）


土壙1
1
2
土壙2
5
土壙3
3
4
2
1
土壙6
6
土壙7
3
1
土壙9
13
土壙10
14
15
土壙11
4
土壙14
5
土壙15
6
8
土壙16
3
1
4
2
土壙17
5
土壙18
6
2
土壙19
3
4
5
土壙20
4
土壙25
3
土壙27
7
土壙24
3
4
土壙21
5

図版 5




2
5
6
7
4
19
23
8
21
18
30
12
11
29
17
20
13
31
33
15
32
22
10
24
27
14
26
34

6. 長谷観音堂（はせかんのんどう）周辺遺跡（No.296）

長谷三丁目41番イ地点

例　言

1．本報は鎌倉市長谷三丁目41番イ地点に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成４年９月25日から10月26日である。

3．本報の執筆、編集は瀬田哲夫が行った。又、検出遺構・出土遺物の実測、拓本、トレースには三上桂子の協力を得た。

4．第三章の第３節は㈱パレオ・ラボに依頼したものである。

5．本報に使用した写真は遺構、遺物ともに瀬田が撮影した。

6．調査体制

調　査　員　瀬田哲夫

調査補助員　滝田薫、安達澄代、三上桂子

作　業　員　菅野五郎、香川尚美、高井富三、茂木正浩（以上、鎌倉市高齢者事業団）。

7．発掘調査、及び、報告書作製にあたり次の諸氏に御協力、御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

金子浩昌（早稲田大学講師）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、佐久間貴士（大阪府埋蔵文化財協会）、菊川英政、大河内勉、馬淵和雄、園部雅之、汐見一夫（鎌倉考古学研究所）

8．本遺跡に関する発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本 文 目 次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……111
第二章　調査の経過と堆積土層 ……114
　第１節　調査の経過 ……114
　第２節　堆積土層 ……114
第三章　検出された遺構と出土した遺物 ……117
　第１節　中世の遺構と出土遺物 ……117
　　Ⅰ．確認面出土遺物 ……118
　　Ⅱ．柱穴 ……119
　　Ⅲ．柱穴出土遺物 ……119
　　Ⅳ．柱穴列 ……125
　　(1)　Ａ－Ｂ柱穴列 ……126
　　(2)　Ｃ－Ｄ柱穴列 ……126
　　(3)　Ｅ－Ｆ柱穴列 ……126
　　Ⅴ．土壙 ……126
　　Ⅵ．溝 ……128
　　(1)　溝１ ……128
　　(2)　溝２ ……128
　　Ⅶ．礎石 ……129
　第２節　中世以前の遺構と出土遺物 ……130
　　Ⅰ．古代遺構１ ……130
　　Ⅱ．古代遺構２ ……132
　　Ⅲ．古代遺構３ ……133
　　Ⅳ．トレンチ調査 ……136
　第３節　本地点における火山灰質堆積物について ……137
第四章　まとめと考察 ……141

表 目 次

表１　柱穴一覧表(1) ……120
表２　柱穴一覧表(2) ……121
表３　柱穴一覧表(3) ……122
表４　柱穴一覧表(4) ……123
表５　堆積物の含有率および砂粒分の粒度組成 ……139
表６　砂粒堆積物の各粒度別の粒子組成 ……139

挿 図 目 次

Fig. 1　調査地点、及び周辺の遺跡 ……112
Fig. 2　グリット割付図 ……115
Fig. 3　堆積土層図 ……116
Fig. 4　遺構全体図（中世）……117
Fig. 5　確認面出土遺物 ……118
Fig. 6　柱穴出土遺物 ……124
Fig. 7　柱穴列 ……125
Fig. 8　土壙 ……127
Fig. 9　土壙出土遺物 ……127
Fig.10　溝（溝１、溝２）……129
Fig.11　礎石 ……129
Fig.12　遺構全体図（中世以前）……130
Fig.13　古代遺構１ ……131
Fig.14　古代遺構１出土遺物 ……132
Fig.15　古代遺構２ ……133
Fig.16　古代遺構３ ……134
Fig.17　古代遺構３出土遺物 ……135
Fig.18　トレンチ設定図 ……136
Fig.19　調査区南壁土層図 ……137
Fig.20　遺構変遷概念図 ……141
Fig.21　中世遺物組成 ……142
Fig.22　弥生時代、古墳時代の遺物 ……143
Fig.23　奈良・平安時代、
　　中世、近世の遺物 ……144

写真図版目次

PL. 1-1　長谷寺総門から参道を臨む。…146
　1-2　長谷交差点から参道、総門を望む。……146
PL. 2-1　遺構確認状況（西から）……147
　2-2　遺構確認状況（東から）……147
PL. 3-1　中世遺構全景（西から）……148
　3-2　中世遺構全景（東から）……148
PL. 4-1　土壙（西から）……149
　4-2　土壙（南から）……149
PL. 5-1　土壙東西セクション（南から）…150
　5-2　土壙南北セクション（西から）…150
PL. 6-1　溝２（南西から）……151
　6-2　溝２東西セクション（南から）…151
PL. 7-1　古代遺構１、掘り下げ状況スナップ……152
　7-2　古代遺構１（東から）……152
PL. 8-1　古代遺構１東西セクション（南から）……153
　8-2　古代遺構１南北セクション（東から）……153
PL. 9-1　古代遺構３土師器検出時（南から）……154
　9-2　古代遺構３土師器出土状況（西から）…154
PL.10-1　古代遺構３高坏出土状況（西から）……155
　10-2　同上、台付甕、軽石（北から）…155
PL.11-1　古代遺構３完掘状況（南から）……156
　11-2　中世以前遺構全景（東から）…156
PL.12-1　調査区北壁セクション（部分）…157
　12-2　調査区南壁セクション（部分）…157
PL.13-1　確認面出土遺物 ……158
　13-2　柱穴出土遺物 ……158
PL.14-1　土壙出土遺物 ……159
　14-2　古代遺構１出土遺物 ……159
PL.15　古代遺構３出土遺物 ……160
PL.16-1　トレンチ出土遺物（凝灰質泥岩）……161
　16-2　トレンチ出土遺物（マガキ）…161
PL.17　堆積物の実体顕微鏡写真 ……162

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 (Fig. 1)

本調査地点は長谷寺正面区域の参道入り口付近、鎌倉市長谷三丁目41番イに所在する。神奈川県遺跡台帳には「長谷観音堂周辺遺跡（No.296）」として記載されている。鎌倉旧市街地の南西部に位置し、ＪＲ鎌倉駅から西へ約1.5km、南へ約1.0km、由比ケ浜から北へ約400mの距離にある。

中世におけるこの地は、所謂「鎌倉七口」のうち極楽寺、大仏坂の両切通しを抜けた道が長谷小路（大町大路）と合流する交通の要所であった。この長谷小路をはさんだ北側の山沿い地域は「甘縄」と呼ばれ、甘縄神明社、長楽寺、万寿寺などの社寺の他に安達一族の屋敷をはじめ、多くの御家人や被官がその居宅を構えた場所である。南側は由比ケ浜とその背後に広がる砂丘地帯であり、また、滑川河口西岸の砂丘は「由比ケ浜中世集団墓地遺跡」と称される区域である。この地域一帯は「前浜」と呼称され、その支配権は和賀江島を含め忍性以来、極楽寺長老に与えられている。また、『新田義貞証判・市村王石丸軍忠状』には「前濱一向堂」と記載されているが、その位置については不明である。本調査地点を大仏坂の切通しに向かい北上すると、東に開口する谷戸があり、忍性が社会事業の一環として設けた桑ケ谷療病院跡と伝えられる。さらに北上すると国宝銅像阿弥陀如来坐像（大仏）を擁する高徳院が位置する。『吾妻鏡』の記載には「相模国深沢里大仏」とみえ、この地が当時、深沢と呼ばれていたことがわかる。

長谷寺は浄土宗。海光山慈照院長谷寺と号する。もと光明寺末。開山徳道、開基は藤原房前と伝える。天平八年（736）の草創と伝えるが、現存する資料では文永元年（1264）七月十五日の銘を有する新長谷寺の梵鐘が最古のものであり、鎌倉時代の末期には成立していたものと考えられている。本尊は木造の仏像としては日本最大という十一面観世音菩薩である。長谷寺には弘長二年（1262）、徳治三年（1308）の板碑をはじめ、嘉暦元年（1326）、元徳二年（1330）の紀年銘を有する懸仏、応永廿年（1413）の銘を有する鰐口など、当時の信仰に関する多くの遺品が伝世している。観音霊場坂東三十三箇所の第四番札所であり、現在も一年を通して参詣者が絶えない。「長谷」、「長谷寺」、「長谷小路」という名称は『吾妻鏡』には見られない。長谷寺が人々に厚く信仰されることにより、この寺名からおきたものと考えられる。

本遺跡区域における発掘調査は、長谷寺の旧阿弥陀堂裏において防災工事時に発見された「やぐら様の遺構」の緊急調査と、観音堂新築に係わる２件のみである（地点２）。[1),2)] 銅製懸仏、納骨壷等を出土し、いずれも中世の長谷寺における埋葬・信仰に関する貴重な資料を得ている。

ここで、周辺地域で実施された調査について簡単に触れておく。長谷郵便局地点（地点３）[3)] では井戸、土壙、溝、ピット等を検出し「14世紀前半代」の時期を想定している。高徳院周辺遺跡群では３箇所で調査が行われている。地点４[4)] では丘陵裾部の段上と、その下に広がる段下の平坦地より検出された遺構群から「一段高い平場に葬送の場をもつ寺院址の一部」を想定され、13世紀末から14世紀前半」の年代を与えている。地点５[5)] は急傾斜地崩壊対策事業に伴う調査であり、玄室と

1．長谷三丁目41番イ地点（本調査地点）
2．長谷寺境内遺跡
3．長谷一丁目284番１地点
4．長谷一丁目390番１地点
5．高徳院周辺遺跡（長谷五丁目「やぐら」）
6．長谷四丁目541番１他地点
7．長谷三丁目630番１、17地点
8．長谷三丁目629番20他地点
9．長谷一丁目271番10地点
10．長谷一丁目236番１地点
11．長谷一丁目277番地点
12．長谷二丁目252番１地点
13．由比ヶ浜南遺跡
14．由比ヶ浜三丁目202番２外地点
15．調査中（1993年12月現在）

Fig. 1　調査地点、及び周辺の遺跡

羨道により構成される大型やぐらを検出している。地点6[6]では土丹（破砕泥岩）敷き、井戸、及び、鎌倉石（凝灰岩切石）により構築された溝を検出し、14～15世紀の年代を想定している。桑ケ谷療病院跡では地点7、8[7),8)]において「13世紀後半から14世紀前半」にかけて行われた谷戸開発に係わる地業を検出している。これは谷戸内全体を石垣により構築される平場が雛壇状に展開するものである。長谷交差点から下馬四ツ角に向かう国道134号（長谷小路）の北側では、甘縄神社遺跡群（地点9[9)]）、伝安達泰盛邸跡（地点10、11[10),11)]）の調査が行われ、概ね14世紀代の掘立柱建物、木組み遺構等を検出している。また、長谷小路の南側では地点12、13、14[12),13),14)]等において調査が行われている。これらは長谷小路周辺遺跡群、由比ケ浜南遺跡と称されている。建物遺構の主体は方形竪穴建築址であり集中して検出されている。また、骨角製品の未製品や、鍛冶・鋳造関係の遺物が多く出土しており、職能集団、及び、工房の存在が推測される地域である。

中世以前におけるこの地は稲村ケ崎の先端から御霊神社(権五郎社)、甘縄神明社、元八幡付近をぬけ、逗子、三浦方面へと通じる古東海道の道筋にあたり、交通の要所であったことと考えられる。稲瀬川（水無瀬川）は『万葉集』に詠まれ、和田塚あたりには人物埴輪を出土した妾女塚を含む「下向原古墳群」が明治頃まで存在していたという。

甘縄神明社の正面区域に所在する地点9、10、11の調査では、弥生中期以降の遺物が出土しており、奈良・平安時代のものが主体となるようである。[15)]地点11では古墳時代後期（？）の竪穴住居址が一棟確認されているらしいが正式な報告はされていない。長谷小路周辺遺跡群からは奈良・平安時代の遺物が広範囲にわたり出土しており、該期の竪穴住居址等が検出されている。地点14では古墳時代初頭（五領期）と考えられている祭祀遺構を検出している。[16)]

《註》

1）松尾宣方他 「21.長谷寺境内」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』 鎌倉市教育委員会 1983。
2）服部清道他 『海光山慈照院長谷寺』 長谷寺観音堂改築工事出土文化財調査団 鎌倉長谷寺 1985。
3）玉林美男 「5.長谷小路周辺遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4』 鎌倉市教育委員会 1988。
4）斉木秀雄他 『長谷一丁目290－1地点遺跡』 高徳院周辺遺跡発掘調査団 1990。
5）田代郁夫他 『高徳院周辺遺跡（やぐら）発掘調査報告書』 同遺跡発掘調査団 1986。
6）報告書未刊。調査担当の田代郁夫氏より御教示頂いた。
7）田代郁夫他 「10.桑ケ谷療病院跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』 鎌倉市教育委員会 1990。
木村美代治他 「11.桑ケ谷療病院跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』 鎌倉市教育委員会 1990。
8）継実 「桑ケ谷療病院遺跡の調査」『鎌倉考古No.20』 鎌倉考古学研究所 1991。
9）木村美代治 「甘縄神社遺跡群の調査」『鎌倉考古 No.25』 鎌倉考古学研究所 1993。
10）報告書未刊。調査担当の福田誠氏より御教示頂いた。
11）松尾宣方他 「43.伝安達泰盛邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』 鎌倉市教育委員会 1983。
12）菊川英政 「1.長谷小路周辺遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』 鎌倉市教育委員会 1990。
13）報告書未刊。調査担当の斉木秀雄氏より御教示頂いた。
14）斉木秀雄他 『長谷小路南遺跡』 長谷小路南遺跡発掘調査団 1992。
15）菊川英政 「諸戸邸内遺跡出土の土器概要」『鎌倉考古 No.22』 鎌倉考古学研究所 1992。
地点9、10については福田誠、木村美代治両氏より御教示頂いた。
16）菊川英政 「第3節 中世以前の遺構と遺物」『長谷小路南遺跡』 同遺跡発掘調査団 1992。

第二章　調査の経過と堆積土層

第1節　調査の経過（Fig. 2）

本地点の調査は自己用店舗改築に係わる約100㎡の敷地を対象とする国庫補助事業調査である。平成4年4月に事前相談があり、掘削深度が1.0mをこえる基礎工事を伴う計画であるために、4月23日に鎌倉市教育委員会による試掘調査が実施され、中世、及び、中世以前の遺構面が確認された。本調査は同年9月25日に開始された。試掘調査の結果を踏まえ、現地表から約40cmは近・現代の客土と判断され重機によりこれを除去し、以下は人力により掘削を行った。現地表下50cm程で暗褐色砂、もしくは同砂に黄色砂を混入する層を検出し、この上面（海抜5.4m前後）において遺構のプラン確認を行った。中世、及び、中世以前の遺構はこの同一面で確認されており、各遺構の掘り込みレベルは後世の撹乱により削平を受けていることが判明した。

中世、中世以前の遺構の調査終了後、調査区内に数本のトレンチを設定し、掘削深度規定である現地表下1.2mまでの土層観察を行い、9月26日に機材の撤収をもって現地調査を終了した。

調査にあたり、敷地を区画する地境をA、Bと仮称し、地境Aと地境Bとを結んだ直線を南北基準軸とし、地境Aから北へ6.0m、西へ5.0mの地点をC－4グリット・ポイントとした。東西軸には西から東へ向けて算用数字（1～6）を、南北軸には北から南へ向けてアルファベット（A～E）を付し、調査対象の敷地内に2.0mの方眼を設定した。それぞれの方眼区画の名称には、その北西角の軸線交点を使用した。尚、このグリット南北軸は磁北に対して4°23′西に傾き、現在の長谷寺参道とほぼ直交の関係にある。

遺跡の位置を国土座標軸上に載せるために地境A、Bと鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市4級基準点との位置関係を示したものがFig. 2である。調査地点付近にはF001（X軸：－76554.255、Y軸：－26815.042）、F048（X軸：－76563.308、Y軸：－26839.402）の2つの4級基準点が確認された。鎌倉市道路管理課が設置した［004］ポイントを中心に、この点とF001とを結んだ直線を基準とし、各点との距離と、時計回りに角度を測ることとした。測定値は表にして示した。

第2節　堆積土層（Fig. 3）

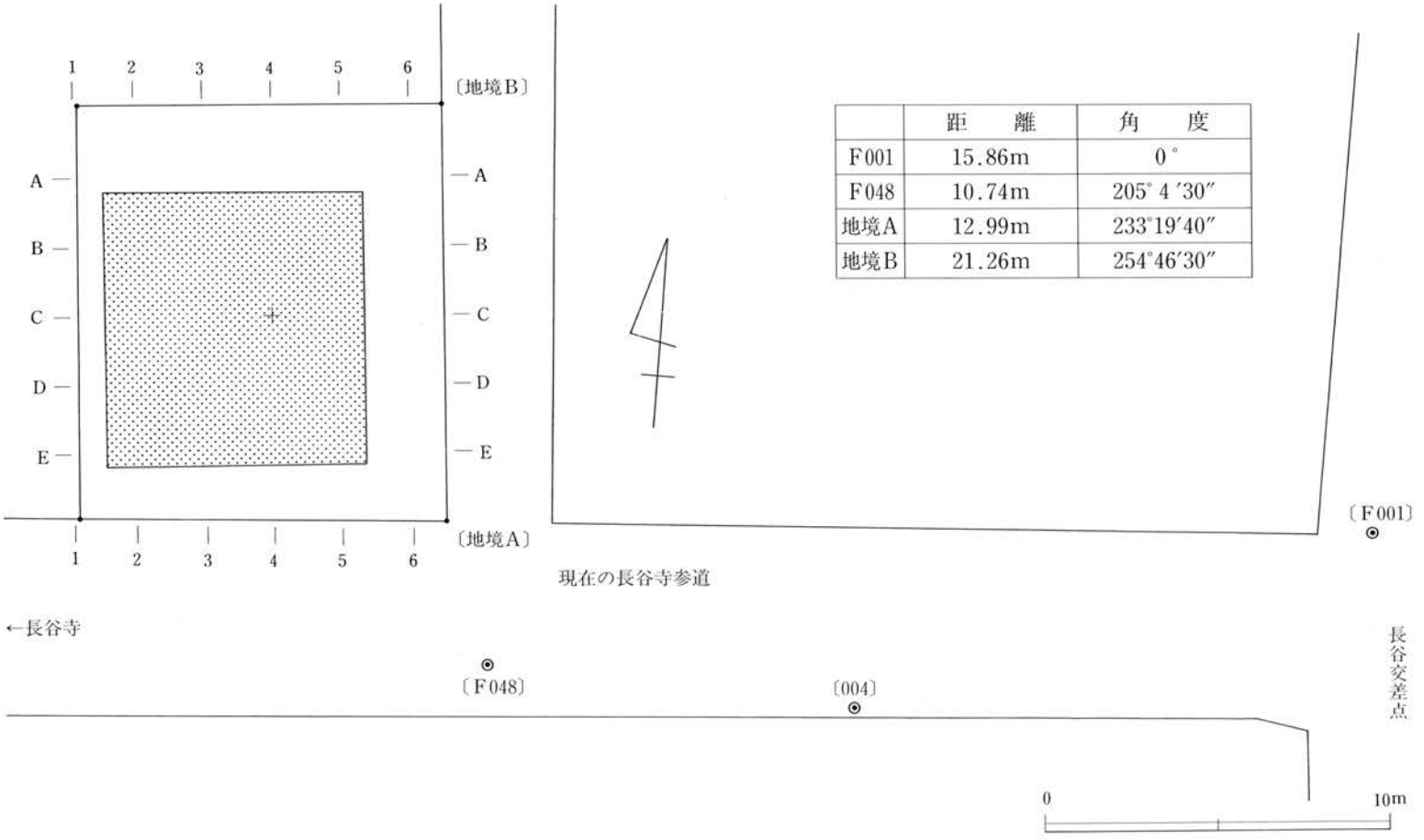
本調査地点における堆積土は、以下に挙げる11層に分けることができる。

第1層：表土。近・現代の客土。玉砂利・ガラスを含む。

第2層：暗褐色砂。

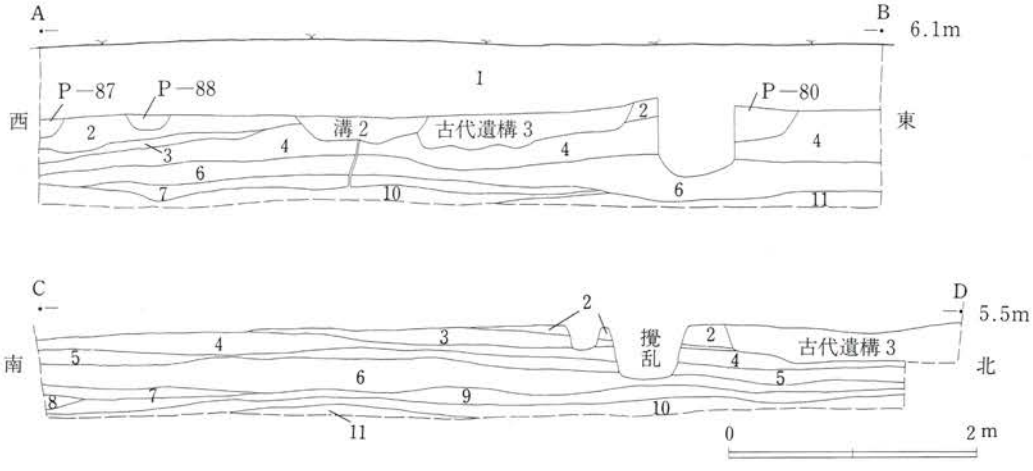
第3層：暗褐色砂。灰黄色砂を混入する。

第4層：灰黄色砂。しまり良好。



	距　離	角　度
F001	15.86m	0°
F048	10.74m	205° 4′30″
地境A	12.99m	233°19′40″
地境B	21.26m	254°46′30″

Fig. 2　グリット割付図



1．表土。
2．暗褐色砂。
3．暗褐色砂。灰黄色砂混入。
4．灰黄色砂。
5．淡赤褐色砂。
6．灰黄色砂。しまり良好。上面は鉄分を含み硬化。
7．暗灰黄色砂。
8．火山灰。
9．暗灰黄色砂。
10．暗灰黄色砂。細粒。
11．灰黒色粗砂。上面は鉄分を含み硬化。

Fig. 3　堆積土層図

第５層：淡赤褐色砂。

第６層：灰黄色砂。しまり良好。上面は鉄分を含み硬化している。

第７層：暗灰黄色砂。

第８層：火山灰。

第９層：暗灰黄色砂。

第10層：暗灰黄色砂。細粒。

第11層：灰黒色粗砂。上面は鉄分を含み硬化している。

各堆積層は東から西、南から北へと緩やかに傾斜している。ガラスや玉砂利を含む第１層を除去すると第２、３、４層を検出する。この表土層を除去した段階で中世、及び、中世以前の遺構プランを確認している。第２層以下は自然堆積層と考えられる。第６、７層からは扁平で表面が磨滅した凝灰質泥岩を30数点採集している。さらに、第８層から検出された火山灰等の分析結果から、一次堆積したものだけではなく、流水等により侵食され移動し、再堆積したものと考えられている。このことについては後章において分析結果を掲載しているので参照されたい。以上のことから、人手が加えられる以前のこの地は川（稲瀬川）の氾濫源であったことと考えられる。また、調査区北壁では第10層を構成する暗灰黄色細粒砂が、上層に堆積する第４、６、７層を貫通し、溝２の覆土に達している。確証はないが、これは第10層の砂層内において地震による液状化現象が発生し、噴砂が上昇したものと考えられる。砂脈（噴砂の割れ口）の幅は３cm程である。噴砂の上限は溝２により削平されており、溝２構築以前に発生したものと考えられる。

第三章　検出された遺構と出土した遺物

第１節　中世の遺構と出土遺物（Fig. 4）

本節では検出された遺構のうち中世に属するものについて説明を加える。検出遺構は柱穴：105口、土壙：１基、溝：２条である。以下、確認面出土遺物、柱穴、柱穴列、土壙、溝の順に説明を加えていくが、柱穴ナンバーは遺構プランの確認時に付したものであり、近・現代の所産である撹乱をも含んでいる。このため撹乱は全体図では破線で示し、ナンバーは除外している。

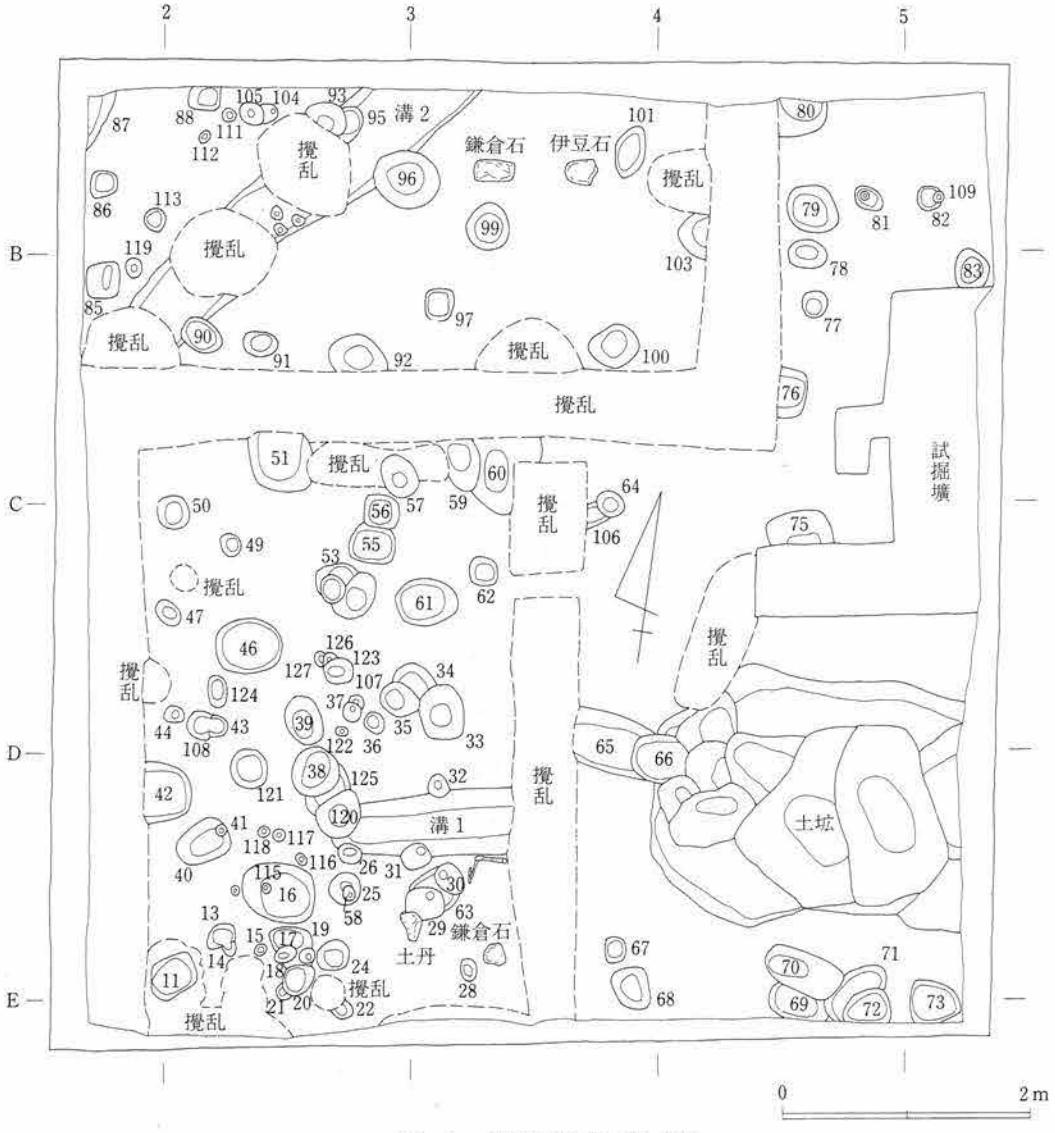


Fig. 4　遺構全体図（中世）

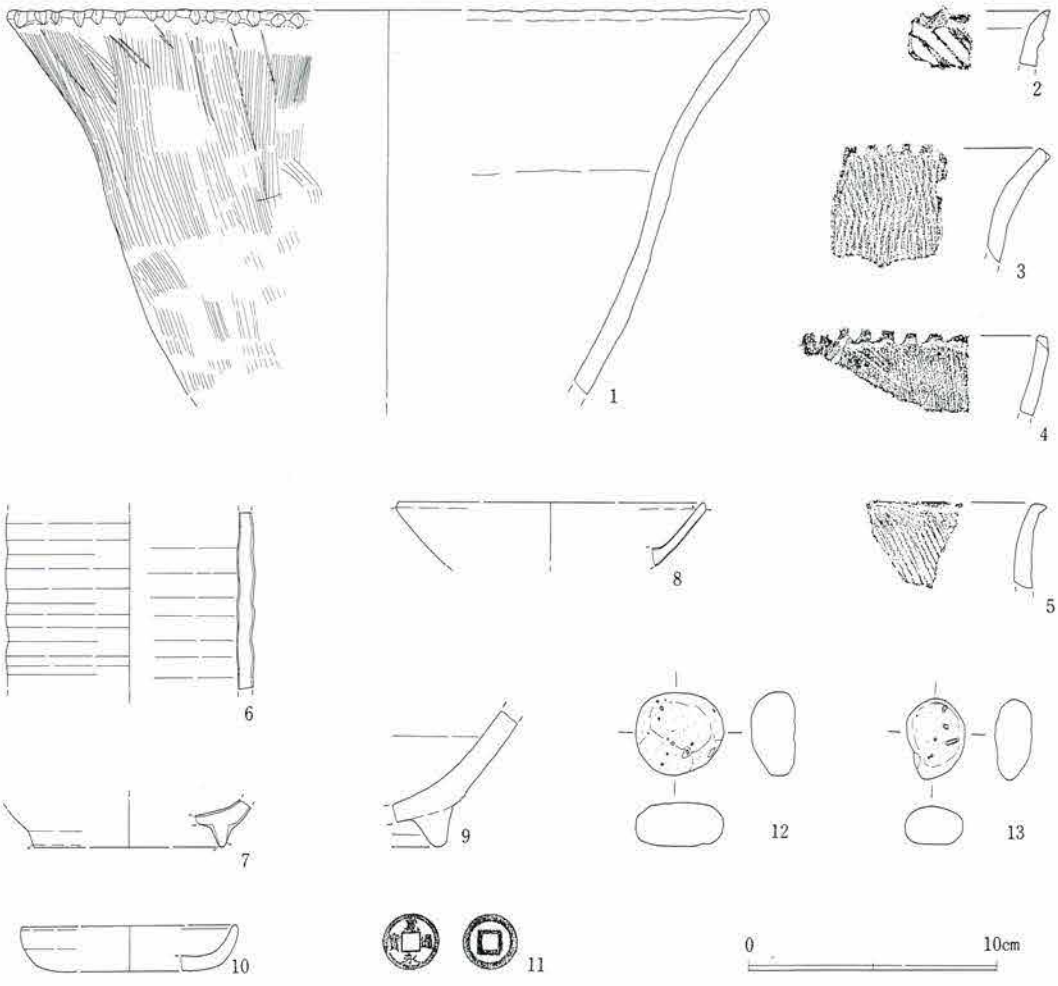


Fig. 5　確認面出土遺物

Ⅰ．確認面出土遺物（Fig. 5）

表土から遺構確認面までの出土遺物をここに含めた。すべて小片である。内訳は土師器：49点、青磁：2点、白磁：1点、常滑窯甕：1点、山茶碗窯系捏ね鉢：1点、かわらけ：6点、滑石鍋：1点、軽石：2点、銭：1点である。以下、図示し得た遺物について説明を加えていく。

1～4は弥生式土器、5は土師器である。

1は甕である。胴は張りをもたず、頸部はゆるやかに外反し、最大径を口縁部に有する。復元口径は30.3cm。外面は縦位を基調としたハケ、内面はヨコナデにより調整される。口唇部は外上方からの押捺により小波状を呈する。胴部外面には煤が付着する。胎土は砂粒、雲母、白色針状物質を含み、色調は淡橙色を呈する。

2～5は甕口縁部である。

2は外面に棒状工具による斜位の文様（？）を有する。内面はヨコナデ。口唇部は上方からの押

捺により波状を呈する。胎土は砂粒、雲母を含み、色調は淡橙色を呈する。

3は外面を縦位のハケ、内面を横位のナデにより調整する。口唇部は外上方からの押捺を有する。胎土は砂粒、雲母、白色針状物質を含む。色調は灰橙色を呈する。

4は外面を縦位のハケ、内面をナデにより調整する。口唇部は外上方からの押捺を有する。胎土は砂粒、雲母、白色針状物質を含む。色調は淡橙色を呈する。1と同一個体の可能性がある。

5は外面をハケ、内面を横位のナデにより調整する。口唇部は角張り、外方へ突出している。胎土は砂粒、雲母、小石を含む。色調は灰橙色を呈する。

6は肥前系青磁花瓶の胴部片である。釉は青緑色を呈し、胎土は灰白色を呈する。

7は青磁鎬蓮弁文碗の底部である。釉は灰緑色を呈する。高台畳付は無釉である。胎土は灰白色を呈する。復元高台径は7.6cm。

8は白磁口兀皿の口縁部片である。釉は灰白色透明。胎土は淡灰色を呈する。復元口径12.2cm。

9は山茶碗窯系捏鉢の底部片である。体部下位は回転ヘラ削り。高台は貼り付け。内面は摩滅している。胎土は精良であり石英、長石を含む。色調は灰色を呈する。焼成良好。

10はかわらけの小皿である。ロクロ成形。底部回転糸切り。胎土は砂粒、雲母、白色針状物質を含む。色調は灰橙色を呈する。復元口径8.5cm。復元底径5.5cm。器高1.8cm。

11は銅銭。「寛永通寶」である。背文はない。直径2.2cm。重さ2.7g。

12、13は軽石である。いずれも表面が研磨されている。

II．柱穴（表1～3）

本調査地点から検出された柱穴は105口を数える。円形、もしくは隅丸方形の平面を呈するものが圧倒的に多く、直径30～40cm程のものが主体を占める。なかには直径が10cm程度の小規模なものも見られる。調査区のほぼ全体にわたり検出されているが、南西部にやや集中している。各柱穴の規模、覆土、出土遺物等については一覧表を参照されたい（表1～3）。

III．柱穴出土遺物（Fig. 6）

各柱穴から出土した遺物の内訳は表1～3に示した通りである。ここでは図示し得た遺物について説明を加えていくことにする。

1、2は弥生式土器である。

1は甕。口縁部の小片である。外面はハケ、内面はナデ調整される。口唇部は上方からの押捺を有する。胎土は砂粒、小石、白色針状物質を含み、色調は灰橙色を呈する。柱穴100出土。

2は甕。口縁部の小片である。外面に3段の粘土紐積み上げ痕を明瞭に有し、ヘラ状（？）工具による縦位の圧痕を有する。内・外面ともにナデにより調整される。胎土は砂粒、雲母を含む。色調は灰橙色を呈する。柱穴20出土。

3～8は土師器である。

柱穴No	長軸 × 短軸 × 深さ	新旧関係	出土遺物	覆土注記
1	(113.0)×(26.0)× 43.5	2～10、12を切る。	近・現代瓦：1点	暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
2	29.0 × 18.5 × 7.5	1に切られる。		暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
3	(10.0)× (9.5)×(10.2)	1に切られる。	平瓦：1点	暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
4	29.0 × 18.5 × 11.8	1に切られる。	近・現代陶器：1点、近・現代瓦：1点	暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
5	11.0 × 8.5 × 8.8	1に切られる。		暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
6	(10.0)× (8.0)× 5.5	1に切られる。11を切る。		暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
7	(18.0)×(14.0)× 15.0	1に切られる。11を切る。		暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
8	(12.5)× (6.0)× 8.7	1に切られる。11を切る。		暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
9	(16.5)× (9.0)× 28.4	1に切られる。11を切る。		土丹。
10	(34.0)×(14.0)× 7.7	1に切られる。11を切る。		褐色砂、暗褐色砂、土丹粒混入。
11	(54.5)×(38.5)× (9.2)	6～10に切られる。		褐色砂、暗褐色砂、土丹粒混入。
12	(34.0)×(16.0)× (2.5)	1に切られる。	近・現代陶器：1点、近・現代瓦：1点、土師：1点	暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
13	(28.0)×(19.0)× 7.5			土丹、及び灰褐色粘質土。
14	(11.0)× (9.5)× 2.5			土丹、及び暗褐色粘質砂。
15	10.0 × 7.0 × 5.0			土丹、及び暗褐色粘質砂。
16	63.5 × 49.0 × 10.0			暗褐色砂。少量の土丹粒を含む。
17	(37.5)×(19.0)×(12.0)			暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
18	(8.5)×(10.5)× 8.5			暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
19	(16.0)×(14.0)× 10.0			暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
20	(29.0)×(25.0)× 32.0		鉄釘：2点、土師：1点。弥生：1点	土丹、及び暗褐色粘質砂。
21	(13.5)× (8.5)× 9.3			褐色砂、暗褐色砂、土丹粒混入。
22	(17.5)×(15.0)× 25.9			褐色砂、暗褐色砂、土丹粒混入。
23	(29.5)×(28.0)× 18.7		近・現代瓦：3点	暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
24	29.0 × 26.0 × 32.8			褐色砂、暗褐色砂、土丹粒混入。
25	27.0 × 25.0 × 14.0			暗褐色粘質土。土丹粒を含む。
26	20.0 × 16.0 × 7.4			暗褐色粘質土。土丹粒を含む。
27	(117.0)×(17.0)× 32.3		近・現代瓦：6点	暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
28	18.0 ×14.0 × 5.5			土丹、及び暗褐色粘質砂。
29	(33.0)×(28.0)× 14.7			褐色砂、暗褐色砂、土丹粒混入。
30	(29.0)×(23.0)× 20.0			暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
31	24.0 × 20.0 × 12.9			暗褐色砂。少量の土丹粒を含む。
32	18.0 × 14.0 × 8.2			暗褐色砂。少量の土丹粒を含む。

（単位 cm）

表1　柱穴一覧表(1)

柱穴No.	長軸 × 短軸 × 深さ	新旧関係	出土遺物	覆土注記
33	(48.5)×(36.5)× 29.1			土丹、及び暗色粘質砂。
34	(31.0)×(19.0)× 6.2	36に切られる。		暗褐色砂。
35	(33.0)×(29.0)× 9.7			暗褐色砂。
36	18.0 × 15.0 × 23.5	34を切る。		土丹、及び灰褐色粘質土。
37	14.0 × 13.5 × 5.4			土丹、及び灰褐色粘質土。
38	42.0 × 40.0 × 10.5			土丹、及び暗褐色粘質砂。
39	40.0 × 31.0 × 8.3			暗褐色砂。
40	45.0 × 34.0 × 12.4			暗褐色砂。
41	(9.0)× (7.0)× 15.8			暗褐色砂。少量の土丹粒を含む。
42	(42.0)×(36.5)× 13.3			暗褐色砂。
43	(17.0)×(16.5)× 7.3			土丹、及び灰褐色粘質土。
44	(15.0)×(14.0)× 8.8			暗褐色砂。少量の土丹粒を含む。
45	(37.5)×(24.0)× 23.7		近・現代瓦：1点	暗褐色砂。
46	53.0 × 47.0 × 19.5		土師：1点、常滑：1点	土丹。
47	24.0 × 17.0 × 4.1			暗褐色砂。
48	23.0 × 22.0 × 10.5		近・現代瓦：1点	暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
49	18.0 × 15.0 × 5.8			暗褐色砂。
50	28.0 × 26.0 × 21.6			土丹、及び暗褐色粘質砂。
51	(51.0)×(48.0)× 18.8		土師：7点	暗褐色砂。
52	(53.0)×(43.0)× 15.5			土丹。
53	(21.0)×(11.0)× 17.2			土丹。
54	(24.0)×(19.5)× 36.5			土丹。
55	(37.0)×(29.0)× 8.8	56に切られる。	土師：3点	暗褐色砂。
56	(28.5)×(27.0)×(26.2)	55を切る。		褐色砂、暗褐色砂、土丹粒混入。
57	36.0 × 27.0 × 18.8		かわらけ：1点	土丹。
58	(11.0)×(10.0)× 6.5			褐色砂、暗褐色砂、土丹粒混入。
59	(42.0)×(29.0)× 18.1	60を切る。		暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
60	(72.0)×(38.0)× 24.1	59に切られる。	土師：5点	暗褐色砂。
61	51.0 × 42.5 × 13.0			暗褐色砂。
62	27.5 × 25.0 × 3.1			暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
63	(51.0)×(32.0)× (7.5)			暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
64	(21.0)×(19.5)× 21.2			暗褐色砂。少量の土丹粒を含む。

（単位 cm）

表 2　柱穴一覧表(2)

柱穴No	長軸 × 短軸 × 深さ	新旧関係	出土遺物	覆土注記
65	(57.0)×(51.0)× 23.0	土壙に切られる。		暗褐色粘質土。土丹粒を含む。
66	(44.0)×(38.0)× 21.5		かわらけ：8点、土師：2点	暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
67	24.0 × 20.0 × 5.6			褐色砂、暗褐色砂、土丹粒混入。
68	40.0 × 35.0 × 12.1			褐色砂、暗褐色砂、土丹粒混入。
69	56.0 × 26.0 × 12.7	71を切る。		土丹。
70	(56.0)×(31.0)× 28.9	71を切る。		土丹。
71	(60.0)×(16.0)× 12.8	69、70に切られる。		褐色砂、暗褐色砂、土丹粒混入。
72	(40.5)×(28.0)× 27.6		かわらけ：3点、土師：1点、須恵：1点、渥美：1点	褐色砂、暗褐色砂、土丹粒混入。
73	(46.0)×(38.0)× 17.2			褐色砂、暗褐色砂、土丹粒混入。
74	(25.5)× (9.0)× (1.2)		近世磁器：1点、現代瓦：1点	暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
75	(56.0)×(22.0)×(21.3)			暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
76	(39.5)×(23.0)× 6.5	古代遺構1を切る。		土丹。
77	23.5 × 19.5 × 8.5	古代遺構1を切る。		暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
78	32.0 × 23.0 × 14.5			暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
79	47.0 × 40.5 × 14.5			暗褐色砂。
80	41.5 × 31.0 × 23.1			暗褐色砂。
81	26.0 × 15.5 × 8.6			暗褐色砂。少量の土丹粒を含む。
82	20.5 × 19.0 × 3.8			暗褐色砂。少量の土丹粒を含む。
83	(32.0)×(28.0)× 16.7	古代遺構1を切る。		暗褐色砂。少量の土丹粒を含む。
84	(77.0)×(43.0)× 21.8	溝2を切る。	近世陶磁：1点	土丹。
85	28.0 × 26.0 × 13.0			暗褐色砂。
86	21.0 × 18.5 × 34.2			暗褐色砂。少量の土丹粒を含む。
87	(48.0)×(28.0)× 15.0			暗褐色砂。
88	(25.5)×(18.5)× 12.2			暗褐色砂。
89	59.0 × 56.0 × 27.2	溝2を切る。	近・現代瓦：1点	土丹、及び灰褐色粘質土。
90	35.0 × 25.5 × 5.5	溝2を切る。	平瓦：1点	暗褐色砂。少量の土丹粒を含む。
91	30.0 × 22.0 × 10.6			暗褐色砂。少量の土丹粒を含む。
92	(51.0)×(33.0)× 16.3			暗褐色砂。
93	(37.5)×(23.0)× 28.8	94に切られる。溝2を切る。	土師：1点	暗褐色砂。
94	(87.0)×(79.0)× 29.3	溝2を切る。		暗褐色砂。少量の土丹粒を含む。
95	(32.5)×(14.0)× 14.7	94に切られる。溝2を切る。		暗褐色砂。
96	54.0 × 48.5 × 6.9			暗褐色砂。土器粒、炭を含む。

（単位 cm）

表3　柱穴一覧表(3)

柱穴No.	長軸 × 短軸 × 深さ	新旧関係	出土遺物	覆土注記
97	24.0 × 20.0 × 11.1		土師：5点	暗褐色砂。
98	(87.0)×(44.0)× 25.3		丸瓦：1点、土師：1点	土丹。
99	40.0 × 31.5 × 11.1		土師：1点	暗褐色砂。
100	40.5 × 36.5 × 22.4		弥生：1点	暗褐色砂。
101	46.5 × 26.5 × 5.1			暗褐色砂。
102	(52.5)×(51.0)× 18.7		近世磁器：1点	暗褐色粘質土。土丹粒を含む。
103	(38.5)×(23.5)× 16.2			暗褐色砂。
104	(17.5)×(15.5)× 2.1			暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
105	(23.0)×(17.0)× 3.0			暗褐色砂。少量の土丹粒を含む。
106	(17.0)×(14.0)× 6.4			暗褐色砂。少量の土丹粒を含む。
107	(17.5)× (7.0)× 2.7			暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
108	(25.0)×(17.0)× 3.8			土丹、及び灰褐色粘質土。
109	9.0 × 8.0 × 5.4			暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
110	9.0 × 8.5 × 6.8			暗褐色砂。土器粒、炭を含む。
111	10.0 × 10.0 × 12.0			暗褐色砂。
112	14.0 × 7.0 × 2.0			暗褐色砂。
113	18.0 × 18.0 × 15.0			暗褐色砂。
114	8.0 × 6.5 × 4.2			暗褐色砂。
115	9.0 × 7.5 × 3.7			暗褐色砂。
116	11.0 × 8.0 × 3.9			暗褐色砂。
117	9.5 × 8.5 × 6.7			暗褐色砂。
118	8.5 × 8.0 × 4.4			暗褐色砂。
119	15.0 × 14.0 × 13.0			暗褐色砂。
120	44.0 × 36.0 × 7.2		土師：1点	暗褐色砂。
121	33.0 × 32.0 × 5.0			暗褐色砂。
122	9.5 × 6.0 × 2.7			暗褐色砂。
123	24.0 × 21.0 × 18.2			暗褐色砂。
124	25.0 × 14.0 × 19.8			暗褐色砂。
125	55.0 × 39.0 × 2.8			暗褐色砂。
126	13.0 × 9.0 × 8.3			暗褐色砂。
127	12.0 × 7.0 × 3.4			暗褐色砂。

（単位 cm）

表 4　柱穴一覧表(4)

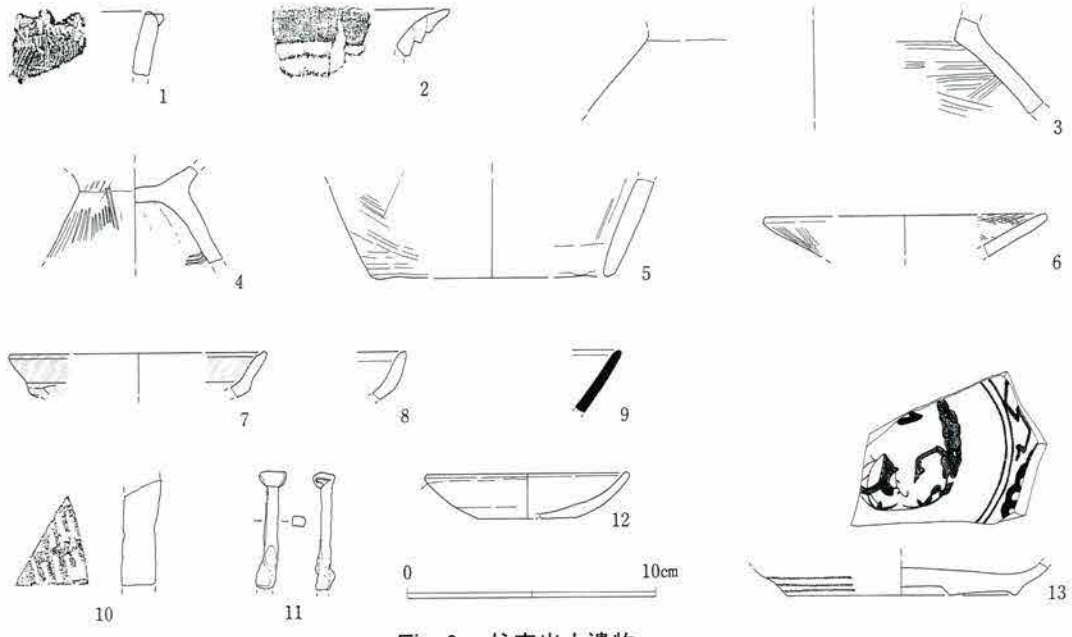


Fig. 6　柱穴出土遺物

3は甕。頸部～肩部の小片である。外面はハケのちナデ、内面はハケ調整される。胎土は砂粒、雲母を含む。色調は暗橙色を呈する。柱穴55出土。

4は台付甕。脚台接合部である。外面はハケ、内面はハケのちヘラナデにより調整される。胎土は雲母、白色粒子を含む。色調は赤橙色を呈する。柱穴72出土。

5は甑。孔部小片である。外面はナデのち縦位のヘラミガキ、内面は縦位のヘラミガキ調整。外面には煤が一部付着する。胎土は雲母、白色針状物質を含む。色調は橙色を呈する。柱穴97出土。

6は高坏、もしくは小形器台の口縁部小片である。外面は縦位のハケ、内面は斜位のハケのちナデ調整。胎土は雲母、砂粒を含む。色調は暗灰橙色を呈する。復元口径11.2cm。柱穴97出土。

7は坏の小片である。ヘラ削りされた底部から強い稜をもち、やや外反気味に立ち上がる。口縁部内、及び、外面はヨコナデ。口唇部内面に沈線を有する。胎土は精良である。内・外面には赤彩を施す。復元口径10.1cm。柱穴46出土。

8は坏。口縁部小片である。ヘラ削りの底部からやや強い稜をもち、直線気味に立ち上がる。口縁部内、及び、外面はヨコナデ。胎土は精良である。色調は赤橙色を呈する。柱穴55出土。

9は須恵器坏。口縁部小片である。体部外面に弱い稜を有する。胎土は白色粒子を含み精良。内・外面は灰黒色、芯部は暗橙色を呈する。焼成良好。柱穴72出土。

10は常滑窯甕。胴部小片である。「格子文」の押印を有する。内・外面は暗褐色を呈する。胎土は粘性が強く、精良であり灰白色を呈する。柱穴72出土。

11は鉄釘である。下半部を欠損している。頭部を平らに叩き、折り曲げられたものである。断面は5×4㎜の長方形を呈する。残存長4.7cm。柱穴20出土。

12は関西系の灯明皿である。口縁から内面にかけて淡乳黄色釉が施される。体部外面の下位は回転ヘラ削り。外底面はヘラ切り。口径8.0cm。底径3.9cm。器高1.8cm。柱穴84出土。

13は肥前染め付け皿の底部片である。蛇ノ目高台。内面には草木文が配される。焼継が認められる。高台径9.2cm。柱穴74出土。

Ⅳ．柱穴列（Fig. 7）

前述した柱穴のうち、列を構成するものをここに含めた。柵列、或いは、塀のような建築物を想定できる3列を提示したが、狭い調査区内からの部分的な検出のため、全体規模など不明瞭な点が多い。また、掘立柱建物として柱穴39、40、47、51、61を一棟、60、80、92、95、99、100、103を一棟と想定することも可能であるが確証はない。各柱穴の覆土は全て、同質の暗褐色を呈するよくしまった砂である。柱穴51、60、93、99、100からは遺物を出土しているが、いずれも中世遺物は含

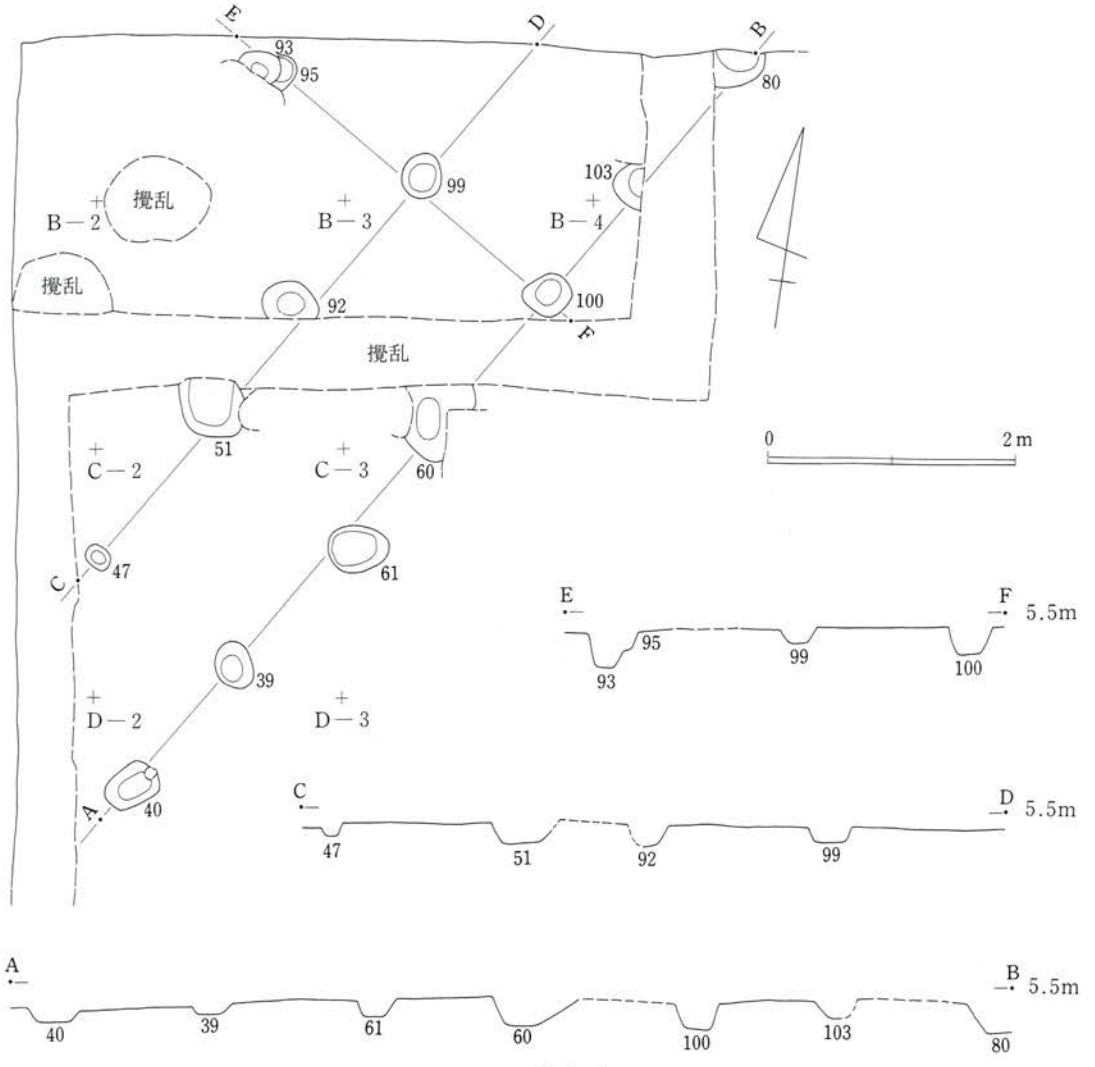


Fig. 7　柱穴列

まず、土師器、弥生式土器の小片を数点出土しているだけである。また、各柱穴列の軸方位は現在の長谷寺参道の軸線と直交、或いは、平行の関係にはない。

(1) A－B柱穴列

A～D－2～4グリットにおいて検出された。A－B間に並ぶ南北方向の7穴である。各柱穴は隅丸方形状の平面形を呈し、確認面からの深さは10～25cm程である。各柱穴の間隔は1.4mを測り、柱穴60～柱穴61間は1.0mである。軸方位はN－32°－Eである。

(2) C－D柱穴列

A～C－2～3グリットにおいて検出された。C－D間に並ぶ南北方向の4穴である。各柱穴は隅丸方形状の平面形を有するが、柱穴47は小さい。確認面からの深さは10～20cm程である。柱穴の間隔は南から1.5、1.0、1.5mを測り、軸方位はA－B列と同様N－32°－Eである。

(3) E－F柱穴列

A～B－2～3グリットにおいて検出された。E－F間に並ぶ3穴である。各柱穴は隅丸方形状の平面形を呈し、確認面からの深さは15～20cm程である。柱穴の間隔は1.4mを測る。軸方位はN－58°－Wであり、A－B、C－D列と直交関係にある。

V．土壙（Fig. 8、9）

C～D－3～5グリットから検出された。本址の東部は調査区外に広がるため全体規模、及び、性格は不明であるが、隅丸方形状の平面形を呈し、長軸（東西）2.6m以上、短軸（南北）2.1mの規模を有する。確認面からの深さは西から30cm、60cm、75cm、50cmを測り、中央付近に最深部を有するものと考えれる。遺構覆土は3層に分けられ、最下層は中・小の土丹、上層はしまりの弱い灰褐色粘質土であり、廃絶時にいっきに埋め戻されたものと考えられる。本址の主軸方位は現在の長谷寺参道の軸線とほぼ平行の関係にある。

出土した遺物はいずれも小片である。その内訳は土師器：19点、須恵器：1点、青磁：2点、瀬戸：2点、常滑：44点、擦り常滑：1点、手焙り：4点、かわらけ：80点、鉄釘：1点、平瓦：1点である。以下、図示し得た遺物について説明を加えていく。

1は土師器。甕の口縁部である。内・外面ともに横位のナデ調整。胎土は砂粒、雲母、白色針状物質を含む。色調は橙色を呈する。

2は須恵器。坏の口縁部である。内・外面ともにナデによる弱い稜をもつ。胎土は白色粒子を多量に含む。粘性は弱く、割れ口はボソリとしている。色調は灰色を呈する。

3は青磁。腰折鉢の口縁部小片である。釉は暗緑色、胎土は灰白色を呈する。

4は常滑窯捏鉢の口縁部片である。口唇は外方に突出する。内・外面ともにヨコナデ。器表は暗

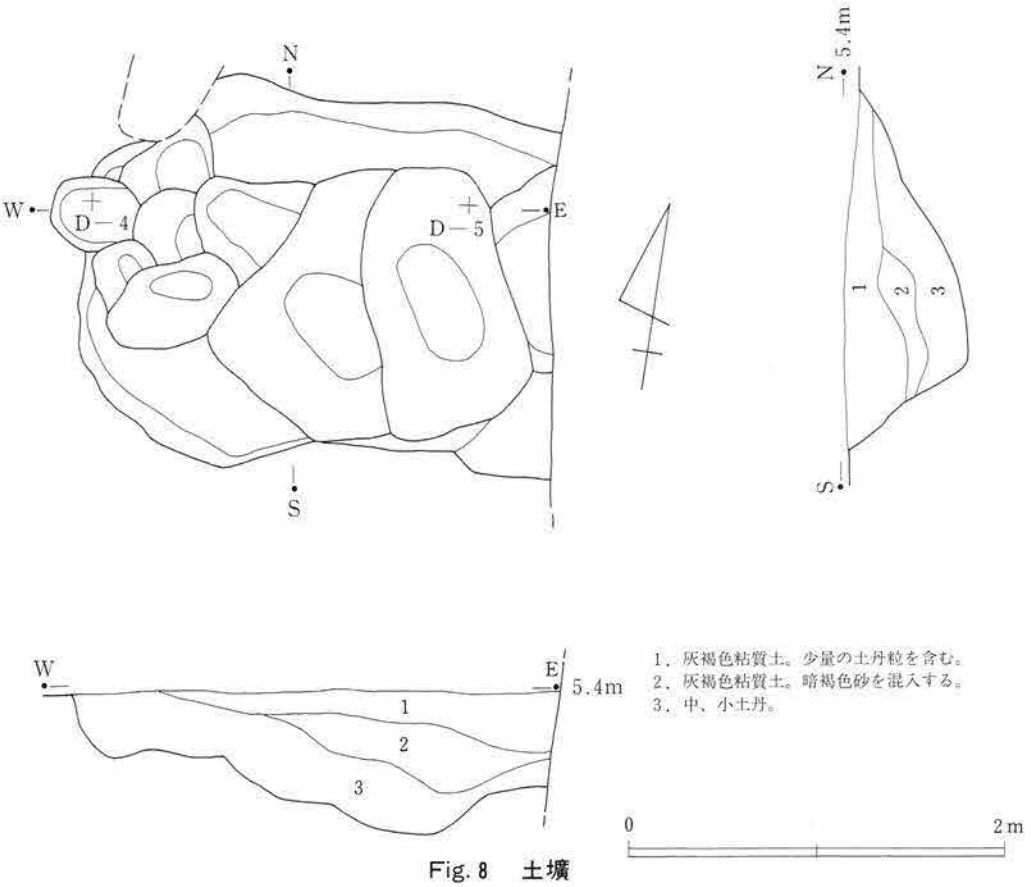


Fig. 8　土壙

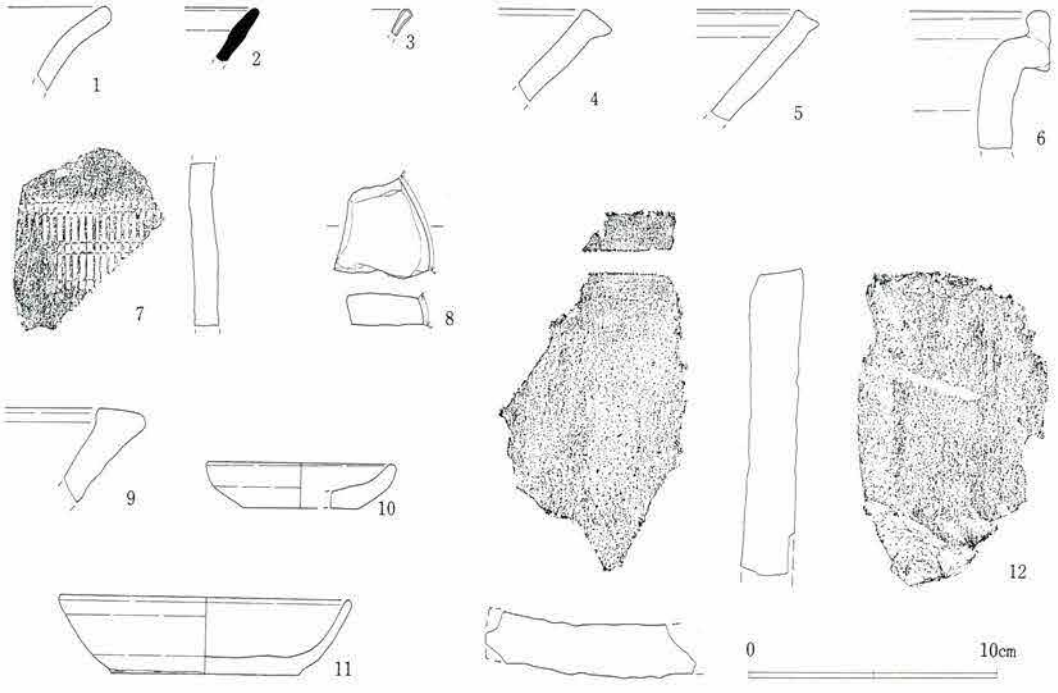


Fig. 9　土壙出土遺物

紫色を呈する。胎土は石英、長石を多量に含み、芯部は灰黒色を呈する。焼成良好。

5は常滑窯捏鉢の口縁部片である。口唇はやや窪み、内・外面に小さく突出する。内面、及び、口縁部はヨコナデ、以下の体部外面は粗いナデが施される。器表は暗橙色を呈する。胎土は石英、長石を含み芯部は灰黒色を呈する。焼成良好。

6は常滑窯甕の口縁部片である。N字状の縁帯を有する。器表は褐色を呈する。胎土は粘性に富み、石英、長石を多量に含む。芯部は灰白色を呈する。焼成良好。

7は常滑窯甕の胴部小片である。器表は暗橙色を呈し、「格子文」の押印を有する。胎土は粘性に富み、石英、長石、小石を含む。芯部は白橙色を呈する。焼成良好。

8は所謂「擦り常滑」である。常滑窯甕胴部片の割れ口の一側面に研磨痕を有する。

9は手焙り。口縁部片である。内・外面ともにナデ調整される。胎土は石英、長石、雲母、小石、白色粒子を多量に含み、焼成は軟質である。色調は器表が淡灰色、芯部が灰黒色を呈する。

10はかわらけ。ロクロ成形の小皿である。胎土は小石、雲母、白色針状物質を含み、色調は灰橙色を呈する。外底面は回転糸切り。口径7.2cm。底径4.6cm。器高1.8cm。

11はかわらけ。ロクロ成形の大皿である。胎土は砂粒、雲母、白色針状物質を含む。器壁は薄く、焼成良好。色調は暗橙色を呈する。外底面は回転糸切りされスノコ痕を有する。口径11.6cm。底径7.6cm。器高3.1cm。

12は平瓦。凸・凹面ともに粗い離れ砂が付着する。側面、端面はヘラ削りされる。器表は黒灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し、石英、長石、白色粒子を含み、粘性に富む。

VI. 溝 (Fig.10)

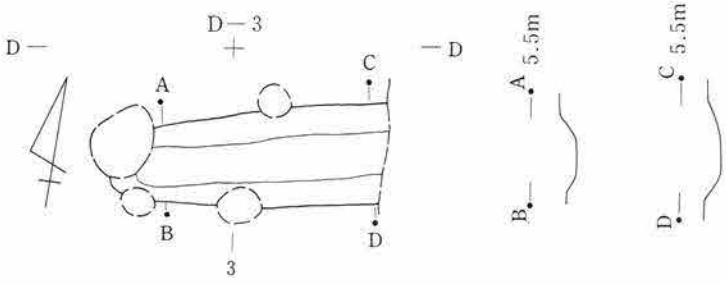
本調査地点からは2条の溝を検出している。狭い調査区からの部分的な検出であり、詳細に関しては不明瞭な点が多い。以下、溝1、溝2に関して説明を加えていく。

(1) 溝1

D－2～3グリットにおいて検出された。東部を攪乱により失うが、東西1.5mにわたり確認されている。上幅55cm前後、下幅25cm前後、確認面からの深さは10cm程である。溝というよりは溝状の土壙と称したほうが妥当かもしれない。軸方位はN－72°－Eであり、現在の長谷寺参道とほぼ平行の関係にある。遺構覆土は暗褐色粘質土であり、少量の土丹粒を混入している。出土遺物の内訳は土師器：6点、かわらけ：2点である。いずれも小片であり、図示し得たものはない。

(2) 溝2

A～B－1～3グリットにおいて約3.2mにわたり検出された。上幅は55～60cm、下幅は40～55cm、確認面からの深さは15cm程であり、溝底は北から南へ向かい緩やかに傾斜している。直径10cmほどのピットを3口検出しているが、本址との関係は不明である。遺構の主軸方位はN－42°－Eであり、



▲溝1

▼溝2

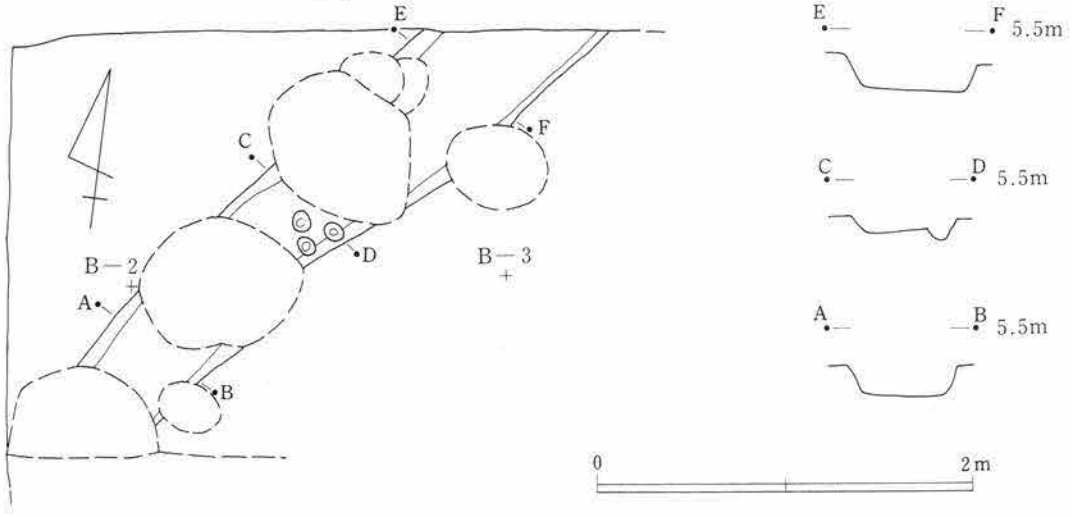


Fig.10　溝（溝1、溝2）

先述したA－B柱穴列、C－D柱穴列よりも10°東に振れている。土層観察の結果から後述する古代遺構3の一部を削平していることが判明している。遺構覆土は黒褐色砂、暗褐色粘質砂、黄色砂の混入層である。出土した遺物は土師器6点のみであり、中世遺物を含んでいない。いずれも小片であり図示し得たものはない。

Ⅶ. 礎石（Fig.11）

A－3グリットにおいてほぼ東西に並ぶ2石を検出した。鎌倉石（砂質凝灰岩切石）と伊豆石（安山岩）であり、ともに上面は平坦である。芯～芯距離で70cmを測る。主軸方位はN－82°－Eであり、現在の長谷寺参道とほぼ平行の関係にある。さらに調査区北外へと広がる可能性もあろう。

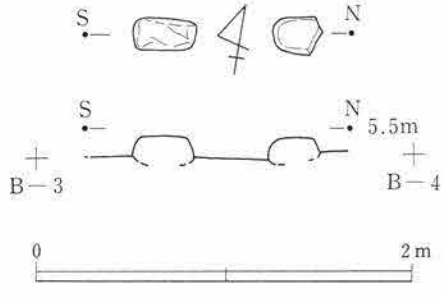


Fig.11　礎石

第２節　中世以前の遺構と出土遺物（Fig.12）

中世遺構の調査終了後、古代遺構の調査を行い、該期の遺構を調査区北東部において３址検出した。本節では古代遺構１～３と呼称し、個々に説明を加えていく。各遺構は中世遺構と同一の確認面において検出されており、遺構の掘り込みレベルは全て近・現代の削平により失われている。

Ⅰ．古代遺構１（Fig.13、14）

A～B－４～５グリットにおいて検出された。本址の東部は調査区外に広がり、一部は試掘調査が行われている。隅丸方形の平面プランを有する竪穴住居址と想定される。東西1.5m以上、南北2.6

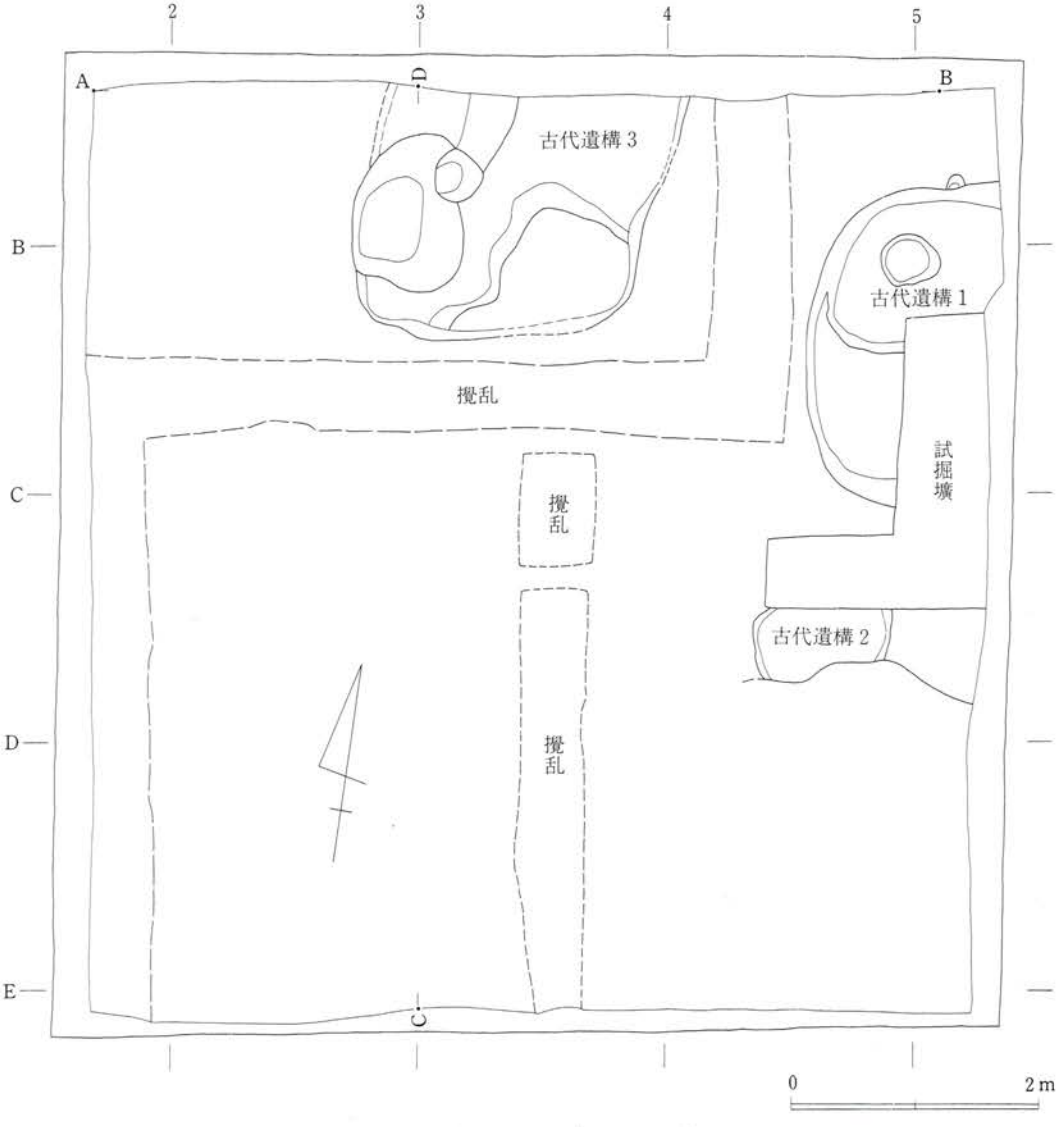


Fig.12　遺構全体図（中世以前）

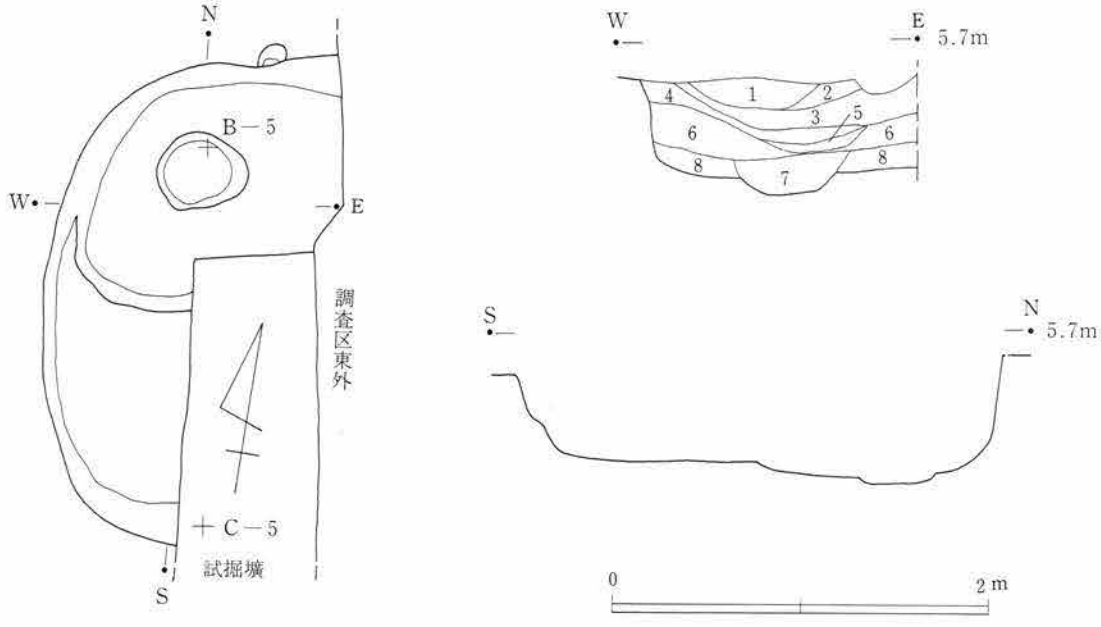


Fig.13　古代遺構１

m、確認面からの深さは45～65cmほどの規模を有する。掘り方底面には低い段を有しており、北部が10cmほど低く、柱穴状の浅い窪みを検出している。全体の構造に関しては不明瞭な点が多く、張り床、カマド等は確認されていない。本址の主軸方位はN－5°－Wである。

遺構覆土は以下の通りである。

１．暗褐色砂質土。

２．暗褐色砂質土。灰黄色砂が混入する。

３．暗褐色砂質土。少量の灰黄色砂が混入する。

４．暗褐色砂質土。

５．暗褐色弱粘質土。

６．暗褐色砂質土。灰黄色砂が混入する。

７．暗褐色砂質土。

８．暗褐色砂質土。灰黄色砂が混入する。

出土した遺物の内訳は土師器：65点、須恵器：２点、軽石：３点であり、いずれも小片である。実測し得た遺物はFig.13に示した。２、６は覆土上層から、他は下層からの出土である。

１～５は土師器である。

１は台付甕。頸部～胴部の小片である。頸部外面はナデ、内面はハケ調整。胴部外面はハケ、内面はナデ調整される。胎土は雲母、小石、白色針状物質を含む。色調は器表が灰橙色、芯部が黒灰色を呈する。焼成良好。

２は甕の口縁部小片である。内・外面ともにナデにより調整される。胎土は雲母、砂粒、白色針

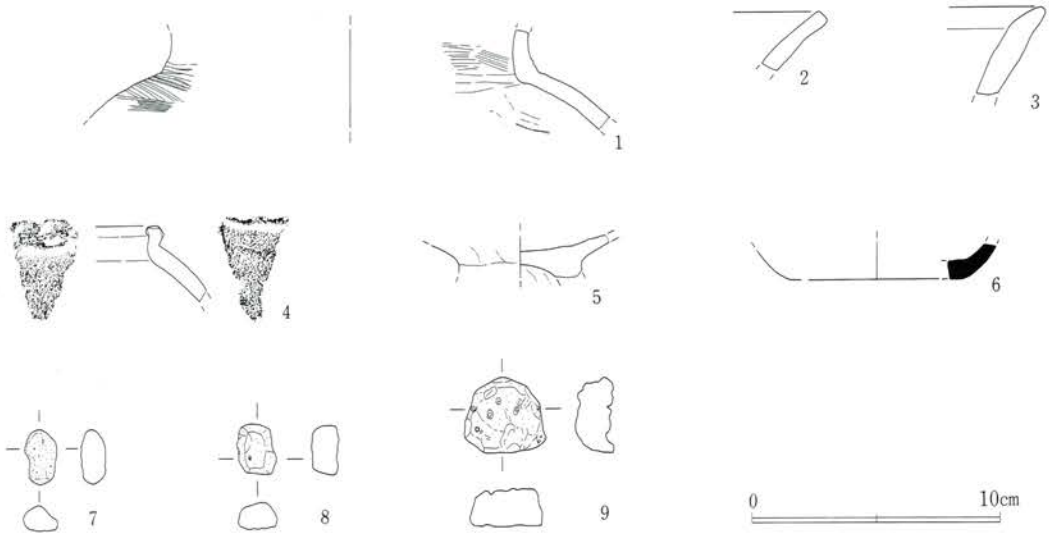


Fig.14　古代遺構 1 出土遺物

状物質を含む。色調は器表が橙色、芯部が灰橙色を呈する。

3は甕の口縁部小片である。内・外面ともにナデ調整される。胎土は石英、長石、雲母、小石を含む。色調は灰橙色を呈する。

4は甕。所謂「類製塩壷」と称されるものである。口縁部は上方からの押捺が施され、波状を呈する。内・外面はナデ調整。胎土は砂粒、雲母、白色針状物質を含む。色調は淡橙色を呈する。

5は台付甕の胴部～脚台部小片である。明瞭ではないが外面はハケ調整、甕部内面、及び、脚台部内面はヘラナデ調整される。胎土は小石、雲母、白色粒子を含む。色調は暗橙色を呈する。

6は須恵器。坏底部片である。体部は内・外面ともにナデ。外底面は周囲に回転ヘラ削りを行うものと考えられるが、小片のため明確ではない。胎土は精良であり、白色粒子を混入する。色調は青味がかった灰黒色を呈する。焼成良好。

7～9は軽石である。7、8は表面全体に研磨痕を有する。

II．古代遺構 2 （Fig.15）

C－4グリットにおいて検出された。北部は試掘壙、及び、近・現代の撹乱により、南部は中世土壙により大半を失っている。平面形は不明であるが、東西110cm、南北60cm以上。上部は大きく削平されているが確認面からの深さは10cm程の規模を有する。覆土は良く締まった暗褐色を呈する砂質土である。検出状況が良好とは言えず性格は不明である。土壙、もしくは自然地形による凹地の可能性があろう。

出土した遺物の内訳は弥生式土器：2点、土師器：7点である。いずれも小片であり、図示し得たものはない。

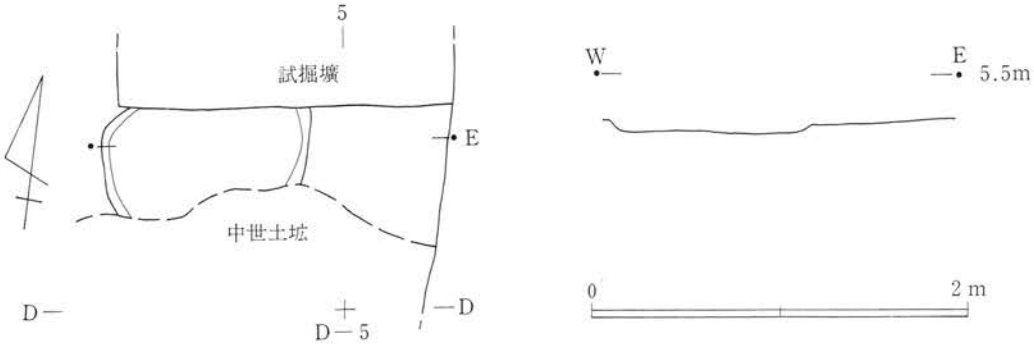


Fig.15　古代遺構 2

III. 古代遺構 3 (Fig.16、17)

A～B－2～3グリットにおいて検出された。本址の北部は調査区外に広がるため全体規模は不明であるが、東西2.4m、南北2.0m以上、確認面からの深さは20cm前後である。平面プランは明確には検出されず、覆土である黒褐色砂を掘りあげた状況がFig.16の上図である。南東部ではしまりの良い灰黄色砂上で土師器片（高坏、台付甕）、軽石等がやや集中して検出された。西部では長軸（南北）1.3m、短軸（東西）0.9m、確認面からの深さ30cm程の規模を有する不定形の土壙と、直径40cm、確認面からの深さ24cmのピットを検出している。本址の北西部は溝2により削平されている。実測終了後に土器片等を取りはずし、しまりの良い灰黄色砂を掘りあげた状況がFig.15の下図である。直径10～20cm、深さ10cm前後の小穴群と、長軸（南北）80cm、短軸（東西）50cm、深さ5cm程の浅い不定形を呈する土壙状の窪地を検出している。さらに、南部中央では直径35～40cm、深さ15cm程のピットを検出している。本址に関しては検出範囲も狭く、また、明瞭な掘り込みも確認されておらず不明瞭な点が多い。このため住居址として把握することは困難であり、自然地形による窪地と判断される。

出土した遺物の内訳は弥生式土器：3点、土師器：40点、軽石：10点である。実測し得たものはFig.16に示した。5～7は灰黄色砂中から出土し、他は同砂層上面からの一括資料である。

1～4、8～10は土師器、5～7は弥生式土器である。

1は台付甕である。接合部分はないが、同一個体であり図上復元したものである。頸部は強く屈曲する。胴部は球形を呈し、中位のやや上方に最大径を有する。口径14.8cm。胴部最大径18.5cm。口縁部は内面をハケ、外面をハケのちナデ調整。胴部外面は上位から中位にかけてハケ、下半部はヘラミガキ調整。胴部内面はヘラナデ調整される。脚台部は外面をハケのちナデ、内面をヘラナデにより調整する。胎土は白色粒子、小石、雲母を含む。焼成は非常に良好であり、色調は暗赤橙色を呈する。

2は台付甕の口縁部小片である。内･外面ともにナデにより調整される。胎土は白色粒子、砂粒、雲母を含む。色調は暗橙色を呈する。

3は台付甕の脚台部片である。外面はヘラナデ、内面はナデにより調整される。台部の復元径は

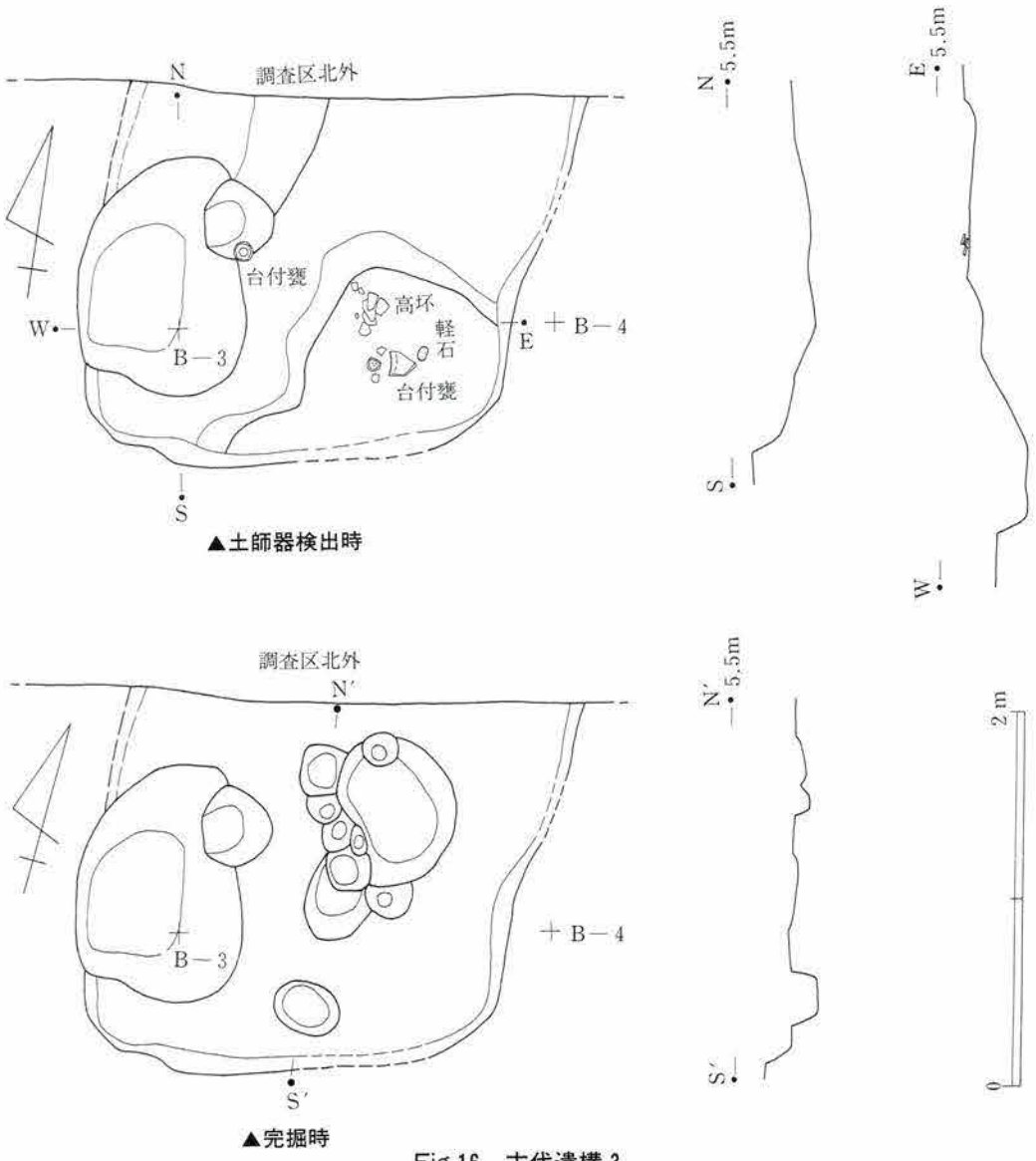


Fig.16　古代遺構 3

6.7cmを測る。胎土は小石、白色粒子を含む。色調は赤橙色を呈する。

4は台付甕の脚台部である。台部径9.5cm。内・外面ともにヘラナデされ、裾部はナデ調整される。胎土は白色粒子、小石、白色針状物質を含む。色調は暗橙色を呈する。

5は深鉢の口縁部小片である。外面に条痕文を有し、内面はナデ調整される。口唇部にはハケ状工具による押捺を有する。胎土は砂、小石、雲母、白色粒子を含む。色調は灰橙色を呈する。

6は深鉢の口縁部小片である。外面に条痕文を有する。内面はナデ調整である。口唇部にはハケ状工具による押捺を有する。胎土は砂粒、小石、雲母、白色粒子を含む。色調は灰橙色を呈する。

7は深鉢の胴部片である。外面に条痕文を有する。内面はナデ調整。胎土は白色粒子、雲母、小

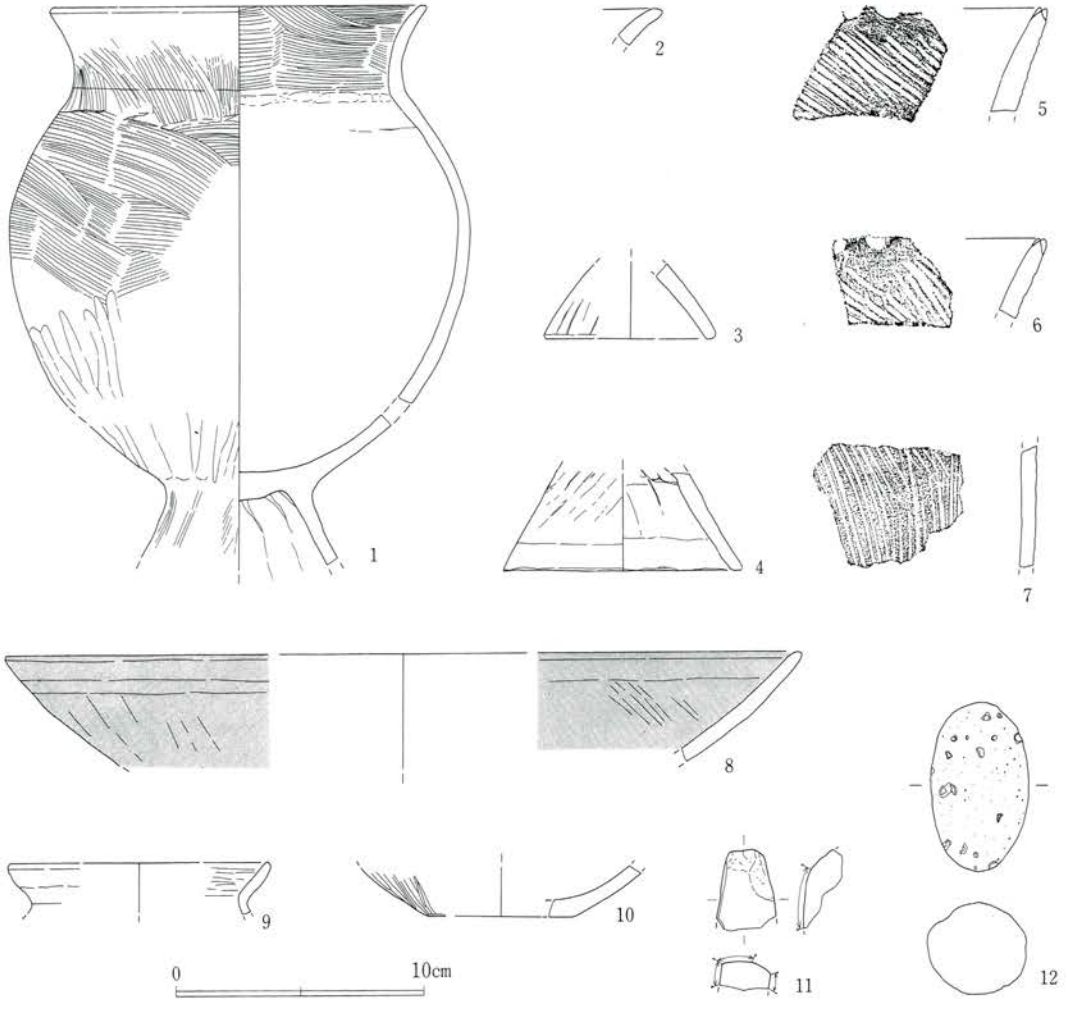


Fig.17　古代遺構 3 出土遺物

石を含む。色調は灰橙色を呈する。

8は高坏の坏部である。器表が著しく剥離しているため明瞭ではないが、内・外面ともに赤彩が施されている。調整は内・外面ともにハケのちナデ、口唇部はヨコナデである。復元口径31.7cm。胎土は小石、雲母、白色粒子を含む。色調は淡橙色を呈する。

9は小型甕の口縁～頸部片と考えられる。外面はナデ、内面はヘラミガキにより調整される。胎土は雲母、小石を含む。色調は灰橙色を呈する。

10は小型甕の胴部下半～底部片である。外面、及び、外底面はヘラミガキ、内面はヘラナデにより調整される。復元底径5.8cm。胎土・焼成等から9と同一個体の可能性をもつ。

11は砥石。凝灰岩製である。表面全体に研磨痕が認められる。

12は軽石。表面全体に研磨痕を有する。

IV．トレンチ調査（Fig. 3 、18）

中世、中世以前における遺構の調査終了後、遺構確認面以下の堆積土層を観察するためにトレンチ調査を実施した。トレンチは調査区内周、３ライン沿い、及び、Ｃ～Ｄライン間に設定し、幅は約60cmとした。掘削深度の規定、及び、湧水による土砂崩落の危険から、深さは海抜4.7mまでとした。土層の堆積状況については第二章・第３節において言及したので、ここでは繰り返さない。

トレンチから採集された遺物(PL.16)としては、第６層、第７層より表面が磨滅した凝灰質泥岩：36点と軽石：３点である。この泥岩のうち13点には貝類の穿孔棲息痕が認められ、20点は偏平形をしている。また、調査区南壁トレンチの北部（Ｂ－２グリット・ポイント付近）からはイワガキ（貝）が３点採集されている。

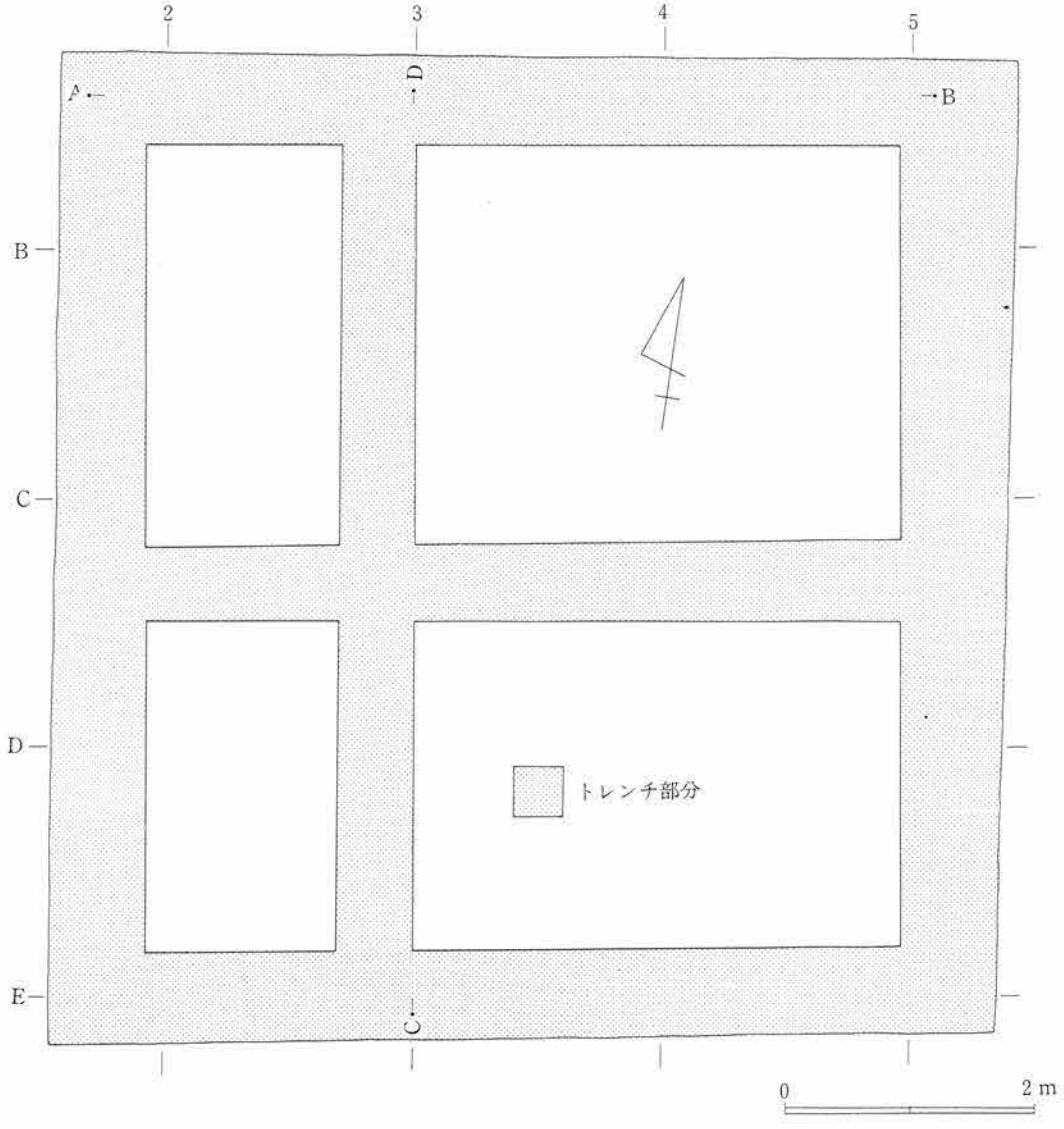


Fig.18　トレンチ設定図

第3節　本地点における火山灰質堆積物について

菱田　量（パレオ・ラボ）

1．はじめに

長谷観音堂周辺遺跡（長谷三丁目41番イ地点）の発掘において、調査区域内に火山灰質とみられる堆積物が濃集している層が見い出された。ここでは、この堆積物中に含まれる個々の粒子を観察し、その組成を求めることにより、堆積物の特徴を明らかにする。

2．試料および分析方法

(1)　試料

Fig.19に示したように、調査区南壁には1～5層の灰黄色～暗褐色の砂層が堆積している。試料はこれらの堆積物の下位に挟在する火山灰とみられる6層の暗褐色の堆積物である。なお、1層上面からは14世紀を中心とする中世遺構、および中世以前の遺構が確認されている。

(2)　分析方法

①．0φ（1.0mm）、1φ（0.5mm）、2φ（0.25mm）、3φ（0.125）、4φ（0.063）のふるいを用

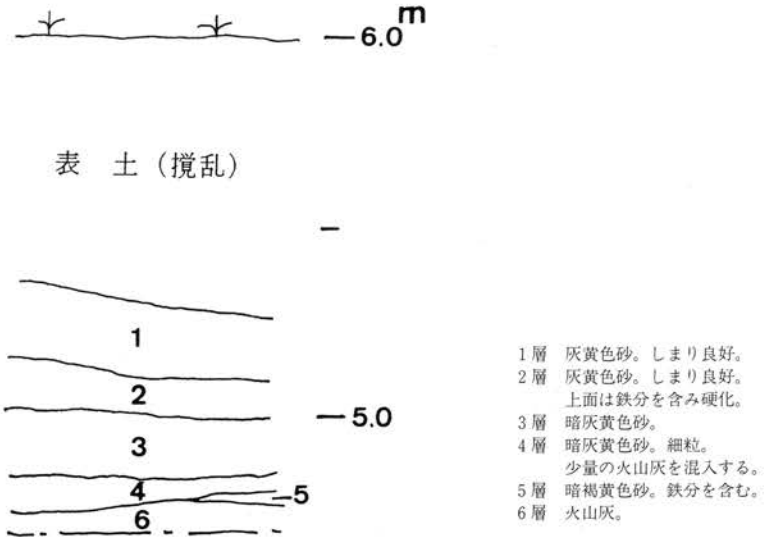


Fig.19　調査区南壁土層図

いて、試料を流水下で湿式ふるい分けを行ない、各ふるいの残渣を乾燥させ秤量する。各残渣の重量%を求め、粒度組成とする。なお、0 φから4 φになるほど残渣の粒径が小さくなる。また、試料の乾燥重量に対する4 φ以上の残渣（砂サイズ以上の粒子）の乾燥重量の割合を含砂率（%）とする。

②. 各ふるい残渣について、実体顕微鏡により含まれる粒子を分類群のように同定、計数し、各粒度別の粒子組成を粒数%で表す。なお、計数の総数は約200個以上になるようにする。

(3) 含まれる粒子

以下に試料中に含まれる粒子について簡単に説明する。

・スコリア：黒色から黒褐色を呈し、泡状の気泡がみられ、多孔質でガラス質の岩片である。火山灰などの火山噴出物起源である。

・風化スコリア：スコリアが何らかの影響で二次的に風化して淡褐色から灰白色になっているもので、スコリアと同様に気泡をもつ岩片である。

・堆積岩岩片：チャート、泥岩、砂岩などの堆積岩を起源とすると考えられる岩片である。

・火山岩岩片：安山岩や玄武岩などの火山岩を起源とすると考えられる岩片である。

・その他の岩片：上記の岩片以外の岩片で、ここでは、細粒で泥質な粒子が凝集した土粒子が比較的多く含まれ、その他の不明のものも含む。

・石英・長石類：石英は主として無色透明で、ほとんどが不規則な形をしている。また、ガラスに似た割れ口(貝殻状断口)がみられるものがある。長石類は無色透明から白色半透明を呈し、柱　状、板状、粒状などいろいろな形をしている。

・輝石類：淡褐色および淡緑色を呈し、長柱状の形の斜方輝石(主に紫蘇輝石)、および緑色から淡緑色を呈し、柱状の形の単斜輝石（主に普通輝石）などがみられる。

・カンラン石：多くは淡黄緑色から無色透明で、ころころした短柱状である。風化に弱く、風化したものは不透明で赤褐色に変化するものが多い。

・その他の鉱物：上記の鉱物以外の鉱物で角閃石などがみられ、その他不明な鉱物も含む。

3．分析結果（表5、6）

含砂率は95%で、堆積物の大部分が砂サイズ以上の粒子から構成されており、シルトサイズ以下の細粒な粒子は少ない。

4 φ以上の砂粒分の粒度組成は2 φ残渣の割合が最も大きく55.7%で、1、2、3 φの残渣で全体の97.8%を閉める。

各粒度別の粒子組成を見ると、0 φ残渣ではスコリアが19.0%、風化スコリアが7.6%含まれ、比較的多い。堆積岩岩片が比較的多く含まれ、それらは円磨されているものがほとんどである。また、

表5　堆積物の含有率および砂粒分の粒度組成

含砂率	0φ	1φ	2φ	3φ	4φ
95.0	0.8	19.2	55.7	22.9	1.4

表6　砂粒堆積物の各粒度別の粒子組成

粒子＼粒度	0φ	1φ	2φ	3φ	4φ
スコリア	40(19.0)	77(31.4)	19(6.8)	3(1.1)	1(0.3)
風化スコリア	16(7.6)	60(24.5)	16(5.7)	1(0.4)	-(-)
堆積岩岩片	56(26.5)	25(10.2)	21(7.5)	6(2.2)	6(2.1)
火山岩岩片	5(2.5)	9(3.2)	11(3.9)	4(1.4)	1(0.3)
その他の岩片	78(37.0)	41(16.7)	47(16.7)	16(5.8)	61(20.7)
石英・長石類	13(6.1)	23(9.4)	98(34.9)	212(76.3)	181(61.6)
輝石類	3(1.4)	10(4.1)	59(21.0)	26(9.3)	34(11.6)
カンラン石	-(-)	-(-)	4(1.4)	3(1.1)	2(0.7)
その他の鉱物	-(-)	-(-)	6(2.1)	7(2.5)	8(2.7)
総数	211(100.0)	245(100.0)	281(100.0)	278(100.0)	294(100.0)

その他の岩片の中の多くは土粒子である。1φ残渣ではスコリアが31.4%、風化スコリアが24.5%であり、各粒度中で最も多く含まれる。2φ残渣ではスコリアが6.8%、風化スコリアが5.7%と少なくなり、0、1φ残渣に比べて石英・長石類などの鉱物類が多くなる。3φ残渣ではスコリアが1.1%、風化スコリアが0.4%と非常に少なくなり、岩片類の割合も小さくなる。一方、石英・長石類などの鉱物類の割合がさらに大きくなる。4φ残渣ではスコリアと確認できるものがほとんどみられず、破片状になっているものも多いと思われる。また、3φ残渣と同様に石英・長石類が多く含まれる。

4．考察

分析結果から、堆積物中の粒子にはスコリアおよび風化スコリアが多くみられ、特に1φ残渣(粒

径1.0～0.5㎜）に密集しており、この堆積物は火山灰などの火山噴出物からなる粒子を主体として構成されていることがわかる。これらのスコリアはおそらく富士山を起源とする火山噴出物と考えられる。しかし、スコリアの中には灰白色や淡褐色に風化したものが比較的多く、また、堆積物中には火山噴出物以外を起源とする円磨された堆積岩岩片が目立つことから、この堆積物は火山噴出物として一次堆積した火山灰だけではなく、一度堆積したものが流水などにより侵食されて移動し、再堆積する過程で火山灰以外の粒子が混入して、さらに、一部のスコリアが水などの影響で風化したものが含まれていると考えられる。

※本稿は「長谷観音堂周辺遺跡（No.296）における火山灰質堆積物について」を改題して掲載したものである。

第四章　まとめと考察

本地点の調査からは中世、及び、中世以前の遺構・遺物を検出し、当該地域に関する新たな知見を得ることができた。しかし、調査面積が狭く、また、近・現代の撹乱により大きく削平をうけ、不明瞭な点も多く、遺跡の性格を捉えることは非常に困難なことである。本章では調査成果を踏まえ、若干の考察をあたえていきたい（Fig.20、21、22、23）。

本調査では同一の確認面において中世、中世以前の遺構を検出している。このうち中世に属するものは100口を越える柱穴と、土壙：１基、溝：２条、礎石である。柱穴の多さから密に遺構が造営されたことと推測される。このうち、柱穴列として把握されたものは３址にすぎないが、これらが２棟の掘立柱建物となる可能性もある。土壙、溝１、及び、礎石の主軸方位は現在の長谷寺参道と直交・平行の関係にあるが、柱穴列と溝２はこれとは異なる軸方位を有している。土壙からの出土遺物からは14世紀を中心とした年代を与えることができる。溝１からは年代を決定させるような遺物はないが、出土したかわらけの小片から土壙とほぼ同時期と考えられる。柱穴列、及び、溝２からは中世に属する遺物は出土しておらず、いずれも土師器の小片を極少量出土しているだけであり、中世以前の時期（奈良・平安時代）に属する可能性もあろう。尚、溝２、及び、柱穴99（C－D、E－F列）は古代遺構３を切っている。

本調査地点からは165点の中世遺物を出土している。Fig.21には器種別に破片数をカウントし、その割合をグラフにして提示した。供膳器種である青磁鎬蓮弁文碗、白磁口兀皿、瀬戸窯鉢、かわらけ

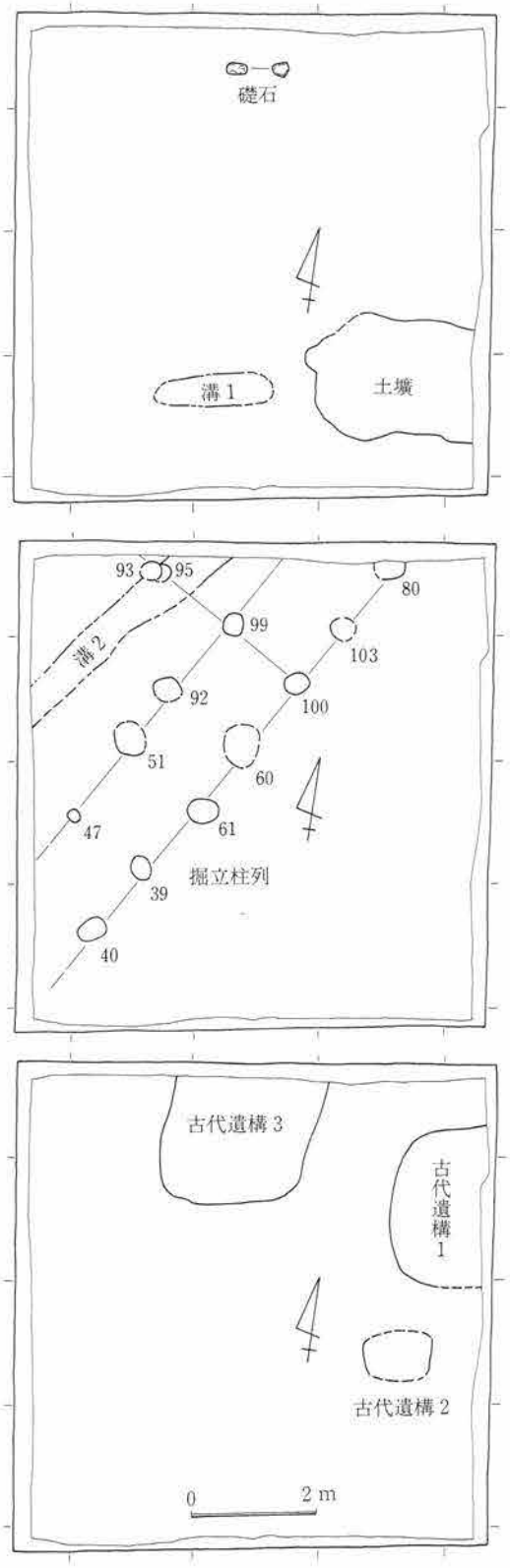


Fig.20　遺構変遷概念図

Fig.21　中世遺物組成

は全体の64.9%、調理・貯蔵器種である渥美窯甕、常滑窯甕、常滑窯捏鉢、山茶碗窯系捏鉢、滑石鍋、研磨痕を有する常滑片[1)]は全体の30.3%を占めている。暖房器種である手焙り[2)]、建築部材である瓦類はそれぞれ全体の2.4%を占めている。

中世以前に属するものは古代遺構1～3である。いずれも部分的な検出にとどまり不明瞭な点が多い。古代遺構1は明確な掘り込みを有するが柱穴、カマド、張り床等は検出されていない。現時点では竪穴住居址の可能性を持つ遺構として考えておきたい。出土遺物は古墳時代前期に属する土師器甕片や奈良・平安時代の土師器甕、類製塩土器、須恵器坏等の小片であり、時期を特定することは困難である。古代遺構2からの出土遺物は弥生式土器、土師器の小片であり、これも時期を特定できず窪地と推測される。古代遺構3からは古墳時代前期（五領期）の遺物をややまとまりをもって出土した。しかし、遺構の平面プランは明確には検出されず、竪穴住居址として判断することは不可能であり、窪地に土器類を投棄した可能性が強い。長谷小路周辺の遺跡からは多くの竪穴住居址が確認されており、古東海道沿いに集落が形成されていたことは過去の調査結果から明らかであり、本調査地点もその一部に含まれていたことであろう。

遺構確認面、及び、遺構覆土からは弥生時代中期後半（宮ノ台期）を中心とする土器片が出土している。該期の遺構は検出されていないが、本遺跡の近郊（例えば稲瀬川上流の河岸段丘上）に集落が立地していたことと想定される。

さらに、トレンチによる確認面以下の堆積土層調査から、流水等により侵食・移動し、再堆積したと考えられる火山灰等、貝類の穿孔棲息痕を有し扁平形のプロポーションを有する凝灰質泥岩、及び、イワガキ（貝）を検出した。年代的に把握することは不可能であるが、人手が加えられる以前（弥生時代中期後半以前？）のこの地域は、縄文時代後期末から始まった海退現象により海岸線が後退し、取り残された部分であり、海岸汀線付近の河川（稲瀬川）の氾濫源であったことと考えられる。

本遺跡からは調査面積が狭いことにも拘らず多くの遺物を出土した。しかし、近・現代の撹乱により上層を大きく削平され、失われた遺構もあろう。確認面、及び、各遺構から出土した遺物については第三章において既に触れたが、ここでは出土遺物を時期別に整理した。小片のものが多数を占め、明確な時期比定は困難であるが、器種、器形、調整、胎土等の特徴から弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世という非常に大雑把な時期区分により示したものである（Fig.22、23）。

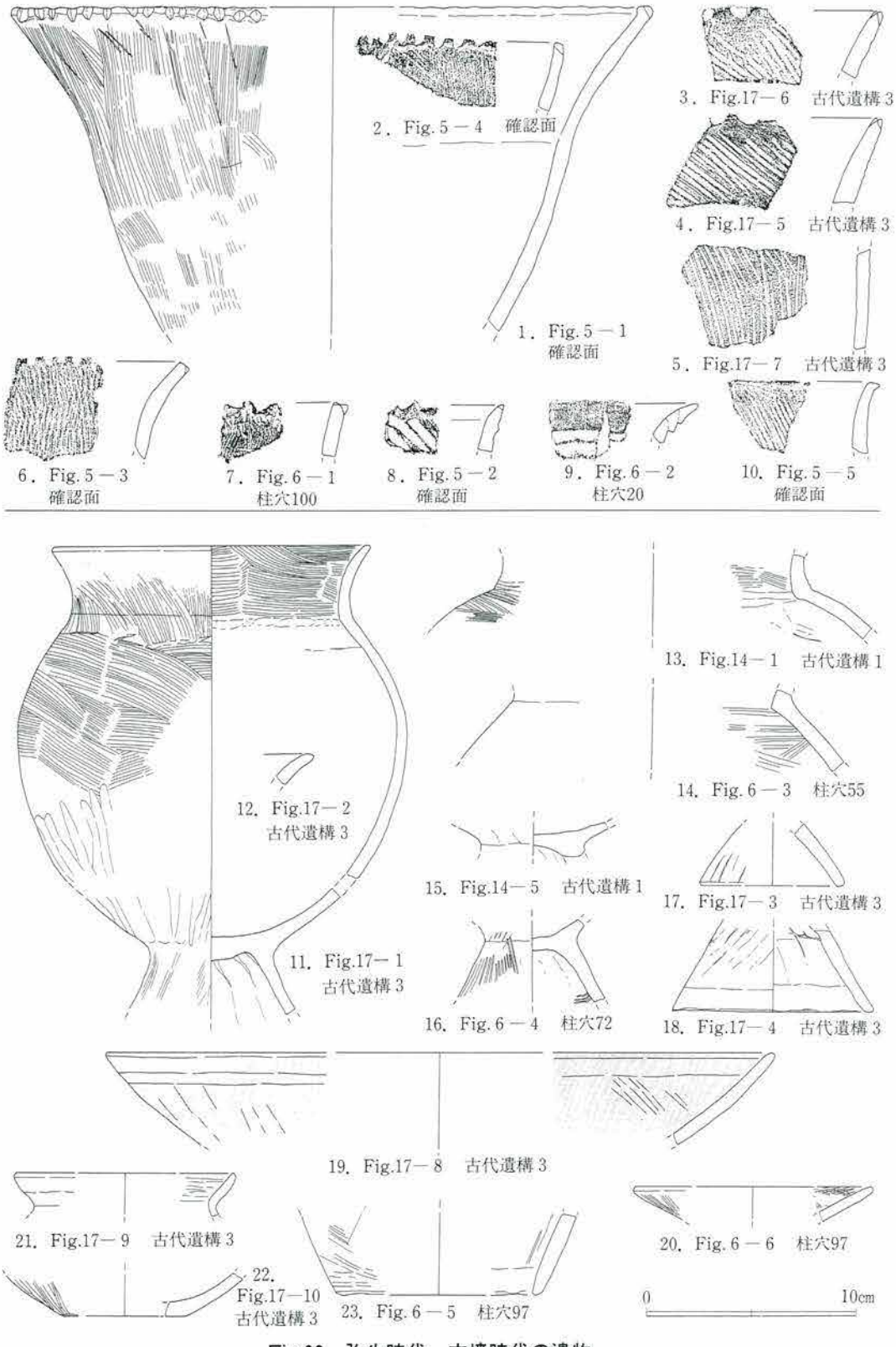


Fig.22 弥生時代、古墳時代の遺物

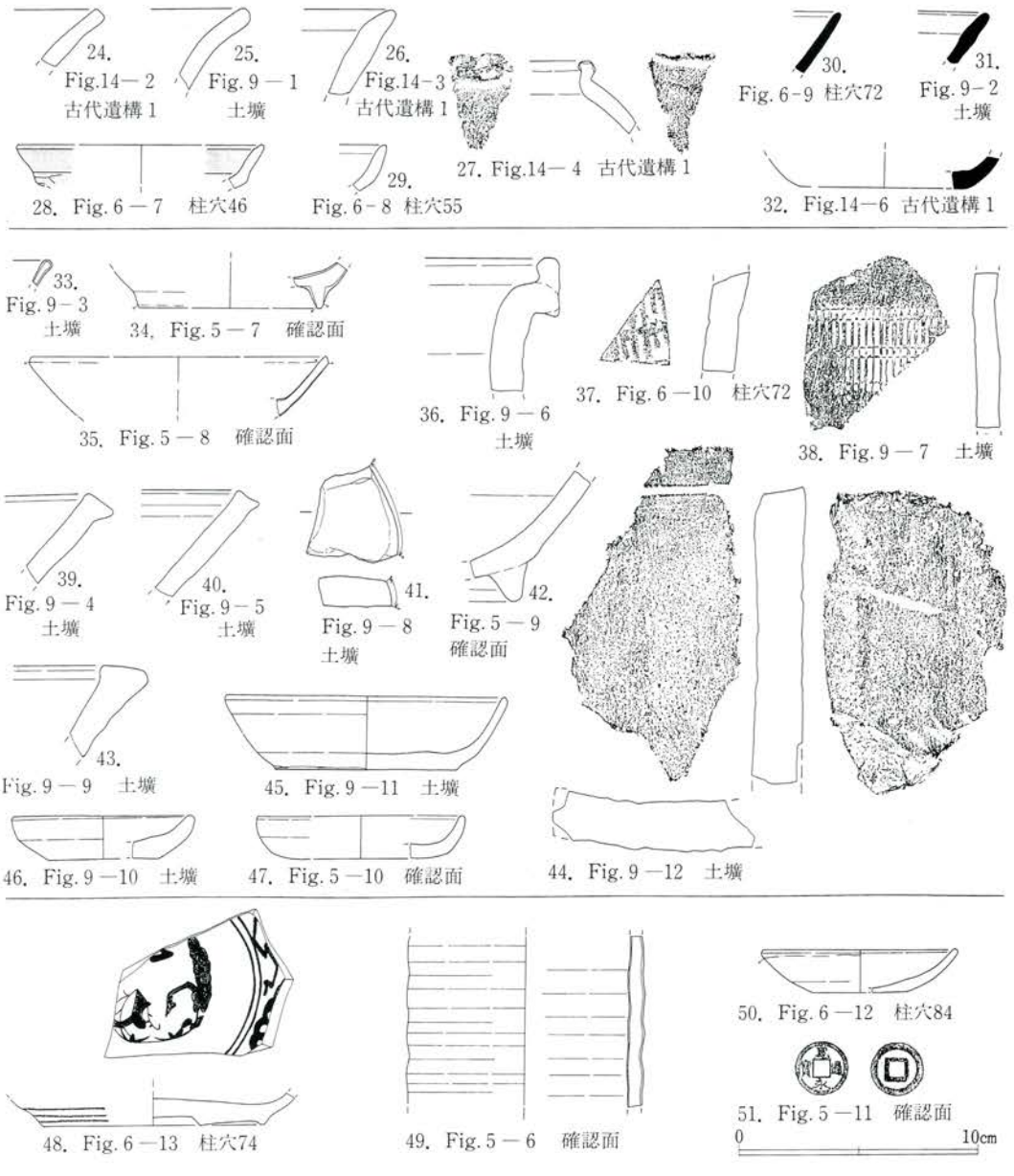


Fig.23　奈良・平安時代、中世、近世の遺物

尚、ここでは鉄製品、軽石、砥石等は除外している。

1～10は弥生時代の土器片であり、中期後半（宮ノ台期）に属するものが主体を占めている。11～23は古墳時代であり、前期（五領期）に属するものが主体を占める。11、12、17、18、19、21、22は古代遺構3からの一括資料である。23は後期（鬼高期）のものである。24～32は奈良・平安時代であり、8～9世紀を中心としたものである。33～47は中世であり、14世紀を中心とした時期。48～51は近世の所産である。尚、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）からの御教示では、48は肥前陶

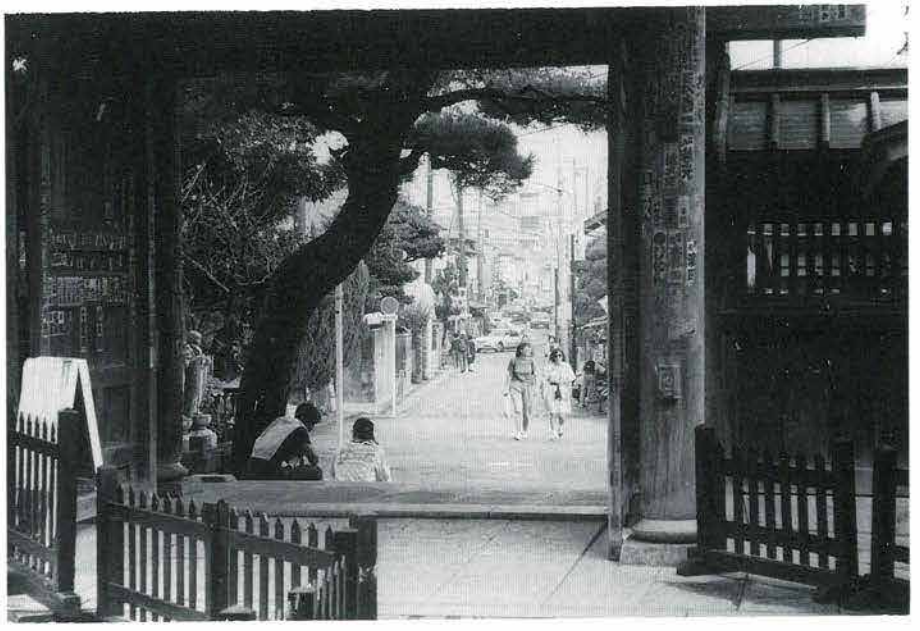
磁であり18世紀後半～19世紀初頭、49は大川内山鍋島藩窯の製品に極めて類似しており19世紀代、50は関西系の製品で19世紀代という年代観を御指摘頂いた。

以上、本地点の調査成果から若干の考察をあたえてきた。長谷寺との関係を明瞭に示すような資料を得ることはできなかったが、「長谷観音堂周辺遺跡（No.296）」区域内における新たな知見を得ることができた。当該区域における発掘調査は今回が最初であり、今後の資料の蓄積に期待したい。

《註》

1）馬淵和雄氏はこのような陶片の用途を「すりこぎの代用品」と想定している。馬淵和雄「すりこぎのあいかた―すりこぎに替わるもの―」『青山考古　第11号』　青山考古学会　1993．10

2）料理の為の移動可能な火処の可能性も指摘されている。斉木秀雄「囲炉裏考―構造上の２～３の問題点について―」『中世都市研究第２号』　中世都市研究同人会　1992．12

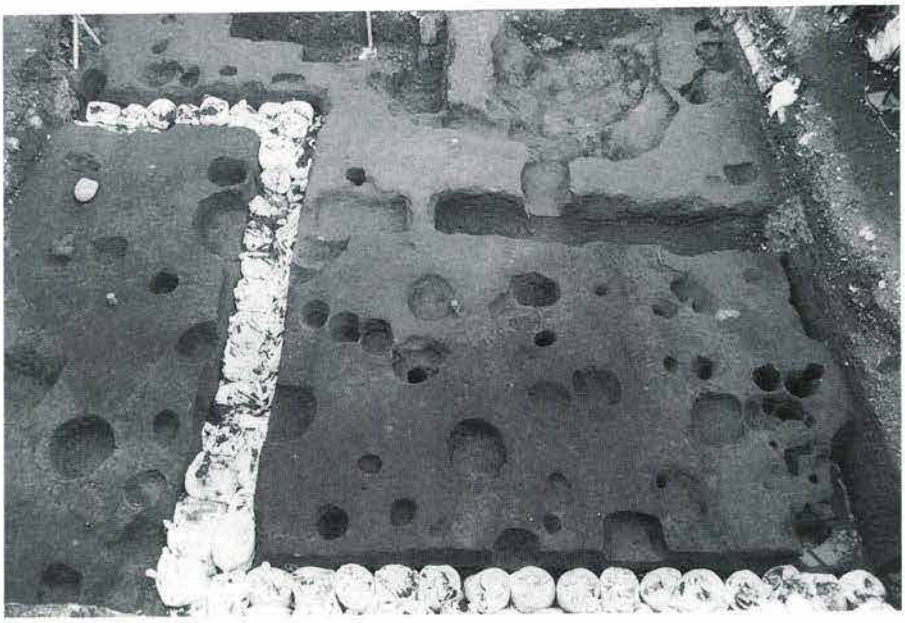


▲1．長谷寺総門から参道を臨む。

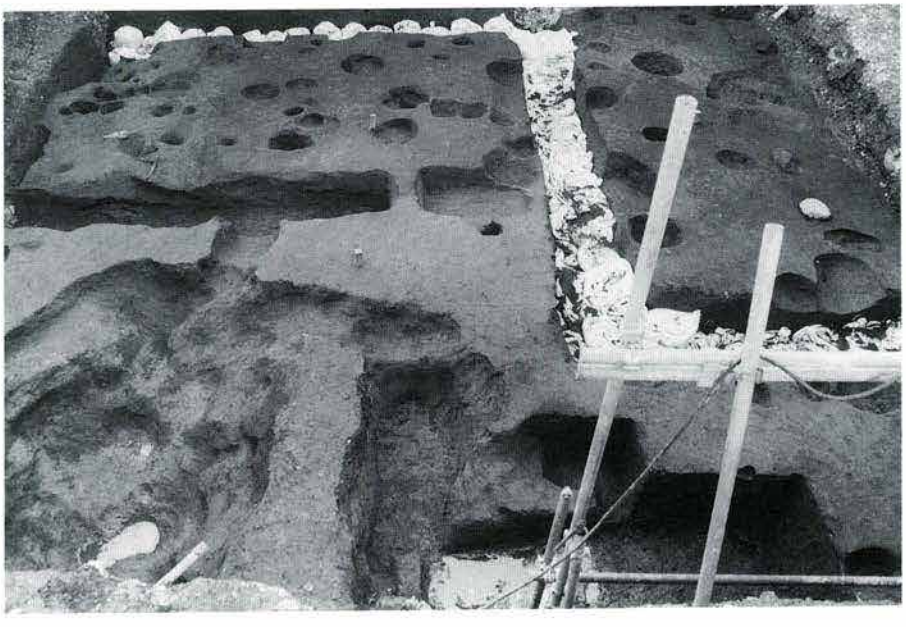
▲2．長谷交差点から参道、総門を臨む。

▲1．遺構確認状況(西から)。

▲2．同上(東から)。



▲1．中世遺構全景(西から)。

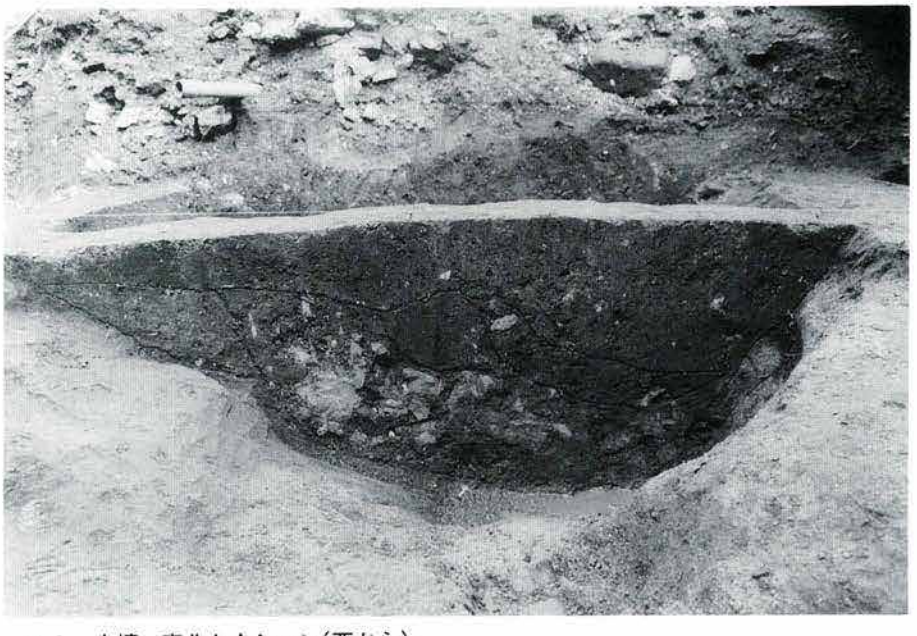


▲2．同上(東から)。

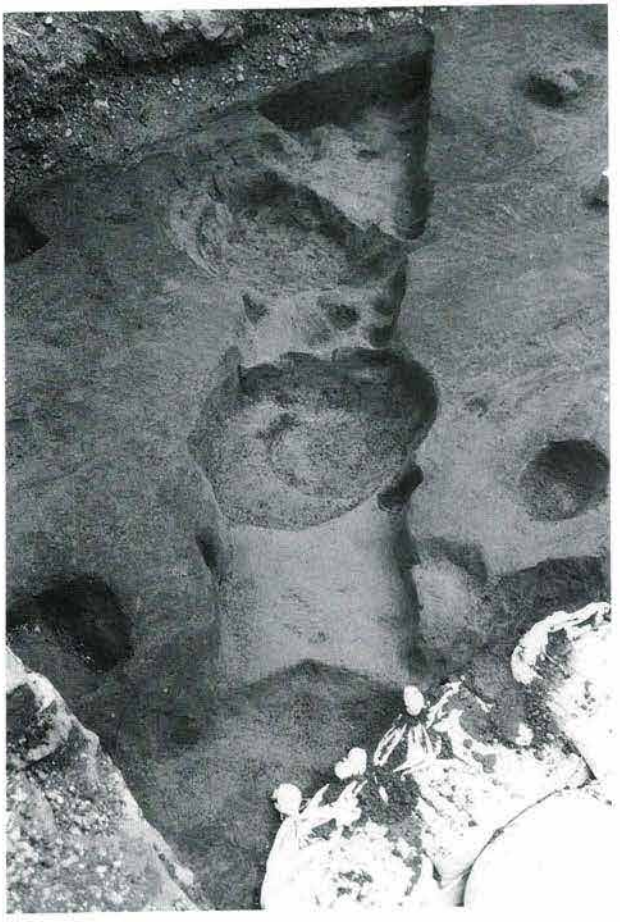
▲1．土壙(西から)。

▲2．同上(南から)。

▲1．土壙、東西セクション(南から)。

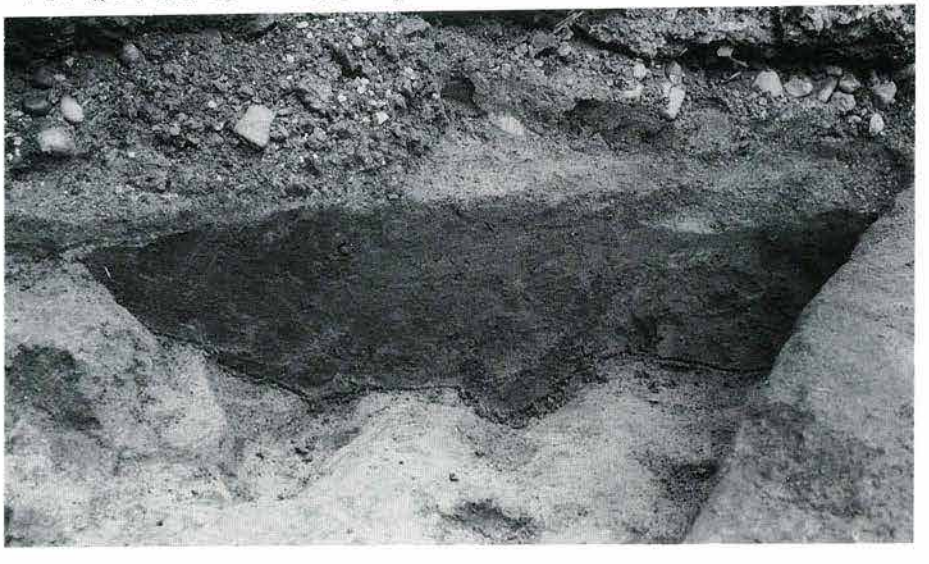


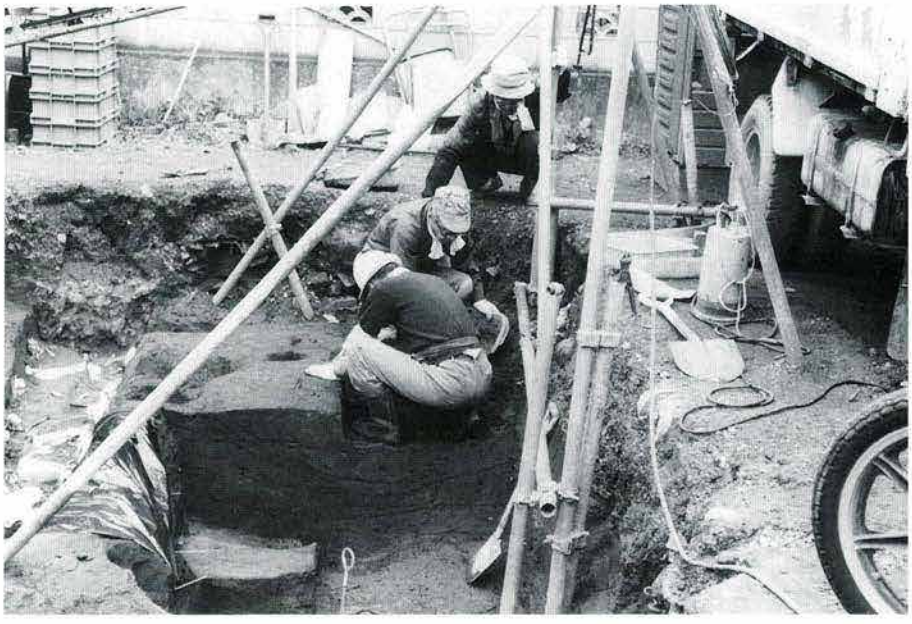
▲2．土壙、南北セクション(西から)。



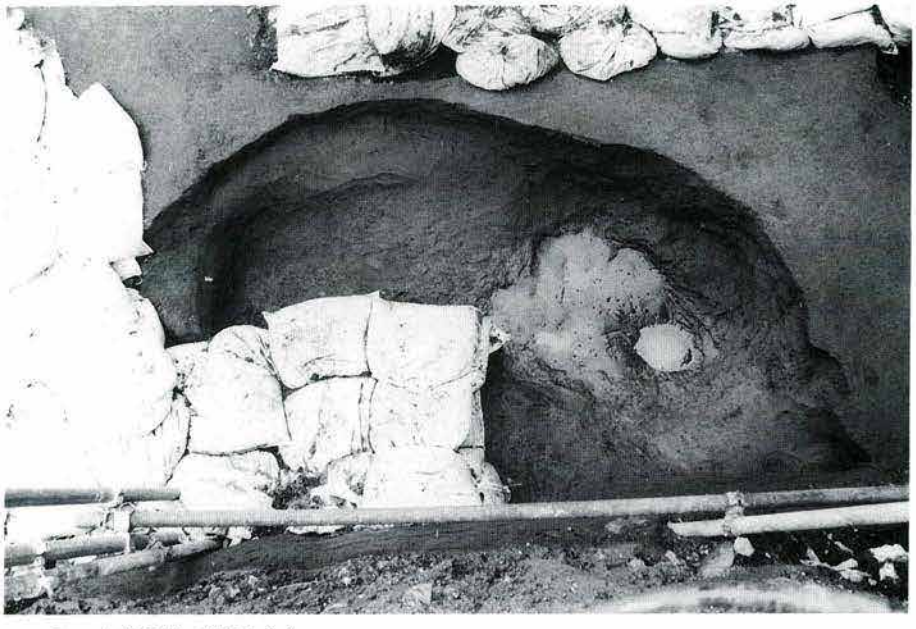
◀1．溝2(南西から)。

▼2．溝2、東西セクション(南から)。

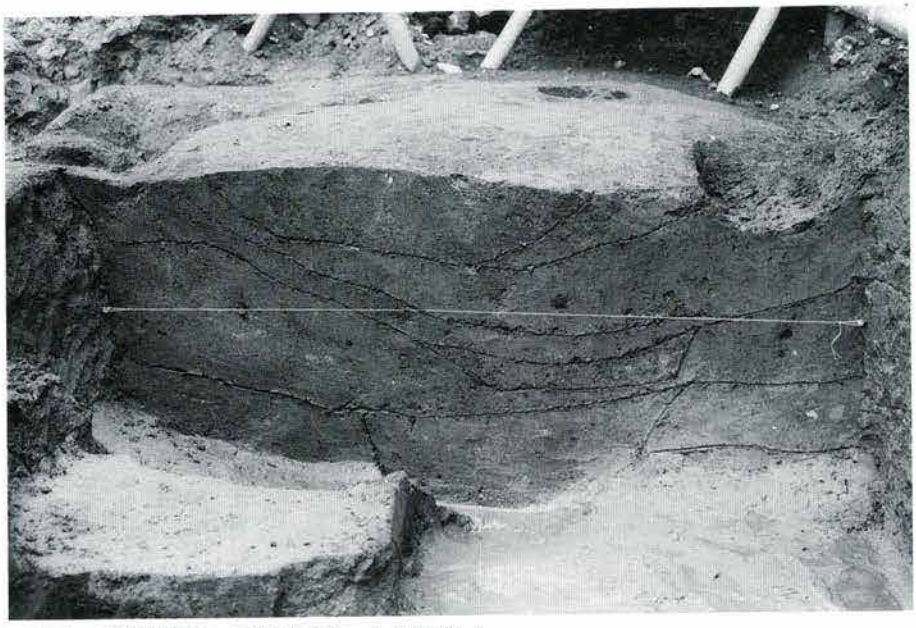




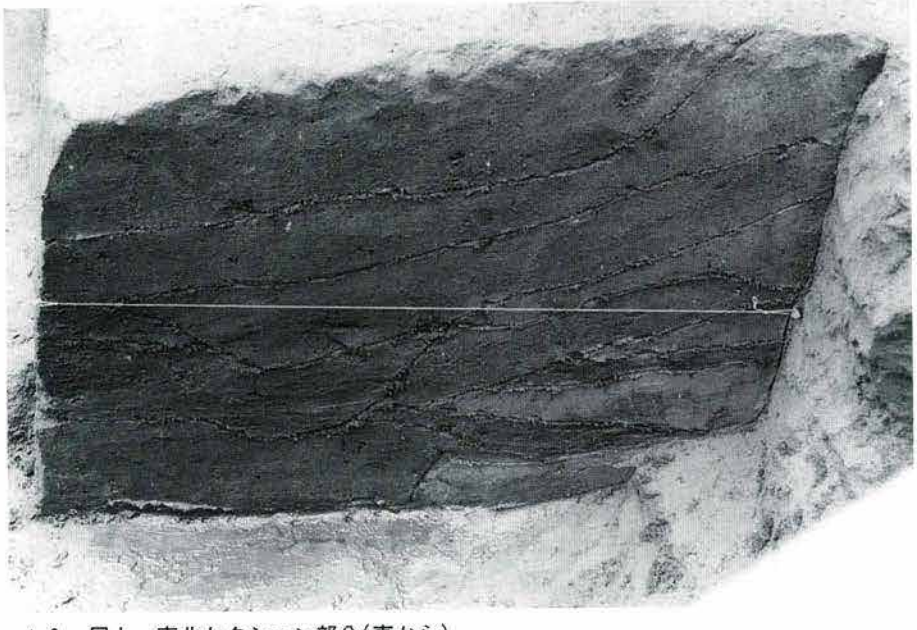
▲1．古代遺構1、掘り下げ状況スナップ(南から)。



▲2．古代遺構1(東から)。

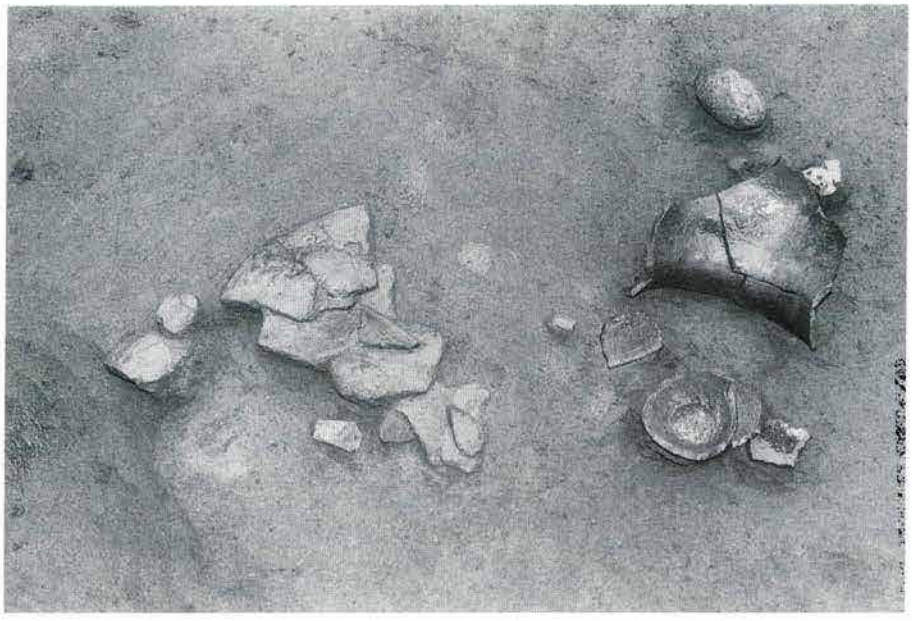


▲1．古代遺構1、東西セクション(南から)。

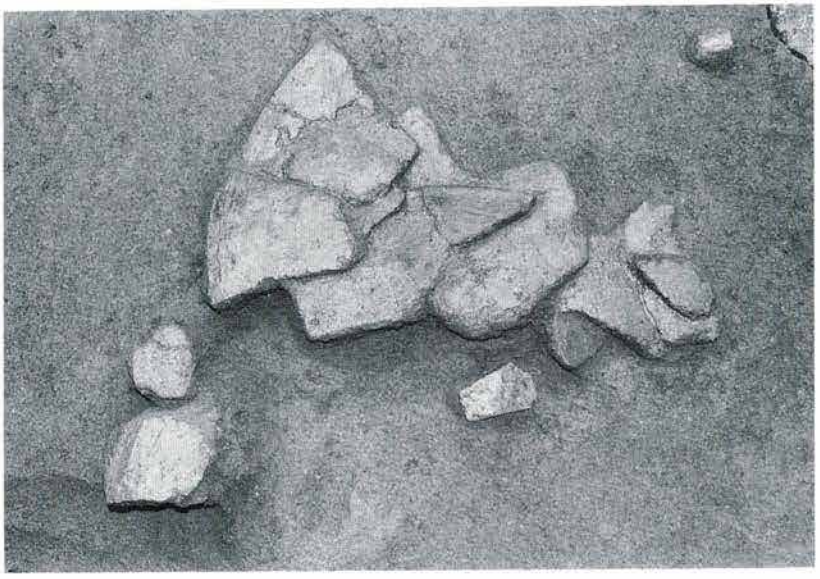


▲2．同上、南北セクション部分(東から)。

▲1．古代遺構3、土師器検出時(南から)。



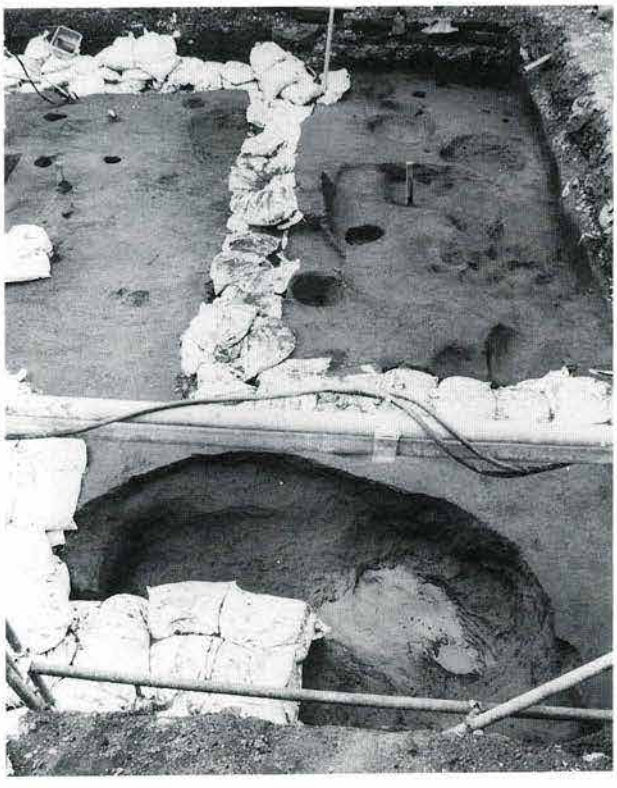
▲2．同上、土師器出土状況(西から)。



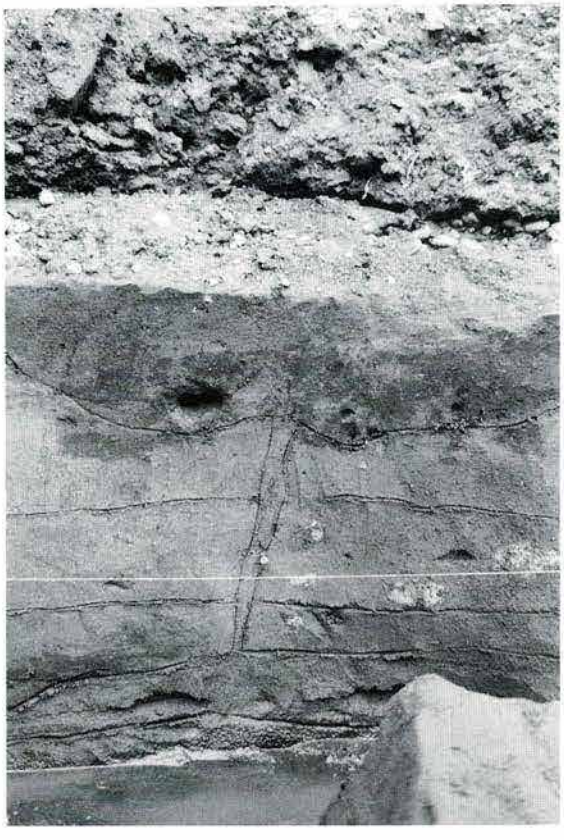
▲1．古代遺構3、高坏出土状況(西から)。

▲2．同上、台付甕、軽石出土状況(北から)。

▲1．古代遺構3、完掘状況(南から)。

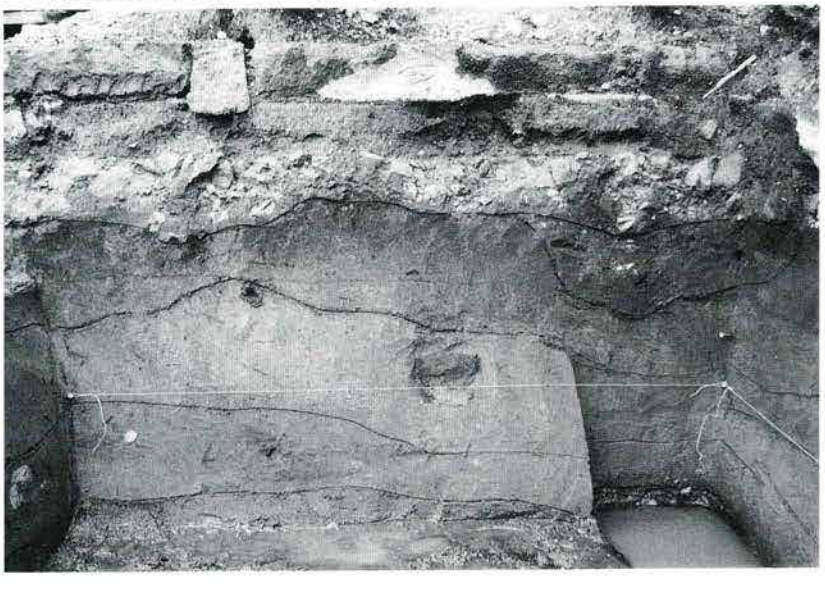


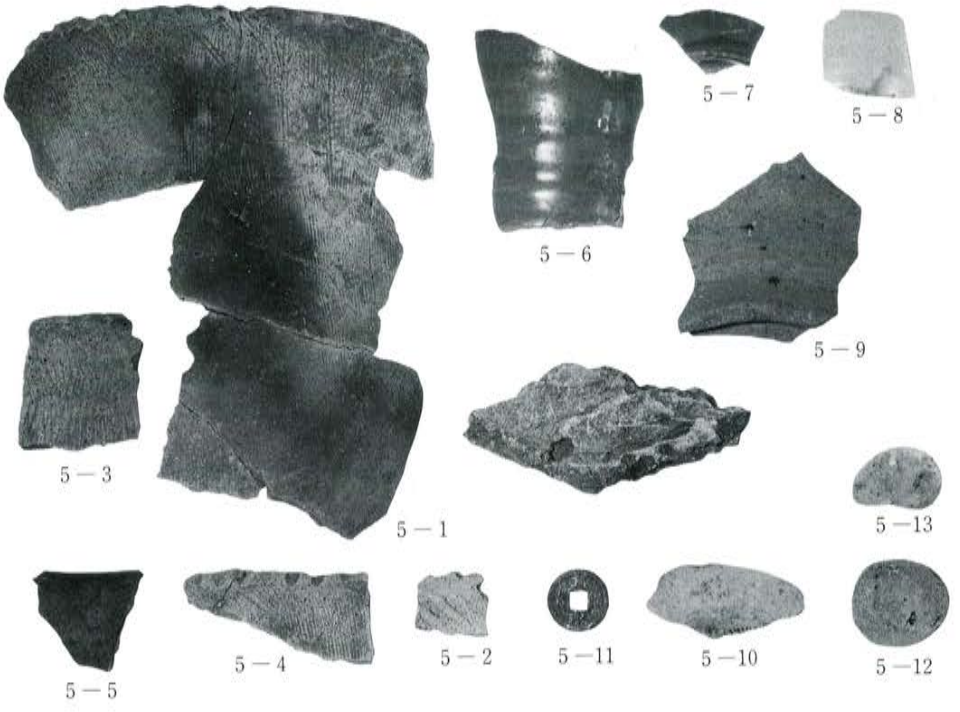
◀2．中世以前遺構全景(東から)。



◀1．調査区北壁セクション(部分)。

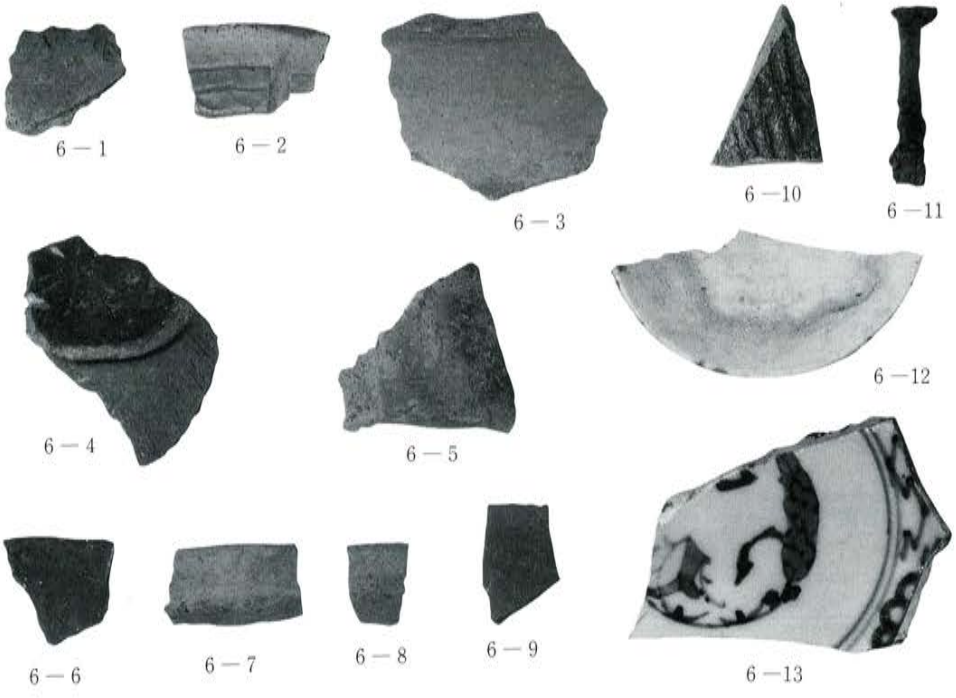
▼2．調査区西壁セクション(部分)。





▲1．確認面出土遺物

▼2．柱穴出土遺物



9－1

9－2

9－3

9－4

9－5

9－8

9－6

9－7

9－12

9－9

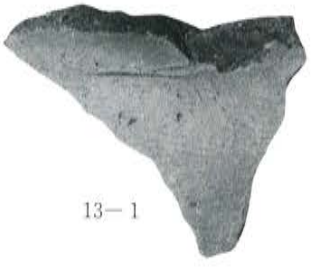
常滑

9－10

9－11

▲1．土壙出土遺物

▼2．古代遺構1出土遺物


13－1

13－2

13－3

13－4

13－7

13－5

13－6

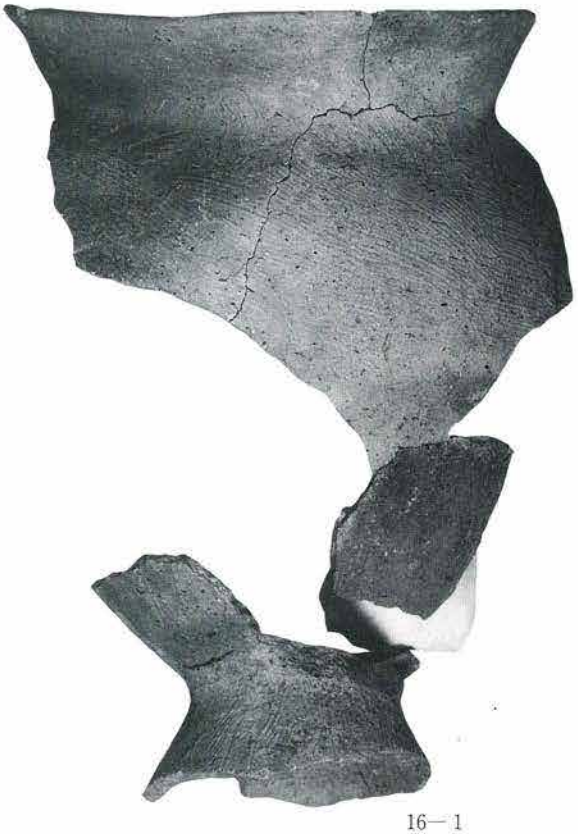
13－9

PL.15

16－5

16－6

16－7

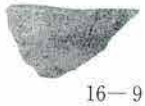


16－1

16－2

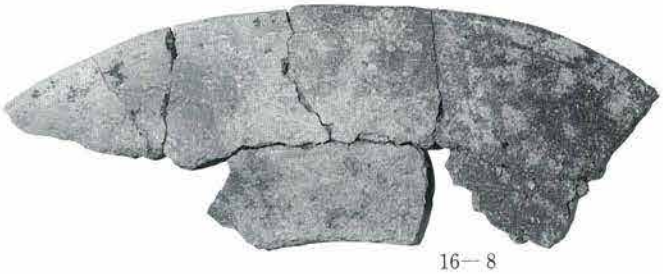
16－3

16－4



16－9

16－10

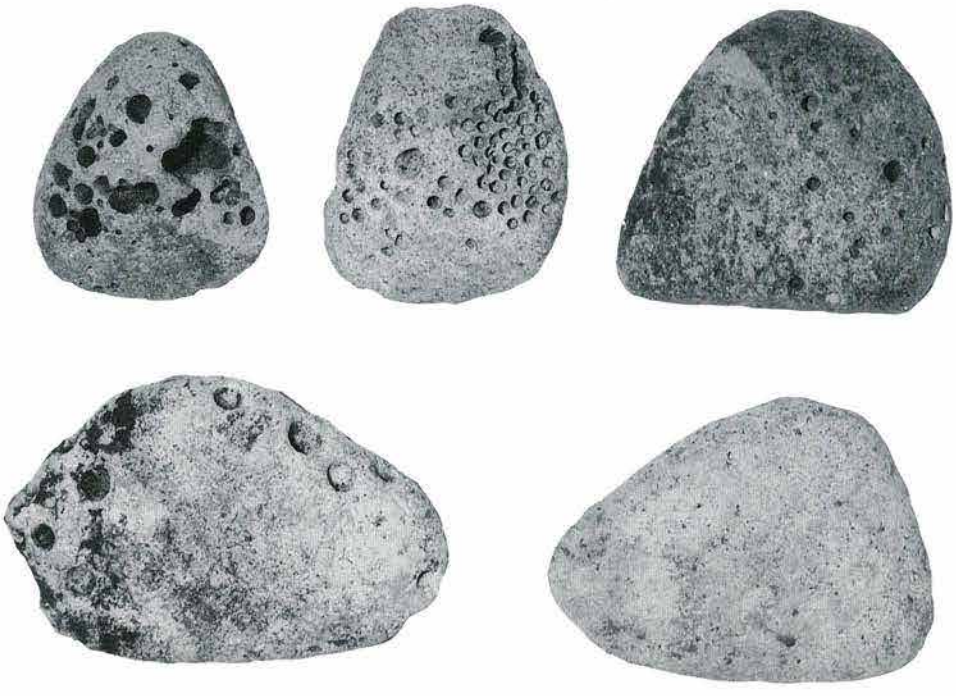


16－8

16－11

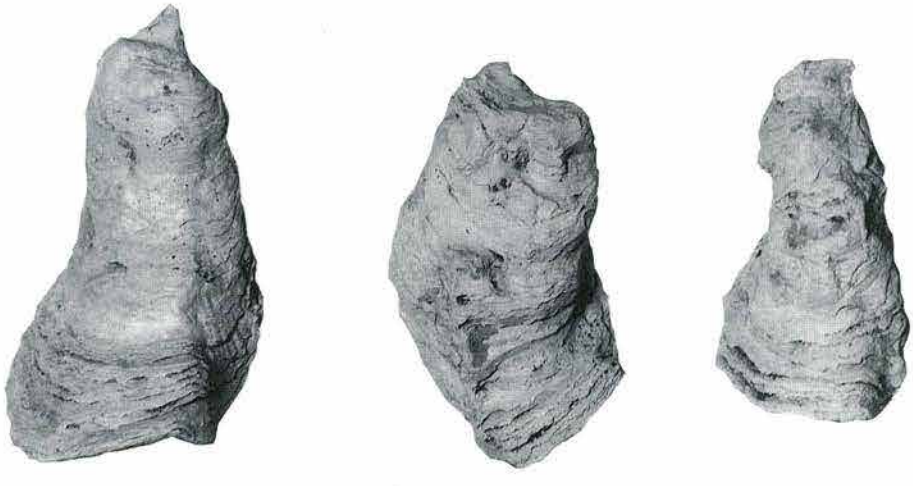
16－12

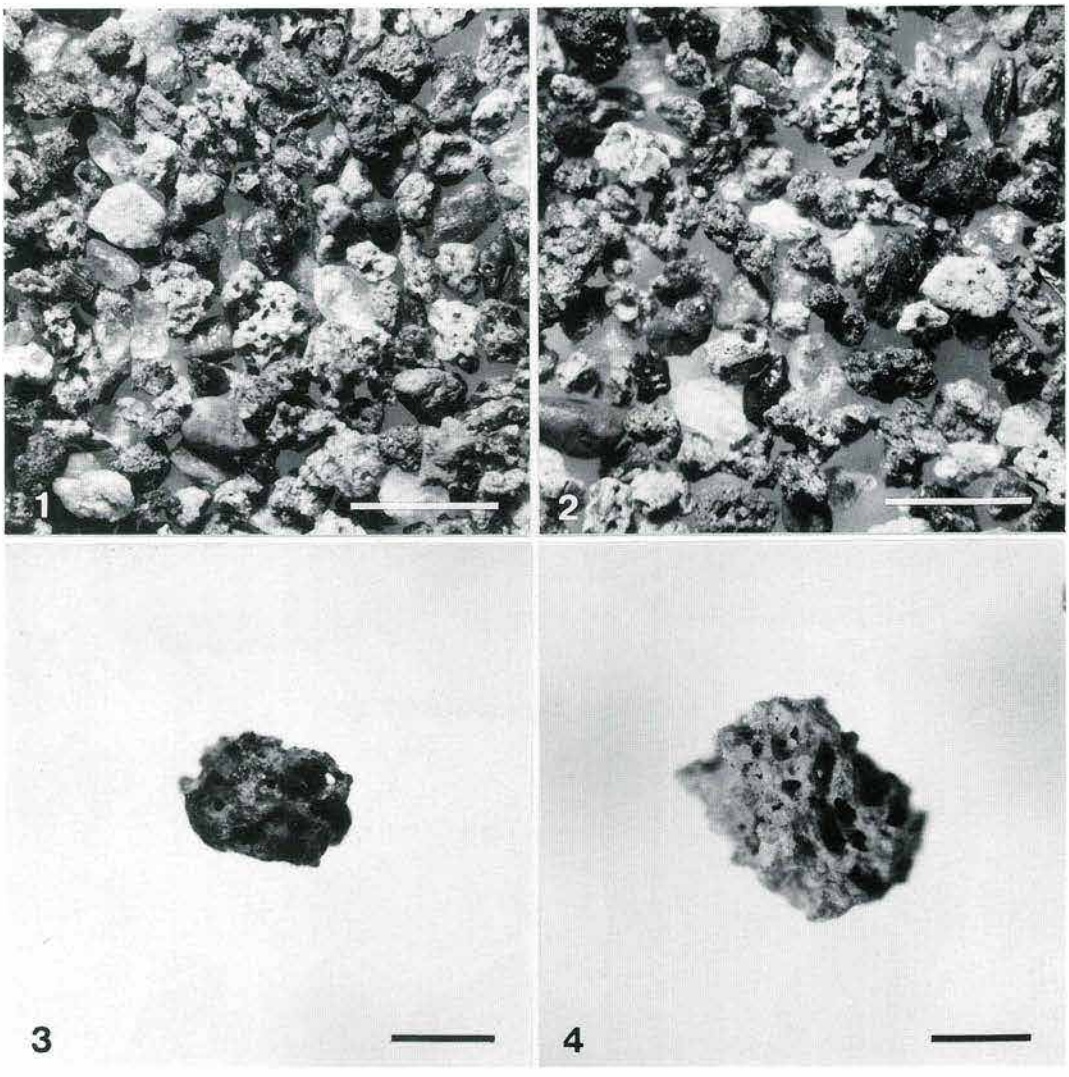
▲古代遺構 3 出土遺物



▲1．トレンチ出土遺物(凝灰質泥岩)

▼2．トレンチ出土遺物(イワガキ)





堆積物の実体顕微鏡写真

1:堆積物全体(ｽｹｰﾙ:2.0mm)　2:堆積物全体(ｽｹｰﾙ:2.0mm)
3:スコリア(ｽｹｰﾙ:0.5mm)　4:風化スコリア(ｽｹｰﾙ:0.5mm)

7. 妙本寺遺跡（No.232）

大町一丁目1146番地点

例　言

1．本報は、鎌倉市大町一丁目1146番に所在する住宅建築に伴う発掘調査の報告である。

2．発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が平成４年12月15日から12月22日にかけて実施した。

3．本報の執筆は、第１章を田代郁夫、第２章を土屋浩美、第３、４章を継　実が行なった。また、資料整理及び図版作成には土屋浩美・田代幸子・早野滋子・浜野洋一・佐々木靖・松山敬一朗・遠藤雅一があたった。

4．本報に使用した写真は、遺構を継　実が、遺物を佐々木靖が撮影した。

5．調査体制は以下のとおりである。

調査主任　原　廣志

調　査　員　　継　実

調査補助員　シルバー人材センター鎌倉市高齢者事業団

6．発掘調査及び本書作成に際し、下記の方々よりご協力、ご教示を賜った。記して深く感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

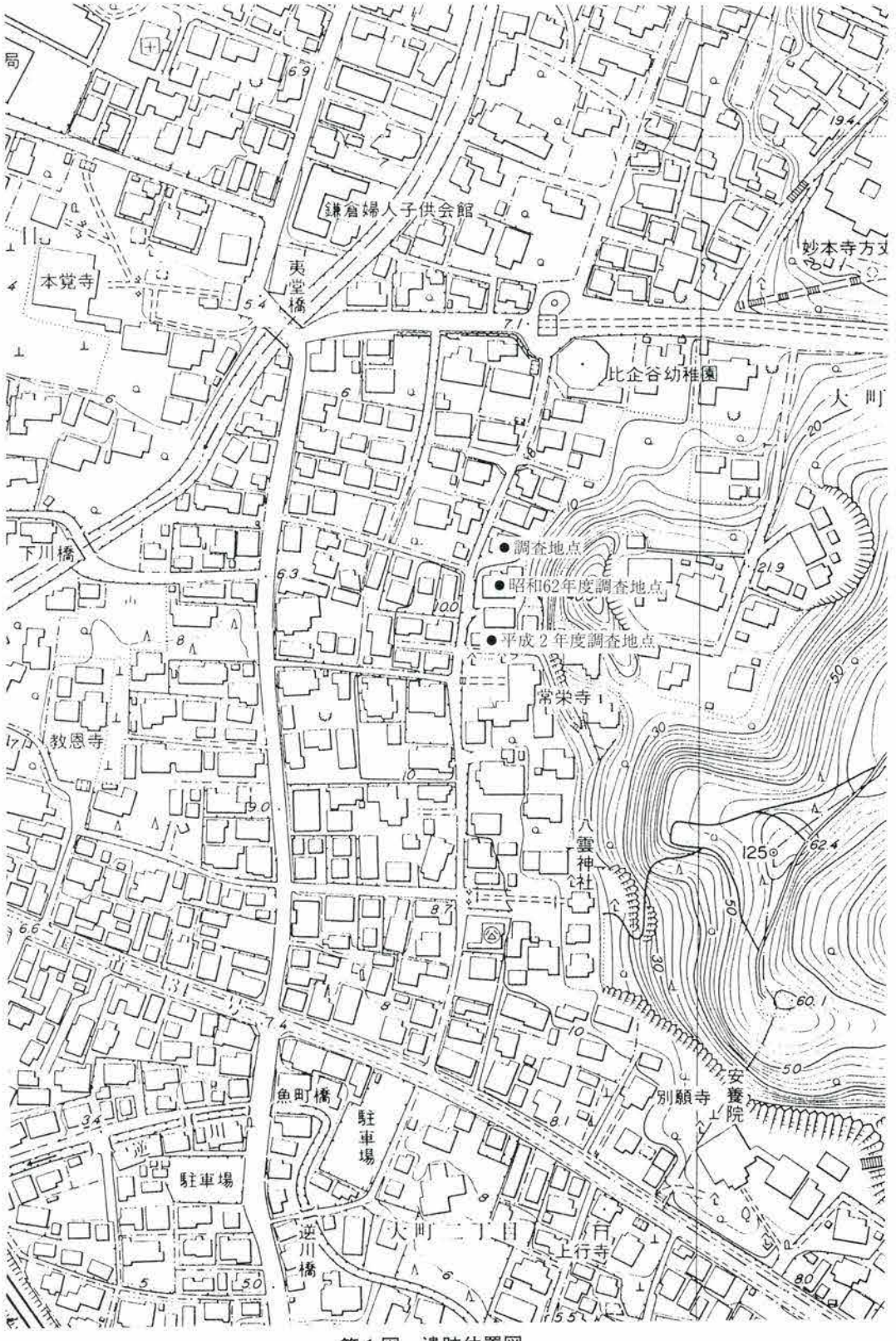
中田　英（神奈川県教育委員会）・松尾宣方・玉林美男・永井正憲・馬淵和夫・福田　誠（鎌倉市教育委員会）・大三輪龍彦・手塚直樹・河野真知郎・斉木秀雄・宮田　真・宗臺秀明・大河内勉・木村美代治・原　廣志・菊川英政・宗臺富貴子・瀬田哲夫・清水菜穂・菊川　泉・汐見一夫・佐藤仁彦・大坪聖子・シルバー人材センター鎌倉市高齢者事業団（山下陽一郎・原田昌幸）

目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……167
第２章　調査の経過と検出した遺構 ……167
第３章　出土遺物 ……170
第４章　まとめ ……173

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 ……166
第２図　調査区全体図 ……169
第３図　出土遺物 ……171


鎌倉婦人子供会館
本覚寺
夷堂橋
妙本寺方
比企谷幼稚園
大町
下川橋
●調査地点
●昭和62年度調査地点
●平成2年度調査地点
常栄寺
教恩寺
八雲神社
安養院
別願寺
魚町橋
駐車場
駐車場
逆川橋
大町二丁目
上行寺

第1図　遺跡位置図

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

調査地点は本覚寺山門の東にある夷堂橋を渡り、妙本寺惣門前を南に折れ八雲神社に向かって約100m程行った東側に道路に面してある。南側に近隣して、日蓮宗常栄寺がある。常栄寺は慶長十一年（1606）に妙本寺の末寺として、妙本寺第十四世（あるいは十三世）の自澄院日詔が創建したとされ、調査地点を含めこのあたりは妙本寺のかつての境内の一角にあたる。この妙本寺は、建仁三年（1203）九月、比企一族滅亡の地といわれる。宗祖転法論の霊場とされ、今もこの地を比企ケ谷という。妙本寺は長興山妙本寺と号する日連宗本山。開山は日郎、開基は比企大学三郎能本。文応元年（1260）開創と伝える。本尊は三宝祖師で、現在境内には祖師堂、客殿、庫裏、宝蔵、蛇苦止堂、惣門、二天門、倉庫等が立ち並んでいる。塔頭としては「新編鎌倉志」に十六坊、「風土記稿」では十二坊をあげているが、現在は一坊もない。

この妙本寺の惣門前から調査地点に至る小路は、更に南行すると八雲神社前を通り、かつての大町大路を横切って、更に南へと進むが、ほどなく西へ曲がり、逆川橋あたりで現在の小町大路に合流している。また、小路を妙本寺惣門から北に辿ると200m程で西に折れ、現在の小町大路に合流しているが、かつては南行したまま、滑川を越えて宝戒寺近くまで通じていたという。

調査地点の背後には、比企ケ谷を抱えた丘陵の崖面が迫っている。この丘陵は、南を大町大路に限られ、東の名越へと続く。調査地点は若宮大路を中心とする鎌倉の平野部の東限に位置し、材木座海浜地域と内陸地域（鎌倉の中心）との接点にあたる地域である。妙本寺の北西に近隣する本覚寺の山門前を流れる滑川には本覚寺夷堂に由来する夷堂橋が架けられている。この夷堂橋を境として、北は小町、南は大町である。

今回の調査地点の極近隣で小範囲ではあるが、二ケ所の地点でかつて調査が実施された。すなわち、1988年に大町一丁目1158番１に於て、1990年に大町一丁目1158番５に於てである。

尚、調査区内セクションポイントｇ－ｇ′はそれぞれ座標値を持っている。座標値はｇがＸ＝－76159.765、Ｙ＝－25080.477、ｇ′がＸ＝－76162.76、Ｙ＝－25082.199である。

第２章　調査の経過と検出した遺構

当該調査区は個人住宅建て替えに伴う比較的狭い範囲のものであり、また深度に関しても建物の構造上基礎が深く入るものではなかったため、掘削深度も浅いものであった。そのため調査は地業層を１面検出したほかは、中世の遺構の存在を確認するに留まった。

調査に当たってはまず現地表下20cm程堆積する表土を重機により掘り下げた後25～30cm程の厚さをもって堆積する中近世の遺物包含層を人力により掘り下げた。その結果土丹地業層を検出した。この地業層の上面を第１面とした。

1．第1面より上層の遺構

・1号方形竪穴建築址

調査区東隅より検出。調査地に於てはプランは不明瞭であった。調査壁の観察によれば遺構は確認面上層の中世の包含層から掘り込まれていることがわかる。覆土は黒褐色土で土丹粒子の包含量は少ない。尚、断面の観察によれば、壁の40cm内側に土丹ブロック層が検出された。これについては土層図a－a′を参照されたいが、4層とその内側の土丹ブロック層の境が遺構の掘り込み面とほぼ平行しており、建物としての壁である可能性が高く、4層は裏込であると考えられる。床面は確認面より70cm下層にて掘削深度の限界となったために、床面の確認はできなかった。

2．第1面検出の遺構

第1面では方形竪穴建築址2棟及び南北方向に走る溝1条を検出した。

・2号方形竪穴建築址

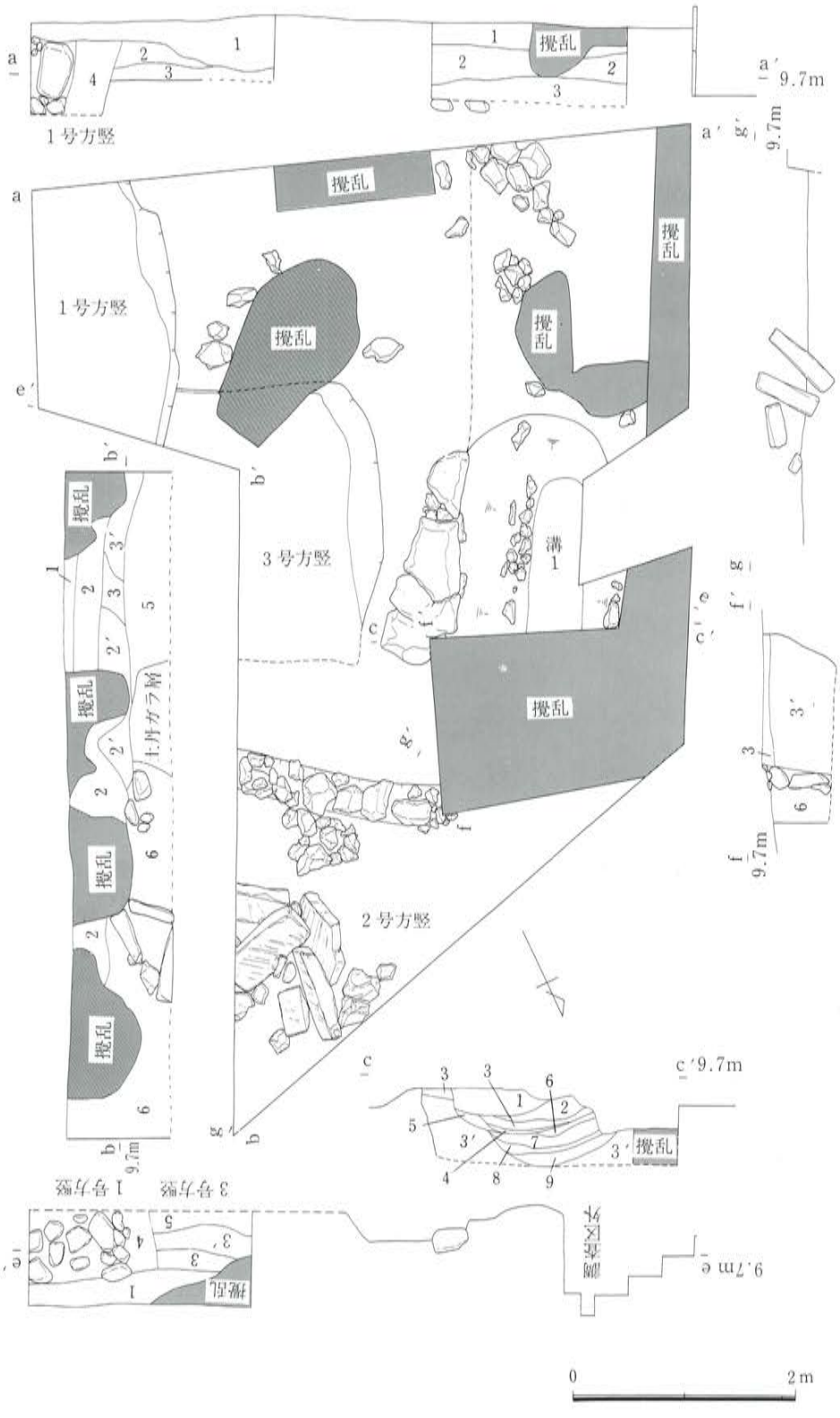
プラン、掘り込み面共に不明瞭であった。しかし、調査区北壁の土層堆積を観察した結果、第1面に伴う遺構と考えられる。調査区北側に僅かに検出されたため、全体の状況は不明であるが、方形竪穴建築址の壁材と考えられる砂質凝灰岩の切石が散乱する形で検出された。切石は全部で7個検出されたが、内、ほぼ原形を保っていたのは4個であった。切石の規模は平面長軸90cm、短軸60cmの長方形で厚さは20cmであった。掘削深度の限界を越えるため、床面の状況及び切石の完全な検出は不可能であったが、ボーリング棒による観察の結果、第1面下98cmの所で床と思われる硬化面にぶつかった。断面の観察によれば、裏込と思われる部分に土丹ブロックが検出された。土丹ブロックの内側の覆土は暗灰褐色土及び直径2cm以下の土丹ブロックにて構成され、木炭、中世の遺物を含む。

・3号方形竪穴建築址

調査区東側より検出。2号方形竪穴建築址で述べたようにプランの確認は困難であったが、調査区壁に於て第1面を構成する土丹地業層から掘り込まれていることが確認された。覆土は暗褐色土層で、土丹粒子をやや多く含む。方形竪穴建築址の覆土に於て、明確な裏込は確認できなかった。確認面より40cm下にて掘削深度の限界となり、床面までは確認できなかった。

・溝－1

攪乱によって切られているため、現況で確認しうる範囲では、溝の規模は南北4.5m、幅1.5m以上であり、調査区西寄り南北に走っている。（現在、調査地点の西隣にある路地と殆ど平行する。）断面より観察すると、溝は第1面の土丹地業層から掘り込まれる。溝には堆積土層から、新旧2時期あると考えられ、断面の形態はいずれもU字状を呈する。上の溝の覆土は暗褐色土層で土丹ブロックを多量に含み、下の溝の覆土は黄褐色粘質土層で土丹ブロックを含む。尚、溝の上端東肩部分には直径40～60cmの土丹ブロックが列状に検出されており、縁石の可能性がある。



第2図　調査区全体図

第３章　　出土遺物

出土遺物の総数はコンテナ1/3箱程度である。

・第１面上出土遺物（３図―１～15）

第１面上からはかわらけ、青磁（碗、盤）、瀬戸（折縁皿、皿）、常滑（甕）、魚住（捏鉢）、山茶碗窯系捏鉢、瓦、砥石などが出土した。殆どが小片である。

かわらけ（３図―１～７）

かわらけの出土量は、完形のものを含む総破片数75点である。かわらけの法量については表―１を参照されたい。１、２共にロクロ整形品であるが、焼成後に体部下半から底部にかけてヘラ状の道具で調整されている。１は底部が丸みを持つほどに整形がなされ、あたかも手捏ねかわらけのような側面観を呈する。このようなかわらけの出土例は今迄に報告されていない。４は口唇部の一部に煤の付着が見られる。灯明皿として使用されたものであろう。６は焼成後に底部中心とやや体部に偏った位置に２箇所穿孔されている。２、７の外底面には所謂スノコ状圧痕が見られる。全ての内底面に指頭によるナデが見られる。胎土はいずれも白色針状物、黒色微粒子などを微量含むきめ細かい粉質のものである。

青磁（３図―８）

青磁の出土量は碗の底部破片が２点、体部破片が４点、盤の口縁部破片が１点である。８は青磁碗の口縁部破片である。表面には薄灰緑色の施釉が見られる。法量を復元できる破片ではない。

瀬戸（３図―９、10）

瀬戸製品の出土量は、折縁皿の口縁部破片が２点、器種不明の胴部破片が４点である。９は皿口縁部破片、10は折縁皿口縁部破片である。共に表面には薄黄緑色の施釉が見られる。いずれも法量を復元できる破片ではない。

魚住（３図―11）

捏鉢の口縁部破片（11）が１点だけ出土した。法量を復元できる破片ではない。

山茶碗窯系捏鉢（３図―12）

口縁部破片が２点出土した。胎土はやや常滑に近い石粒、石英などを少量含むものである。法量を復元できる破片ではない。

常滑（３図―13、14）

甕の底部破片が２点、胴部破片が24点出土した。13、14共に甕底部破片である。13は復元底径13.8cmである。

砥石（３図―15）

15は仕上げ砥である。

上記の他には、女瓦の破片が１点出土した。

・方形竪穴建築址

1号方竪（3図—16～20）

わずかに調査した覆土中から、かわらけ、青磁、瀬戸、備前、常滑、瓦器碗、瓦質手焙りの破片銭が出土した。

かわらけ（3図—16、17）

かわらけの出土量は破片数66点である。法量は表—1を参照されたい。17は口唇部に煤の付着が見られ、灯明皿として使用されたことが窺える。いずれもロクロ整形品で、内底面には指頭によるナデが見られる。17の外底面には所謂スノコ状圧痕が見られる。胎土は粉質の精良なものである。

瀬戸（3図—18、19）

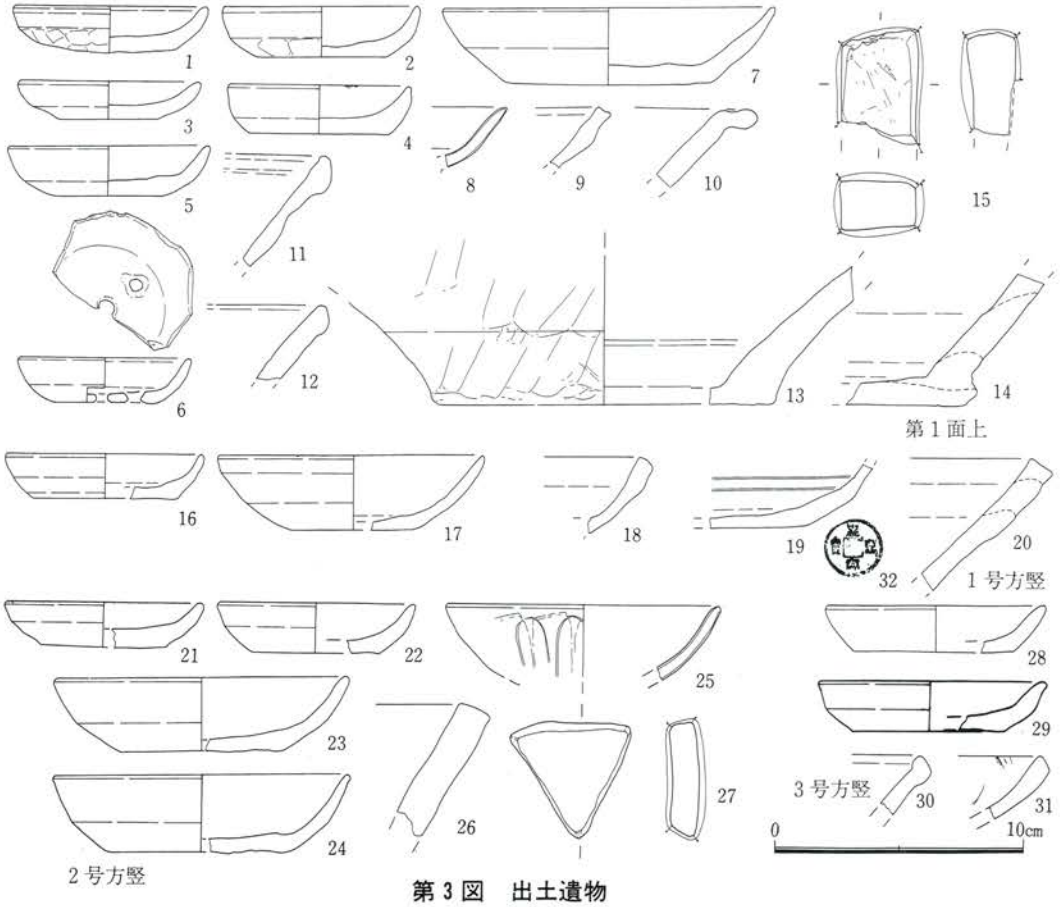
図示したものが全てである。18は灰釉卸皿体部破片、19は緑釉の盤の破片である。

常滑（3図—20）

捏鉢の口縁部片が1点出土した。口唇部は内外にわずかに引き出される。法量の復元は不可能であった。

銭（3図—32）

2点出土している。1点は皇宋通宝、もう1点は腐食がひどく、判別不明である。



第3図　出土遺物

上記した他に、常滑甕破片12点、山茶碗窯系捏鉢体部破片１点、青磁碗破片２点、瓦質手焙り破片２点、瓦器碗破片１点が出土している。

２号方竪（３図―21～27）

出土遺物はかわらけ、青磁、土製手焙り、常滑、山茶碗窯系捏鉢、瓦質製品などが出土している。

かわらけ（３図―21～24）

かわらけの出土量は破片数23点である。法量は表―１を参照されたい。体部側面観はいずれも底部から外反しながら立ち上がり、体部中央で稜を持ち、内彎しながら口縁部に達し、口唇部がわずかに外側に引出されるものである。整形はロクロを使用したものである。23、24の外底面には所謂スノコ状圧痕が見られる。内底面にはいずれも指頭によるナデが見られる。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂等を含む。

青磁（３図―25）

蓮弁碗体部破片が１点出土している。外面の蓮弁文はカンナ状のものにより鎬を削り出した後、花弁を線刻したものである。

土製手焙り（３図―26）

１点のみ出土。胎土は黒雲母、微砂などを含むものである。

常滑（３図―27）

擦常滑が１点出土した。三角形の破片の割れ口がいずれもよく摩耗している。

表―１　かわらけ法量表　（単位はcm）

挿図No.	口　径	底　径	器　高
1	7.8	5.4	2.0
2	(7.6)	(5.2)	2.0
3	(7.2)	(4.0)	1.6
4	(7.2)	(5.6)	2.0
5	(7.8)	(4.2)	2.0
6	(6.8)	(4.0)	1.8
7	(13.2)	(8.0)	3.1
16	(7.8)	(5.8)	1.8
17	(10.6)	(5.0)	3.0
21	(7.8)	(5.0)	1.8
22	(7.8)	(5.0)	2.0
23	(11.6)	(6.6)	3.0
24	(11.8)	(7.2)	3.1
28	(8.8)	(6.4)	1.8
29	(8.8)	(6.2)	2.0

＊カッコ内は復元値

以上、図示したものの他に常滑甕片が３点、山茶碗窯系捏鉢破片が１点出土した。

３号方竪（３図―28～31）

出土遺物はかわらけ、瀬戸、山茶碗窯系捏鉢、常滑、貝殻などである。

かわらけ（３図―28、29）

出土量は破片数12点である。ロクロ整形品で、内底面には指頭によるナデが見られる。胎土は白色針状物、微砂などを含むものである。非常に良く焼き締まっている。

瀬戸（３図―31）

灰釉卸皿の破片が１点出土した。胎土はやや黄味を帯びたものである。

山茶碗窯系捏鉢（3図—30）

1点出土した。胎土は黒色微粒子、灰白色微粒子などを含むやや瀬戸に似た胎土である。法量の復元は不可能であった。

以上、図示したものの他に常滑甕片が4点、貝殻はサザエ、ダンベイキサゴが各1点出土した。

・溝1出土遺物

溝1からは、かわらけ破片17点、常滑甕破片3点が出土したが、図示できる遺物はなかった。

第4章　まとめ

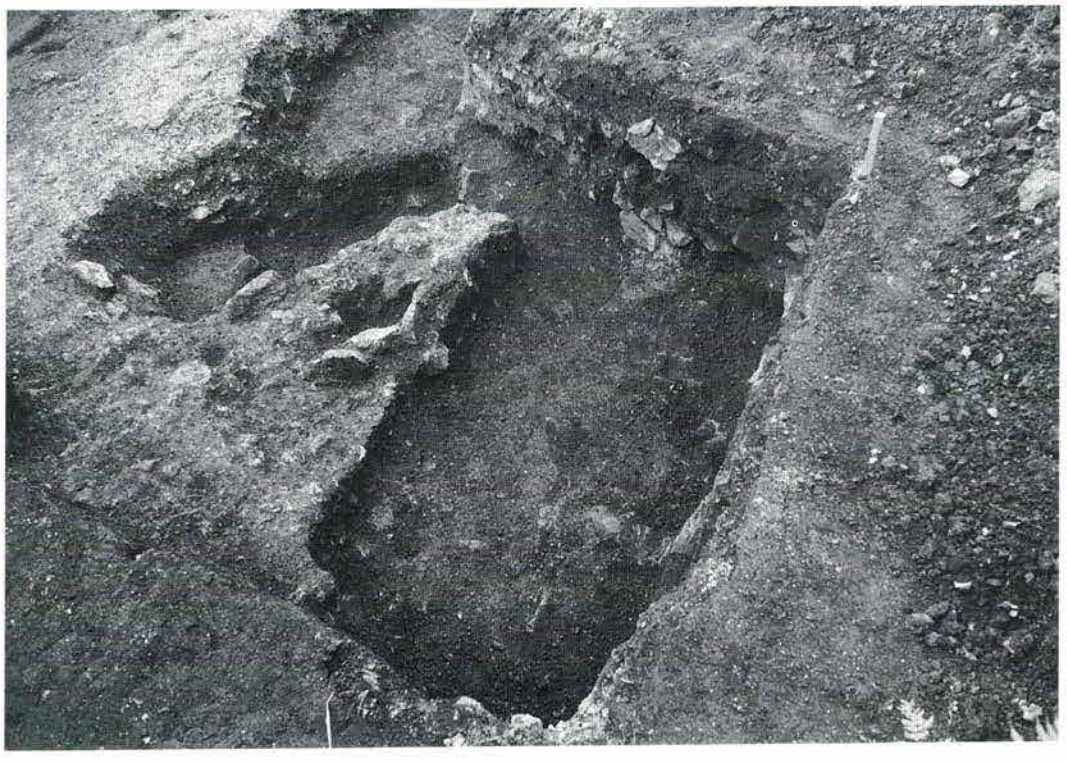
今回調査した遺跡の時期は、土丹地業層及び各遺構とも、かわらけを主とした出土遺物から判断して14世紀後半の年代観が与えられる。

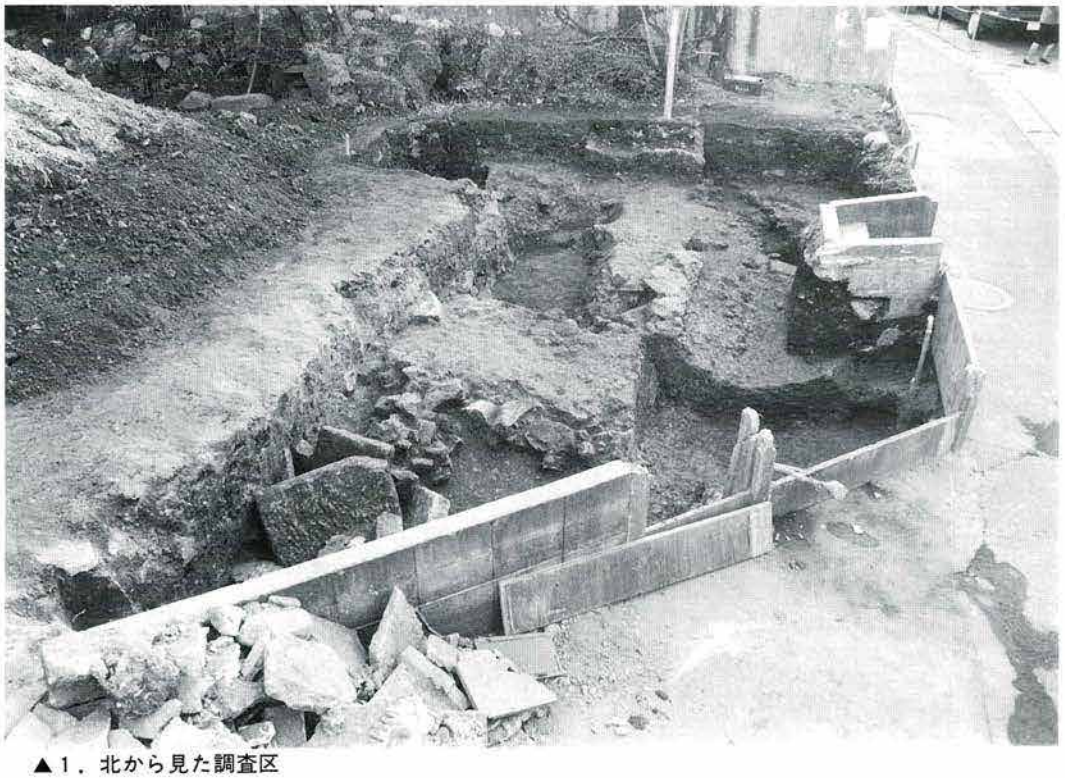
当該地点南隣で昭和62年度に実施された発掘調査では、標高9mから11mにかけて4枚の土丹地業層が検出され、14世紀後半から15世紀前半の年代が与えられる第1面（標高10.7m程度）では、築地塀の基礎と推察される南北に延びる切石列などが検出された。（鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4に収録）今回の調査では、この遺構の延長は検出されなかったが、従来、調査地点の周辺では検出されていなかった方形竪穴建築址を検出した。第2章の冒頭に述べた理由により、遺構の存在を確認するにとどまったが、同時期に調査された若宮大路周辺遺跡群（秋月医院跡地、報告書未刊行）ともども下馬から北側の滑川沿いに方形竪穴建築址群の存在が確認された事は大きな成果である。

図版 1

▲1．調査区全景

▼2．1号方竪





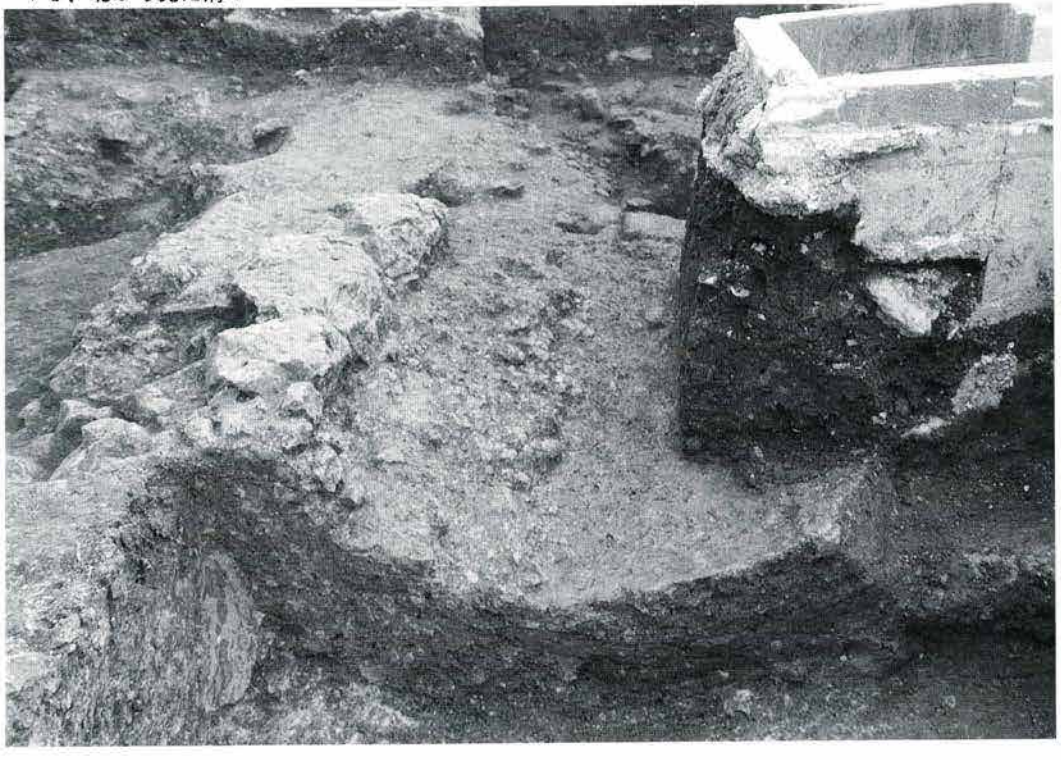
▲1．北から見た調査区

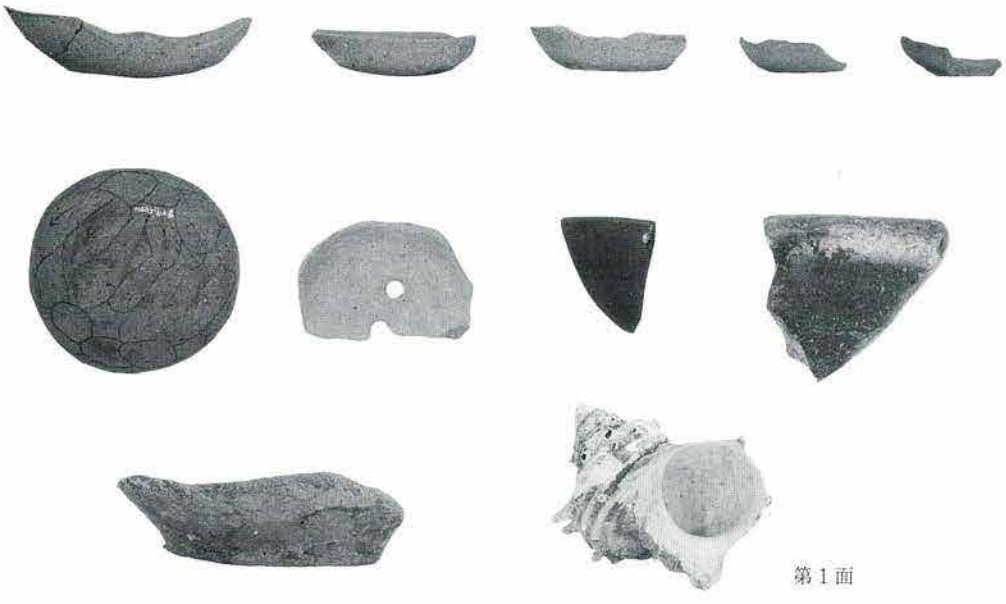
▼2．2号方竪内検出の凝灰岩切石

図版 3

▲1．2号方竪断面

▼2．北から見た溝1





第 1 面

1 号方竪

2 号方竪

3 号方竪

出土遺物

8. 天神山下城（No.358）

山崎字宮廻708番１外地点

例　言

1．本報は、鎌倉市山崎字宮廻708番１外に所在する住宅建築に伴う発掘調査の報告である。

2．発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が平成５年２月２日から２月16日にかけて実施した。

3．本報の執筆は、田代郁夫、浜野洋一が行なった。また、資料整理及び図版作成には土屋浩美・田代幸子・早野滋子・浜野洋一・佐々木靖・松山敬一朗・遠藤雅一があたった。

4．本報に使用使用した写真は、遺構・遺物ともに佐々木靖が撮影した。

5．調査体制は以下のとおりである。

調 査 主 任　田代　郁夫

調　査　員　継　実・熊谷洋一・浜野洋一・佐々木靖・山田健二

調査補助員　松山敬一朗・本田礼・嘉代和夫

6．発掘調査及び本書作成に際し、下記の方々よりご協力、ご教示を賜った。記して深く感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

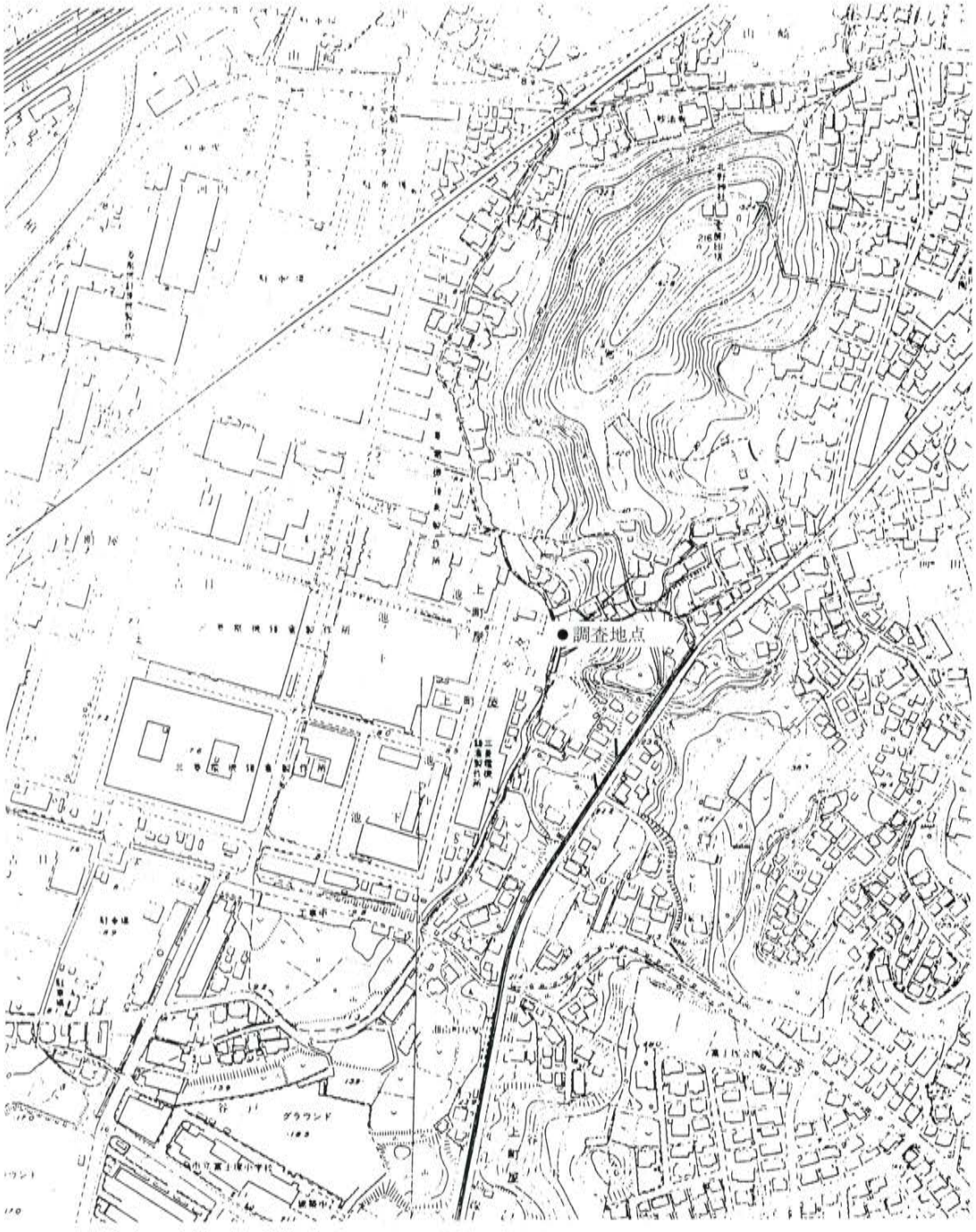
中田　英（神奈川県教育委員会）・松尾宣方・玉林美男・永井正憲・馬淵和夫・福田　誠（鎌倉市教育委員会）・大三輪龍彦・手塚直樹・河野真知郎・斉木秀雄・宮田　真・宗臺秀明・大河内勉・木村美代治・原　廣志・菊川英政・宗臺富貴子・瀬田哲夫・清水菜穂・菊川　泉・汐見一夫・佐藤仁彦・大坪聖子・シルバー人材センター鎌倉市高齢者事業団（山下陽一郎・原田昌幸）

目　次

第１章　遺跡の立地及び周辺の遺跡 ……183
第２章　トレンチ調査 ……184
・まとめ ……184

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 ……182
第２図　遺跡位置図 ……183
第３図　堆積土層図 ……185

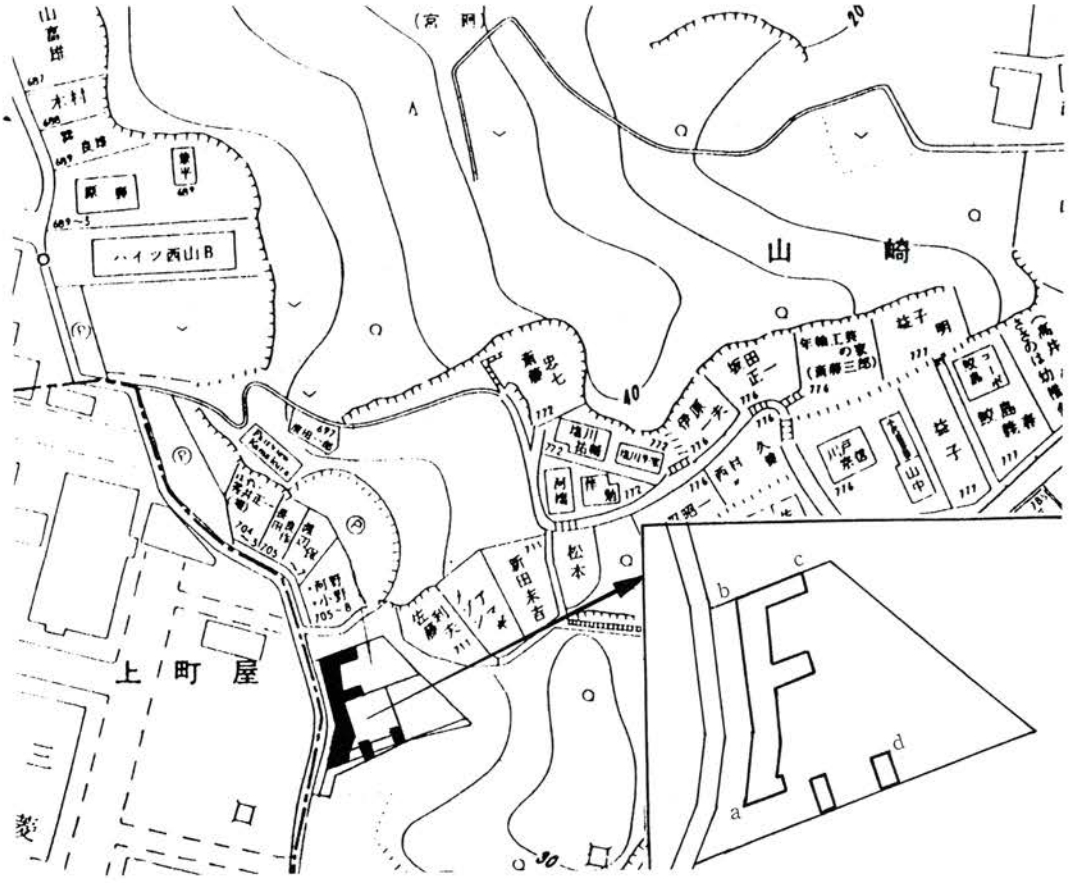


第１図　遺跡位置図

第１章　遺跡の立地及び周辺の遺跡

当遺跡地は、鎌倉市山崎字宮廻708番１の一部ほか２筆に所在し、柏尾川の左岸、舌状に張り出した丘陵の西側直下の小さな谷状を呈する所にある。遺跡の名称は天神山下城No.358遺跡である。調査面積は90㎡である。調査は、平成５年２月２日から同３月15日まで行われた。

遺跡地の前面には柏尾川の氾濫原が広くひろがり、現在はほとんど工場群となっているが、かつては広大な水田地帯であった。調査地点付近の丘陵崖面には、かつて赤星直忠氏らによって確認、あるいは調査された本町上横穴群、上町屋横穴群、山崎横穴群、垣根谷横穴群、清水塚横穴群、東谷戸横穴群、倉久保横穴群等々の古墳時代後～末期の横穴群が多数存在する。



第２図　遺跡位置図

※黒ヌキは調査対象範囲。
※拡大図のアルファベットは土層図のポイントである。

谷戸横穴群、倉久保横穴群等々の古墳時代後～末期の横穴群が多数存在する。

第2章　トレンチ調査

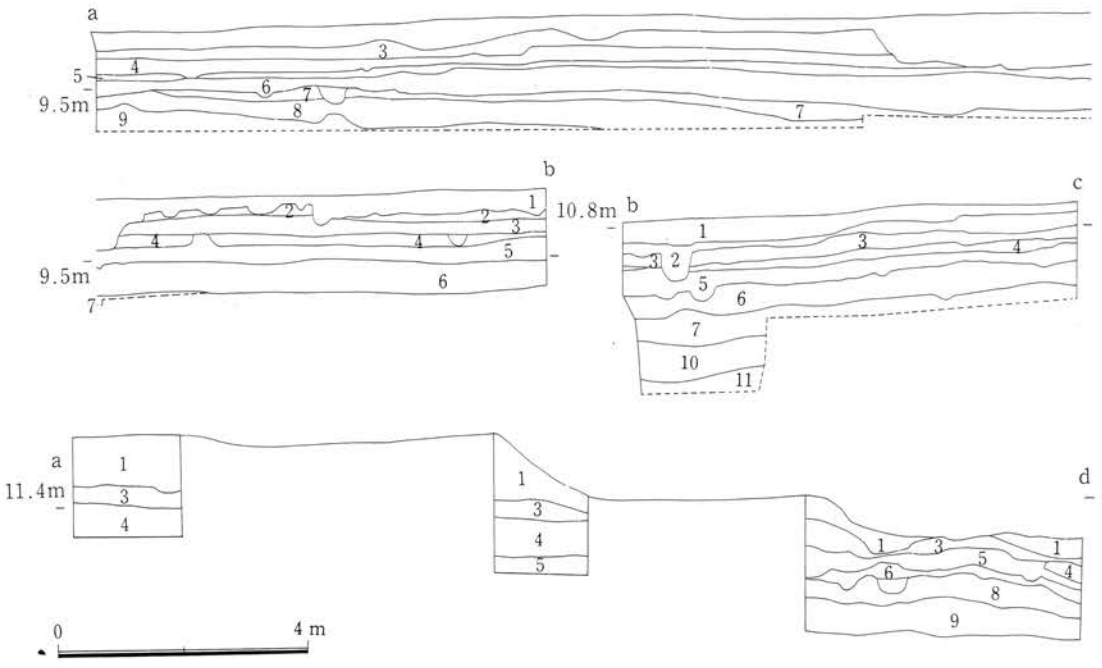
本調査は、宅地石積基礎、及び駐車場区域にあたる地下部分を対象に行われた。調査範囲はトレンチ状に設定され、南北に22.4m、東西幅2.4mの調査区と、その北端より東へ7.3m、南北幅2mの調査区からなる。掘削は現代耕作土を重機で行い、宝永火山灰を検出した現地表下約20～50cmから根切り深度の現地表下約1.7mまでを人力によって行った。

本調査地点に於て、生活面や遺構はまったく検出されなかった。また、図示できるような遺物は出土しておらず、調査は土層図を記録するにとどまった。土層は、すべてが自然の堆積によるものであり、11層に分けられる。（土層図参照）

1は表土層で、近・現代の耕作土である。下位で宝永火山灰が僅かに確認される。2、3層は灰褐色土である。いずれも白色パミスを含み、しまり強く、弱い粘性を帯びる。2層は厚さ10～30cmでほぼ水平に堆積している。3層は厚さ10～30cmで東から西へ穏やかに下る。また部分的に酸化し、赤く変色する。4、5層は暗褐色土層である。いずれも白色パミスを含み、弱い粘性を帯びる。4層は厚さ15～20cmで東から西へ穏やかに下る。しまり弱。5層は厚さ15～40cmで、ほぼ水平に堆積する。しまり強く、南北調査区では部分的に酸化還元をうける。6～9層は暗灰色土である。やや酸化還元をうける。いずれも北東へ穏やかに下ることが確認される。6層は厚さ15～50cmである。白色パミス、炭化粒を含み、しまり強。強い粘性を帯びる。また、土師器、11世紀のものと思われる灰釉陶器碗などの破片が出土している。7層は厚さ20～60cmである。砂質を帯び、白色パミスを極めて少量含む。しまり強。強い粘性を帯びる。また、土師器の細片が出土している。8層は厚さ15～40cmである。白色パミス、炭化粒を極めて少量含み、砂粒を混入する。しまり強く、強い粘性を帯びる。9層は厚さ20～50cmである。白色パミスを極めて少量含み、しまり、粘性共に強く、8層より勝る。土師器の細片が出土している。10、11層は南北調査区北端で現地表下2.7mまでの深掘りを行い検出した土層で、いずれも酸化還元をうける。10層は暗灰色土である。厚さは50～65cmで、白色パミス、自然木、土器粒などを極めて少量含む。しまりやや弱く、強い粘性を帯びる。11層は10層に近似するが、黒色味強く、しまり強い。

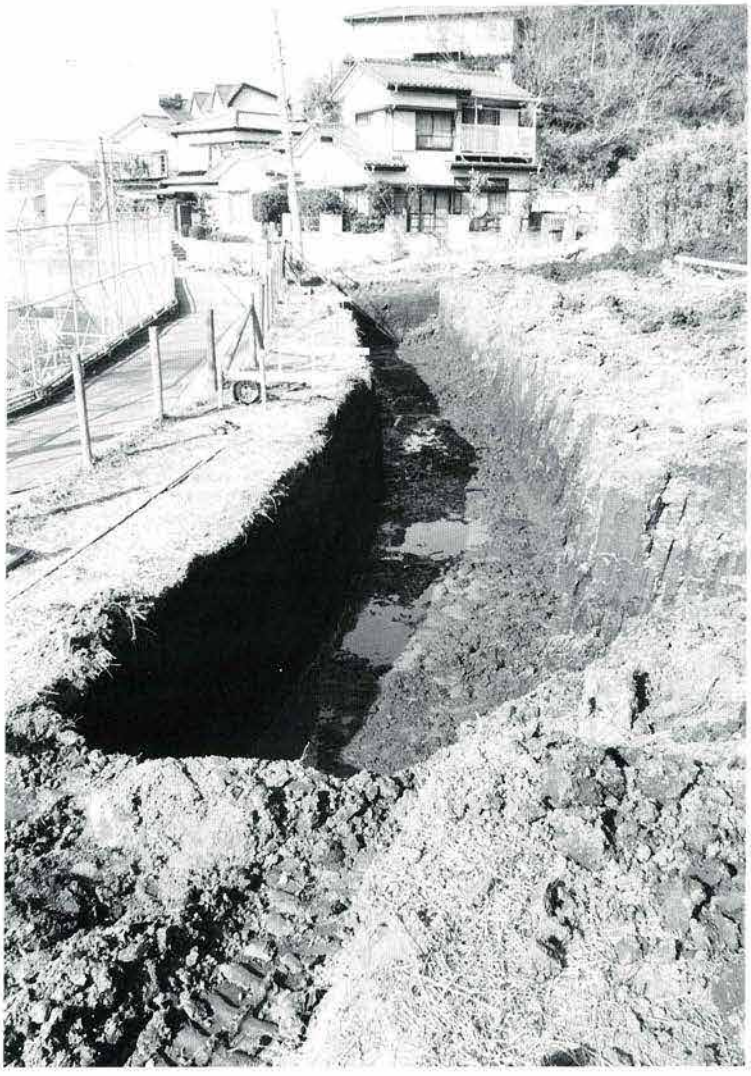
・まとめ

今回調査した地点からは顕著な遺構の検出はなかったが、堆積土層中からは土師器小片が少量ながら出土しており、付近にこれらの時期の集落などが存在する可能性が極めて高いといえそうである。最後に、遺跡地の字名であるが、これは山崎字宮廻736番地にある北野神社からきた地名である。北野社は、かつて宝積寺ケ谷にあった宝積寺の鎮守ではないかといわれている。宝積寺の創建は、1300年代の中頃で、開山は方外宏遠である。試掘段階では、白磁口兀小皿の小片が出土しており、古代のみならず中世の遺構が付近に存在する可能性も極めて高いといえそうである。

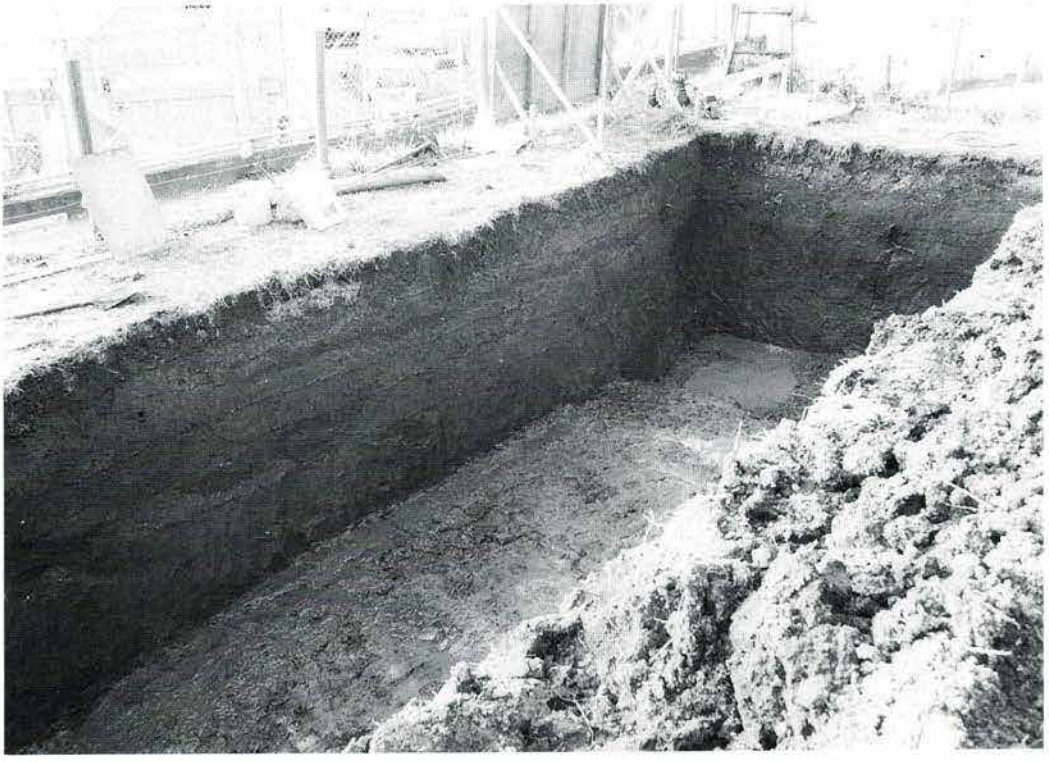


第 3 図　堆積土層図

図版 1



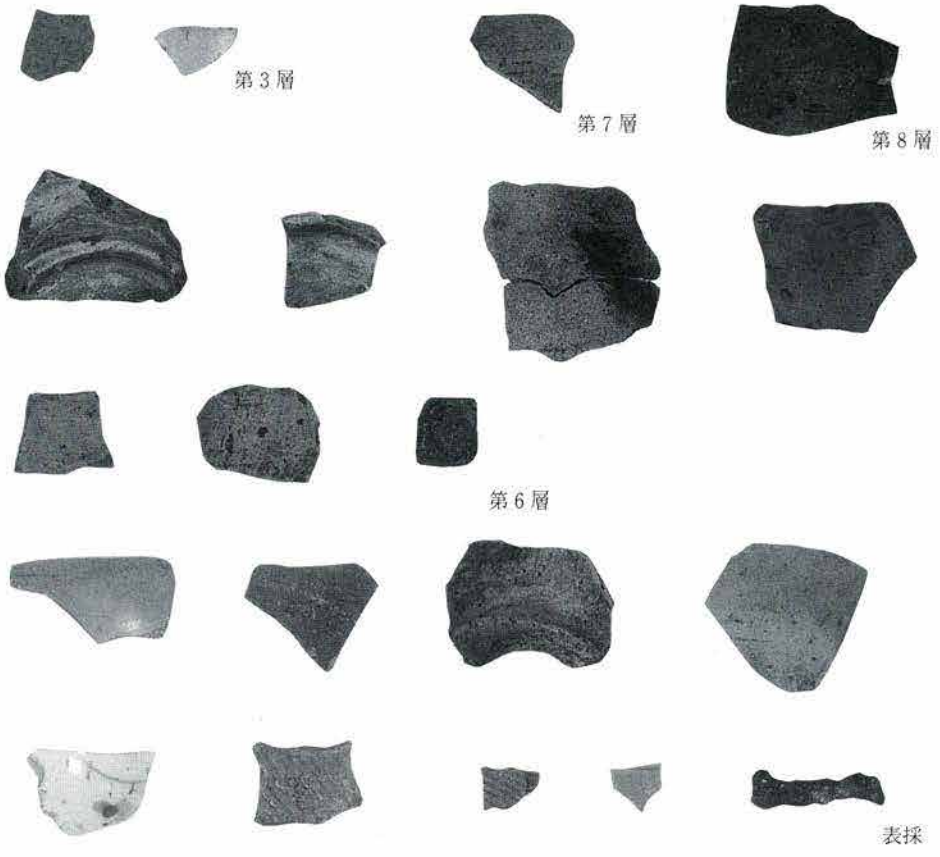
◀調査状況(南から)



◀調査状況(東から)

◀土層堆積状況(下の水は涌水)

図版 3



出土遺物

9. 若宮大路周辺遺跡群（No.242）

扇ヶ谷一丁目74番地９外地点

例　言

1．本報は鎌倉市扇ヶ谷一丁目74番地９外地点に所在する遺跡の発掘調査報告である。

2．発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。

3．調査期間は平成５年２月８日～３月３日まで、調査面積は約100㎡である。

4．本報の執筆・編集は菊川が行い、遺物実測と自然遺物（貝・骨）の鑑定は宗臺秀明氏に依頼した。

5．本報に使用した写真は、遺構を菊川が、遺物を石丸が撮影した。

6．調査体制は以下の通りである。

主任調査員　菊川英政

調　査　員　石丸運人

協力機関　㈱鎌倉市高齢者事業団　㈱旭化成ホームズ

7．出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

本 文 目 次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……193
第二章　調査の概要 ……194
　第１節　調査区の設定 ……194
　第２節　堆積土層と生活面 ……194
第三章　検出遺構 ……196
　第１節　第一面検出遺構 ……196
　第２節　第二面検出遺構 ……198
　第３節　第三・四面検出遺構 ……200
第四章　出土遺物 ……201
第五章　調査のまとめ ……211

挿 図 目 次

図１　遺跡位置図 ……192
図２　調査区設定図 ……194
図３　調査区壁土層堆積図 ……195
図４　井戸址 ……196
図５　第一面検出遺構全体図 ……197
図６　第二面検出遺構全体図 ……199
図７　第三面（四面）検出遺構全体図 …200
図８　第一面の遺物 ……202
図９　第二面上包含層出土遺物(1) ……203
図10　第二面上包含層出土遺物(2) ……204
図11　第二面の遺物 ……205
図12　第三面上包含層出土遺物 ……207
図13　第三面の遺物 ……208
図14　第四面上包含層出土遺物 ……208
図15　サブトレンチ出土遺物 ……209
図16　排水溝内出土遺物 ……211
図17　近接地点遺構対比図 ……213
図18　今小路周辺の道路遺構 ……214

図 版 目 次

図版１　井戸址 ……215
図版２　第一面全景・道路遺構 ……216
図版３　第二面全景・遺物出土状態 ……217
図版４　食物残滓検出状態･第三面全景…218
図版５　溝２・遺物出土状態 ……219
図版６　調査区近景・道路遺構断面 ……220
図版７　出土遺物 ……221

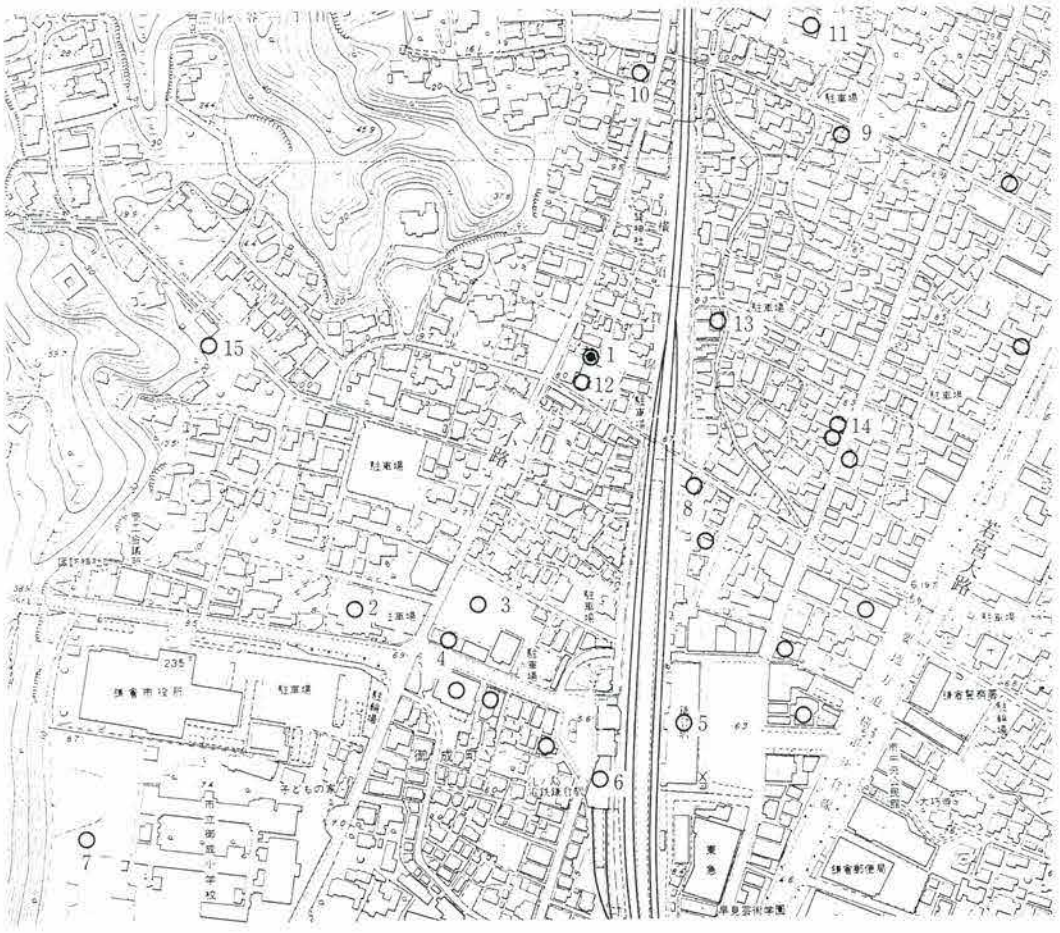


図1　遺跡位置図

調査地周辺の主要遺跡文献一覧

1．調査地点
2．『千葉地遺跡』同遺跡発掘調査団　1982
3．『千葉地東遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター　1986
4．『諏訪東遺跡』同遺跡調査会　1985
5．『蔵屋敷遺跡』鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会　1984
6．『蔵屋敷東遺跡』江ノ電鎌倉ビル発掘調査団　1983
7．『今小路西遺跡発掘調査報告書』同遺跡調査団　1990
8．『小町一丁目120番1地点遺跡』風門社ビル発掘調査団　1989
9．『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』鎌倉市教育委員会　H.1　103頁
10．『　同　5』　同　H.1　203頁
11．『　同　6』　同　H.2　317頁
12．『　同　6』　同　H.2　245頁
13．『　同　7』　同　H.3　33頁
14．『　同　8』　同　H.4　193頁
15．『　同　8』　同　H.4　235頁

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

調査地点は、ＪＲ鎌倉駅の北方約250m程の所にあり、現在〝今小路〟と呼ばれる道路の東側に位置している。『神奈川県遺跡台帳』によれば、この今小路より西側一帯を〝今小路西遺跡〟（No.201）とし、調査地点を含む東側一帯、若宮大路までの間を〝若宮大路周辺遺跡群〟（No.242）として包括している。

今小路という名は『吾妻鏡』になく、『快元僧都記』天文八年（1539）十月の条が初見である。同条には、「扇谷今小路之番匠主計助。荒神之宮修補之。」とあり、ここでいう「荒神之宮」は、調査地点の北方100m程にある巽神社のこととされている。『快元僧都記』以前に今小路と呼ばれていたかは不明であるが、道路自体はより古くから存在した可能性は強い。京都に倣った都市整備のなかで、若宮大路を中心として東に小町大路、西に今大路（今小路）が南北に併走しただろうことは想像に難くなく、今小路沿いの調査地点（図―１―10地点）では、多少規模は劣るものの、若宮大路側溝[註1]や小町大路側溝[註2]と同じ構造をもつ木組の南北溝が検出され、14世紀前葉～中葉の年代に比定されている。

東西方向の道路と考えられるものに〝辻子〟がある。『吾妻鏡』には〝宇津宮辻子〟〝田楽辻子〟〝大学辻子〟〝咒師勾当辻子〟の名がみえ、他にも〝柳辻子〟〝唐笠辻子〟があったことが知られている。これらの道路に比定される遺構はいまだ発見されていないが、本調査地点で検出された道路遺構がいずれかに該当するのかもしれない。

自然地形の面からみると、調査地点は扇ヶ谷川流域に形成された低湿地に位置している。この低湿地は若宮大路の西側一帯に広がりをもち、北は瀬古邸用地遺跡（図１―11地点）、南は蔵屋敷東遺跡（図１－６地点）にまで及び、更に南の今小路西遺跡（図１－７地点）で海岸砂丘の北端部へ接続している。また、近世以降に削平を受けてはいるが、蔵屋敷遺跡（図１－５地点）付近は微高地となっていたらしい。扇ヶ谷川の旧流路は、調査地点の東方（図１－８・13地点）で確認されたほか、支流とみられる旧河川が千葉地東遺跡（図１－３地点）で検出されている。中世基盤層（黒褐色粘土層）の標高は、調査地点で約5.8m、千葉地東遺跡（図１－３地点）で約５m、風聞社ビル用地遺跡（図１－８地点）で約６m、錦屋用地遺跡（図１―10地点）で約9.2m、相模屋ビル用地遺跡（図１―14地点）で約5.8mを測る

註１　「北条時房・顕時邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書４』９頁　鎌倉市教育委員会　1988
註２　「北条泰時・時頼邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書５』21頁　鎌倉市教育委員会　1989

第二章　調査の概要

第1節　調査区の設定（図2）

当初、調査区は敷地内の東西2ヶ所に3m×6m四方のトレンチを設定する予定であった。しかし、表土層除去後の状態では、西側部分に近代の建築基礎杭(軟弱な地盤を固めるための松材丸太)が多数打ち込まれており、遺構の遺存状態は非常に悪いことが予測された。したがって、東側部分をL字形に拡張して調査を行うこととした。なお、調査区壁面が崩落する危険性があるため、地表下2m以下は調査を断念し、基盤層（地山）レベルは東壁際のサブトレンチで確認するにとどめた。

調査に際しては、任意の測量点A・Bを設定し、平板測量で記録した。測量点A－Bラインは、磁北に対して24.5°東へ傾いている。

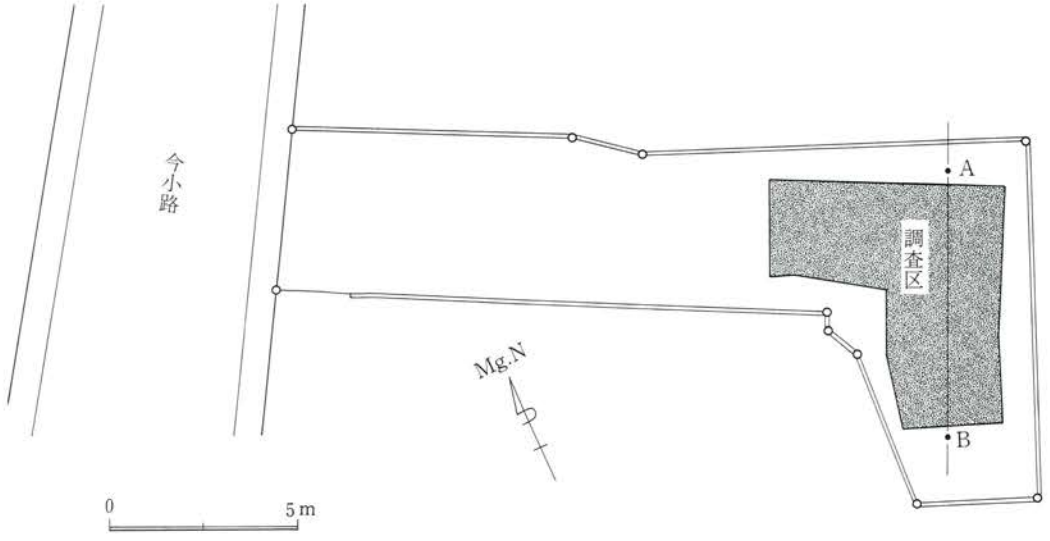


図2　調査区設定図

第2節　堆積土層と生活面（図3）

土層の観察は、調査区の東壁と北壁で行った。両壁面とも既に建物基礎にあたる箇所をボーリングしており、土層の連続性を把握しづらい部分もある。

堆積した土層の性格は、1・2層が近代以後の堆積層。3・4層は近世以後の堆積層で耕作土と思われる。5層以下は中世遺物包含層。20層は古代遺物包含層であるが、ごく少量の中世遺物も混入する。21層は古代～中世初頭にかけての基盤層（地山）である。

なお、15層～19層中にみられる木質腐蝕層・砂層・粘土層の堆積状態は、遺跡地付近が低湿地化し、不安定な状況下にあったことを示している。現在でも15層以下は常に滞水し、多量の木製品が遺存している。

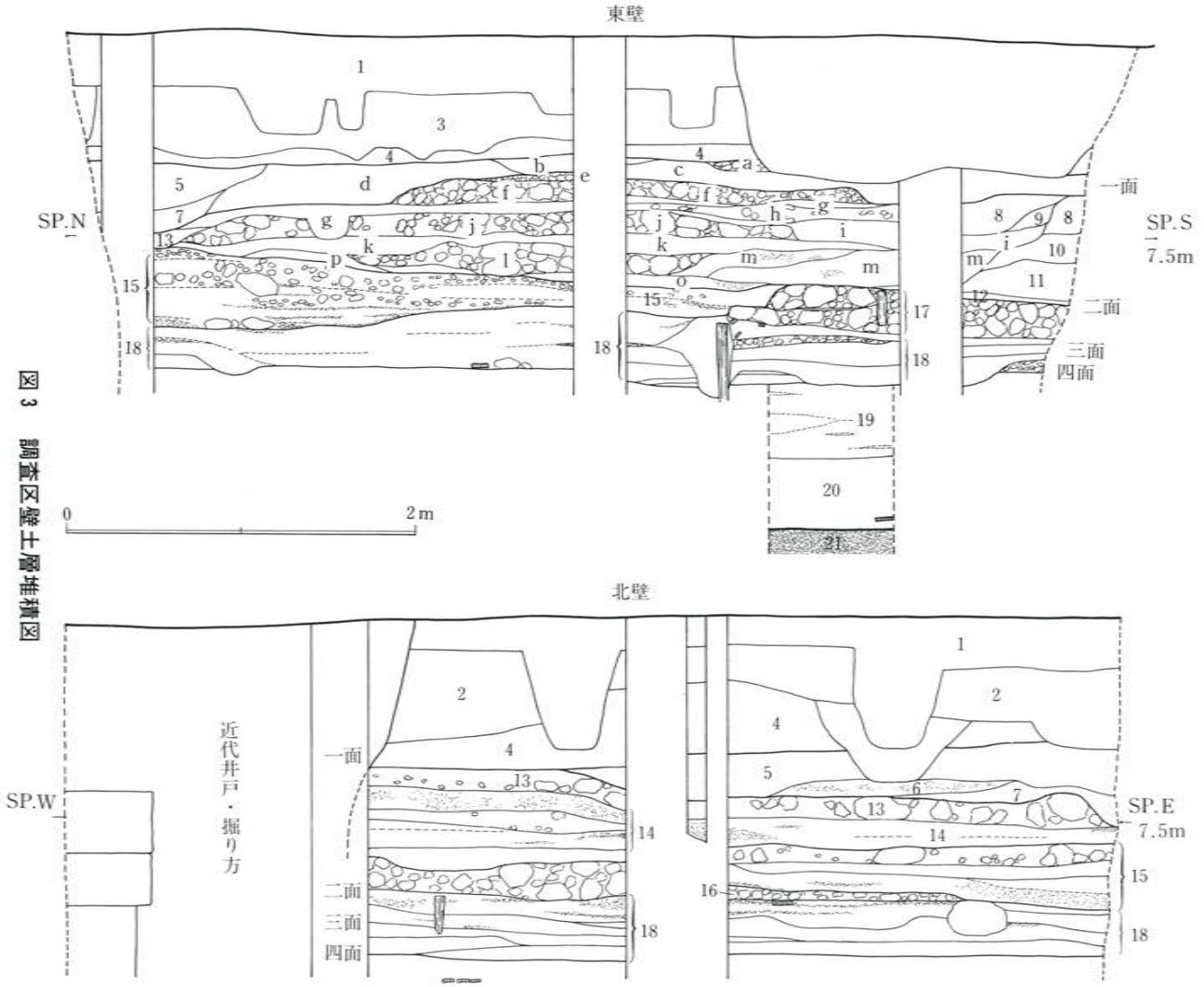


図3　調査区盤土層堆積図

〈土層説明〉

1　表土
2　暗褐色土　空缶・ガラス等を混入
3　茶褐色砂質土（耕作土）
4　茶褐色土（中世遺物包含層）
5　暗褐色土
6　暗褐色土　炭化物を混入
7　暗褐色土　遺物の混入少ない
8　茶褐色粘土　小土丹混入
9　暗褐色粘土
10　黄褐色粘土
11　暗茶褐色粘土　土丹を多く混入
12　青灰色砂質土
13　茶褐色土　土丹を多く混入
14　暗灰色粘土　炭化物を混入
15　青灰色砂質粘土（分層不明瞭）
16　青灰色土丹層
17　青灰色土丹版築層
18　暗灰色砂質粘土（分層不明瞭）
19　暗紫褐色粘土
20　黒灰色粘土（古代遺物包含層）
21　黒褐色粘土（地山）

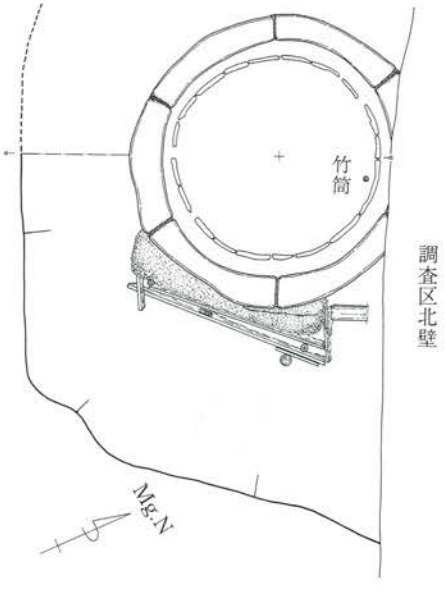
a～0までは道路遺構構築土。土丹版築層と粘質土が互層状に堆積する。層中の土丹塊はスケッチで描き入れたものである。

中世の堆積層のうち、ａ～ｏまでは道路遺構の構築層で、８層および13層上面を道路遺構最終期の生活面（第一面）として調査した。

15・18層は砂層、粘土層、木質腐蝕層、炭化物層が薄く互層状に堆積しており、明確な分層は不可能である。部分的に薄い土丹（泥岩）版築層もみられるが、生活面としての広がりをつかむことはできなかった。15層上面は土丹（泥岩）塊による凹凸があり、遺構は検出されていない。18層上位を第二面として調査し、調査区南端部分に検出された土丹版築面（17層）は、第二面上に構築された遺構と考えた。

17層除去後、18層を徐々に下げた段階で簡易な溝状遺構が検出され、第三面として調査した。レベル的には18層中位にあたる。部分的に薄い土丹版築層も確認されたが、生活面としては極めて不明瞭な状態であった。

19層上面を第四面とした。良く締った生活面であるが、調査区北壁沿いで検出された溝３以外に遺構を確認できなかった。溝３は第三面調査時に掘った排水溝内で検出されたため、便宜上、第三面の遺構全体図に入れてある。



第三章　検出遺構

第１節　第一面検出遺構

井戸址（図４）……調査区の西端で検出された。既に表土層除去段階で確認されており、第一面に伴う遺構ではない。

井戸掘り方は、１辺約２ｍの隅丸方形を呈し、そのほぼ中央に井筒を埋設する。井筒の構造は、後世に掘り直しと補強が行われているため、二時期に分けて考えることができる。

当初の井筒は、縦板（厚さ２cm、幅10～15cm）を直径80cmの円形に配し、竹のタガでまとめた桶側形式のものである。竹のタガは、上端から約70cm下で確認したが、桶側下端の構造は不明である。

掘り直し後の井筒は、下部を横板で囲み、杭を打って固定する。その上には鎌倉石（凝灰石）切石で組んだ井筒を２段積み上げ、更に常滑焼土管を乗せた構造

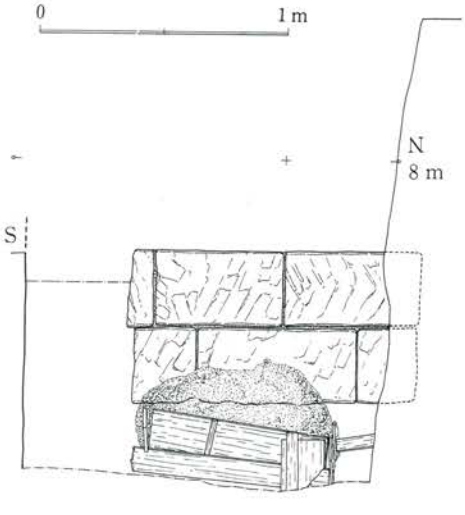


図４　井戸址

となっている。常滑焼土管は、残念なことに表土掘削時に破壊されて遺存しない。なお、各部の接着にはコンクリートが使用され、下部板囲い内には、多量のコンクリートを充填している。

出土遺物としては、井戸掘り方内でかわらけ片・瓦片が少量出土したが、いずれも混入品で、井戸址に直接かかわる遺物ではない。なお、井筒内部には、〝息抜き〟の竹管が遺存していた。

井戸址の年代については、井戸内が未発掘のため構築時期は不明である。しかし、掘り直し後に常滑焼土管（径約三尺）を用いていることから、明治30年代以降まで使用されていたことは確実と思われる。

道路遺構（図５）……調査区のほぼ中央部で検出された。幅約2.7m。側溝は伴わない。主軸方位はN—68.5°—Wを測るが、検出された範囲が狭いため、あまり正確な数値とは言えない。

道路面は、小～中形の土丹（泥岩）塊を密につき固め、北辺にはやや大き目の土丹塊を並べて縁石としている。上面は平坦であるが、縁辺部は緩やかに下降し、断面形状は薄いカマボコ形を呈している。

調査区東壁の土層堆積状態（図３）をみると、道路遺構は間層を挟んで少なくとも５回の貼り増

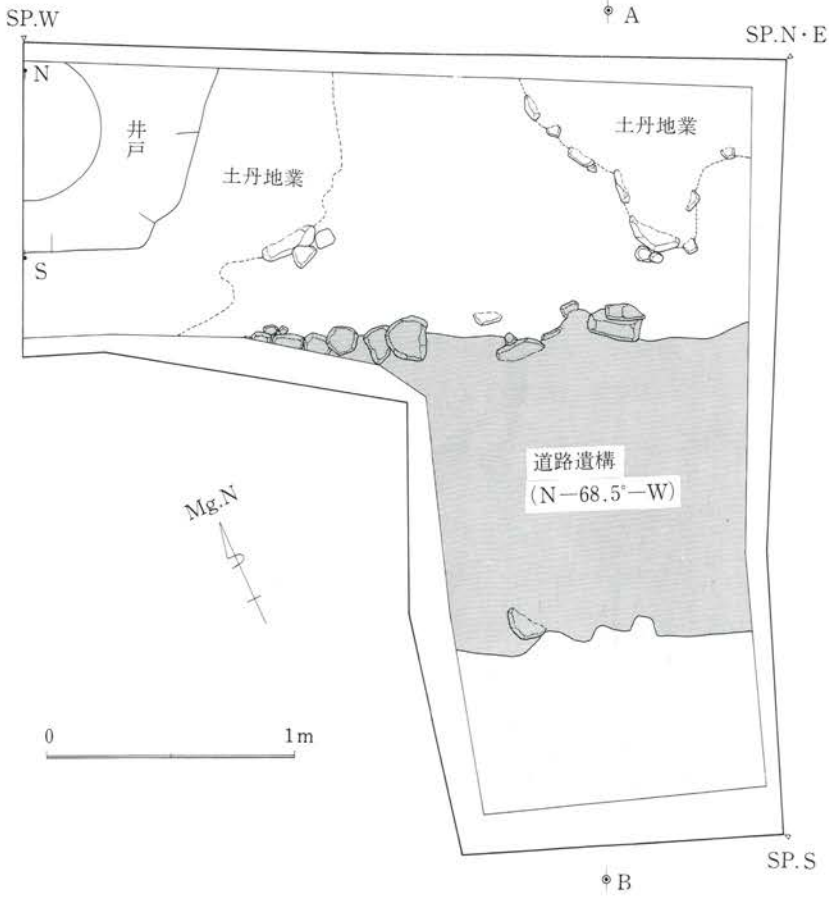


図５　第一面検出遺構全体図

しが行われ、基底部からの高さは約60cmに達する。また、道路面の修築は、主軸方位を変えずに行われるが、敷設された位置と幅は若干の変化をみせ、最大幅を有する時期（図３－ｊ層）では、幅約3.7mを測り、やや北寄りに位置している。なお、修築に伴って生活面は徐々に高位へ移っていたものと考えられるが、対応する生活面を同定にするには至らず、最終期（第一面）と初期（基底部）の遺物を区別してとり上げるだけにとどまった。

道路遺構を挟んだ南北両側では、生活面の状態に大きな差異がみられる。道路遺構の北側部分では、湧水のために軟弱な地盤となり、地業層中の土丹塊が露出して荒れた観を呈している。それに対して南側部分では、土丹粒と粘土ブロックを多量に含む締りの強い地業土を用いている。なお、本調査地点の南方約10mの地点（図１―12地点）での調査結果をみると、第一面に対応する面は「破砕された鎌倉石、拳大～人頭大の土丹塊で構成」され、遺構は何も検出されていない状態となっている。これらのことから、道路遺構の最終期（第一面）においては、地業が複雑な状況を呈しており、建物址や井戸、土壙といった生活遺構の密度は低かったものと考えられる。

第２節　第二面検出遺構

道路遺構下には、青灰色土丹（泥岩）地業層（図３―15層上部）が広い範囲で確認され、同レベルで精査したところ、調査区南端部に堅固な土丹版築面（図３―17層）が検出された。青灰色土丹層上面は凹凸が激しく、生活面とはみなし難いため除去した結果、同層下に薄い木質腐蝕層がみれ、下駄・枝草履・建築部材などが検出された。更に木質腐蝕層を剝がすと、薄い炭化物層を乗せた暗灰色粘土層が堆積しており、ハマグリ・アワビ等の食物残滓が集中してみつかったほか、切石列も確認された。

同状態を第二面（図６）として記録したが、南端部の土丹版築面より約20cm程低く、遺物集中箇所での標高は７ｍを測る。なお、第二面とした暗灰色粘土層は、調査区西部に至って緩やかに立ち上がり消滅するが、軟弱な地盤であるため、その境界（限界）線を明確にすることはできなかった。

土丹版築面（図６）……調査区南端部で検出された。上面は平坦で、南側へわずかに傾斜している。北側縁辺部の標高は7.2m。南端部は7.1mである。調査区外へ続くため全容は不明であるが、概ね１枚の版築層で造成されており、道路遺構とは構造の点で異なっている。なお、版築面上に堆積した砂質土（図３―12層）中には、破砕されたかわらけ皿の細片が多量に含まれていた。

切石列（図６）……土丹版築面の北辺に直交する形で検出された。排水溝を掘るため除去したものを含めて６個の切石が確認されたが、北側調査区外へまだ続くものと思われる。鎌倉石（凝灰岩）・土丹（泥岩）で構成されるが、破損したものや表裏面が焼けて赤変したものなどがある。用途、性格ともに不明である。

Pit１（図６）……切石列の西約1.3mの所で検出された。掘り方は円形に近く、直径30cm、深さ20cmを測り、内部には土丹塊２個と角材が検出された。角材は長さ15cm、幅８cm、厚さ３cmで上端を切られている。なお、東隣の穴は掘り過ぎによるもので、下層にある板材の一部が露出している。

遺物出土状態（図６）……冒頭に記したように、第二面上には炭化物層、木質腐蝕層が薄く堆

積しており、木質腐蝕層直上から建築部材・下駄・板草履が検出され、第二面直上では食物残滓がみつかっている。しかし、両者は非常に近接したレベルにあり、差は５㎜にも満たない。

建築部材は３箇所でみつかった。切石列南端部の板材は、幅３㎝、長さ99㎝、厚さ0.6～1.2㎝。切石列西側の板材は、調査区外へ続くため全長は不明。幅12㎝、厚さ２㎝。Pit１の西側にある２枚の板材は、幅９～12㎝、厚さ２㎝である。これら板材は、切石列・土丹版築面と直行ないし平行する位置関係にあるが、意識的に据えたものとは考え難い状態である。

下駄・板草履は切石列の西側３箇所でみつかった。破損したものもあり、投棄あるいは遺棄された状態を呈している。

食物残滓は切石列の南端近くに集中して検出された。ハマグリの貝殻が大多数を占めるが、アワビ（マダカ？）１点の他、ダンベイキサゴを少量含み、魚骨・鱗片・肩胛骨（イヌ）・脛骨（トリ）もわずかであるが確認された。取りあげの際に不備があり、詳細なデータを作製することはできなかった。

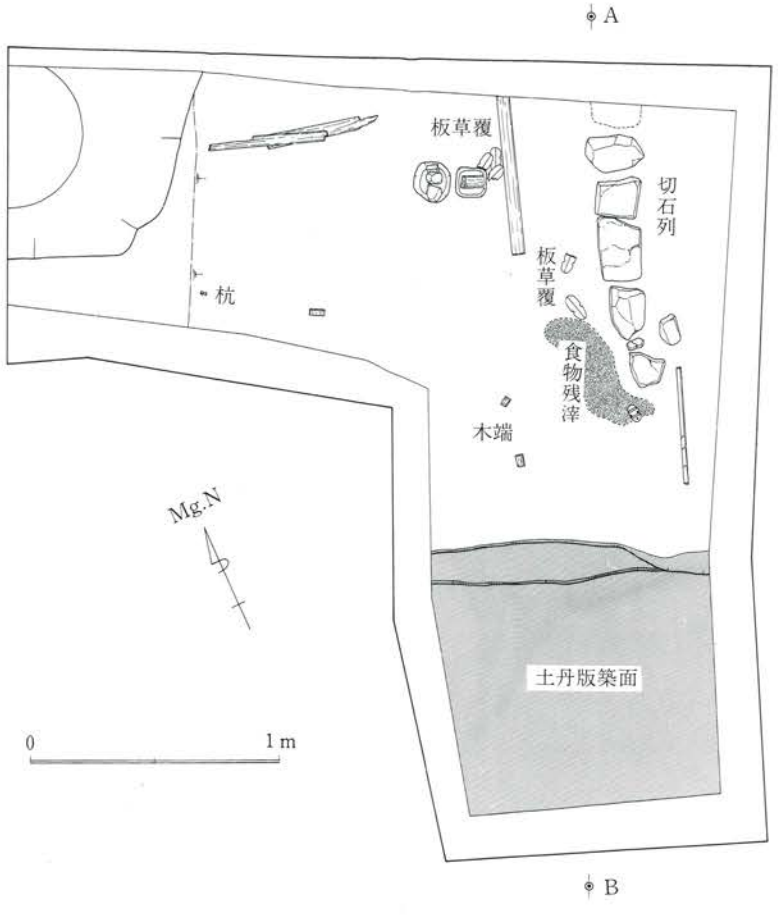


図６　第二面検出遺構全体図

第3節　第三・四面検出遺構

土丹版築面（第二面）の下、溝1・溝2が確認されたレベルを第三面とした。標高6.9mを測り、一部に薄い土丹版築面もみられるが、生活面としての広がりを確認することはできなかった。なお、溝2以北は掘り過ぎて、第四面（写真図版4）が露呈している。第四面の標高は約6.7m、溝3以外に検出された遺構はない。

溝1（図7）……南北方向の溝である。既に第二面精査時に杭の一部は確認されたが、調査区南端部の土丹版築面下で、延長線上にある杭が検出されたことにより、第三面に伴う遺構と判明した。調査区中央部で溝2と接続している。

溝は杭を打ち込み側板をとめただけの簡単な構造で、杭および側板は西側だけに遺存した。東側は幅約40cmの範囲が浅く窪み、溝底を示すものと考えられる。杭は主として側板内側に打ち込まれるが、内外に打って側板を挟んだ箇所もある。細いもので2cm×1cm、太いもので12cm×3cmの角材を用い、上端部はいずれも焼け焦げている。側板は幅9cm、厚さ1cmを測り、約95cm分が遺存する。側板上端の検出レベルは標高6.9m。溝内からの出土遺物はない。

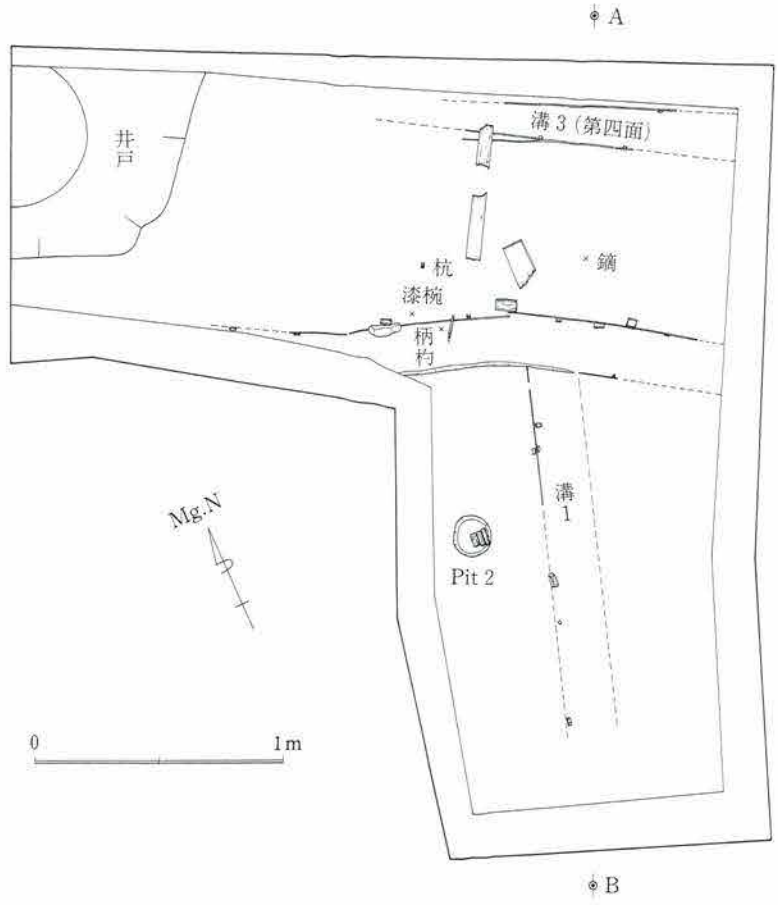


図7　第三面（四面）検出遺構全体図

溝２（図７）……溝１と接続する東西方向の溝である。規模・構造とも溝１と同様であるが、側板の残る部分以外では溝肩・溝底ともに不明瞭となり、東壁土層断面（図３）でも明確な線引きをすることができなかった。

杭は４cm×２cmの角材の他、８cm×６cmの大形角材や幅６～８cm、厚さ１cm程の板材を打ち込んだ箇所もあり、杭の一部は既に第二面で確認されている。側板は溝の北側で良好に遺存した。幅12cm、厚さ１cm、長いもので155cmを測り、側板上端の検出レベルは標高6.85mである。

溝内からは、小形の曲物に竹の柄を付けた柄杓（写真図版５）が１点出土し、柄の付近には玉砂利が集中して検出された。この柄杓は遺物洗浄作業中に砕けて遺存しない。なお、柄杓と近接した溝の外側で出土した漆椀は、溝の側板確認レベルよりわずかに低い位置にあるため、本遺構とは直接的に関連のないものとして、第四面上包含層出土遺物（図14～５）の内に含めた。

溝３（図７）……調査区の北壁下で検出された東西方向の溝で、溝幅は約30cmを測る。規模・構造ともに溝１・溝２と同様であるが、側板上端の検出レベルが標高6.75mと低く、第四面に伴う遺構と考えられる。第三面調査時に掘った排水溝内で検出され、他に第四面の遺構も確認されていないことから、便宜的に第三面検出遺構全体図（図７）中に記録した。

溝内の出土遺物は、排水溝掘削時に混入して明確に区分することができなかった。ただし、小形の下駄（図12—29）については、その出土位置からみて、溝３覆土中の遺物である可能性が高い。

Pit２（図７）……土丹版築面（第二面・図３—17層）の北縁に接する位置で検出された。掘り方直径30cmの円形を呈し、深さ約54cmを測る。底面に接して３枚の礎板を置くが、柱は抜き取られて遺存しない。掘り方の一部がわずかに土丹版築面下に入るため第三面の遺構としたが、調査区東壁の土層堆積図（図３）にも同様の柱穴が確認され、第二面に伴う遺構である可能性も捨て切れない。この両柱穴間の中心距離は約1.9mである。

第四章　出土遺物

第一面の遺物（図８）……道路遺構の構築土中（１・３・６・９～16）および上位包含層中から出土した遺物である。

１～16はかわらけ皿。すべて糸切り底で、薄手タイプの皿を主体とする。薄手タイプの皿には、体部に丸味をもつもの（１・３・９）とそうでないもの（２・８・11・14）とが含まれている。

17は白磁口兀げ皿。

18・19は瀬戸製品。18は灰釉小壺の完形品。19は灰釉卸し皿である。

20～23は常滑製品。20・21は捏ね鉢。22は肩部に沈線をめぐらす壺。23は小形の甕である。

24は瓦質手焙り。鍔上面に２個一対の菱形スタンプ文を押捺し、穿孔を有す。復原口径は40cm前後と思われる。

〈出土遺物の内訳〉

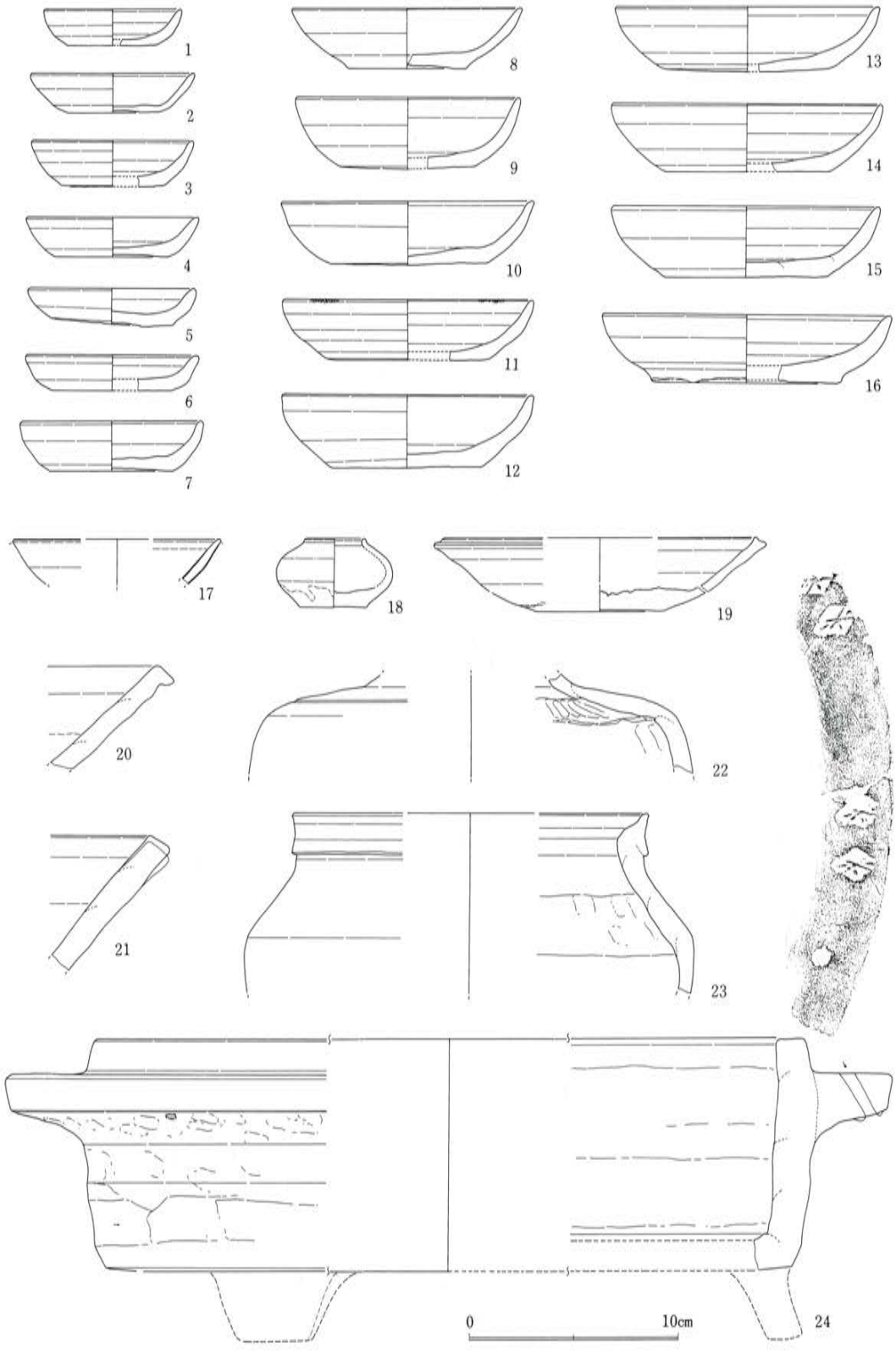


図 8　第一面の遺物

かわらけ皿435点（手捏ね０・糸切り365・不明70）、白かわらけ１点、青磁碗２点、白磁皿３点、瀬戸３点（卸し皿２・小壺１）、常滑16点（甕12・壺２・捏ね鉢２）、山茶碗窯捏ね鉢５点、手焙り６点（土器質３・瓦質３）、鉄釘１点、獣骨２点。

第二面上包含層出土遺物（図９・10）……第二面廃絶後、道路遺構が建築される直前までの遺物である。主として青灰色土丹層（図３—15層）上位に含まれており、多量のかわらけ皿が出土した。

１～32はかわらけ小皿、１・２・12・13・17・25～27・31・32が略完形品である。胎土と焼成の特徴からみれば、24・31が薄手タイプに属す。

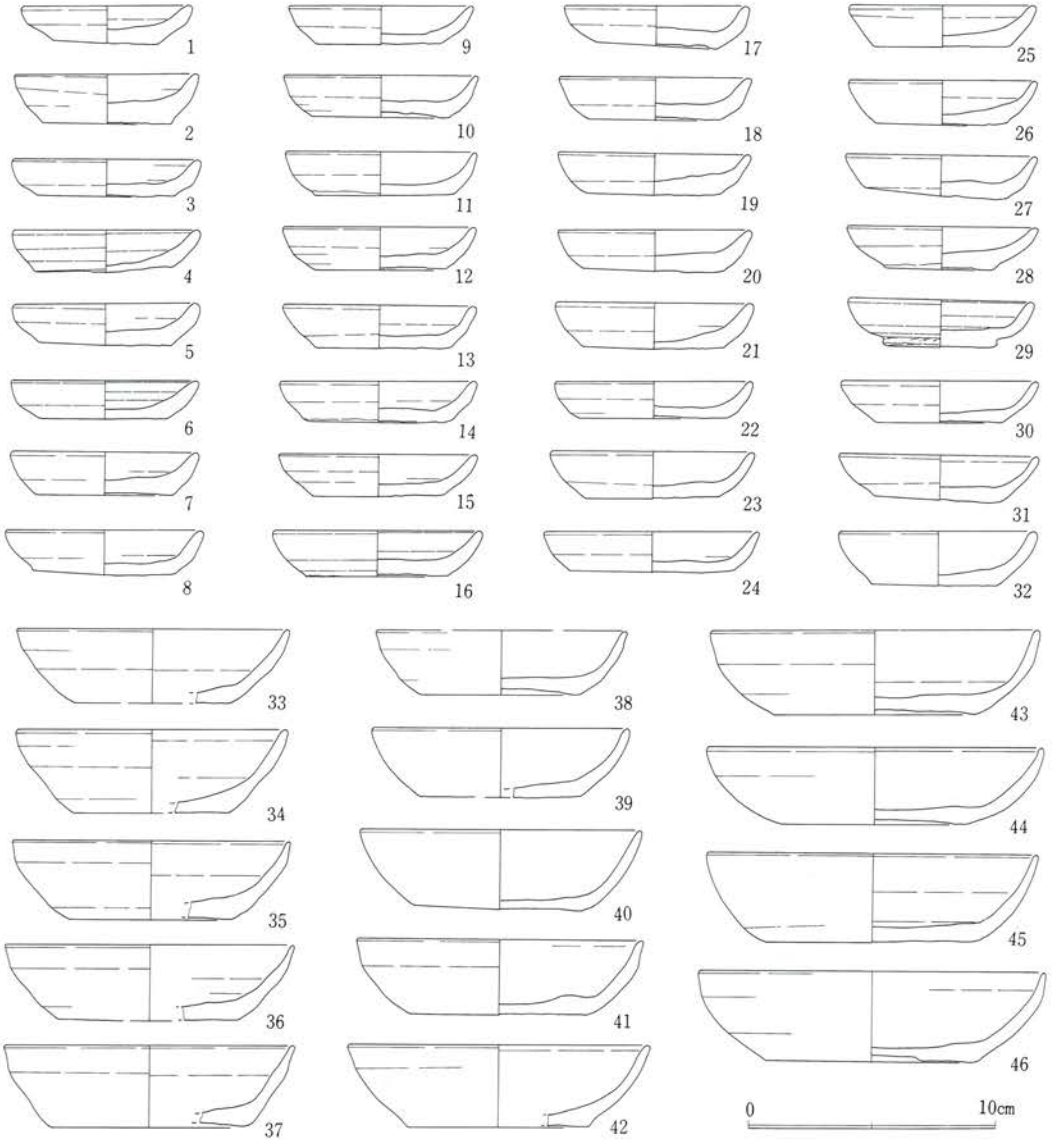


図９　第二面上包含層出土遺物(1)

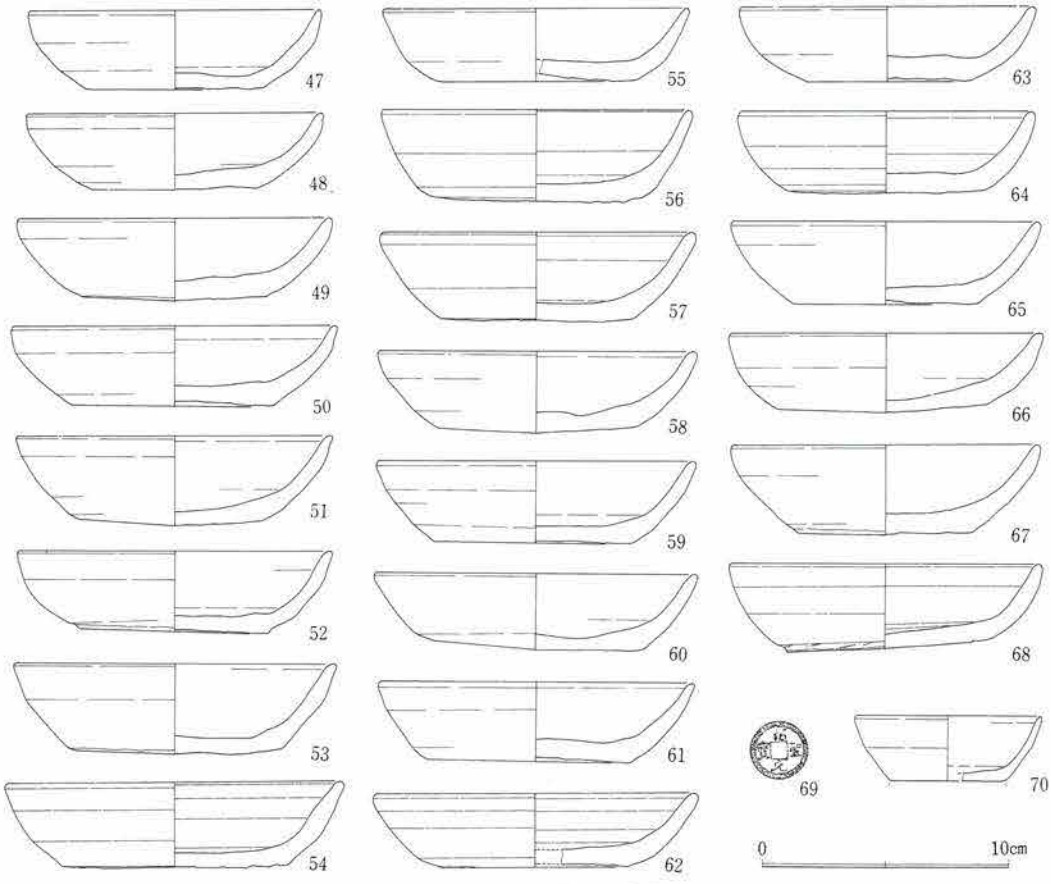


図10　第二面上包含層出土遺物(2)

33～68はかわらけ中・大皿。45、51、58～61。66が略完形品である薄手タイプの皿（33～46）のなかには、体部中位～下位に強いくびれをもつ特徴的な一群（33～37）が含まれている。

69は北宋銭。「紹聖元宝」（初鋳1094年）。

70は瀬戸入れ子皿。暗灰色の精緻な胎土で、外底面は手持ちヘラケズリ調整である。

〈出土遺物の内訳〉

かわらけ皿646点（手捏ね０・糸切り548・不明98）、青磁碗１点、青白磁梅瓶１点、瀬戸皿１点、常滑９点（甕８・捏ね鉢１）、山茶碗窯捏ね鉢１点、銭１点、骨３点（イルカ下顎骨１・メジロサメ椎体。・不明肋骨１）

第二面の遺物（図11）……第二面直上で板草履・下駄（31～33）が出土し、調査区南端の土丹版築層（図３―17層）中からは、かわらけ皿（16・17）が出土した。他の遺物は第二面精査中に出土し、青灰色土丹層（図３―15層）中位に含まれていた遺物である。全体的な特徴として木製品の遺存率が高く、箸状木製品・折敷片が多量に出土したほか、一部焼け焦げた建築材も少なからずみつかっている。

１～21はかわらけ皿。すべて糸切り底である。４・５・９・16が略完形品。20・21は薄手タイプ

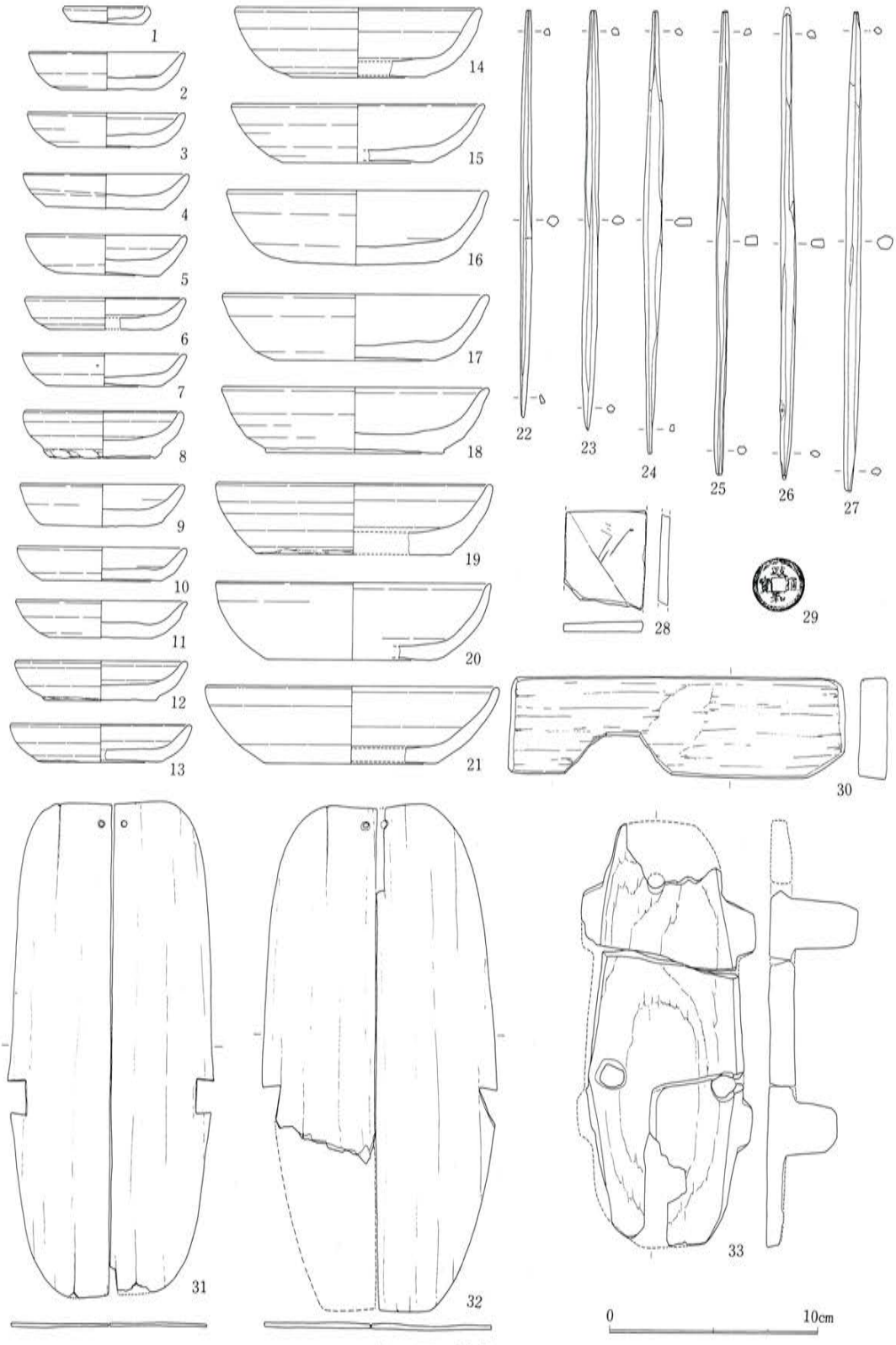

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
10cm

図11　第二面の遺物

の皿である。

22～27は箸状木製品。

28は粘板岩製砥石。仕上げ砥であろう。

29は北宋銭。「政和通宝」（初鋳1111年）。

30は用途不明木製品。片側に台形状の抉部分をもつ。

31・32は板草覆。

33は下駄。歯は削り出しである。

〈出土遺物の内訳〉

かわらけ皿345点（手捏ね0・糸切り345）、常滑9点（甕8・壺1）、銭1点、砥石1点。

第三面上包含層出土遺物（図12）……第二面下～溝1・2確認レベルまでの遺物である。暗灰色砂質粘土層（図3—18層）上位に含まれていた遺物を主体とするが、一部青灰色土丹層（図3—15層）下位の遺物も混入する。木製品の遺存率が高く、多量の箸状木製品のほかに板草覆・折敷・曲物の破片や焼け焦げた建築材も出土している。

1～20はかわらけ皿。すべての糸切り底である。1・9～11・13・16が略完形品。薄手タイプの皿は少なく、6・13だけが測図化できた。

21・22は青磁皿と碗。いずれも小片である。

23・24は山茶碗窯捏ね鉢。

25は軒丸瓦。

26・27は漆器。黒色系漆を塗った小形容器の一部と思われる。26は表裏面に漆が遺存。27は被膜だけである。

28は板草覆。

29は小形の下駄。溝3（第四面）覆土中に含まれていた可能性が高い。

30は箆状の木製品。用途不明。

31～36は箸状木製品である。

〈出土遺物の内訳〉

かわらけ皿216点（手捏ね0・糸切り186・不明30）、青磁4点（碗3・皿1）、常滑甕9点、山茶碗窯捏ね鉢2点、軒丸瓦1点、釘1点。

第三面の遺物（図13）……遺構覆土中に混入した遺物である。1はPit 2から、2～7は溝2から出土した。

1～5はかわらけ皿。薄手タイプの皿はなく、いずれも小片である。

6・7は鉄釘。

〈出土遺物の内訳〉Pit 2

かわらけ皿15点（手捏ね0・糸切り15）、白磁器1点、常滑甕4点、貝3点（アカニシ1・ハマグリ2）。

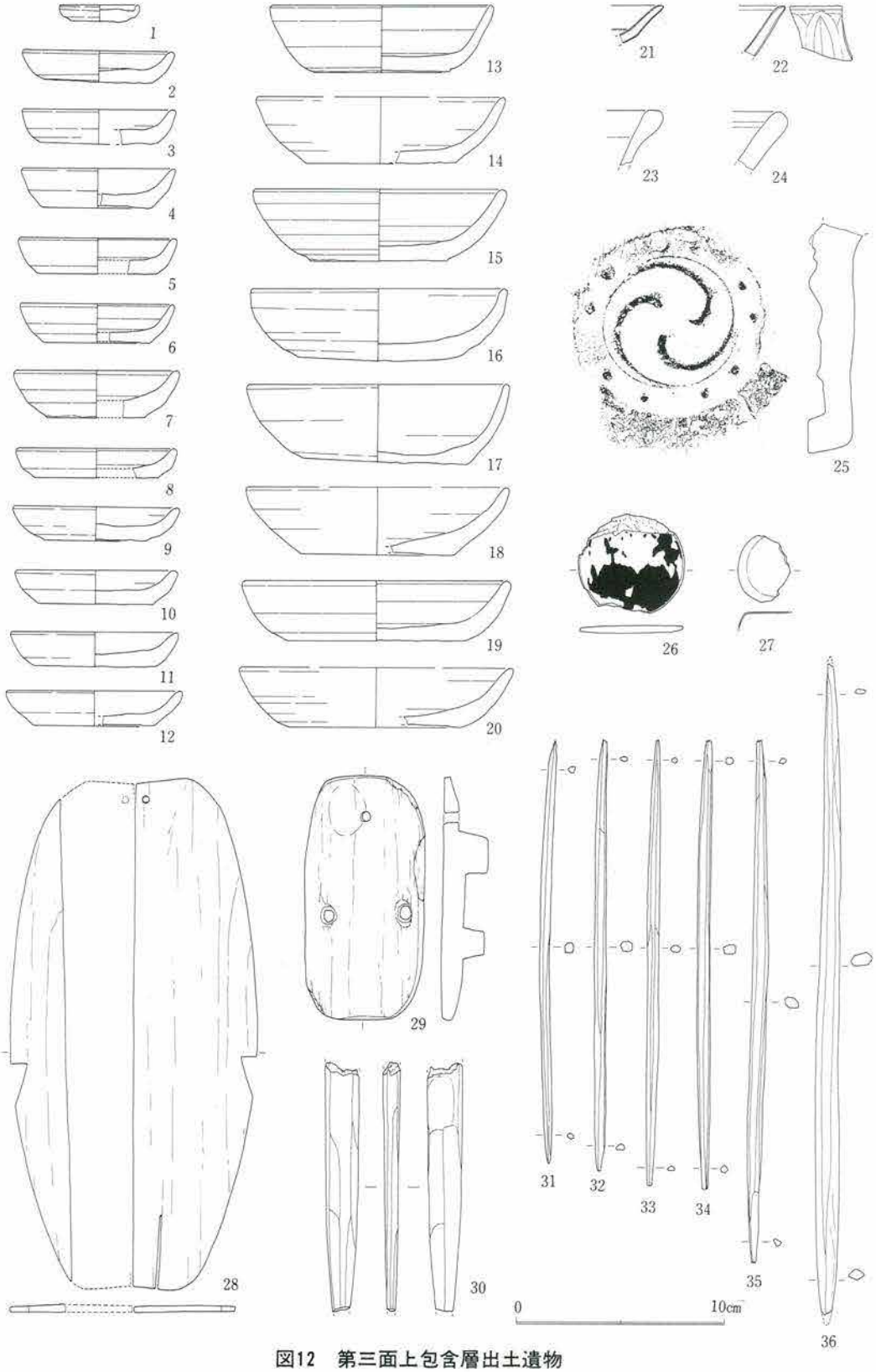


図12　第三面上包含層出土遺物

〈出土遺物の内訳〉溝２

かわらけ皿27点（手捏ね１・糸切り26）、常滑壺１点、釘２点、貝４点（アカニシ１・サザエ１・ハマグリ１・バテイラ１）、不明獣骨１点、種子１点（モモ）。

第四面上包含層出土遺物（図14）……暗灰色砂質粘土層（図３―18層）下位に含まれていた遺物である。木製品としては建築材と思われる断片が多く、箸状木製品や折敷の類は少ない。

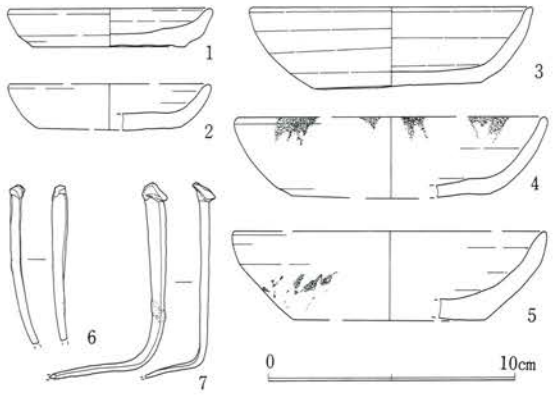


図13　第三面の遺物

１はかわらけ皿。測図可能なものは少なく、薄手タイプの皿は４点だけ確認された。

２・３は青磁碗。２は鎬蓮弁文、３は無文である。

４は瀬戸製品であろうか。内外面に薄く灰釉がかかる。

５は漆器碗。内外面に黒色系漆を塗り、無文である。溝２に接近して出土した。

６は木製鏑と思われる。先端近くに三方向から四角い穴を穿ち、身部は中空である。いずれの穴も貫通はしていない。

７は木製容器の蓋あるいは底板。

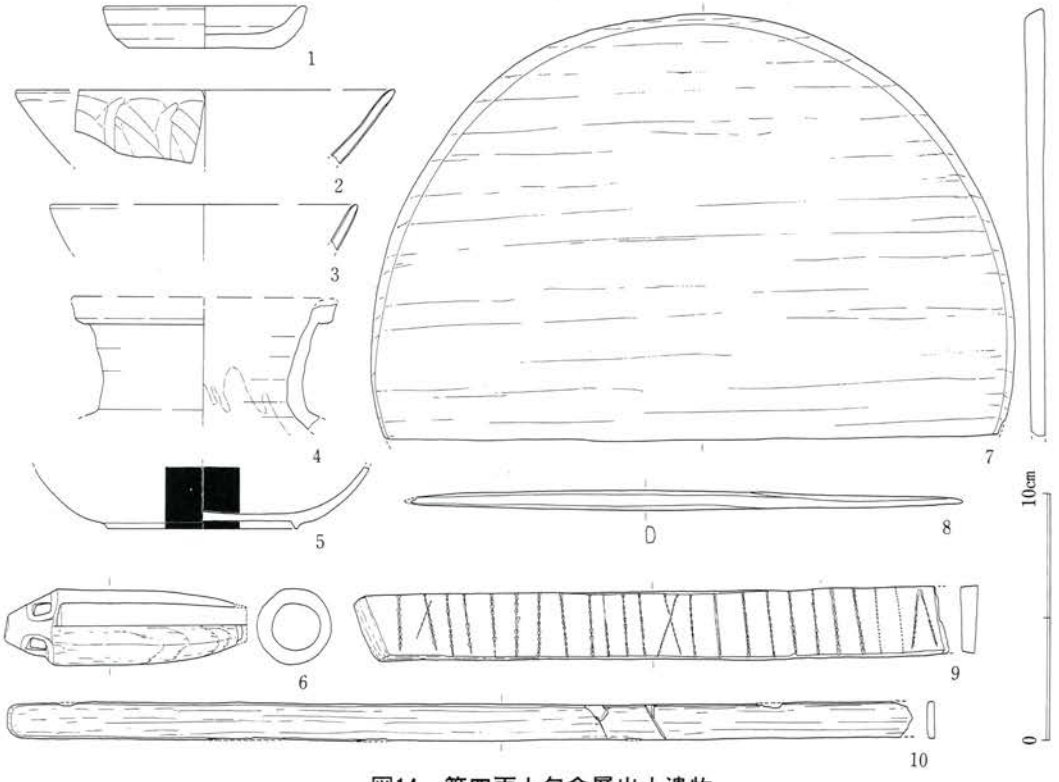


図14　第四面上包含層出土遺物

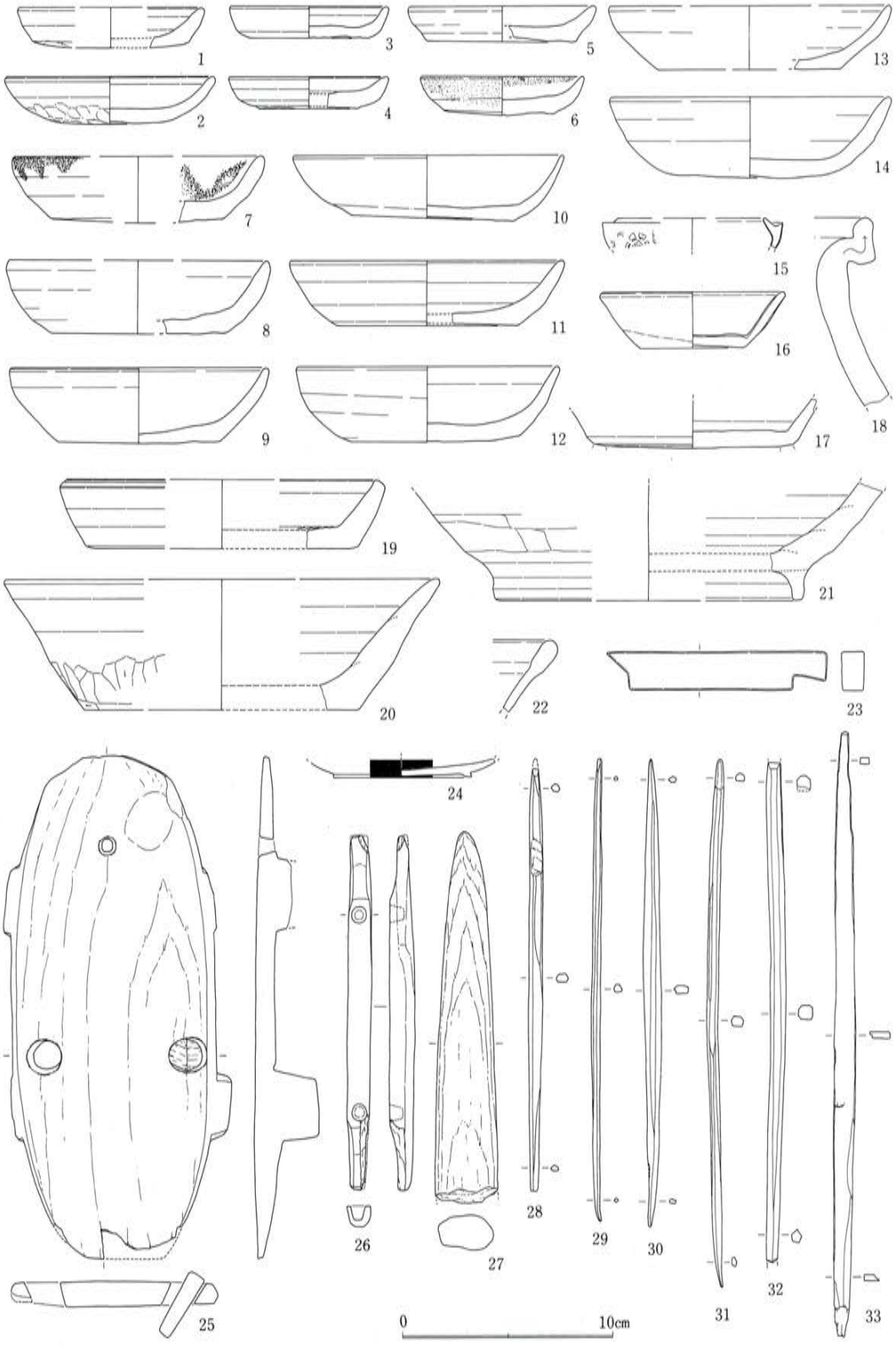


図15　サブトレンチ出土遺物

8は箸状木製品。

9は計測具であろうか。板材の片面に刃状工具で刻み目をつける。刻み目の間隔は不規則であるが、X印の間を10分割していることがわかる。

10は不明木製品。細板状の製品で一端を丸く削る。

〈出土遺物の内訳〉

かわらけ皿47点（手捏ね1・糸切り28・不明18）、青磁4点（碗3・鉢1）、瀬戸壺1点、常滑15点（甕14、壺1）、山茶碗窯捏ね鉢2点、貝10点（アカニシ1・ダンベイキサゴ2・キサゴ1・ハマグリ6）、大型獣骨4点（肋骨3・四肢骨1）、鳥骨2点、種子2点（クルミ）、須恵器3点（坏2・甕1）、土師器甕1点。

サブトレンチ出土遺物（図15）……地山上に堆積した粘土層（図3—19・20層）中から出土した遺物である。小範囲の調査であるため遺物量は少ないが、木製品のなかには一部に焼け焦げのある建築材断片も含まれる。また古代遺物も若干量出土した。

1～14はかわらけ皿。1・2・14は手捏ね成形。10は薄手タイプ。6・12は略完形品である。

15は青白磁合子。身部小片である。

16は白磁口兀げ皿。体部下半～外底面に釉はない。

17は須恵器坏。底部回転糸切り後、外周部に回転ヘラケズリ調整を加える。内底面はわずかに磨耗。肉眼では白色針状物質が認められない。

18・20は常滑製品。18は甕。20は鉢。鉢の体部下端はヘラケズリ調整、内面には濃緑色の自然釉が厚くかかる。

19は瀬戸灰釉卸し皿。

21・22は山茶碗窯捏ね鉢。

23・24は漆器。いずれも全面に黒色系漆を塗っている。23は調度品の一部か。24は皿である。

25は下駄。削り出しの歯をもち、鼻緒止めの木片が差し込まれている。

26は紡績具。糸巻きの枠木である。

27は杭状の木製品。用途不明。

28～33は箸状木製品。33は未製品と思われる。

〈出土遺物の内訳〉

かわらけ皿114点（手捏ね9・糸切り70・不明35）、白磁皿3点、青白磁合子1点、瀬戸卸し皿1点、常滑18点（甕17・鉢1）、渥美甕1点、山茶碗窯捏ね鉢4点、釘2点、貝45点（ハマグリ35・アカニシ1・メカイアワビ1・バテイラ1・イボキサゴ1・ダイベイキサゴ5・カリモニガイ1）、須恵器2点（坏1・甕1）。

排水溝内出土遺物（図16）……調査区壁沿いに排水溝を掘った際出土した遺物である。層序的には新旧混在しているため、主要な遺物のみ測図化した。

1～8はかわらけ皿。2～4・6が略完形品。

図16　排水溝内出土遺物

9は土製円盤。かわらけ皿底部の再加工品である。

10は青磁合子蓋。完形品。

11は瀬戸輪花形入れ子皿。高さ調整のため、外底面の四箇所を爪で掻き出している。

12は箸状鉄製品。両端が細く、断面は正方形の製品。用途不明。

13は下駄。

第五章　調査のまとめ

遺跡の年代

遺跡の上限については、地山面を調査することができなかったため明らかではない。しかし、トレンチ内から出土した須恵器坏（図15—17）は8世紀後葉～9世紀前葉の特徴をもっており、中世以前の遺構が存在した可能性を否定できない。

中世遺物ではかわらけ皿が出土遺物の大半を占めている。その特徴をもとに、鎌倉での編年観に沿って実年代の比定を行うこととする。

出土したかわらけ皿の中には、13世紀代に通有の手捏ね成形の皿は非常に少なく、トレンチ内では糸切り皿との数量比が1：7と低い割合を示している。このことは、調査地点における中世の営為が13世紀の終末、むしろ14世紀になって開始されたことを示唆している。また、糸切り底の皿には、器壁が厚く体部の直線的に外反する器形、すなわち、15世紀中葉以降に顕著となるタイプの皿は1点も出土していない。おそらく、鎌倉が衰微し始める14世紀終末～15世紀初頭頃をもって、遺跡は廃絶してしまったものと考えられよう。

14世紀を主体とするかわらけ皿は、器壁が薄く胎土の精製された〝薄手タイプ〟と呼ばれる皿の

消長が年代的指標となる。同種の皿はトレンチ内出土遺物（図15—10）中にみられ、第四面上包含層中では4点が確認されている。数量的に最も顕著となるのは第二面上包含層（図9—33～46）の時期で、薄手タイプの中にも体部中位に強い屈曲をもつ特徴的な一群（図9—33～37）が含まれている。この一群は今小路西遺跡の中世第2面～第3面出土遺物中に多くみられ、年代的に近いことが予想されよう。

以上を整理すると、本調査地点での第四面は13世紀末～14世紀前葉、第三面が14世紀前葉、第二面が14世紀前葉～中葉、第一面が14世紀後葉～15世紀初頭に比定できる。

調査成果と問題点

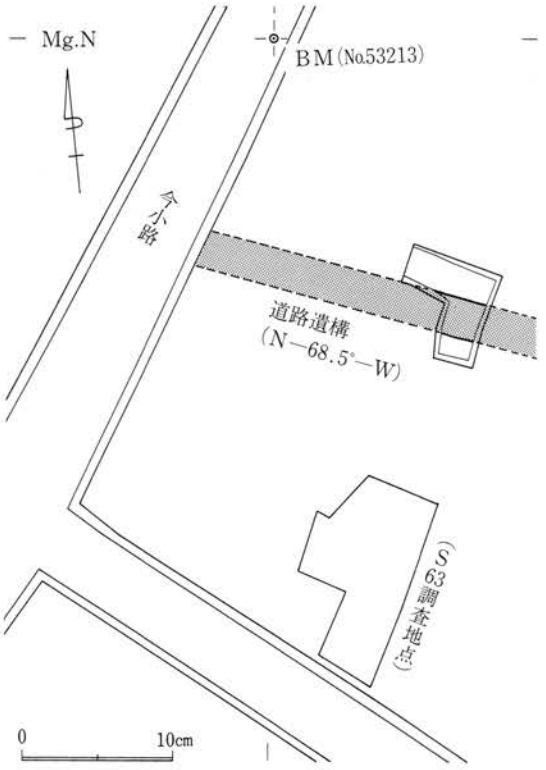
第一面で検出された道路遺構は、鎌倉の街割りを考える上で極めて重要な発見であった。現在までに今小路周辺で検出された道路遺構は、千葉地遺跡・千葉地東遺跡・今小路西遺跡[註1]の3地点にあるが、千葉地東遺跡は南北方向の道路である。東西方向の道路についてみると、千葉地遺跡は主軸方位N—81°—E、幅員4.5m、今小路西遺跡は主軸方位N—115°—E、幅員約5mを測る[註2]。本調査地点の道路幅はいずれにも劣るものであるが、今小路西遺跡の道路とは主軸方位をほぼ同じくしている。また、両道路間の距離は大体375～380mを隔てているが、丁度その中間に千葉地遺跡の道路が位置することになる。（図18）

この3地点の道路が計画的に作られた都市の区画であるとは、数値の類似や規格性だけでは判断できない。なぜならば、検出された範囲が部分的であるため、屋敷地へ行くための私道であるか、大路と大路を結ぶ公道であるかが確認されていないこと、また、千葉地遺跡と今小路西遺跡の道路が13世紀中葉から存続していたのに対し、本調査地点の道路は14世紀後葉に作られている点が問題として残っているからである。文献史料にみえる〝咒師勾当辻子〟〝宇津宮辻子〟〝柳辻子〟等々との比定も、同様の理由で結論を下すには至っていない。

第二面の遺構は、既に調査が行われた南側の地点（図1—12地点）と共通点が多く、同一の遺構である可能性が強い。既調査地点では南側に通路状の切石列を配し、その北側に礎石列や柱穴列（柵？）を伴った基壇状の遺構が存在する（図17）。基壇状遺構の一部には、かわらけ皿を破砕してつき固めた箇所と本調査地点と同様の土丹版築面がみられ、レベル的にも等しく、切り石列等の方向性も一致している。出土遺物にはかわらけ皿と箸状木製品が多く、焼け焦げた建築材の一部や焼土面（既調査地点）も確認されてはいるが、遺構の性格を直接的に知る資料はなく不明といわざるを得ない。既報告書[註3]では小規模の堂を想定したが、基壇状遺構の南辺と北辺との間が約16.5mあることから、より広い範囲で考え直す必要があろう。

第三面以下については、現時点で特記すべき問題もないため省略する。

註1　『今小路西遺跡・第五次発掘調査概報』同遺跡発掘調査団編　1993
註2　両遺跡ともに14世紀後半の道路遺構の数値であり、時期ごとに多少の変動がある。
註3　『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6』245頁　鎌倉市教育委員会　平成2



〈第一面対比図〉
・道路遺構は主軸方向に延長して図化した。
・S63調査地点では遺構が検出されていない。

〈第二面対比図〉
・両地点で基壇状の遺構が検出された。

図17　近接地点遺構対比図

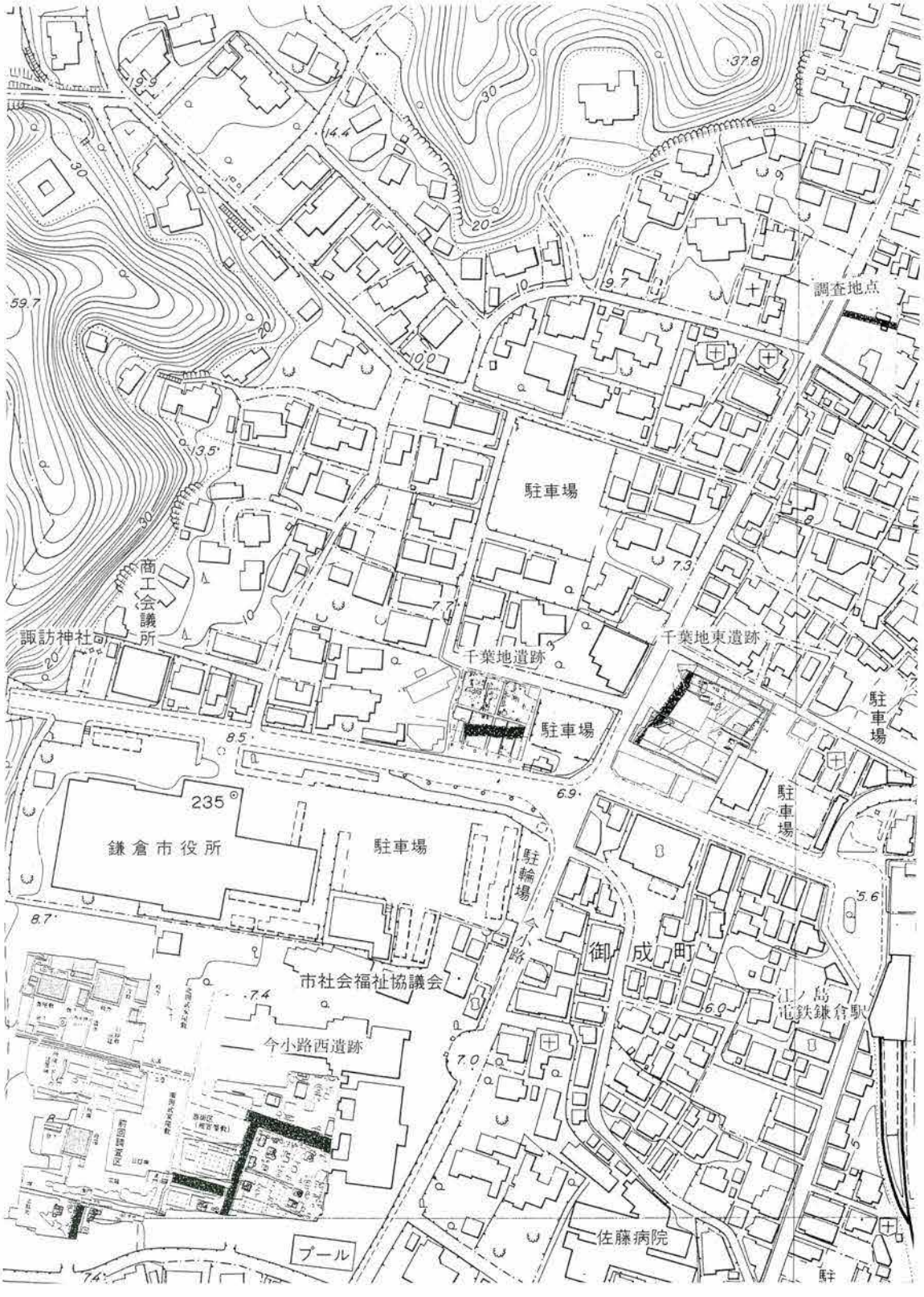
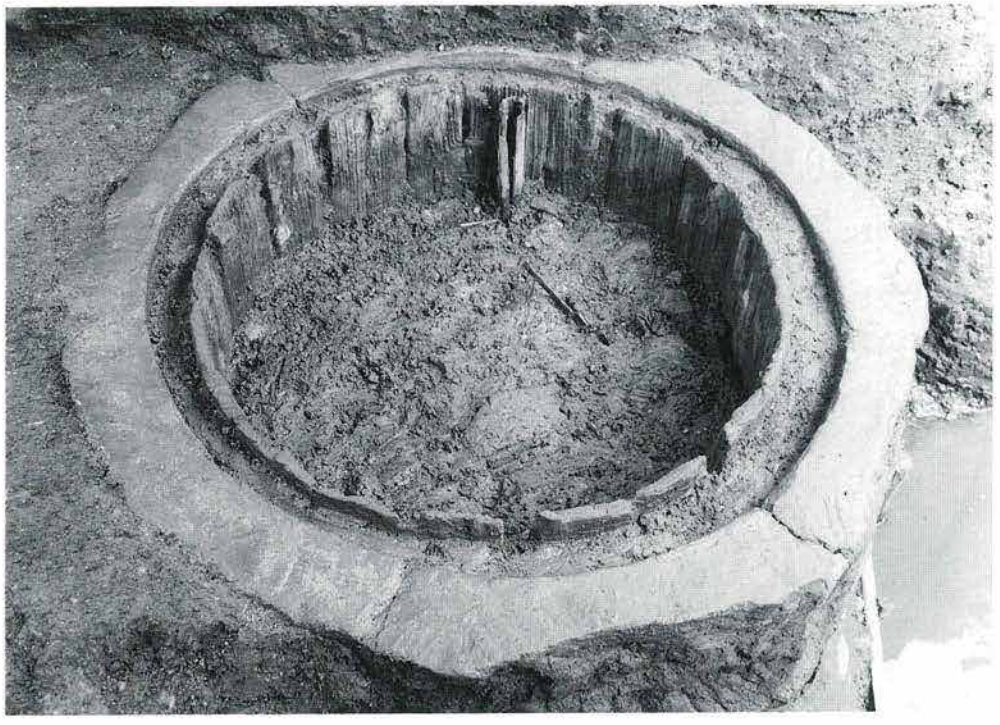
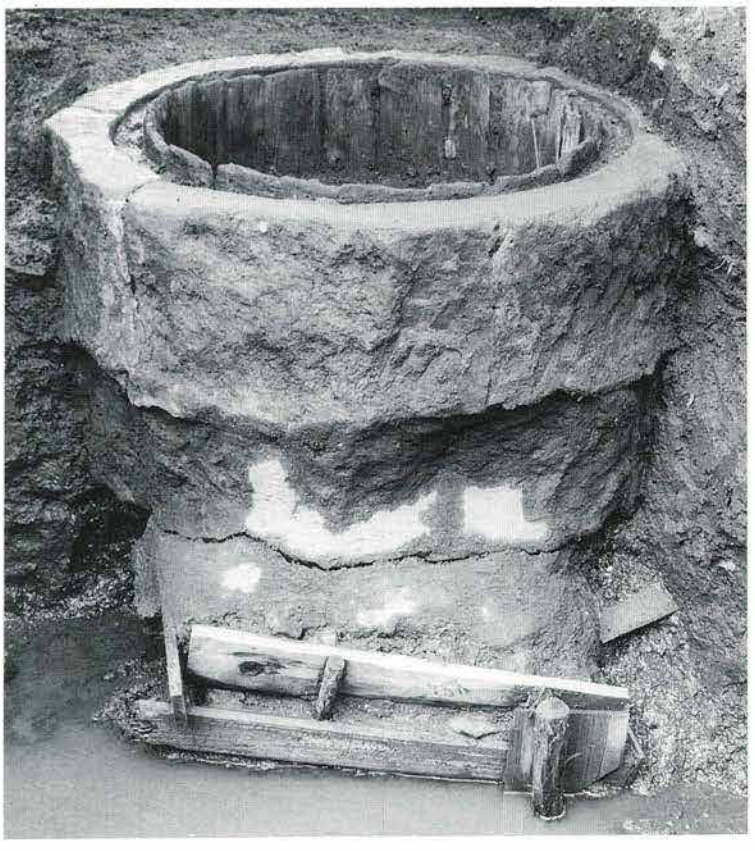


図18　今小路周辺の道路遺構



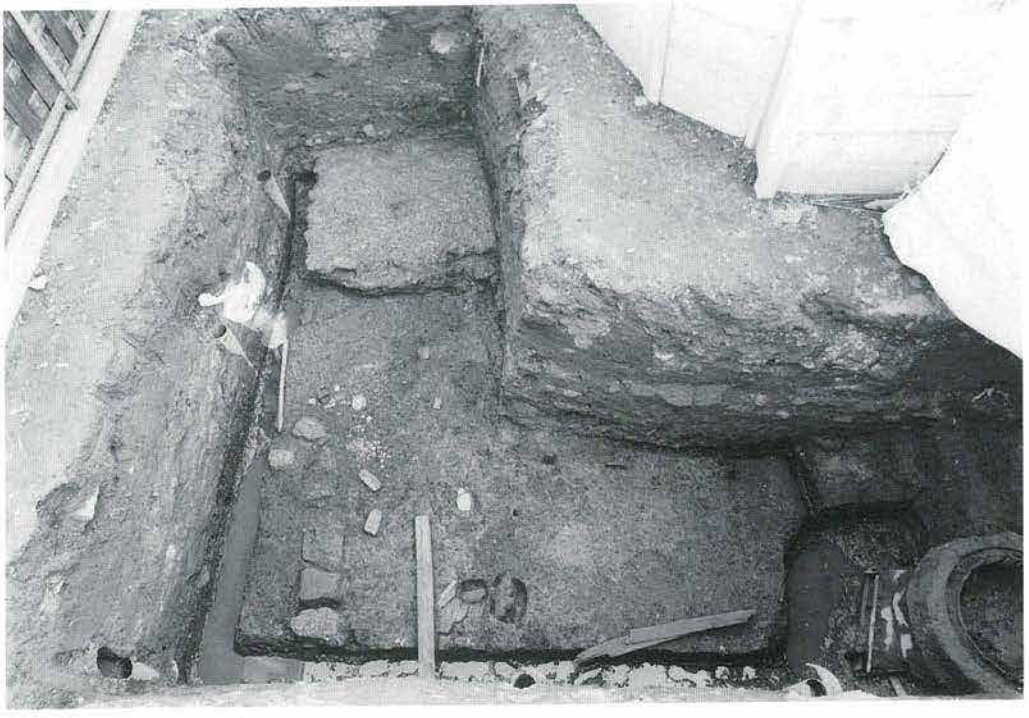


井戸址検出状態（上面及び側面）

図版 2

第一面全景(北から)

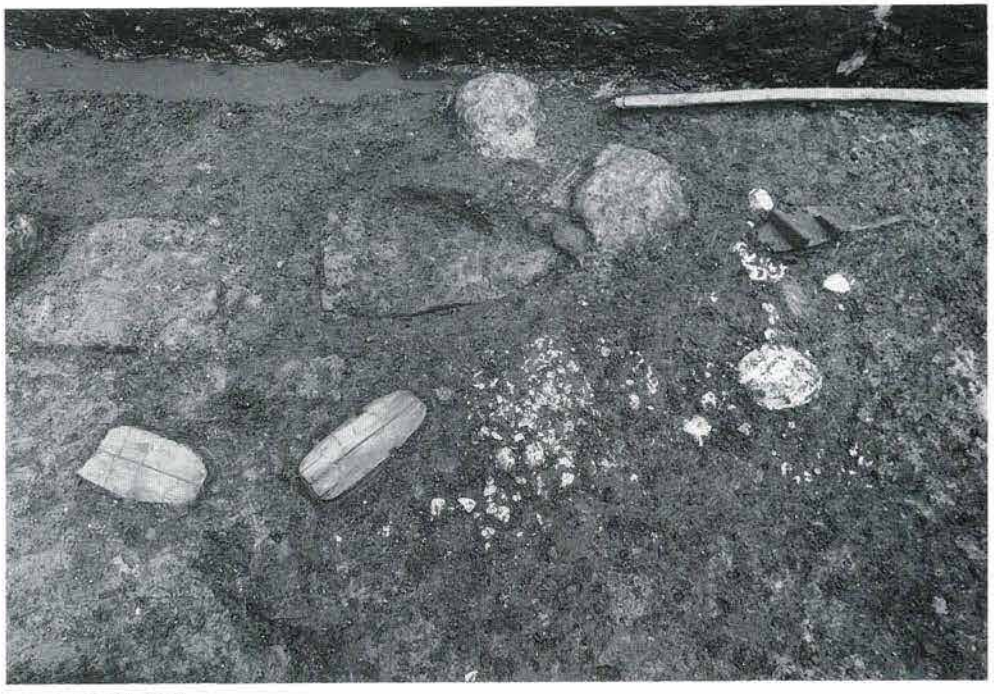
道路遺構(東から)



第二面全景(北から)

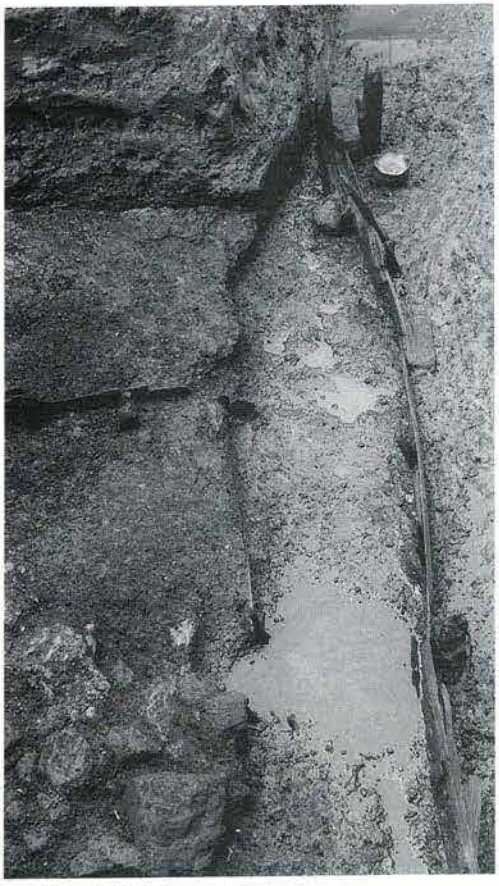
切石列周辺の遺物出土状態(東から)

図版 4

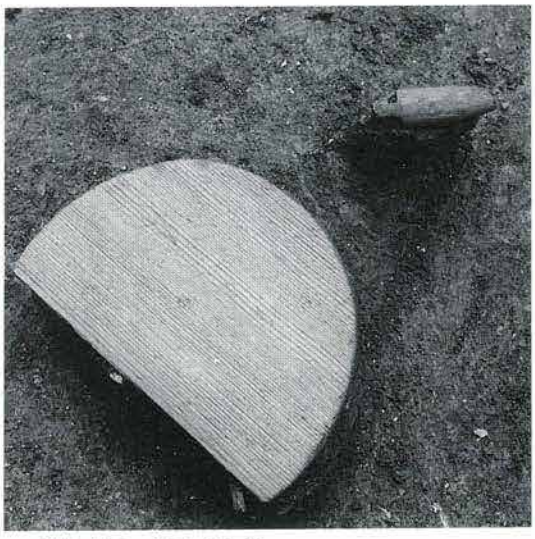


食物残滓状態

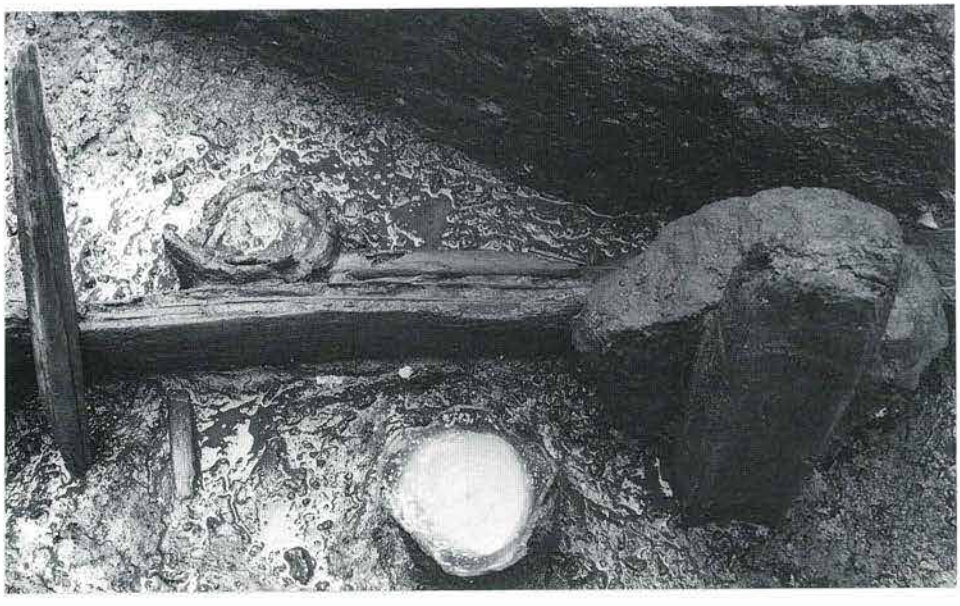
第三面全景(北から)・土丹版築面除去前



溝 2（東から）



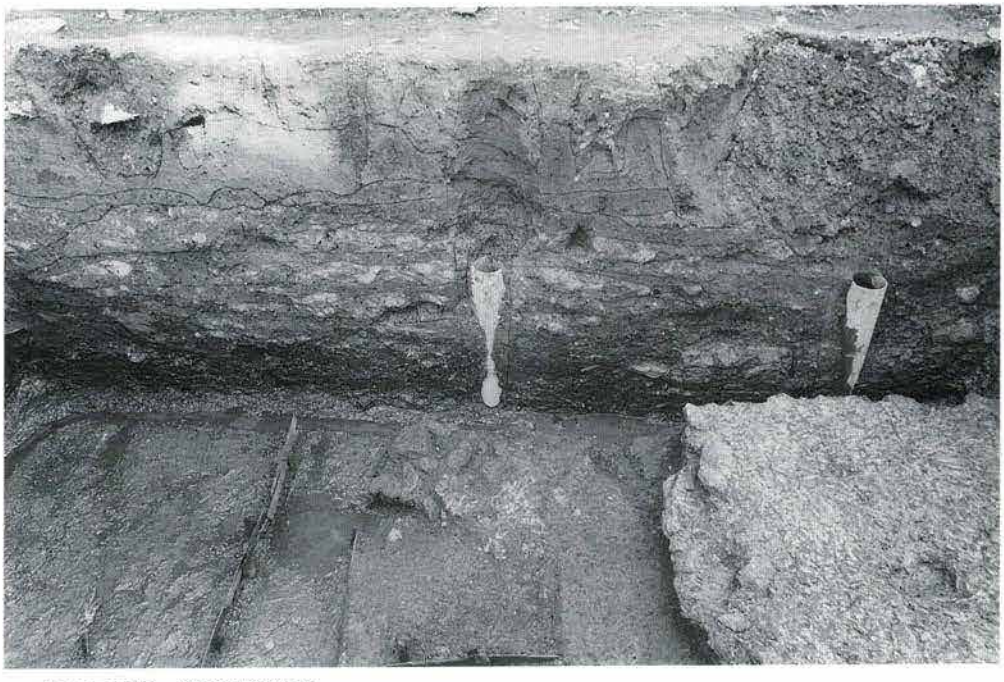
曲物底板・鏑出土状態



柄杓・漆椀出土状態

図版 6

調査区内近景(西から)



調査区東壁・道路遺構断面

図 9 － 2

図 9 －12

図 9 －13

図 9 －17

図 9 －26

図 9 －29

図 9 －31

図 9 －32

図 9 －34

図 9 －36

図 9 －37

図 9 －40

図 9 －44

図 9 －45

図10—51

図10—52

図10—54

図10—55

図10—58

図10—59

図10—60

図10—67

第二面上包含層出土かわらけ皿

10. 笹目（ささめ）遺跡（No.207）

笹目町425番1外地点

例　言

1．本報は、鎌倉市笹目町425番１外に所在する住宅建築に伴う発掘調査の報告である。

2．発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が平成５年２月15日から３月６日にかけて実施した。

3．本報の執筆は、田代郁夫が行なった。また、資料整理及び図版作成には土屋浩美・田代幸子・早野滋子・浜野洋一・佐々木靖・松山敬一朗・遠藤雅一があたった。

4．本報に使用使用した写真は、遺構・遺物ともに佐々木靖が撮影した。

5．調査体制は以下のとおりである。

調 査 主 任　田代　郁夫

調　査　員　継　実・熊谷洋一・浜野洋一・佐々木靖

調査補助員　シルバー人材センター鎌倉市高齢者事業団

6．発掘調査及び本書作成に際し、下記の方々よりご協力、ご教示を賜った。記して深く感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

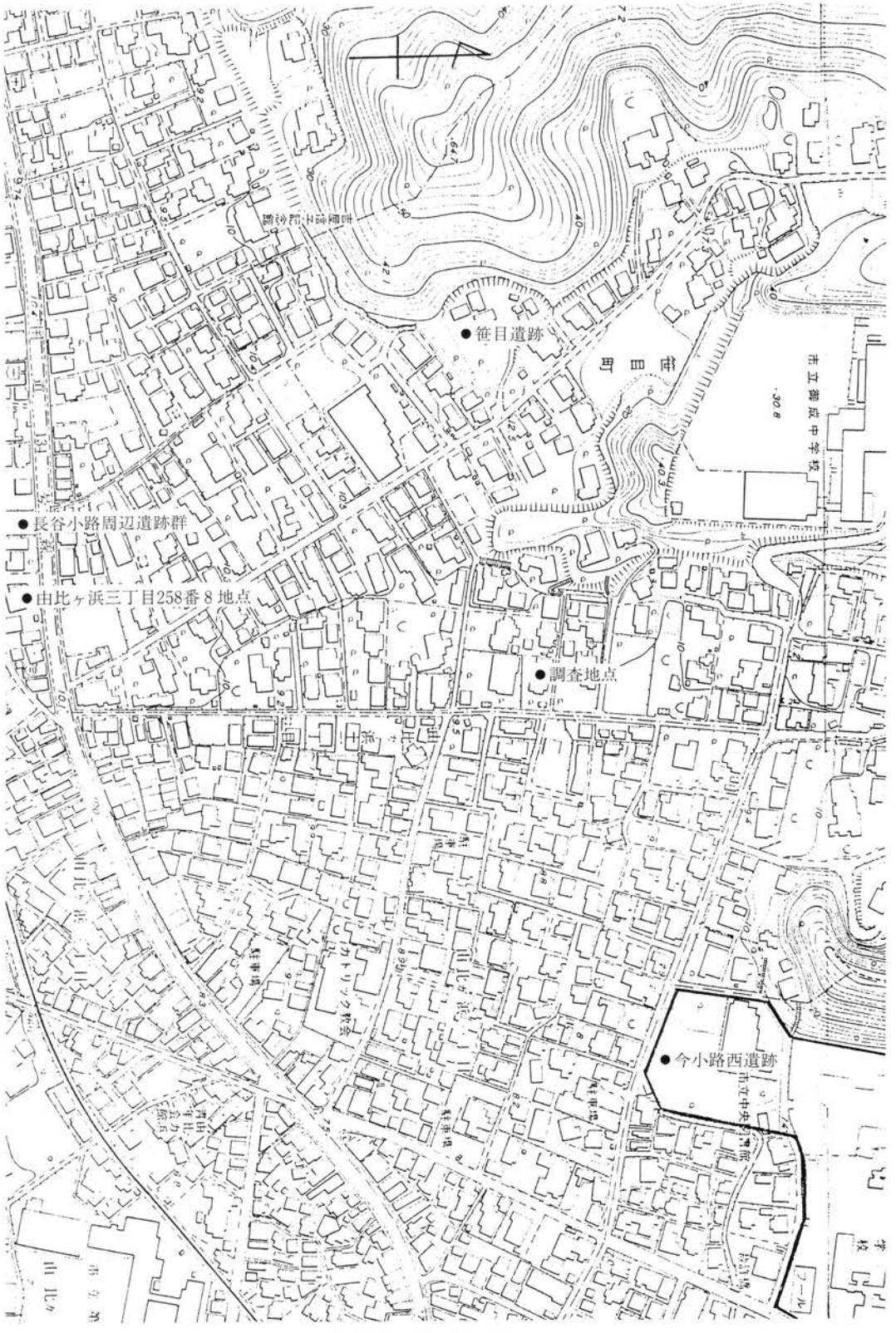
中田　英（神奈川県教育委員会）・松尾宣方・玉林美男・永井正憲・馬淵和夫・福田　誠（鎌倉市教育委員会）・大三輪龍彦・手塚直樹・河野真知郎・斉木秀雄・宮田　真・宗臺秀明・大河内勉・木村美代治・原　廣志・菊川秀政・宗臺富貴子・瀬田哲夫・清水菜穂・菊川　泉・汐見一夫・佐藤仁彦・大坪聖子・シルバー人材センター鎌倉市高齢者事業団（山下陽一郎・原田昌幸）

目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……227
第２章　調査の経過と検出した遺構 ……228
第３章　出土遺物 ……230

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 ……226
第２図　調査区全体図 ……229
第３図　出土遺物１ ……232
第４図　出土遺物２ ……233



第1図　遺跡位置図

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

鎌倉の中で遺跡の調査をするとき、わたしたちはかつて石野瑛氏の述べられた「鎌倉は谷（やつ）の集合体である」（神奈川県大観３・鎌倉・三浦・湘南・昭和33）という言葉を思い起さないわけにはいかない。なぜならば、遺跡周辺の歴史的環境の中で遺跡を捉えるには、考古学はもとより文献史学・地理学といった様々な学問領域の成果を必要とするわけだが、そのとき、対象となる遺跡がどの谷（やつ）に属しているかといったことが、大きな問題点となるからである。すなわち、文書・記録に残る武士の居館の所在地、廃寺の所在地等々、多くは何々ヶ谷といった地名で書き残され、また、谷戸と谷戸を結ぶ道、山から流れ出る細流の流路、そういったものに遺跡の立地が大きく関わっているからである。

さて、今回調査した笹目遺跡は、鎌倉市笹目425番１外に所在する。現在の地番で言うと文字通り笹目にあるわけだが、地図を繙けば、佐々目ヶ谷と佐助ヶ谷との隣接するところにあり、道筋からすると佐助ヶ谷の前面にあたっている。ちょうど、天保３年（1832）扇ヶ谷村絵図（鎌倉の古絵図２　鎌倉国宝館図録16　昭和44）の佐々目ヶ谷と佐助ヶ谷を画す山の端に「七観音」とあるところの南東にあたる。

佐助ヶ谷は大きな谷戸でその内には多くの更に小さな谷戸と字（あざ）を含んでいる。さしあたって今回調査した遺跡の付近についてみれば、佐助ヶ谷の南、谷戸の入口付近に「御所入」の地名がある。北条経時が佐助ヶ谷に隠居し、専修念仏して卒ったという。御所入はその居所にちなむといわれている。経時の墓は笹目の麓にある。（前掲　神奈川県大観３）この笹目ヶ谷には遺身院があったといわれ、『金沢文庫文書』に「佐々目遺身院」とみえている。遺身院は北条経時の墳墓の傍らに営まれた梵字で経時の菩提所といわれている。またこの周辺の火災記事として、『随文私記』には永仁五年（1297）閏十月七日未の刻、佐々目ヶ谷口から出火、甘縄宿坊が焼け、聖教等を出したという。次に、笹目遺跡をとりまく周辺の遺跡について概観してみたい。佐々目ヶ谷の入口西側には、島津邸遺跡があり、昭和六三年に発掘調査が実施され礎石建物や溝などの遺構が確認された。更に佐々目ヶ谷奥の西側山腹には佐々目ヶ谷榎並邸内横穴（赤星直忠　鎌倉市史考古編　昭和34）、佐々目ヶ谷斉藤邸内横穴群（一部やぐらにも転用）が知られており、また長楽寺ヶ谷周辺にもやぐら群と横穴群が広く分布している。（前掲　市史考古編）昭和63年度には市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査で笹目遺跡内やぐらを（昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書　平成２年）、またその一連のやぐら群である長谷小路周辺遺跡内やぐらを平成五年度に調査している。

第２章　調査の経過と検出した遺構

ａ．はじめに

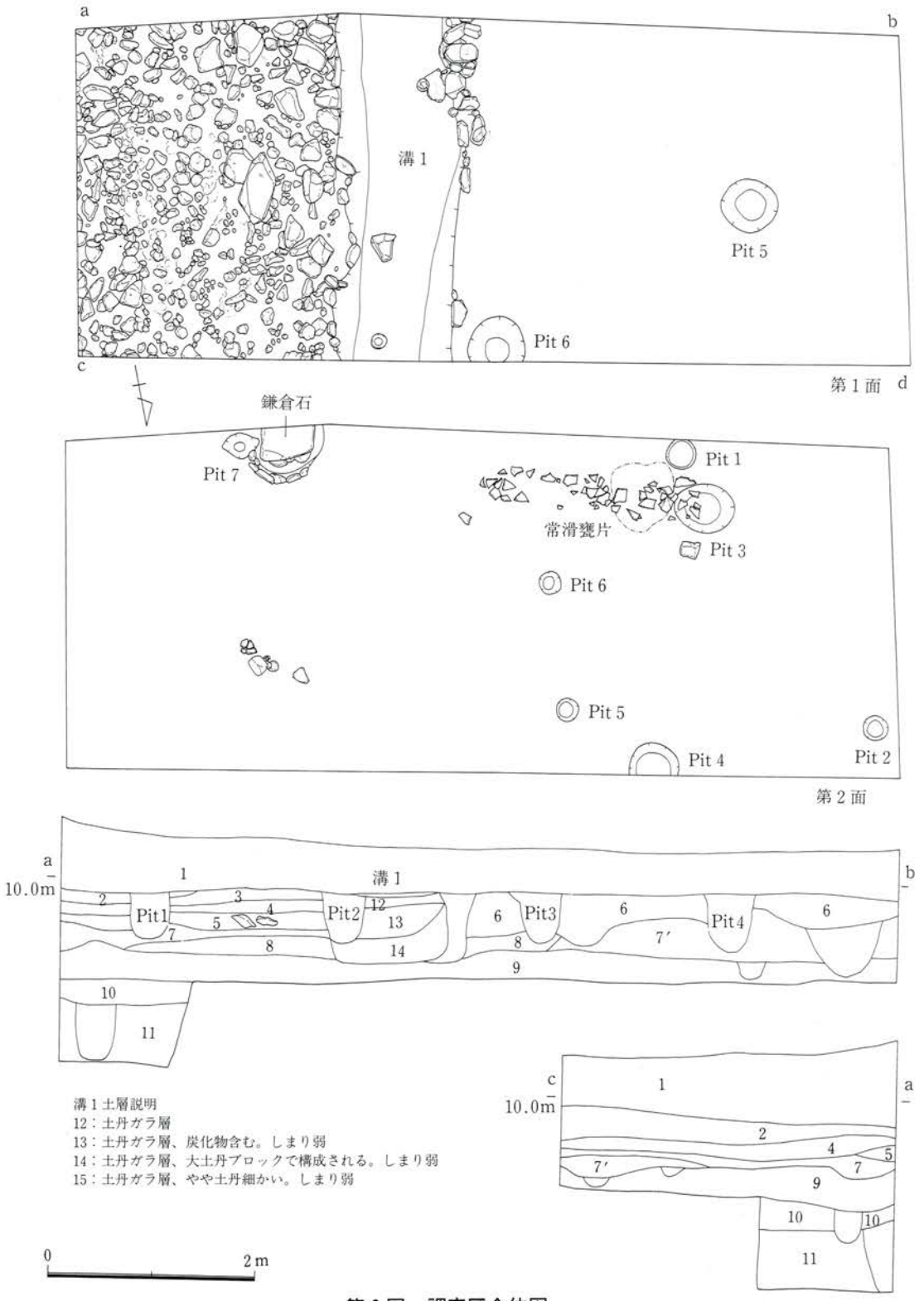
調査区は東西８ｍ、南北３ｍのやや幅広のトレンチのようなものであったので、ここでは初めに土層の堆積状況を説明し、順次検出した生活面および各生活面にともなう遺構について述べる。尚、セクションポイントＣとＤは座標値を持っている。ＣはＸ＝－76159.603、Ｙ＝－26048.665、ＤはＸ＝－76158.638、Ｙ＝－26056.908である。

ｂ．土層堆積状況

厚さ４～50cmの表土層（第１層）下に遺物包含層および地業層が存在するが、調査区ほぼ中央で検出した南北方向にはしる溝（南北溝）を境に上層において若干様相を異にする。調査区東側では表土下に10cm程度暗茶褐色土（第２層）が薄く堆積し、その下に第１面とした土丹地業層（第４層）の積み増しと思われる荒れた土丹層（第３層）が厚さ約10cm堆積していた。この土丹層（第３層）は調査区中央南北溝を溝の裏込め部分を除き薄く覆っており、溝廃絶後に敷いたものであるが、溝の西方でとまっており、南北溝が平面利用の区画の意味をもち、廃絶後もこの区画が踏襲されていたものと思われる。尚、この第２、３層を第１遺物包含層とした。上記土丹層（第３層）の下に、土丹による版築地業面を検出した。この版築地業面を構成する土丹地業層（第４層）の厚さは約10cmである。この土丹地業層（第４層）とその下位の土丹粒を含み良く締まっている茶褐色土層（第５層）は、南北溝の東側にだけ認められ、第４層と第５層を合わせた厚さは南北溝の西側に堆積する第６層（土丹塊、土丹粒、炭化物を含むやや締まりに欠ける暗茶褐色土層）とほぼ等しくこれら第４、５、６層は同時期に形成されたものと思われる。すなわち第４層の土丹版築面（第１面）は第５層を基盤として構築され、この西側を区画する目的で南北溝が構築され、土丹版築面とレベルを合わせるように第６層が埋め込まれたものであろう。第１面の標高は、約9.80mである。これら３層の下位層では、南北溝に区画されることなく、調査区全体に一様の堆積状況を呈している。すなわち第７、８層は暗茶褐色土層で土器片、炭化物を多量に含み、締まりの比較的弱い土質で、第２遺物包含層とした。第２遺物包含層の下に非常に良く締まった土丹版築面を検出した。厚さ３～40cmで調査区全体に広がり、この版築面を第２面としこれを構成する土丹地業層を第９層とした。第２面の標高は約9.40mである。調査予定はこの土丹地業層をはずすところまでであったが、調査区東側を若干掘り下げて下層の様子を探った。その結果、第10層は明黄褐色土層で、土器小片、炭化物、土丹粒を少量含む、粘性、締まりのある土質で、第11層は暗茶褐色土で、土器片、炭化物を多く含むやや締まりに欠ける土質である。

以上、本遺跡の土層堆積状況について概観した。次に、検出した遺構および遺物の出土状況について概観する。

ｃ．第１面より上層のピット


a
b
溝 1
Pit 5
Pit 6
c
第 1 面
d
鎌倉石
Pit 7
Pit 1
常滑甕片
Pit 3
Pit 6
Pit 5
Pit 4
Pit 2
第 2 面
a
10.0m
b
1
溝 1
2
Pit1
3
4
5
7
8
Pit2
12
13
14
6
Pit3
9
6
7′
Pit4
6
10
11
c
10.0m
a
1
2
4
5
7′
7
9
10
10
11
溝 1 土層説明
12：土丹ガラ層
13：土丹ガラ層、炭化物含む。しまり弱
14：土丹ガラ層、大土丹ブロックで構成される。しまり弱
15：土丹ガラ層、やや土丹細かい。しまり弱
0
2 m

第 2 図　調査区全体図

調査区南面壁に等間隔に４穴のピットを検出した。いずれも、表土直下に掘り込みが確認されているため、実際の掘り込み面は更に上層の可能性がある。これらのピットは調査区内に平面的に確認されていない。いずれもピット底は調査区外南に更に深く入り込むものと考えられる。

ｄ．第１面の遺構

土層堆積状況の項でも述べたが第１面上には、上端幅約140cm、底部幅約70cm、深さ約60cmの南北にはしる溝が検出された。覆土西側に裏込めと思われる土層堆積が見られ、東側については、上層ピットによって切られているため定かにできなかったが、やはり裏込めがあったならば、本来の溝の規模は幅100cm程度であったのであろう。

南北溝の東側は調査区内全面が土丹による版築地業面であった。面上には何ら他の遺構は検出されなかった。この版築地業面については、土層の堆積状況の項で述べた。

南北溝の西側では、ほぼ同規模のピットが２穴検出された。径５～60cm、底径２～30cm、深さ13～25cmである。

ｅ．第２面の遺構

第２面は、土丹による版築地業が施され、調査区全体に広がっている。面上で計７穴のピットを検出したが、建築物等を想定できるものはない。この他調査区南東で鎌倉石の切石を検出した。浅い据え方をもち、切石下には土丹を挟んで固定していた。第２面上の南側には常滑甕片が集中して散在し、その下には炭化物が径60cm程の範囲で広がっていた。

第３章　出土遺物

第１包含層出土遺物（第３図１～８）

１は龍泉窯系の青磁である。外面に蓮弁文が施されるが、鎬をもたない。素地は灰白色で緻密、粘性が強い。釉は淡緑色を呈し、比較的透明度は高い。２は口兀の小皿である。内側に雷文が型捺しされている。素地は白色で、緻密である。釉は乳白色を呈し、器面は光沢がある。３、４、５はかわらけである。３は口径11.8cm、底径7.3cm、器高2.8cm。胎土には黒雲母、微砂を含み、色調は淡い橙色を呈する。底部糸切り。内底面には横方向のナデが認められる。４は口径11.8cm、底径6.8cm、器高3.4cm。胎土には黒雲母、白色針状物質、微砂を含み、色調は淡い橙色を呈する。底部糸切り。内底面には横方向のナデが認められる。５はほぼ完形で、口径13.5cm、底径7.1cm、器高3.6cm。胎土には黒雲母、白色針状物質、微砂を含み、色調は淡い橙色を呈する。底部は糸切りで、内底面には横方向のナデが認められる。６は山茶碗窯系捏鉢の口縁部片である。小片のため口径などは定かではない。胎土は灰白色で黒色微砂を含むが、比較的緻密である。口唇部および内面に自然の降灰が認められる。７は常滑の甕の口縁部片である。所謂不職壷のタイプであろう。折り返された口縁部が頸部に接着している。胎土は長石、石英の微粒子を含み、色調は灰褐色を呈する。８は滑石製鍋の口縁部片である。内面は湾曲している部分を研磨して平らな面を作り出している。これまで

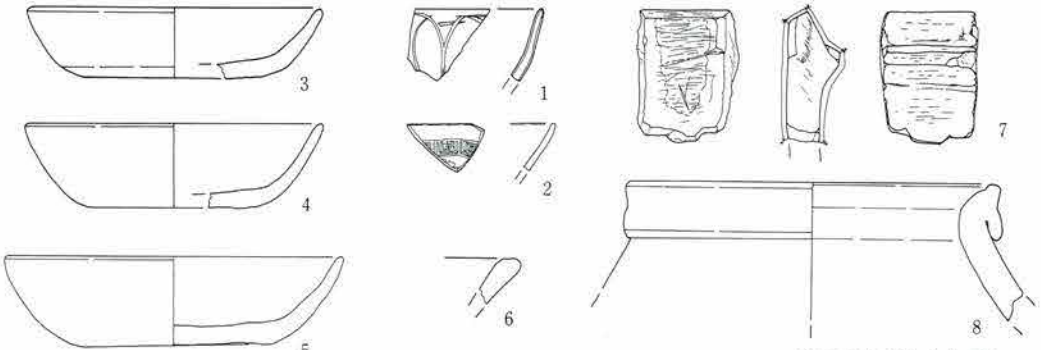
の他遺跡からの同様の出土遺物から考えて、滑石製スタンプの未製品であろう。

第1面上および第1面直上出土遺物（第3図9～17）

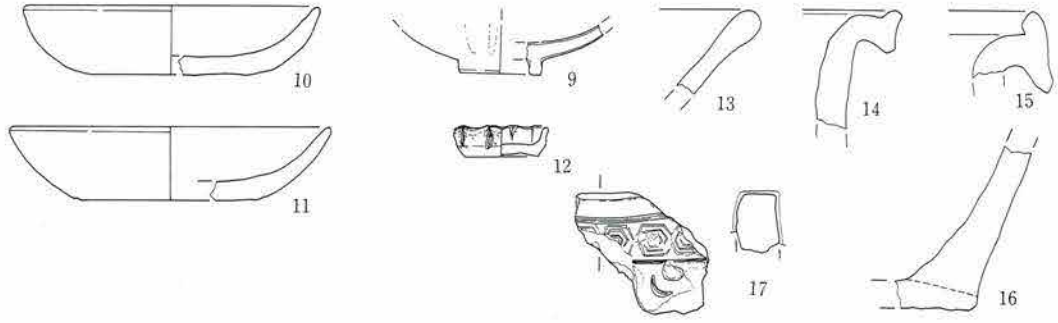
9は龍泉窯系青磁碗の底部小片である。蓮弁文系である。復元底径3.2cm。素地は灰白色で粘性があり、細かな気泡を含む。高台畳付を除いて施釉され、淡い緑色を呈する。面直上より出土している。10、11はかわらけである。10は復元口径11.8cm、復元底径5.4cm、器高2.7cmである。胎土は黒雲母、白色針状物質、微砂を含み、色調は淡い橙色を呈する。底部は糸切りで内底面には横方向のナデが認められる。面直上から出土している。11は復元口径12.8cm、復元底径7.3cm、器高3.0cm。胎土に黒雲母を多く含み、白色針状物質、微砂を含む。色調は淡い橙色を呈する。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。面直上から出土している。12は瀬戸の輪花の入子である。復元口径3.8cm、底径3.0cm、器高1.3cm。胎土は灰白色で長石微粒を少量含む。面上から出土している。13は山茶碗窯系の捏鉢の口縁部片である。小片であるため口径等は不明。胎土には微砂、長石粒を含み灰色を呈する。面直上より出土。14、15、16は常滑である。14は甕の口縁部小片で、口径等は不明。口縁部は上下方向にわずかに折り返されるだけである。外面には光沢のある緑灰色の自然釉がかかる。胎土は微砂、長石、小石を少量含み、灰色を呈する。面上から出土している。15は甕の口縁部である。口縁部は上下方向にやや大きく折り返されるが、縁帯部は頸部に接着していない。胎土には微砂、長石を含み、暗灰色を呈する。面直上から出土している。16は甕の底部片である。胎土には長石、石英、微砂を多く含み、暗灰色を呈する。17は瓦質手焙りの口縁部片である。口縁上方に二条の沈線間に小スタンプ文、その直下に連珠貼付文が巡る。表面は灰色を呈する。胎土は淡橙色で微砂多く、小石を若干含む。

第1面1号溝覆土出土遺物（第3図18～33）

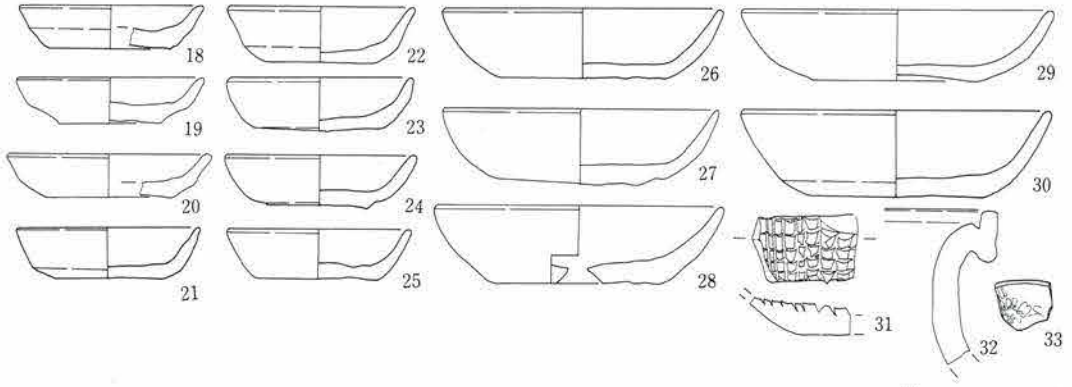
18～30はかわらけである。18は復元口径7.3cm、復元底径4.9cm、器高1.7cm。胎土は黒雲母を多く含み、土丹粒を少量含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。19は復元口径7.4cm、復元底径4.1cm、器高1.8cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。20は復元口径7.9cm、復元底径5.0cm、器高1.8cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。21は完形で、口径7.3cm、底径4.3cm、器高2.1cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。22は復元口径7.4cm、復元底径4.4cm、器高2.2cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。23は復元口径7.3cm、復元底径5.2cm、器高2.1cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。24は復元口径7.6cm、復元底径4.4cm、器高2.1cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。25は口径7.4cm、底径4.8cm、器高2.0cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。26は復元口径11.0cm、復元底径6.6cm、器高2.8cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。27は口径11.0cm、底径5.8cm、器高3.1cm。胎土



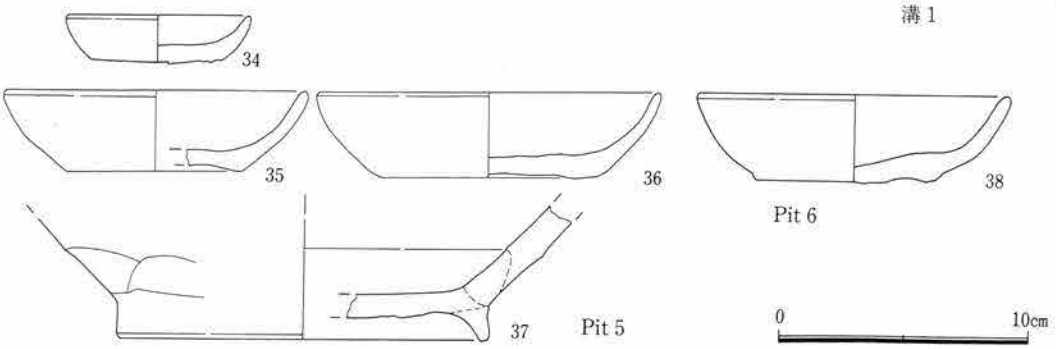
第1面上遺物包含層中



第1面上



溝1

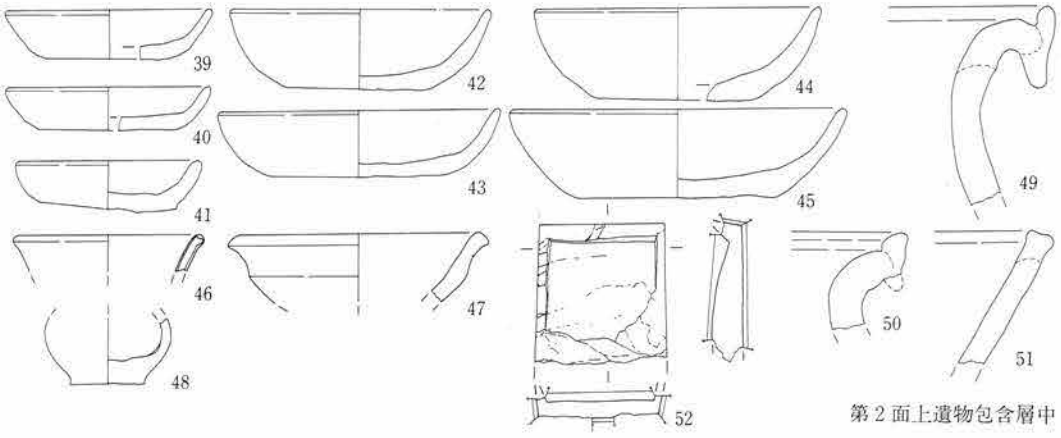


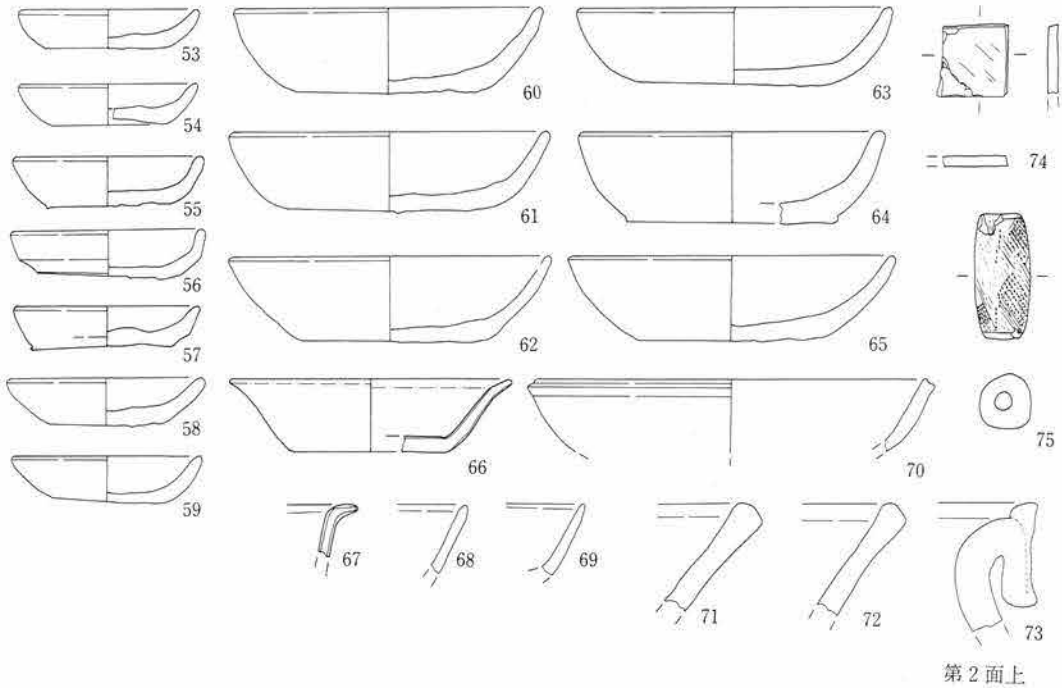
Pit 5

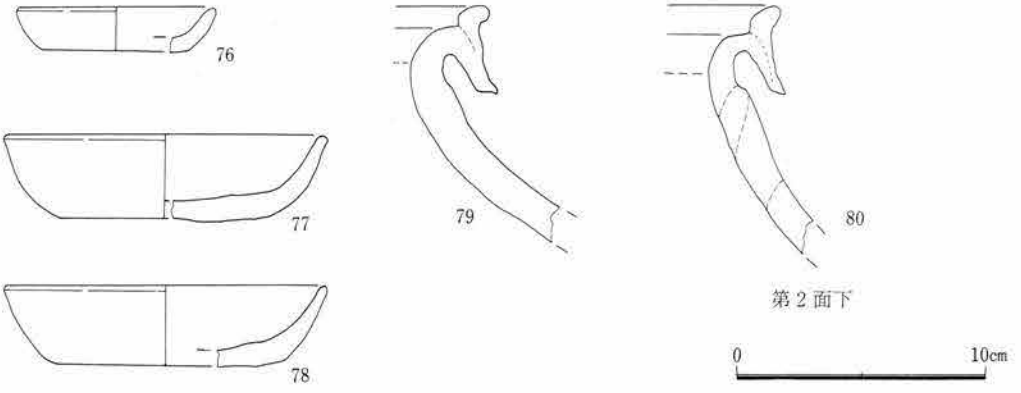
Pit 6

0 10cm

第3図　出土遺物1


39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
第2面上遺物包含層中


53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
第2面上


76
77
78
79
80
第2面下
0
10cm

第4図　出土遺物2

は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。28は復元口径11.4cm、復元底径6.5cm、器高3.1cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。底部中央には焼成後の穿孔がみられる。29は復元口径12.4cm、復元底径6.7cm、器高2.8cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。30は復元口径12.4cm、復元底径7.0cm、器高2.1cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。31は瀬戸卸し皿の小片である。胎土は比較的精良で灰色を呈する。32は常滑甕の口縁部片。口縁端部はN字状に折り返されるが、縁帯幅は狭い。胎土は長石粒、砂粒を多く含む。外面には自然釉が緑色にかかる。33は青白磁印花文皿の小片である。素地は白色を呈し粘性に富む。

第1面上検出ピット内出土遺物（第3、4図34～45）

ピット5

34～36はかわらけである。34は口径7.3cm、底径5.2cm、器高1.9cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。35は復元口径12.0cm、復元底径7.0cm、器高3.3cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。36は復元口径13.6cm、復元底径8.5cm、器高3.4cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。37は山茶碗窯系の捏鉢底部である。底径14.8cmで、貼付け高台。胎土は長石、小石、砂粒を多く含む。色調は暗灰色を呈する。内面はよく摩滅している。

ピット6

38～45はかわらけである。38は口径12.4cm、底径7.2cm、器高3.5cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。39は復元口径8.1cm、復元底径5.0cm、器高2.0cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。40は復元口径8.1cm、復元底径6.6cm、器高2.0cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。41は口径7.3cm、底径5.4cm、器高2.1cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。42は復元口径10.3cm、復元底径5.8cm、器高3.2cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。43は復元口径11.2cm、復元底径7.0cm、器高3.2cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。44は復元口径11.3cm、復元底径6.4cm、器高3.7cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。45は復元口径13.3cm、復元底径6.7cm、器高2.8cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。

第2包含層出土の遺物（第4図46～52）

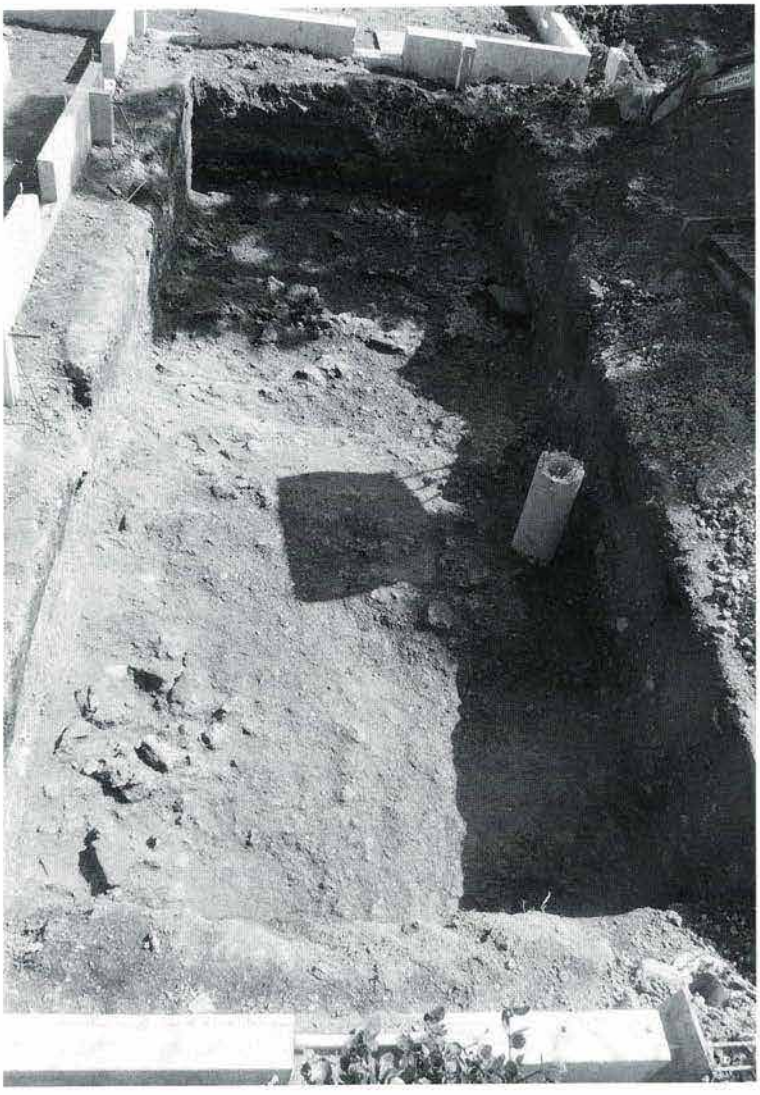
46は龍泉窯系の青磁小鉢である。素地は微砂を含み、灰白色を呈する。釉は淡い緑色を呈する。復元口径7.4cm。47は瀬戸灰釉の小鉢である。胎土は灰白色を呈し微砂を含む。灰釉は薄くかけられ

ている。復元口径9.6cm。48は瀬戸灰釉の仏華瓶である。底径3.0cm。胎土は灰白色。釉はきわめて薄くかけられ、淡い緑色を呈する。49～51は常滑である。49は甕の口縁部片。折り返された端部は上下に大きく引き伸ばされ幅広の縁帯をつくるが、頸部には接着していない。胎土は長石、石英、砂粒を多く含む。50はやはり甕の口縁部。N字状口縁は下端部が欠損している。長石、砂粒を含む。51は捏鉢の口縁部。胎土には長石、砂粒を含む。口縁端部は平坦で、内外方向への引き出しは見られない。52は硯である。黒灰色の石材で陸部にはひび割れて微細な線が多数見られる。

第2面上出土の遺物（第4図53～80）

53～65はかわらけである。53は復元口径7.0cm、復元底径4.8cm、器高1.6cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。54は復元口径7.0cm、復元底径4.5cm、器高1.7cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。55は口径7.0cm、底径4.8cm、器高1.6cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。56は口径7.5cm、底径5.8cm、器高1.9cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。57は口径7.4cm、底径5.7cm、器高1.6cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。58は復元口径7.6cm、底径4.4cm、器高1.9cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。59は口径7.5cm、底径4.5cm、器高1.9cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。60は口径12.2cm、底径7.5cm、器高3.4cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。61は復元口径12.6cm、復元底径8.2cm、器高3.2cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。62は復元口径12.8cm、復元底径7.1cm、器高3.5cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部は糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。63は復元口径12.6cm、復元底径7.6cm、器高3.1cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部は糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。64は復元口径12.0cm、復元底径8.4cm、器高3.7cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部は糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。65は口径12.8cm、底径7.4cm、器高3.5cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部は糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。66は白磁口兀小皿である。復元口径11.2cm、復元底径6.0cm、器高2.9cm。素地は比較的精良で白色を呈する。釉の色調は乳白色を呈する。67は龍泉窯系青磁の鉢である。素地は灰白色で微砂を含むが精良である。色調は淡緑色を呈する。68、69は白磁口兀小皿の小片である。70は瀬戸卸し皿である。復元口径15.7cm、胎土は比較的精良で灰白色を呈する。色調は緑灰色を呈する。71、72は山茶碗窯系の捏鉢である。いずれも胎土は石英、粗砂を含む。色調は灰色を呈する。73は常滑の甕の口縁である。端部はN字状を呈し、上下に大きく引き出される。胎土は小石、石英、粗砂を多く含む。74は骨製の管である。75は砥石である。裏面は剝離している。仕上げ砥である。76～78はかわらけである。76は復元口径7.8cm、復元底径5.9cm、器高1.8cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微

砂を含む。底部は糸切りである。内底面に横方向のナデが認められる。77は復元口径12.7cm、復元底径8.4cm、器高3.4cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。底部は糸切り。内底面に横方向のナデが認められる。78は復元口径12.8cm、復元底径8.6cm、器高3.2cm。胎土は白色針状物質、黒雲母、微砂を含む。79、80は常滑である。両片とも甕の口縁部である。いずれも端部をN字状に折り返し、上下方向に引き伸ばされた端部は縁帯を構成するが頸部には接着しない。胎土はいずれも長石、石英の微粒を含む。



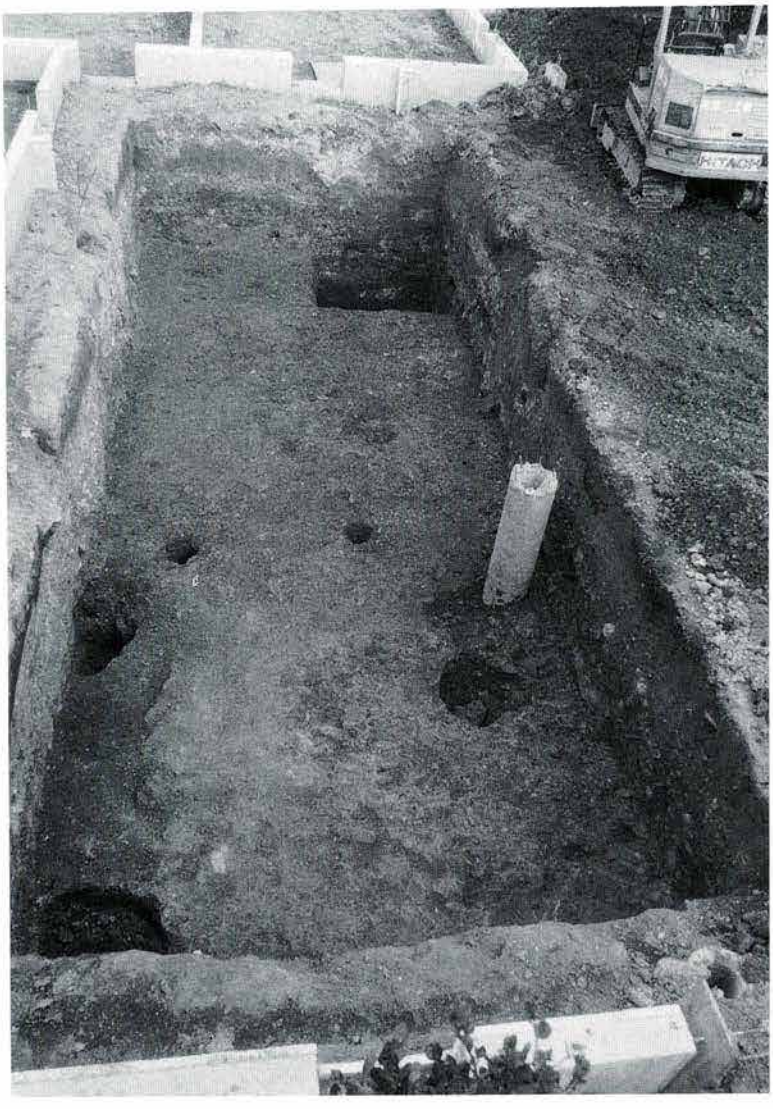
◀第1面検出状況(西から)

◀北側から見た1号溝

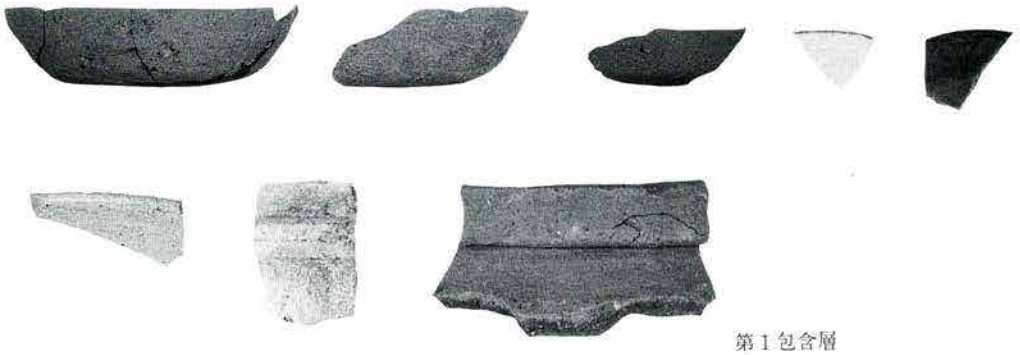
◀切石検出状況と土層堆積

◀調査区内遺物出土状況

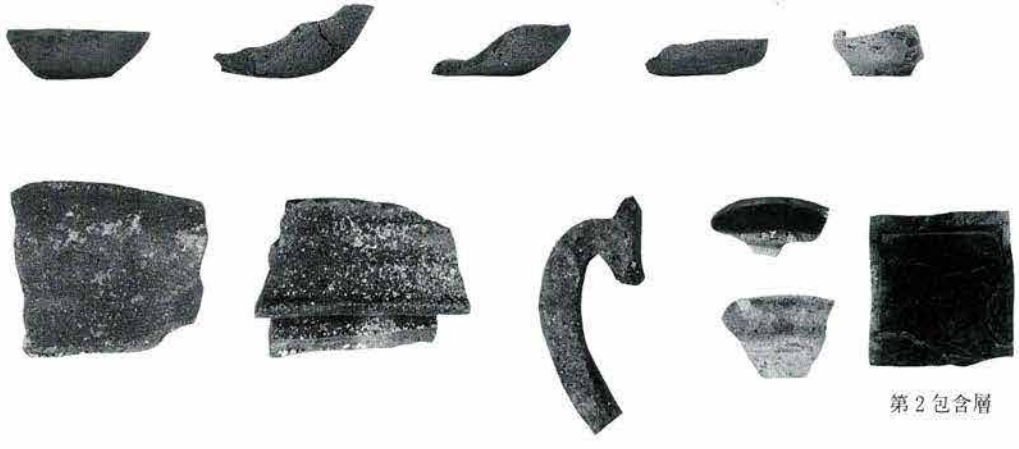
図版 4



◀西側から見た第2面

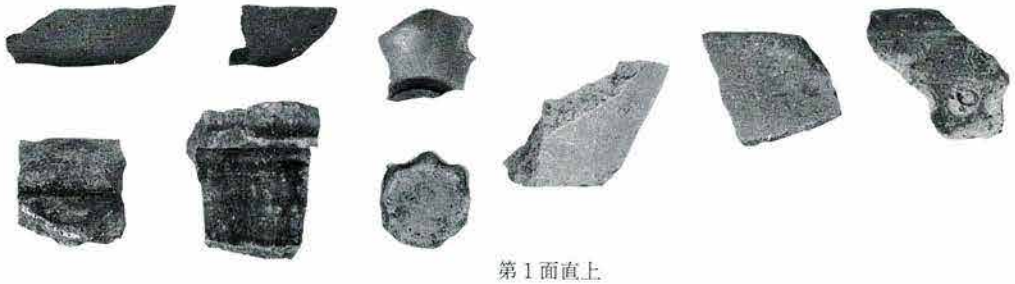


第１包含層

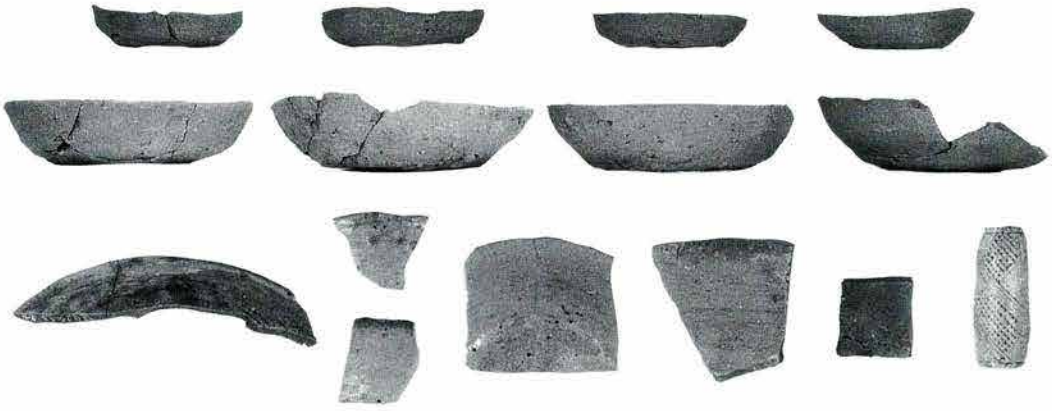


第２包含層

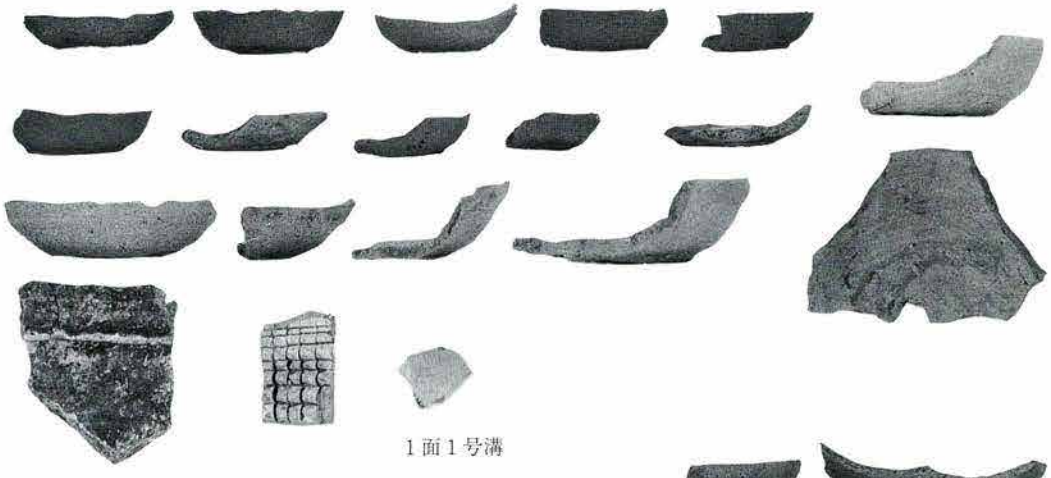
南面トレンチ



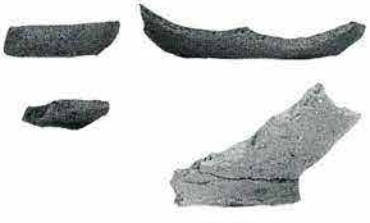
第 1 面直上



第 2 面直上



1 面 1 号溝



1 面溝中

1 面Pit 2

1 面Pit 1

出土遺物

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　10

平成５年度　発掘調査報告(第２分冊)

発 行 日　平成６年３月

編　集
発　行　鎌倉市教育委員会

印　刷　中川印刷株式会社